

新時代の軟派雑誌決定版

奇譚クラブ



ヌ
アルバム

特
作
集

11月

奇譚クラブ

定價九拾円



温泉
旅館

五月花壇

宣伝サービス期間中特別割引

御宿泊 御商談 御休憩 御宴會にぜひ……

(岩風呂)

之が風呂



大阪市阿倍野区松虫通五丁目
上町線松虫駅下車西へ三丁
阪堺線北天下茶屋下車東へ三丁

電.天下茶屋(66)
3220番

春画師 利ハ

村上人志



見らるゝものとして
幽々幻の境地にこそ、込め
素晴し、春画を作ることの
利ハの悲願である

ヌードアルバム傑作集



壺と女





モデル嬢年令当
拾萬圓大懸賞

十二人のモデル嬢の年令をお當て下さい
別紙目次裏に記載の賞金、賞品を差し上
げます

官製ハガキに一から十二までの番号を
附して、その下に各モデルの年令を書
いてお出し下さい。
(送先)大阪府堺局区内曙書房郵賃係宛



モデル嬢体格一覽表

番号	氏名	身長	体重
(一)	雲井久子	五尺二寸五分	十四貫二百匁
(二)	津森志奈子	五尺二寸三分	十三貫八百匁
(三)	吉田百合	五尺三寸一分	十四貫五百匁
(四)	赤坂和枝	五尺二寸二分	十三貫四百匁
(五)	黒川タミ	五尺一寸九分	十二貫六百匁
(六)	淡名藤子	五尺二寸三分	十三貫二百匁
(七)	中林力オ	五尺一寸五分	十二貫五百匁
(八)	緑川瀧江	五尺二寸一分	十三貫八百匁
(九)	藤原ユキ	五尺二寸六分	十四貫七百匁
(十)	渡邊満佐子	五尺一寸三分	十三貫八百匁
(十一)	牧野マリ子	五尺二寸四分	十四貫六百匁
(十二)	土井昭子	五尺二寸三分	十三貫二百匁



二人のメトマーズが描く美しい双曲線



女闘美



メトミは手を組んで押しあうことから初まる

手と足の滑らかな動きが、筋肉の躍動となる



押す方も受ける方も動的美に溢れるフォーム



この
木林のうた



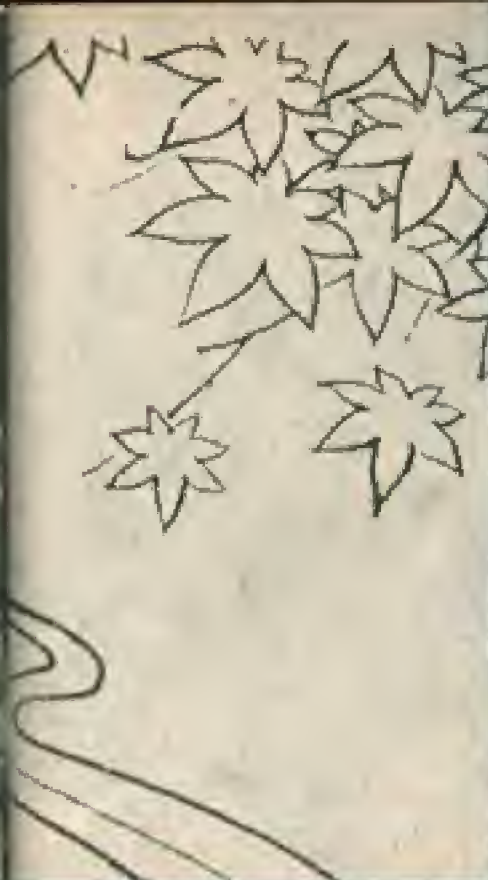
この丘の森の白くや 看臥せよ
香りするらむ ゆあみせさるや



この森はまよひ来ぬは
森ゆゑに氷のはとり
まよひのつるなく湧き
乙めはさるにんづき
きはなりす、ゆあみぬ

この木は、
森の中に生
る。若々し
く、乙めな
い。樹皮は、

山峽の岩のはづまに
湧きいで
湯はほろ／＼と
肌にかぎりう



湧湯に
戯れる乙女



肌にしむ
山風うけて
湯に浸る
乙女二人は
湯をかり
あえり





本誌写真部特写

存在しないページ

※落丁や切抜きらしき痕跡が無い為、
占領軍の検閲により削除された可能性も

(より古い号では、ここに『遊閑奇譚新聞』『艶笑娯楽館』『滑稽珍聞』
などが赤色単色刷りで挿入されている)

愛慾性態像群

囚人

男の記

女体にうえた囚人たちが、落ちてゆくソドミイの深淵。人生の裏にはこんなことがあるのだ.....

雑女部落の住人たち

どん底の部落にも矢張り男と女の

昔風がある 戀情のまゝに毎日をおく
雑女部落の赤裸々な描寫を見よ
花木実作

諸国好色地圖

上海愛慾行脚

餅肌の女の

燃え上る情熱が.....

賞金

一等	三万円	及ビヌードアルバム一冊	一名
二等	一万円	及ビヌードアルバム一冊	三名
三等	五千元	及ビヌードアルバム一冊	五名
等外	記念品		百名

通中者有手数の場合は抽せんを行います

モデル
年々当
松は
何ぞでしょう？
★

問題ばクニビヤ頁にあります



スーパードアールバム傑作集

女斗美舞踊
山の湯の裸女
この本林のうた

探訪実話

(色街
ルポルタージュ)

接客婦の街を歩く 大木悦二

女はカリのササ思を曰恭く!!

特集

(生々しき女体の生活記録)

★春嬌めく白獣 白衣乱淫園 ★

★赤裸々な離婚地帯 女工員宿舍 ★ 懊惱する女群母子寮 寮主 ★

★白壁の牢獄 脳病院の手記 ★ 失恋女の溜り 尼寺袋中庵 ★

時代俠艶・元祿浪花やくざ

天王寺 星七
画 今 幾久藏

軟派小説・春画師利八

上村 人志
画 美濃村 晃

実話奇談・雑姦部落の住人たち

花木 実
画 千葉 健

変態性慾・囚人男色記

格 淳
画 秋田 冷

墮落の女学生・泥まみれの思春期

矢代文吉
画 長 夢 玲子

異色艶譚・女社長と女秘書

二俣 志心 津子
画 志乃田 じろう

妖淫奇話・色聴症患者

八瀬田 音児
画 竹中英 二郎

好色地獄・上海愛慾行脚

楊 馬 珊
画 美濃村 晃

敗戦記録・六本指の女

日向路 雄
画 森 ありさ

猟奇読物・肉体の谷間

池 長 味
画 山 彫 三

★ピントグラスにうつる女魅・丹羽二郎・沖研二 画

好色人生
まめ泥たけ泥

赤七人はいやッ
女へん 進七
たけ泥のふ縁

小島伸二
画 曾根 三 郎

女学生夏期アルバイト報告記
パチンコ娘は唄う

左瀬 鯛子

ホルネオ密林秘話
パンヤンクルの凌辱

日尾 瀧 郎
画 箕田 京 二

好色男
女奇譚 穴二題

風呂の穴
板床の穴
画 兵庫 一 平
画 明石 三 平

非処女初夜姦告白集

木村 由 紀子
画 滝 弓子

こゝろまより

★最後まで読まなくては行けない話 笹田 豊
★二片の肉が女性美の増進に役立話 画 沖 研 二

★表紙 磯田貞子・目次カット 七枝 夢 玲子・マカ さいの 麗人
さいの 麗人

女^{きんな}ばか^ばりの世界^をを 早く^{あは}暴^は!

★ 赤裸々な雑婚地帯女工員宿舍
★ 白壁の牢獄脳病院の手記
★ 蠢めく白獣白衣乱淫図
★ 懊惱する女群母子寮すまい
★ 失恋女の溜り尼寺袋中庵

白壁の牢獄脳病院の手記

福田克子

狂える女の集り
とは、なんと悲しい語感であろう。
諸々の人の世の苦しさを残して、女の羞恥を忘れた本能の露呈が病棟を彩つてゆく

狂える女の群

この世の中で最もエロでグロな女の世界といえ、この脳病院の婦人病棟であります。妻自身が若い身で痛々しい孤独の身を誰も嫌がる脳病院の看護人として過去の悪夢を忘れ果てるために、特に志願して来ているだけに、この狂える女たちの事を他人事には思えないのです。



妻の右の頬には、戦災で受けた大きなヤケドのヒキツリが醜く残っているのです。
こゝへ入院して来る女狂人たちの身の上を書き立てたならば、本当にあらゆる世相の縮図といふことが出来るでしょう。
犯罪のかげには女ありと言われますが、女の狂える原因はすべて男にありといつて間違ひはありません。男にだまされて罪を犯す女の人も気の毒ではありますが、それはまだ自分の思う通り遂行した

結果の当然の償いとしての慰めはありますが、精神に異常をきたした彼女たちは、現在の姿が悲惨であればあるだけ、女の哀れさというものが、ひし／＼と身に迫ってくるのであります。
狂える女、何んといひしい語感でありますし、妻は一生を捧げて哀れな彼女たちの看護人として、少しでも彼女たちの幸福のために尽したいと決心しておりますが、然し妻のこの健気な心がけも狂える彼女たちには一向に通じな

本誌創刊以来五力年、日々送られてくる夥しい原稿の中には婦人愛讀者の手になる原稿が相当数混つていた。文章は稚拙ながら、生々しいその生活体験を語る告白談は、吾々の胸を打つものが少なくなかつた。以来発表の機会を待った原稿が編集者の机上に山積したので、こゝに『女ばかりの世界を暴く』と題してその中の五篇を選んで発表することにした。

いのです。

経血を壁に塗る女

狂人といつても、兇暴性を帯びた者ばかりではありません、特に女性患者では憂鬱性のものが多いのです。一日中部屋の隅でブツブツとわけのわからぬことを呟やいている三十女や、もう手垢で真黒になつた毛糸を右手から左手へ巻き、又左手から右手へ巻くといった動作を何日となく繰り返している二十八の女。終日壁に向つたまゝで静座して倦くことを知らない女。狂人といつても他人に何ら危害を及ぼさない軽症患者も多いのです。こゝにいつた軽度の患者は、三人なり五人なり同じ部屋で一緒に起居させても一向に差支えないのです。が、発作的に兇暴性を帯びる患者や他人に危害を及ぼすような患者は重症患者室へ収容して厳重に監視するわけなのです。

今年の春のことでした。夫が芸者に夢中になつて妻を顧りみない所からヒステリーが昂じて憂鬱症になり、それから転じて躁鬱症となつた女は、紙でも布でも手当たり次第に破りまくるといつた厄介な症状でした。
障子でも畳でも身近にあるものは、何んでも引きさいてしまうので、板敷の個室へ収容したところ、自分の来ている着物を脱いで



夕やみの格子にすがりて泣きわめく

狂女は口に髪くわえおり 克子

それをボロ／＼になるまで引き裂いてしするのです。女のどこにあんな力があるのかと不思議に思うばかりの根のよさで次々に着けているものを破つてしまい、遂には最後のズロースまで、ズタズタにしてしすつたのには、流石狂人に慣れた姿も目を瞠つてしまいました。

重症患者の病室は一種異様な臭気。糞便だけの臭いではありませぬ。何か人間の肉体から発した動物的な悪臭といったものでしょうか。丁度、そうです動物園、あの動物園のオリの中の臭いと一脈相通じているのです。

真赤な長じばんは裾の方がビリ／＼に破れている。髪はウルメのようで油気がない。白粉饒けのした四十四五才位の水商売上りの女幻聴とでも話しているのでしょうか、何かしきりと呟やいています。と突然です。この女は何におびえたのか「キヤーツ」と金切声を放つて、「こわいよッ」と泣き叫びながら表へ飛び出しました洗濯場へ飛び込むと、手桶から



狂女の立ち廻り

もう身体をかくす何に物もつけないで引き裂いたボロの中に埋まっているのです。狂人になつても生理現象だけは毎月きちん／＼とあるのには女の生理のかなしさをつくづくと感じさせられました。妾が一寸眼を離している間に、経血を掌で壁に塗たくつていいるではありせんか。男性患者の中には、自分の糞便を身体中になすりつけて、臭くて臭くてどうにもならぬいヒドイのがあるそうですが、こゝろいつた女患者にも手を焼いてしまふのです。

処置をする妾の前に、女のかくし所をあらわしたまゝで何ら羞恥の反応もないのですから、こゝろいつた所は男の方には絶対に見せられた図ではありせん。

相手もなしに 妊娠した狂女

脳梅毒が頭へ来て早発性痴呆で入つてゐる四十二才になるフミさんは、突に開放的な患者なのです看護婦に注意されると、「あたしの肌はこんなに美しいでしよう誰でも褒めてくれるのよ」と、しや／＼と言つて部屋の中中で両足を大胆に投げ出して、太股の肌を掌で撫でゝいるのです。

「廊下へ出てはいけません。贅物を着て下さい」

妾が注意すると

「郵便局へ行つて来るんだよ」

と、フミさんは、その珍妙な生れたまゝのいでたちで、郵便局へ貯金の金を引出しに行くのだといつてきかない。何んでも七、八千円の彼女のへそくり金が郵便貯金になつてゐるので、彼女は忘れずにそれをよく知つていたので、お金は何に使うのかと聞いてみると、

「あたしはね、妊娠したんです。だから、ほら、お産の準備をしなくちゃいけないでしょう」

フミさんは、妊娠した氣でゐるのです。

「どうして？」

「どうしてつて、ありますか、あたしは旦那さんがあるんですよ、あんたはお嫁に行つたことがない



から知らないんだよ。旦那さんがあると妊娠して、お産するんですよ」

フミさんは妊娠を妄想しているのです。しかし、この病棟で本当に妊娠した患者があつたのです。妄想でも夢想でもない、彼女の腹部が日増しにせり上つてきたのです。

彼女の名は初子、二十一才随分詮議されましたが、とう／＼その相手がわからずじまいになつた謎の狂女妊娠事件。

看護人は医者だらうといふ、医者は看護人だらうといふのですが結局証拠がなくて、うやむやになつてしまいました。可哀想なのは初子さんですが、相手の男が一体誰なのかその男の顔の記憶もないのです。

夕暮になると初子さんは、婦人

病棟裏の柳の木の下でしよんぼりと毎日、男を待つて居るのです。狂った頭に記憶のない最初の男の姿を。男は或は男子患者だつたかも知れませんが。狂つても春を知つた女、彼女の姿は涙なくして見られませんでした。

未亡人の狂態

タネさんというのは二十七八の未亡人、この女は手紙ばかりを書いている。
「何を書いているんだね」



看護長が巡つてくると、毎日のように同じ質問をする
「見ちやいけないよ」
「いゝ人へやる手紙だね」
「いやアだよ、知らないわ。からかうんだもの」
「いゝから読んで聞かしてくれないか」

「ほら、見せてあげる」
渡されたのを手にとつて見ても文字は支離滅裂、てんで読めたものではありません。

「この文句はいゝでしょう。看護長さん」

「この文句かい、うん、なか／＼うまいもんだね」

どの文句だか、さつぱり分らないが、看護長がそうほめると、彼女は得意になつて、

「ゆうべ一晩中考えたんだすよ。お許様のおそばをのみ慕いまいらせ候、あの人きつと迎えに来るわあの人、とつてもあたしを可愛がつてくれたのよ。あたしが風邪をひいた時なんか、水を汲んで、御飯を焚いて、卵を買つて来てくれた……、ほんとにいゝ人なの」

彼女は夫が病気で死んでしまつたことを忘れて居る。自分もそのために気が狂つてしまつたことも女の狂人といへば直ぐ色きちがいを想像いたしますが、タネさんも発作が起ると平常の大人しさが急変して私たちを驚かせるのです。異性との性生活を経験した二十七八の爛熟した女が理性の塵埃した本館の赴くまゝに衝動する行為は、私達未婚の女性として、見るに堪えない、聞くに堪えないことばかりなのです。特にタネさんは女学校も卒業している順調な結婚から幸福な生活へ入つたのですから、気が狂つたといつてもその動作の節々には、平當は教養の深さ

が感じられるのですが、それが一度発作が起つたとなると、本当にいろきちがいになつてしまふのです。

二十七八といつてもタネさんは美しい肌をしています。子供を生んだ事のない乳房はピンと張り切つて大きな盃を伏せたようです。特に手の指や足の指は美しいのです。女の姿でさえも、グツと力が入つて薄桃色に紅のさした足の指先を見た時には、ふるいつきたいような性的衝動を感じるのです。

彼女の発作が起きた時の動作の節々に、旦那さんの生前、如何にタミさんが全身でその愛撫に答えていつたかということが伺われるのです。数日前にも、こんな事が起りました。

大体彼女には、男の看護人や患者は発作が起きそうな時には近づけないことにしているのです。だから、彼女の幻想の世界にいる間



は殆んど妻一人が相手になつて居るわけなのです。それがどうした事かタミさんは妻を男と間違えてしまつたのです。平靜な時は淑やかで、かすかな羞恥心さえ持つた彼女の何処にあんな魔性を持つて居るのでしょうか、毎日接している私でさえ不思議に思う位なのです。

妻もタミさんが好きなのです。未婚ではありませんが、妻は男との世界を知らない齡でもありません。それからの妻は、タミさんと二人つきりである時は、もう理性も見栄もかなくなり捨てゝ本能の赴くまゝにタミさんの相手をする女になつてしまつたのです。

妻とタミさんとの仲が、患者と看護人との域を脱していると噂され出したのはつい最近のことです。二人つきりいる時のことはこゝに詳しくは書けません、それは同性愛というよりな生やさしいものではありません、もつと深刻な、直接肉慾につらなる変態的なものだと思つながら恥しく思ふのです。

狂人になりそうな孤獨

妻との噂が激しくなつてタミさんは、実家の田舎へ引き取られて帰りました。一生この脳病院の婦人病棟で狂女を相手をして過ごさうとした決心も鈍り勝ちな毎日の



空虚さです。

始めて知つた本能の疼くような満足もタミさんが帰つてからというものは、職員宿舎の冷たいベツトに頼々とする妻の肉体にはかなえられそうもありません。狂人の世話をする管のこの妻自身が狂人になりそうな恐怖観念に襲われてならないのです。

孤獨を望んでいた妻でした。そして自ら志願して狂人の社会へ入つてきた妻でしたのに今日此の頃の此の人恋しさはなんとしたものでしょう。白い壁に秋の陽が明るく照りつけて居ります。自由に出入りの出来るこの白壁の牢獄なのですが、妻には此処を出ても頼つてゆく人さえいないのです。

此の哀れな孤獨な女に愛の手を差し伸べて下さる方つてないものかしら。身も心も成熟し尽したこの二十三の処女に。

赤裸々な離婚地帯女工員宿舍

三 木 澄 江

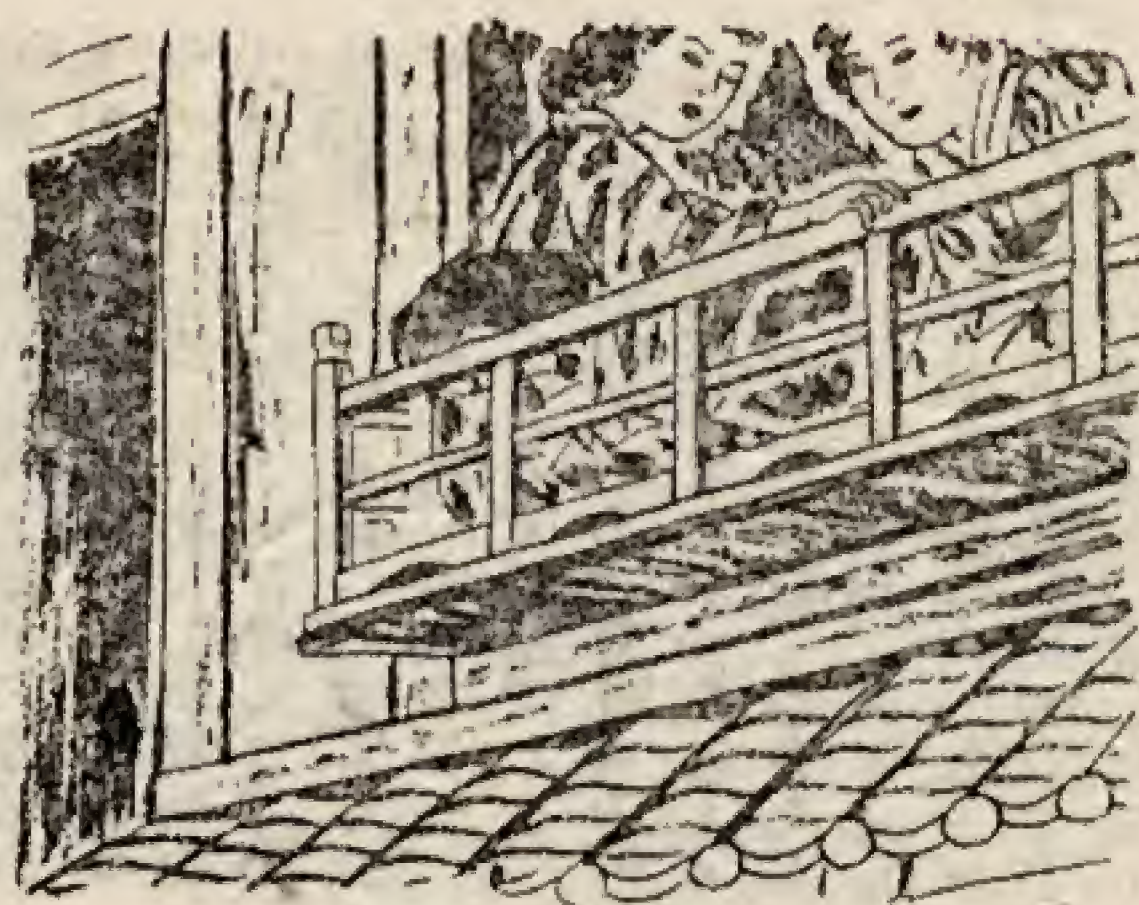
娘三人持てば 左團扇

ガチヤ萬の世の中が過ぎたといえ、日本は昔から糸への国である。可憐な織婦を酷使した女工哀史は昔の夢としても、織機を動かす娘の入用なのは今も昔もかわりがない。

東海道線の彦根からバスで二里半のこの地方都市も××紡績の工場が存在することによつて栄えているといつて過言ではない。近郷近村では、娘三人持てば親は左團扇と言われている。

娘たちは新制中学を卒業すると直ぐこの工場に勤めだす。親も承知であれば娘たちも承知なのである。試みに在学中の娘たちに卒業すれば、どうするかと尋ねてみると、その殆んどが町の紡績工場へ行くと答える。泥くさい田舎に埋れて粗衣粗食に甘んじているのは年頃の娘としては耐えられないことなのである。

最も手ツとり早い方法は、紡績



織姫の町の風紀

工場に勤めることである。工場には厚生施設としての売店、食堂、娯楽室がある。一食三十円の食券で洋食やお寿司によつて、都会生れの片鱗を味わうことが出来るし売店では、原価に近い価で、娘の虚荣心を満足させる化粧品や雑貨を扱うことが出来る。

それで彼女たちは、年頃になると競つて工場へ勤め出す。親たちにすれば、嫁入り前の娘の結婚費用も生み出すことが出来るので喜ぶ。

近辺の娘たちは、徒歩や自転車で通つてくるが、町の二階を借りて自炊している娘や、二、三人共同で二階を借りている娘たちもいる。この町では、男よりも女の数はずつと多い。今年の春の国勢調査では、青年期の女の数と同じ男の数より二千数百人も多い結果が出た。従つて、町の盛り場、富の銀座には休日ともなれば、これらの娘たちで氾濫する。若い男が向うから来れば、数人の娘たちがスクラムを組んで、通せんぼをして男をからかうのである。

「よう、男前、澄まして何処へ行くんだい？」

「返事をしたら、どうなの？」

気の弱い男は、織姫たちの姿をただで逃げて出してしまう。一人一人の娘はそうアバズレではないのだが、群集心理で数人集まると俄然気が強くなつてくるのだ。

この街の若い男は女には不自由しない。夕暮ともなれば、男欲し

げな顔をした娘たちがシモタ屋の二階からいくつも顔を出している窓から放つてくる罵倒は、男を誘うテクニクの一つである。若し女のからかいに応じて返事をしたならば、忽ち走り下りて来て「ねえ、つき合つてよ」

と近くの喫茶店へ連れ込んで交渉をつけてしまう。こうして何人もの男と関係をしている娘が沢山いる。

町の商店も、映画館も彼女たちのお蔭を蒙ることか多いのだから、男と女の数のアンバランスから来る風紀の悪さには手を焼いているいつとはなしに、紡績女工達のことをブタバタとアダ名で呼ぶ習慣がついた。

それは、サイレンがブーと鳴ると彼女たちが職場へ駆けてゆく様子を諷刺したアダ名であつた。子供達は路ゆく娘のあとをつけて、「ブータ、ブータ」と連呼してついてゆくので、これには流石傍若無人で街を闊歩していた彼女たちも辟易して、以来、裏街を歩くようになり、若い男をからかうことも



少くなつた。ぶく／＼とよく肥えて背の低い田舎娘さるだしのその恰好がよく似ているというので、その呼名は長くすたれなかつた。

女ばかりの 寄宿舎

近くの年頃の娘だけでは、十分需要を満たすことが出来ないところから、遠方の農村からも、織婦を募集するために、募集人を北陸道から東北へかけて派遣された。

昨年の暮あたりから今年の春にかけて、夥しい数の田舎娘が思い／＼の風呂敷包を手この町のバスの停留所へ下り立つて、案外、小さな町なのに驚いた顔で埃つぽい県道を工場の表門迄列をなして歩いてゆくのをみた。

彼女たちの年齢は新制中学を終えた十五六から二十才迄。中には

出戻りの二十四五といったものな
くはなかつたが、その殆んどが思
春期のはちきれそうな健康の持主
であつた。

戦争中は、防毒面や弾薬箱の倉
庫になつていた第六工場の棟つづ
きが改造されて、彼女たちの寄宿
舎になつた。一階は、事務室や衛
生室、物置となり、二階は南側の
廊下に沿うて北側に八畳の部屋が
三十六並んでゐる。

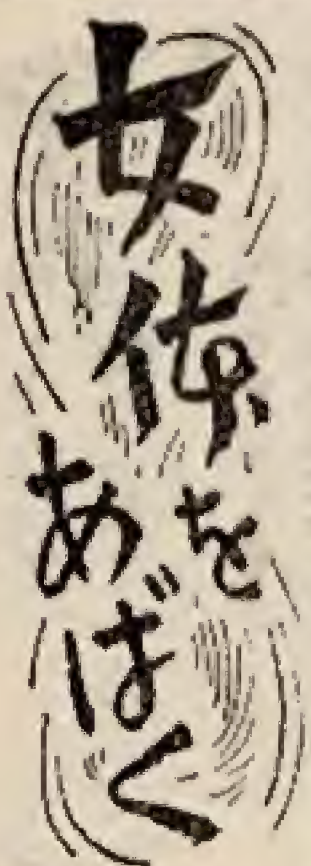
最初のうちは八畳一間に三人だ
つたのか、今年になつて、だん
／＼人数が増えて今では六人にな
つてゐる。

黄昏ともなれば、この女護島の
寄宿舎の窓々に灯がついて、流行
歌の吟みや、若い女の甲高い嬌声
が遠く離れた町の家々に迄、風の
便りに洩れ聞えてくる。夜になつ
てこの附近を通ると、寮全体が何
か揺れるようなざわめきに、燃え
上る青春のいぶきを感じることが
出来るという。

女の猥談會議

厩は単調な紡織機械を相手に一
日中埃すみれになつて立ちづくめ
の彼女たちの唯一の慰安は食べる
ことと寝ることである。

休日になつて外出してくる彼女



たち目当の飲食店、食料品店が道
の兩側に軒を並べてゐる。寝ころ
んで雑誌を読みながら、南京豆を
ぼり／＼噛む時が、最も彼女た
ちの生き甲斐を感じる時である。
織機と取り組む日中の労働は、



決して日本の再建のためでもなけ
れば、国家のためでもない。自分
達の衣食の本能を満足させるため
のやむを得ない辛苦の労働であり
国元の両親や姉弟へ仕送りするた
めの勤めである。

彼女たちは都会へ出てキャバレ
ーの女給やダンサー、デパートの
店員等を志さないだけに御世辞に
も美人だとは言えない。潑刺とし
た若さは皆持ち合してゐるが、男
から騒がれる御面相ではない。し
かし、それは彼女たちが異性に対
して歡心を持つていないという証
左にはならない。
田舎にいた頃、すでに数々の男

の洗礼を受けた女もあれば、恋人
らしい男を持つ娘もあつた。八畳
一間に六人といえは、現在の住宅
難からいへば贅沢は言えないけれ
ど、決して十分であるとは言えな
い。寝べつてゐる娘の頭の上では
手すりにもたれて口笛を吹いてい
る娘の大根足がぶら／＼と揺れて
ゐる。

共同風呂で乙女の身体の隅々の
秘密まで見せあつた間柄であつて
みれば、性の秘事についても別に
かくし立てする事もない。女が三
人寄れば姦淫しいというが、狭い
室に年頃の娘ばかりが枕を並べて
雑魚寝してゐると、勢い話は男性
の事になつてゆく。最初は各自が
初めて男と関係した時の事が、潤
色され誇張されて、最大級の美辞
麗句に飾られて話される。それは
多分に、まだそんな男との経験を
持たない同室の娘たちを目標とし
て、煽情的に語られる。

年若いか或は周囲の環境のため
に、偶然処女を保つてゐた娘たち
は、固唾をのんで、この経験者の
話に自分の夢をつけ加えて、胸を
わく／＼させて聞く。初めは従順
に合槌を打つて聞き手に入つてゐた
娘の中から、急に語り手となつて
この女ばかりの猥談会のヒロイン
になろうとする者があらわれる。
汗ばんだ手をじつと内股の間で
握りしめていた娘たちは、たまら
なくなると、互にわけもわからぬ
嬌声を上げて抱き合つたりする。

仲のよい二人は壁に面した片隅に
掛蒲団をすつぽりとかぶつたまゝ
じつとしてゐるのがある。
こうして、娘たちの桃色の夢を
より大きくより美しく彩つて、そ
の本能を僅かに慰めるよすがとも
なる猥談会は、次第に各室へと伝
染して、消燈後の暗闇の中で、聞
き耳を立てながら、あちらこちら
で、耐えきれない溜め息が洩れて
くるのである。

戻れぬ橋の嬌態

工場の前を流れてゐる小川は寮
の裏手で大きく曲つて町へ向つて
ゐる。寮の北側は、昔は材料置場
になつてゐた広場で現在では人の背
丈位の草が生い茂つてゐる。

二千数百人の従業員の中で男子
はその一割にも満たないこの工場
では、満しきれぬ彼女たちの本能
を慰める相手の若い男は殆んど数
える程しかない。二十六才の釜場
番の復員男は、掘簾食わぬは、男
の恥とばかりに、意気投合するま
ゝに、寮の裏手の広場を利用して
片ツ端から寮の女と関係してゐる
うちに女同志が鉢合せをしたこと
から一方の女が、相手の女の顔に
薬罐の煮湯をぶつかけた事件が起
つてから問題が大きくなり居たゝ
まれなくなつてとう／＼工場をや
めてしまつた。

広場の周りの申し分け程度の鉄
条網をくぐれば向うの町をつな

ぐ戻り橋がすぐ目の前に懸つてい
る。夏の夕暮時など、十数人の女
たちが橋の兩側の手摺に背をもた
せて夕涼みを兼ねて男を張つてい
る。

若い男でも通りかゝるものな
ら、忽ち兩側から女たちの黄色い
声が飛んでくる。返事をしてもし
なくても

「ちよいと、男前さん、話してゆ
きなさいよ」

と一人が寄つてゆけば、右から
左から手どり足どりされて、大の
男が無数の纖手によつてもみくち
やにされてしまふ。

おとなしくしていれば、頬べた
をつま／＼れたり、腋の下を擦られ
たりする位で済むのであるが、な
んの女位と思つて抵抗したりする
と、下駄は川へ捨てられるし、着
物は破られるし、さんさんな目に
あり。だから、若い男たちの間で



は戻れぬ橋と呼ばれて、こゝを夕方通るのは敬遠されている位である。

女に輪姦され た男

これは今年の六月のことであるが、理髪店でこの戻れぬ橋の噂を



きいた葉売りの男が、一つ土産話に女の御馳走に預りたいものと、誰にも言わず唯一人で夕暮れと共に戻り橋へ出かけてきた。

丁度螢狩りの季節で、「ホー、ホー、螢来い」と呼ぶ子供達の声が川の岸で聞えてくるばかりで、川を伝つて吹いてくる夕風が涼しく、噂にきいた橋の袂には、一向に女たちの姿も見えないので、これは一杯かつがれたかなあと、つまらぬ街の噂を信じて来た自分の馬鹿さ加減を笑いたくなつた。然

し、まあ折角来たのだから、向う岸迄渡つて、廻り道をして帰ろうと思つて、ドン／＼橋を渡りきつた時

「ちよッと兄さん、煙草の火かしこよ」

と一人の女が道端からすつくと立つて呼びかけて来たので、突然の事にびくつとして立ち止つたが一向に煙草を差し出す気配もないので、そのまゝ行き過ぎようとする

「あんた返事をしないの？」

と欄杆のかけから数人の女が出て来たのはあつと驚いた。最近では噂が大きくなつたため、この橋を通る男もすつかりなくなつたので、男の足音を聞いて姿をかくしていたのであろう。葉売りの男が、一言の言葉も発しないうちから、ぐる／＼と女たちに囲れてしまつたのである。

「あたい達と一緒にあそこ迄来てよ」

そこは彼女たちのホームグラウンドの店場である。背丈ばかりの草叢の中に、十畳敷位の広さで枯草を敷きつめた天然のベットは周囲から覗くことも出来ない。

最初からそのつもりで来た男ではあつたが、女から先にそう言われると、馬鹿らしくて返事をしないといひ、一番先に来た女が、グイとシャツの袖を引つぱつたのを合図に、数人の女に手を足を

を持たれて、あれよあれよという間に、草叢の中に連れ込まれてしまつた。

こゝで男と女たちの間で十分話合いが行われ、後で述べるような事事も起らなかつたのであろうが、男一匹が女たちから虫けらのように意志の自由を奪われたのであるから、この葉売りの男、俄然持前の負けん気を出して、真先の女を腰車にかけて、はね飛ばしたものである。

もう後は一人の男と数人の女たちの肉と肉とが、もつれ合い打ち合う音が暗闇の中で凄じくするばかりであつた。長い陽もすつかり沈んでとつぷりと暮れた店場の草叢で行われていた事件については当事者以外は誰も知らなかつた。

シャツもズボンもズタ／＼に破られた葉売り男が、足腰立たず一週間も町の旅人宿で寝込んでいたという事を聞いただけで、どんな事が行われたか、想像することが出来るが、後でこのグループの一人で、懇談会の一方の旗頭である女の告白談によると、今迄の数々の経験の中で、これ位面白いことはなかつたそうである。若い男であれば、その相手を選ばない彼女たちにとつて、あの葉売りの男は珍重すべき価値ある男であつたらしい。

この経験談は長い間、懇談会の重要な話題になつたし、この道の様には異性に飢えた女ばかりの世界に生きる彼女たちには、必然的に同性愛が芽生える。青春期の過程として、異性愛の衝動が起る前に、そういった自己性愛、ひいては同性愛といった一時期があるもので、まだ新制中学を出たての娘たちが、年上の先輩を慕うといった気持はまのがれない。

異性にうつゝを抜かず女以外の娘は殆んど自らの手で本能を慰める手段を知っている。普通は女性の間では、こういった事柄は秘密にされ勝ちのものであるが、こゝの宿舎では半ば公然とその事柄が話される。まだ初心な処女が入宿



同性愛はやはりある

強の者を羨ましがらせたのであつた。

してきても、狭い室の雑魚寝のこゝとだから、乙女の敏感な感受性はその気配ですぐさとつてしまふし年上者が一週間も経たないうちにその公然秘密の愉悅の方法を教え

てしまふ。それが年上と年少との差がなくとも、自然に同性愛的な相互慰安に移つてゆくこともある。壁にびつたりとひつついて、二人寄り添つて蒲団を敷く二人組はあやしい。その外に彼女たちの場所としては、便所が利用される。手紙を用いるとか、愛の言葉を囁やくとかいつた廻りくどい方法は使われない。すべて直接感覚に訴えた、直接肉体に訴える方法や手段でもつて挑まれてゆくのである。

露骨な性表現の言葉。殊更に卑猥な仕草。それが年頃の娘ばかり集つてこの寮内の日常ありふれたことなのだから「柄(ガラ)が悪い」と言われる一般の評判も一概に悪口でないことがわかる。上品ぶつた事を知らない彼女たちには上から押えつける何物もないとすれば勢い、生れたまゝの奔放な動作になるのは、やむを得ない。それが特に性の事になると、直接本能につながるものだけに、競争的な激しさ、もう既に或る程度癖痺した管の彼女たちの日常の動作の節々にも如実に現れてくるのである。

ウゴめく白獣白衣亂淫圖

葦原和子

白衣に包まれた乙女たちの肌は、性慾的な匂いに満ちている。人里離れた高原療養所の看護婦たちの性の悩みを暴いた告白報告記。

〔一〕濡れた白衣の裾

高原には秋の訪れは早い。八月の初め、立秋の声をきくと療養所の廻りの草叢にはもう萩や露草がたわみに咲き乱れる。朝の検温時間の前に、私達は白衣の裾を朝露に濡らしながら、樹立の中に分け入って草花を手折ってくる。殺風景な病室。中でも、五級以上の動けない個室の花瓶を飾ろうというのであるが、それ以外に私達は素足を露でビショ／＼に濡らしたいという乙女らしい心の動きが大いに影響しているのである。田舎娘の寄り集りである私達看護婦見習は病棟より二丁ばかり離れている寮から通ってくるのはサングラか下駄ばきである。赤い鼻緒の駒下駄で、ふつくらと膨らんだ真白い素足を露に濡らして病棟



の裏入口から事務室へ行こうとして、もう二、三日で外気小屋へ行こうという患者さんから「看護婦さんの足は美しいなア」と言われて、何かしら急に顔がほてつたように、そのまゝ物も言わずに廊下を駆け出してしまった。生理の御講義の時間に教えられ

る迄もなくもう私達には十分に発育した自分達の身体のことについてよく知っている。寮のお風呂では最初来た時のように、キヤツキヤツといってお湯のかけあいをして騒いでばかりいない。腕の上げ下しや、湯槽のふちをまたぐ腰の運び等にもちりと鋭い視線を放ち合う。胸の膨らみ、下腹部の秘密、かくすことの出来ない腕の生毛。そうして各自が自分の身体と比較して、果して自分の肉体が男性に対して魅力があるだろうかと考えてみたりする。福知山線で大坂から二時間半、三田米で知られた三輪町から約六軒、赤松林に囲まれた丘陵の中に数十の病棟がベランダの硝子窓をキラ／＼と反射させて建ち並んでいる。

結核療養所といえ、田舎では名前を聞いただけで、もうオジ氣づく、まして其処の看護婦を志願やるのだと言え、家族争つて大反対をするのも、もつともの事であつたが、一町歩足らずの耕地に、両親、兄夫婦、二人の弟に一人の妹の大家族、どうせ厄介者の私のことだから、若いうちに身体に職をつけておいた方がよいと、二カ年で無試験という魅力に釣られて飛び込んで来た。療養所の生活に慣れて二年生になると、雑用は新生入生がやつてくれるし、一病棟での正看護婦は寮長と副長の二人だけ、私達二年生五人は、すっかり看護婦としての仕事を分担して、一週間に一回は宿直もある。患者といつても、一級、二級の外気小屋の人達は殆んど健康者とかわりはないし、病棟でも三級ともなれば自覚症状は何にもないのだから、白衣の天使とは言いながら、私たちの張り切れるばかりの乙女の胸には、冷水擦擦をする男の患者たちの裸体姿がまぶしく眼の中に飛び込んでくる。

〔二〕オールド・ミスの悲哀

私の寮長は二十九才のオールドミス、背は高く、瘦せ型、肩が男のように尖っている。私達は鶴というニック・ネームをつけている二十一の齡からずっと看護婦をしているというだけあつて、腕達者なことについては中々の評判である。若い医員先生は一目も二目もおいているというだけあつて、仕事のことになると頼しい。然し、それだけに老けていて三十四五に見える。患者もこの寮長にだけはビク／＼している。それというのも彼女は男を男と思わぬどころか男が嫌いなのである。婚期はずした老嬢のひがみがそうなつたものか、或は不自然な行為が、そういう性質にしてしまったものか、とにかく私達は仕事の上では、彼女を尊敬しながら、中性化した否、男性化した彼女に対して、何かしら乙女心に不潔感を抱くのである。それは隣りの寮長として、二十六になる看護婦が赴任して来てからに始まる。彼女は十人並の容貌ながら、上唇に醜い鬼唇の跡があるので、自分から志願して結核療養所の看護婦となつたのである。マスクをかけた顔を見ると、ふる／＼つきたいような可憐さに、年齢





未知の世界に対する空想で、乙女の胸は風船のように膨らむ

(三) 於菟女寮の黄昏

黄昏

西の空が茜色に染まる頃、私達は三々五々に各病棟から寮へ帰つてゆく。寮の窓からは松林越しに、池の水面がキラ／＼と光っている。

夕陽が迫つて、病棟の突から洩れる灯がそこはかとなく瞬く潮のようにひた／＼と押し寄せてくる底知れぬ怖しさ、はかなさ、悩ましさは、寮生活を経験した乙女でないといけない。

山出しの猿のような田舎女の集りであつても、多情多感な乙女の寮であつてみれば、この夕食後の刻限になると、誰も彼もひどい感傷詩人になつてしまふ。窓の手摺りに寄り添つて、知る限りのありとあらゆる最も哀調を帯びた流行歌を涙まじりに唄いあふ。

ノド自慢が盛んになつて、誰も彼も声に自信のある者の中にセンチな歌が流行した。患者さんの中に、ギターやアコーディオンを弾く者があるので、示し合せて松林の中のあるちこちで合唱する声が洩れてくる。

黄昏というものは、乙女にとつて曲者である。唄いまくつて情が昂じてくると、仲のよい者同志がびつたり抱き合つて畳の上を転が

り廻つたりする。それを眺めた者は

「変態だわ」

と言つて面白そうに、お腹を抱えて笑う。「変態だわ」という言葉は、私の寮長と隣の寮長との同性愛事件から、私たち見習生の間で、すっかり流行つてしまつた。

普通より少しでも変つた事柄は皆変態にされてしまふ。「あの先生、変態やわ」というのは、アブノーマルなどというよりも、少し変つているといつた軽い意味に使われるのである。泣いているかと思えば笑うかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

る。泣いているかと思えば笑うかと思つてい

(四) 流行語「変態」やわ

「変態」やわ

二年生ともなれば、十八九から二十三才の丁度婚期にある、はちきれそうな肉体の持主であるから、寮の隠れた生活や思ひべしである。十五六の女学生とは違つて部屋の中も女の蒸れるような性的な匂いで充満する。

夢から現実へ悩みも一層深刻となつてゆく。

夕暮になると室内に居たゝまれず、廊下へ飛び出して、ドンドンと廊下の板を踏み鳴らして、大声で叫喚怒号するので、「変態第一号」の敬称を奉られた人もある。

看護婦を志す

位の娘たちの集りであるから清潔第一だろ

足と申すもの。人権尊重、自由主義の時代であるから寮監のメガネ女史も、そこは要領よく、乙女の気分をこわすような野暮なことは申さない。

煙草の味、酒の味、注射の味を覚えるのもこの寮へ入つてから。自分の身体の欲望がどんな形で、

どんな位置に、どんな具合に存在しているかというところを知るのも二年生になつてからである。

戸部さん。この人は二年生の中のしたゝか者。今年の春、京大から赴任してきた若い医員と関係があるとかないとか騒しく噂されただけあつて、五尺三寸、十五貫五百の男まさりの体格は、私たち同性が見たつて一人で置いておくのは惜しい位である。

この戸部さんは、科学的合理的に、性慾の発散作用がうまくゆかないからか、どうか知らないが、チビ／＼酒を嗜むのである。寮でそんなふしだらな事を許しているのかと思われるのは認識不足である。こんなことはすべて公然の秘密である。

異性と酒。戸部さんはもうすっかり一人前の女である。一カ月に二回の寮監の巡回と不定期にある院長の巡視には、押入れから行李トランクの中迄調べられるのであるが、一体戸部さんはウイスキーの瓶を何処へかくして置くのだろうか？

これは簡単である。女には男と違つて都合なくし場所があるそれは毎月の生理日に用いるバンドである。この用具の中にくるんでおけば、如何に同性の寮監だつてムヤミに開ける心配がないからである。

〔五〕異性を知つて いるのが自慢

異性に接近し、獲得し、恋愛を現実的に経験することに希望と誇りを持つてゐるのが私たち見習生グループの一般の気持である。

異性を知らない純潔等は、私たちにとつては歯牙にもかけないナンセンスでしかないのである。より多くの異性との肉体的な体験が憧れの的であり、そういった体験者が私たちのヒロシロシなのである。その機会がないために処女性を保つてゐる娘たちもその心の中では、常に多くの異性との交渉を持つた朋輩に羨望の眼を向けるのである。はちきれそうに成熟した肉体を實際に使用に供してみるといつた冒険に限りないスリルを感じるのである。

西谷さんは、そんなグループの中のオースリテイである。彼女が異性との恋愛を獲得しあらゆる障害を排除して、肉慾体験の洗礼を受けるに至るまでの戦術は、模範的にして又歴史的なものとして、寮生の誰もが一度は聞かされる獵



奇的で感動的な一頁なのである。

彼女が月二回の休日毎に訪ねる伯母の家のその隣家の二階に下宿してゐる日大生との間に恋愛が發生した。しかし彼はおとなしい内気な学生で、彼女に容易に冒険を強いようとはしない。彼女は羞らいとじれつたさと、いらだたしさを以て、いつも逢う毎に、それとなく肉体を投げ出して誘うのであるが、彼は恐る／＼唇を合せるのが関の山であつた。

或る日、彼女は教科書を二三冊抱えて行つた。

「これ、看護婦の勉強の本？」
「ええ、あたし、つく／＼嫌になつたわ、もつと華やかな商売を選ぼうかしら」

彼はその本を手にとつて、パラ／＼と頁をめくつた。そこには男と女が本能のまゝに行動する肉体の接触を描いた図解入りの説明が

刻明に記載されてゐた。彼女は内心、クスツと笑つてゐた。

「何にを見ていらつしやるの？」
彼は顔を赤くして、慌てゝ別の頁を開けた。そこもやはり、前と同じことが記載されてゐる。急いで又次の頁を開けた。そこも同じである。彼はすつかり落着きを失つてしまつた。

「いやねえ、そんな事にびつくりして」

西谷さんは、わざとその本の最も煽情的な頁を開けたまゝにして蘊蓄を傾けて怪しげな性愛講義を始めたのである。彼もやはり男であつた。それから、その日は、西谷さんの一生を通じ重要な記念日となつたのである。

西谷さんのこの経験談が適當の誇張を加えられて微に入り細を穿つて語られる時は、聞き手の寮生たちは興奮のあまり、キヤツキヤツと言つて攪りあい、果ては畳の上を抱き合つたまゝで転り合うのである。

そして、おきまりの足相撲が消燈時間ぎりぎりまで、互いに太股迄あらわにして、五本の指と指とをからませて、南京豆や塩せんべいを賭けて、部屋のあるちこちの隅で展開される。

〔六〕乙女の本能

思いきり抓ねられて、叩かれて

傷けられてみたい乙女の本能。このまん丸いお尻も、膨らんだ胸も、誰の為にあるのだらうか、指で押せば弾きかえりそうなる此の肌血のにじむ位菌型を入れてほしい。鞭で叩かれ暇られ、この肉体を悲鳴を上げるほど傷つけてほしい。乙女の本能は時折、異常に高ぶつてくる。

血沈の血を注射器に吸い取る時も、氣胸の太い針が肋間の皮膚にぶつりと突きささる時にも、こよない刺戟に酔うのである。

給湯室の狭いすき間に、所謂「変態同士」が寄り添つて、いとも派手な場面を展開してゐて、牛乳を温めに來た独歩患者を驚かせることもある。

療養所の位置は人里離れてゐるし、周囲は山と池と森と林に囲まれてゐて、人民広場なんか問題にならない位、そんな場合の場所には恵れてゐるし、二人にその氣持さえあれば、機会はいくらでもある。

私たちに最も誘惑の触手を伸してくる、否私たちの冒険心をそゝのかすのは、一週間に一回の宿直である。その夜は仮眠するだけで容態の急変する患者に備えて待機するのである。そのかわり、宿直の翌日は休暇がとれる。だから、私たちはこの晩は、大びらに夜ふかし出来る。消燈時間は、宿直の看護婦をばりある元氣な患者たちが

が、事務室に溢れる。

頭痛がするといつてトンプクを貰いに來る者。血沈の成績を聞きに來る者。本を貸りに來る者、返しに來る者。それ等が互いに牽制し合つて中々帰ろうとしない。

秋かに男と交渉を持つ私たちのグループでこの夜を利用しない者はない位公然のヒミツとなつてゐる。だから、消燈時間以後の或るひとときを待つ男は、彼等の知ら



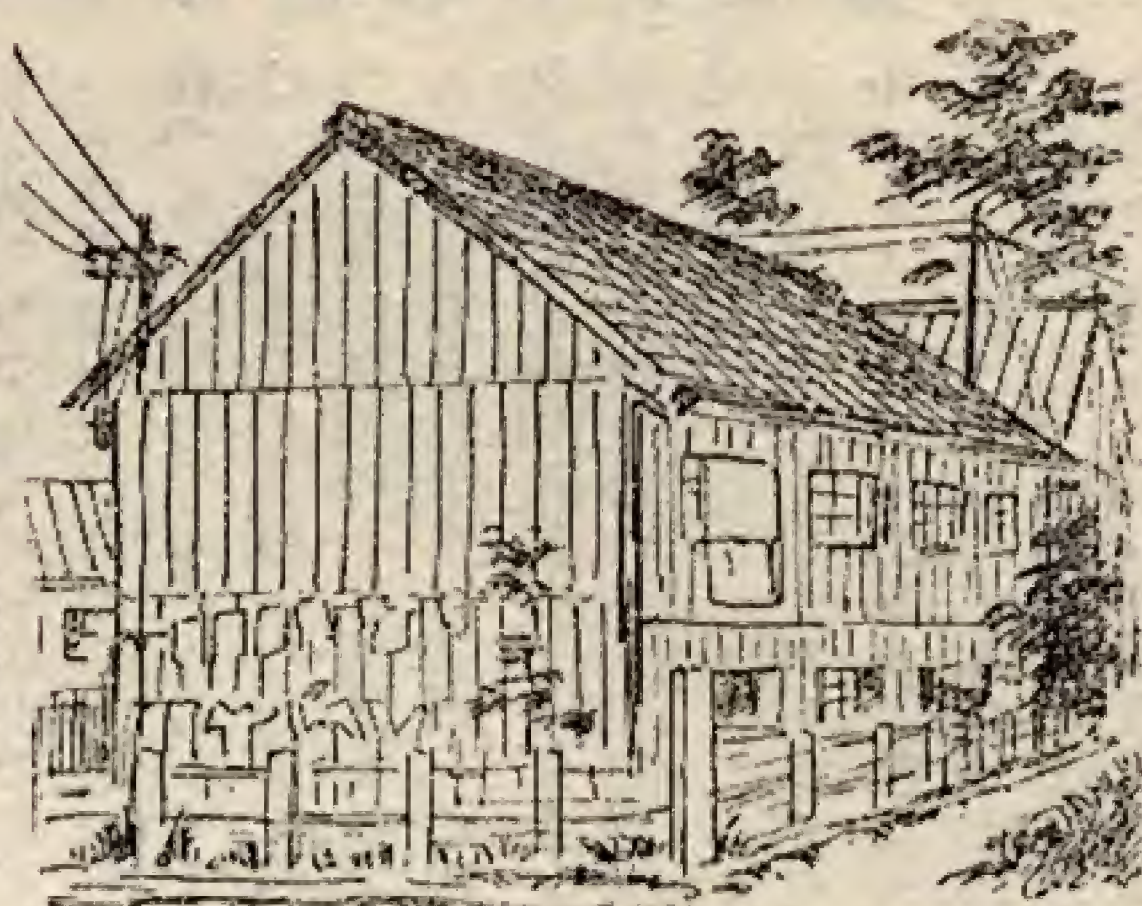
ない間に、事前に連絡されてゐる。

この夜だけが、女ばかりの世界に生きる私たちが、男ばかりの世界のクインになるのだ。

× × × × ×

懊惱する女群母子寮ずまい

雪村タキ



男子立入禁止の札

私たちは子供を抱えた女の独り者。年齢も若くないし、容貌の自信もない、未亡人といったロマンチックな響きを持った言葉よりも、後家といった方が、遙かにふさわしい世帯やつれのした中年女の集りである。

この母子寮に集つてくる女たちに、心身共に甲斐性のある者は殆んどない。年が若くて美貌な女であれば、世の男たちが捨てて、おか

母子寮の二階の窓から洩れてくる子守唄は女と母の悩みを訴える哀切が盛られていた。世の辛惨をなめた中年女の懊惱は如何ばかりか。

ないから、よし子供があつても、結婚するか二号なんかで男の世話になつて、こんな所へは頼つてこない。

又派手な女は、水商売の所へ勤めて、時々肉体の切り売りをすれば、或る程度の生活には事を欠かない。この母子寮から二丁離れた駅前に、〃美須々アパート〃というのがある。一度この母子寮を頼つてきて、一週間も経たないうちに、そのアパートへ移つていった人があるので、私も一度訪ねて行つたことがある。

室数は十二ばかりなのだが、その中に住む人は皆〇〇新地の芸妓か、旦那を持つ二号さんばかりなので、〃お婆アパート〃と呼ばれているところである。

母子寮から移つていった女の人、金社の上役の人から世話を受けるようになったとかで、最初極

子寮を訪ねて来た時から見ると、お化粧から服装がすっかり變つて女は如何に化け物だといったつてずあ、あの人がと驚く位の変わり様である。

それから、身体に技術を持った人なんかもやつて来ない。しつかりした定収入があれば何にも、こんな飽きしい集團生活をしなくつたつて、間借りでもしていれば結構たのしい生活を夢見ることもあるのだから。

私は今迄、色恋の男のと言つたことを考えるよりも、生きることを食べることに、子供のことで頭が一杯になるギリギリの世帯であつたので、絶えて久しく男を異性として見ることもなかつたのだが、此処へ初めて来た時、入口に掲げられてある〃男子立入禁止〃の木札を見た時には、何にかしら、私た

われているといった感じが強く響いて、ふつと男の体が恋しいような気が湧いてきた瞬間もあつた。

やはり結婚を夢みる

然し現実にはそんな生やさしいものではなかつた。三ツに五ツの二人の子供を抱えた中年の女。しかも、手になんの職もない無学の女のことだから自惚れは強いのだが、自慢にでも男から魅力がある女体だとは思えない。

こゝの養育場へ廻つてくる内職の仕事なんて高が知れている。内職の仕事を出す側の方にしても、若し仕事本位という事を考えればこんな処へ仕事をもち込むのは嫌がるだろう。勢い自分で身入りのいゝ仕事を探さなくてはならない

を続けてゆく以上、甘い考えは禁物である。

通いの女中、洗濯女、会社の雑役婦、鉄屑拾、菓子商行商、紙芝居、封筒ハリ、下駄直し、この世の下級な仕事を網羅しているこのグループの職業である。近くを電車が通つてゐるが、やはり大阪迄出るのには往復数十円の電車賃がいるので、大抵はこの附近を足場としている。

こゝにいる女は、堅気の仕事をしているのが自慢である。女だから、やはり井戸端会議はある。どんな男にでも直ぐ身体を与える女は此処では直ぐ槍玉に挙る。そんな破廉恥な貞操のない女たちの攻撃を合する時には、こゝの女たちの頬は紅潮し、眼はいき／＼とかいやく。

自分達だけが此の世で最も貞淑な女だという自負が彼女たちを尙



更、お喋りにする。そして日々の激しい下積みの苦役が殉教者のような気持で幾分慰められる。美しく着飾った女たちに対する羨望や嫉妬は、その女たちの不貞という攻撃武器で抹殺される。

然し、この女たちが一様に異性が恋しくないとするのは嘘である。世帯に苦勞はしていても、やはり性慾の旺盛な中年女である。若し夫が生きている世ならば、そ



の温かい腕の中に毎夜抱かれて寝ている筈なのである。

今年の夏、この地域が大掃除の時、どうしても休めない会社の難役婦をしている女の荷物をみんなして片づけた時、風呂敷包の中から転り出した珍奇な品物に、一時掃除も中絶する位に話題が沸騰したが、この事を言い出された時、その難役婦の女は年甲斐もなく顔を真赤に染めて一言も言葉を発しな

かつたが、これは敢て彼女だけの悩みではなさそうだった。

彼女たちは三人寄れば、結婚の話をする。それもきまつて、子供にお父ちゃんが必要ならば可哀想だ、というのである。然し、最近こゝから結婚をして出ていった人は一人もいない。どんな貧乏な人でも正式に結婚をして子供を可愛がつてくれるのなら、と口を揃えて言う。それも彼女たちの夢でしかないのだから哀れだ。

虚榮と享樂に生きる

彼女たちの話題の槍玉に挙がる不貞の女とは一体どんな種類の女であろうか。

「貞女は二夫にすみえず」という昔流の貞操観念からいえば、未亡人は絶対に再婚も出来なければ勿論私通といった事は大禁物であるわけだ。

然し、この女たちの言う不貞といえは、パンパンや二号さんのことを言うらしい。少しケバ／＼しい派手な身なりをしないと「あの女は淫売かも知れんよ」と囁やきあうのである。正式な再婚は不貞とは見ない。然し、彼女たちの中から、正式な結婚で祝福されて出て行った者のない所を見ると如何に、ゴブ付女の結婚がむつかしいかわかる。

この寮は以前は幼稚園だったと

かで、廊下に滑つて教室のように並んだ部屋は、天井が低いまま、で十畳の間に仕切られている。だから子供の泣き声や、母親たちの話し声も筒抜けに聞える。人数によつて、この一間に三組乃至四組の家族が住居する。隣りは家畜飼育場なので風向きによつては、動物のいやな臭いと鳴き声が硝子窓越しに漂つてきて、つく／＼この住居がいやになる。

女はドン底に落ちて、やはり虚榮と享樂心は消え失せない。駅前の田舎芝居や映画館へ子供を連れて行つた時は、一しきりそれが御自慢になる。子供に与えるお菓子の数にしても又それが競争心のあらわれとなる。

金の有難味をイヤという程、身に浸みて感じさせられている女たちであるが、同じ寮の中で朋輩に見栄を飾りたい時には、あゝ金がないなアと一入思わせられる。男に媚びたり、肉体を売つたりする術を知らない彼女たちであつて見れば、そんな時には、別な悪魔の手が襲つてくる。最近になつて、金使いも荒く子供に買つてやる玩具等も急に高価なものを選ぶようになった女があつた。彼女は近くの食料品工場の洗濯女として働かれていたのだが、この工場の性質上、夜業が多いので家族の人手が足らないうちに寮の中へ衣類を盗んで帰つては、近くの古着屋へ売つていたのである。

少量ずつ巧妙に買物籠に忍ばせて盗んで帰つていたので家族の人達も、すつかり気がつかずにいたのだが、古着屋でよく似た着物を見つけ出したことから足がついてとう／＼見破られてしまった。警察問題にはならなかつたけれど、直ぐ洗濯女の仕事をやめさせられ間もなくこの寮も出て行つてしまった。

男の餌食になる女



た同性ばかりの生活では、えてして、砂を噛むような寂寥なものになり易い。経済的な意味ばかりではなしに、身辺を小綺麗にしている人達が少いのはどうしたことであらう。

それでいて人一倍男恋しい気持の強いのはこの階級の女である。婚期に遅れた老嬢が、私はもう一生独身で暮すのだと、倍り澄ました事を言つておきながら、その実触れなば落ちんといった風情で、

あんなつまらない男にといつた相手を選んで身を固めてゆく、といった心理と同じで、もうどんな相手でもよいから、この肉体の奥底から湧き上つてくる寂寞さを救つてくれ、ばその男に身体を授け出してゆこうと思ふのである。

女ばかりのこの寮は、さぞかしよく整頓されていて「男ヤモメにウジがわく」の反対で塵一つ落ちていないだらと思われののだが、実際はその反対で、投げやりな人が多いし共同生活は誰かやるだらうという依頼心が多いので廊下等は砂や土でザラ／＼でハダシで上るのは氣持が悪い位である。

女というものは、男と一緒に生活であれば暮しにも張りが出て来てよい意味での身振が女らしいもののぼのとした潤いを持たすのであるが、男を異性として見る眼を失つ

最初にいつたように、この寮の入口には、いかめしく「男子立入禁止」の立札が、諸々の男性の出入を阻んでいる。男氣といつたら事務員の浅田さん一人。しかし商業部の本年二十六才の独身男であつてみれば私たちの関心から遙かに縁が遠い。

三十過ぎたゴブ付の女とあれば五十過ぎの男の相手が相応であるだから、ダメに内職の仕事の事で

五十過ぎの男が来たりしたもののなら、皆の眼がキラリと光る。しかし、それも一瞬であつて、直ぐ仕事に頭がむいてゆく。

男というものは何故、この様に若い美しい女にばかり関心を示すのだろうか。私たちはまだ此の様に、立派に役に立つ肉体を持つてゐるのだが、冗談にもからかう男はいない。

若し本当に欺ますつもり男が居つたならば世間慣れしたようである。案外脆いのがこの女だから簡単に籠絡することが出来るだろうけれど、母子寮に住む女なんか欺したつて、逆さにしても血も出ないのだから厄介者を背負ひ込む位がオチである。

「今はこんな所に厄介になつていても、昔はこれでも奉公人の十人抱えて贅沢に暮らしていたのよ」と、

過去の自慢をする程イヤなものはない。私が昔からの貧乏人だといふのでヒガミで言うのではないが、過ぎ去つた生活なんか如何に自慢したつて仕方がないが、それも憐ない女の虚栄心のあらわれと思えば憎めない。この虚栄心と自尊心の高い女が、近くのヨセヤの親爺に欺されて、その高価な管の貞操が、なし／＼の衣料品や世帯道具等と一緒にハナカミの様に持ち去られたのだから泣くにも泣けやしない。

自分の肉体でも売つて金に替へるという事は生やさしいことではない。下手をすれば只で弄れるばかりでなく、お土産を頂戴するか金や品物を巻き上げられる。

彼女は金へん景気で値上りのした金屑を拾ひ群に混つて稼いでゐるうち、いつしかヨセヤの親爺と悪意になつて、世話をしてやろう子供さえ可愛がつて貰えるなら。と相談は簡単にまとまつて——肉体の方はずつと以前に許していらしいが、近々ヨセヤの家へ移転するといふので、行李に一杯の衣服と、台所用具を除いた世帯道具とを、商売道具の荷車で運びに来た五十五六の老人があつた。

そして、その日の夕方、気狂いのように泣き喚きながら帰つて来た女に聞いてみると、まんまと一杯喰わされたのである。ヨセヤの親爺とは真赤なウソ、実は忙しい



間だけ臨時に傭つた風来坊で、ヨセヤの主人も何処の馬の骨か一向に知らないとのこと。

詳しく言うまでもなく、女を只で遊んで行きがけの駄賃に世帯道具一切をかつさらつて行つたわけである。女にすれば案外、楽しい夢を見たのかも知れないが、世の中には、こんな薄倖の女をも絞りとろうとする悪性男が存在するのである。

秘かな性の取引

人の事ばかり書き立てたので、自分のことも一寸告白しておく。

こんなおバアちゃんでも貰つてやろうという奇特なお方があれば、姥様花を咲かせて、一苦勞して見たいと思つてゐる位だから、こんな裏面を告白するのは嫌だけれど、之れを書かないと偽善者のように思われるから書いてしまふ。

正直なところ、私の今一番欲しいのはお金である。前にもいつた様に三ツと五ツの二人の子供があるもので、住込みや夜にかゝる仕事は、それが如何に有利だといつても、するわけにはいかない。勢い狭い範囲に限定された中から私が選んだ仕事は、飯場の飯焚きである。

だから後はどうなるか知らないが今の所は、私が少しばかり字を書くところから手紙の代筆や事務の手伝いをして、名は飯焚女ながら結構楽な役廻りになつてゐる。

若し世間体と、妊娠ということがないならば女はもつと性については大胆になつてゐるだろうという事を、私はつくづく考える。

貞操とか純潔とかいつたつて、やはり肉慾の要求には勝てない。若し人に知られることなしに、妊娠を十分に避けることが出来るならば私も、男と遊んで、まだ／＼この若々しい肉体をこのまゝ朽ちさせたくはない。

私にいろんな噂が立つて、この寮に居られなくなると困る。私も母子三人を住ませてくれる所は今の所／＼以外にはない。だからこの寮を追い出されることは母子三人、路頭に迷ふことを意味する。未亡人の妊娠なんて、滑稽を通り越して悲惨である。

この寮では、同性の動向に対しては鋭敏な嗅覚を働かす姑のような女たちが多い。だから此の点シツポを掴まれないようにして、適当に外での男との交渉は持つてゐる。後くされのない条件で、この飯場で働いてゐる男たちとの秘密の性の取引である。

妻子のある男も独り者もある、その相手の男たちは十指に余つてゐる。私がいらぬといつても、ろいんな物を呉れたりする男。だ



が私は、そんな物質よりも、疼くこの肉体の処理が目的なのだから決してパンパンだなんて思つてゐやしない。

私や私の子供の生活はやはり私の身体を働かせた報酬から當んでゆくのが本当だと思つてゐる。それに、私は自分の肉体交渉のあつた男より金を貰つたりは出来ない組し易く婆さんと思つたり、恵んでやつた氣持でいたりする相手の男があるかも知れないけれど、潔癖な心がさういう私にしたのかと思つたりする時がある。

私が特別に氣があるなんて誤解されない為に金を要求した事もあつたが、強いて貰おうと思つたことは一度もなかつた。これも悲しい未亡人の虚栄心かしら。

失戀女の溜り尼寺袋中庵

津 坂 高 子

浮世を離れて清浄な生活を持つ筈の尼僧にも人並みの慾は消えなかつた。まして尼僧志願の乙女には性の乱舞は當然だつた。尼寺袋中庵の暴露談

私は自殺未遂女



尼寺——袋中庵、というよりも失戀女の集り今様吉田御殿といった方が遙かにわかりいゝ筈です。うら若い女性、ハチ切れそりな肉体と情熱を、墨染めの衣に包んで共同生活を續けている洛東五条坂の丘陵地帯。そこだけが凹んだよう

に低地となつた樹林の中に建つた尼寺。

そこは果して修養と持戒によつて何処までも道心堅固な仏弟子となつて行います人たちの住居でしょうか。私はフトした事から、この尼寺で三カ月を過した経験があるのです。

その頃、私自身が初めての恋に破れ果て、傷心の肉体を毎日持ち余して、このまゝではもう家出でも自殺でも繰り返えしかねないシヨゲ方でした。世間知らずの初心な乙女が、身も心も捧げ尽した男にだまされて捨てられた挙句、アドルム自殺の失敗。家出の失敗、僅かあと数カ月で卒業出来る筈の学業も放棄してこの仕末だつたのです。

忘れもしません今年の春三月炊事場で食器を洗つていて失戀の傷手の結果フイにアドルム百錠を飲み下してしまつたのです。全部飲み終るか終らないうちに、もう睡くて睡くて恐しい

とか悲しいとかいう考えは少しも起らず洗いかけのお茶碗を持つたまゝ、その場所へばつたりと倒れてしまいました。

それから何時間位経つたのでしようか。胸をかきむしられるような息苦しさ、眼が覚めたのは西の窓にもう陽がさがつていて、紙芝居屋の子供を集める拍子木の音が不思議にはつきりと記憶に残つておるのです。私が台所の板の上にお倒れているのを見つけた母親が、びつくりして医者呼んで来て呉れた時には、致死量を超すアドルムを嚙下しているのぞきこんで駄目だらうとの事でした。心臓が普通の人よりずつと丈夫だつたのでやつと助かつたのです。それから近所の人達が失戀で自殺をし損つた娘だといふので変な眼で見ますので、それが苦になつて家出をしたのです。しかし、それも淡路の友達の家へ行こうとして神戸港の埠頭をうろ／＼しているところを、警官に見つかつて再び家へ連れ戻

されてしまいました。こうして、生ける屍のような私は伯母の知り合いになるこの袋中庵へ預けられたのです。

家出した尼僧

志願者

俗名を糸子さんという娘さんがいました。糸子さんという大變愛くるしく聞えますが、決して名は体を現すような糸子さんではありません。むしろ綱子さんか、縋子さんとも言つた方が、遙かに彼女には適切だつたでしょう。

飢えた時には食慾以外の慾望がなくなるという事は終戦直後の食糧難の時にイヤという程御経験になられた事と思います。

仏弟子の精進する場所であるこの尼寺ではこの心理を一番巧みに纏んで利用しています。すべての辛い勤めや、差別的な待遇が、此処ではすべて「修行」という美しい言葉を冠されて、不平もストライキもなく、たゞ囁詞不思議な南阿無彌陀仏だけが敵として存在しているのです。

糸子さんは、この尼寺の中で一番貧しい家の娘さんでした。尼になるということが、その人の自由意志から出るものだとして、そんな気紛れを出せないような家の娘だつたのです。とても毎月の食費から修行費、その他に多額な寄附金まで出来ない家の娘である糸

子さんが、どうして尼寺に起居するようになったかと言いますと、下働き雑役としての生活が彼女の仕事だつたので、庵主が特に無給雑役婦として預つたわけでした。

「ナンマイダ／＼／＼」

そう呟きながら、金持のご令嬢で、今は氣まぐれ尼僧の汚した便所をせつせと仕末して行く彼女の姿を見たら、如何に精進の辛いかが如実に伺われます。

彼女は映画を見ませんでした。と言いますと、随分奇妙にお感じになるかも知れません。が、庵主が大の映画ファンで、変る度毎に街へ出て見逃せないのですから、映画だけは入場料に困らなければ誰かが大びらで見に行くことが出来たのです。

この尼寺に來ている娘さんの殆んどは、物質に困らない者ばかりですから、映画を見て来た晩は、一しきりその美しい恋のロマンスを追想し語りあうのですが、貧しいために皆と一緒に街へ出られない糸子さんにとつて、こうした事を聞かされるのが、どんなに辛いことだつたでしょう！

或る朝、糸子さんは朝の勤行に出て來なかつたのです。多分便所の掃除が手間どつて位に考えていたのですが、何時まで経つても姿を見せませんでした。彼女の机の上には、彼女の悲しい心を書き綴つた一通の遺書が置かれてあつたのです。

——わたくしはお金がないの、
で、とても尼さんにはなれませ
ん。わたくしは、東京へ行つて女
中になり、お金をとつてから、ま
た帰つて来ようかと思ひました。
あたまでつる／＼では、女中にも
なれませんが。わたくしは死にま
す。死ねば仏さまになれます。

ナムアミダブツ……糸子

糸子さんは、とても生きて仏に
なれないと思つたのでしよう。死
ねば仏になる——これが幼稚な頭
に堪らなく頼もしい魅惑だつたの
でしよう。然し、彼女の屍体は何
処にもありませんでした。或はつ
る／＼の頭で女中を志願したのか
も知れません。

庵主の色道行脚

労働は神聖——それは尼寺では
最も必要なそして有意義な金言で
す。ヘト／＼に疲勞することによ
つて、多情多感な淫奔女の合宿所
は、ようやく静かな眠りに入られ
るのです。

此処にいる誰もが——例外に糸
子さんのように一人の娘を仏に捧
げるといふ親の意志からの人もあ
りますが、それは庵主が歓迎しま
せん。それよりは、金持の不品行
な娘の方が遙かに尼寺経営上必
要であるのです。——汚れた浮世
と高くとまるだけあつて、相当自
惚れてもい／＼だけの美貌の持主の
集りなのです。

肉体的な疲勞を伴わない夜など
は、ダンサーや女給の集りと何ら
変るところはありません。それこ
そ俗人以上の世界なのです。却つ
て殆んど娘たちが激しい恋愛の
経験者の強者だけに、さん／＼語



合つて末は、エロを通り越してグ
ロに近い地獄の形相を展開します
私が庵主の尼僧の秘密を知つた
のは、こゝへ来てから一週間ばか
り経つてからです。この尼寺へ来
てから、私はすっかり元気になつ
ていました。今迄のおセンチが飛
び去つて、そのかわりに、簪にも
棒にもかゝらないおテンバ娘へと
變つていつたのです。

その日は和やか春の陽ざしなが
誘うように差し込んで、土の香が
胸をときめかす四月の中旬でし
た。尼僧志願者たちは土をなつか
しんで庵主の命令で、萌え出した
芝生の雑草を抜きとつていまし

た。

私はこの日、生霊の前でなんと
なく身体がだる／＼一人皆と離れて
庵主の居間になつてゐる離れの裏
の櫓林の下に落葉に寝そべつて、
サボつていました。その時です。
裏山を伝つてカサ／＼と人の足音
がしたので。私は寝転んだまゝ
でその足音の方を見ました。

その足音は檀家の中でも有力な
坂本さんでした。坂本さんは尼寺
を訪ねてくる度に、私達にキヤラ
メル等を呉れたりするので、よく
知つていました。私がじつとして
いるので坂本さんは、気付かず
縁側から庵主の部屋の障子を開け
て入つてゆきました。

その時、チャリと庵主の青い坊
主頭が障子のかげから覗き、何に
か驚くような女の声が洩れて来
ました。私はむくりと起き上ると
簪を片手に、今閉められたばかり
の障子へ耳を寄せてゆきました。

そこで私は坂本さんと庵主の、
どんな秘密の場面を眺めたでし
うか。

賢明な私はこの覗きからくりの
秘密を朋輩に洩らすかわりに、庵
主の尼僧に打ち聞きました。

浴槽の秘密

その翌日から私は庵主つきの当
番として、尼僧の側に仕えること
になりました。庵主は私が最初想
像していた以上に淫奔極まりない女

で、私の知つてゐる範圍でも数人
の男が、この尼寺を公然と訪れて
いるのです。

私がこの秘密を知つてからは、
庵主は私にだけは、隠しだてはせ
ず、私の眼の前で大びらに男と戯
れあつたりしました。粗食と労働
これが、この仏弟子修業の鉄則で
したが、私だけは特別扱いで、糸
子さんが失踪以来、交替で行う風
呂焚きや、便所掃除、寺内の清掃
も免除されていましたし、食事も
尼僧のお給仕をする名目で同じ食
べ物を頂いていました。

午後三時になると、夕の勤行の
前に、庵主と一緒に入浴するので
す。今年三十二才になる尼僧は、
頭こそ坊主に剃つてはいますが、
裸になるとぼつてりと脂肪ぶりし
てふるいつきたい程惚々とする肉
体美の持主なのです。鮮紅の皮膚
は滑々として、指先で摘まもうと
しても皮下脂肪が厚くて摘まめな
い位です。

子供を産んだ事がないのでお乳
房は処女のように膨らんでいま
す。庵主は私に身体の間々洗わ
すのです。高貴な方は遠慮心がな
いといわれますが、庵主もそうな
のです。子供のよう、すつかり
私に身体をまかせ切つて言ひ通り
自由になるのです。男との恋に破
れて、かたくなになつていた私は
いつしか、この庵主を慕うように
なつていました。仏弟子としての
この大それた破戒的行為も、初め

て知つた肉体の法悦境には勝てま
せんでした。

今様吉田御殿

この尼寺が今様吉田御殿として
街の人たちから噂される頃には、
男たちを引き入れて現世の肉体の
極楽を味つていたのは、庵主だけ
ではなかつた事がわかり、流石の
尼僧も慌て出しました。

袋中庵の裏手の山へ行けば尼僧
のペン／＼が買えるとな誰が言い出
したか、そんな噂が立つたので
す。それから夕暮ともなれば物
好きな若い男の影がチャ／＼と物
欲しそりに欄の間に見えかくれし
出しました。

さあ、落ち着かないのは、恋愛
失敗者の尼僧たちです。散歩する
風をして相手の男を求めては次々
と森の中へ消えてゆきました。金





枯木ですまさ

れぬ人間

寺内の風呂の釜が薪を無理に押し込んで壊れた日でした。二人の同僚と一緒に三ヶ月振りで町湯のれんをくぐったのでした。

頭を丸めた尼僧を汚すといった事に異常な興味を覚えた街の男たちは、針小棒大に言いふらして友を誘って噂をまき散らしましたので、尼寺袋中庵の周辺の林の中では、夜毎、激しい肉体の饗宴が活

潑に繰りひろげられました。勿論私もその中の尼僧の姫君の一人でした。一度処女の純潔を捨てた女は勇敢でした。来る夜も来る夜も、変った男との肉体の交渉の楽しさ。扉は部屋の間で転寝をしては、夜は泥棒猫のように、男を求めては林の中をさまよい歩くのです。

林の中は天然の巧まざる尊でした。カサ／＼という落葉の音さえ辛抱すれば、青空天国の暗闇の中で人間本来の最も原始的な本能の発露に狂うことが出来るのです。

もうこゝには虚栄も見栄もてりいも無いのです。性の乱舞が大胆奔放に繰りひろげられてゆくばかりでした。若し男の人たちに、遊里等の女を片づけしから弄んでゆく興味があるとしたら、私たち尼僧の行動もそんなところに自虐的な喜びがあつたのかも知れません

「娘のうちなんか、まだ／＼よ、どうせ苦勞はいろんな形で一生ついて廻るんだもの、でも、娘のうちは、その苦勞の間に案外楽しみのあることだつて知らないのよ」

「だつて……あたし、矢張り厭な人と不幸だわ……」

私は二人の話を聞いているうちに、何故かこの解らずやの娘さんが、憎らしいような氣持になつて来たのです。と、反対にこの幸福らしい若妻が、なんとなく羨ましく、そして輝やかしい存在のようにさえ思われてくるのでした。

「そうだ、どうせ苦勞はいろんな形で生涯つきまとう。どうせ苦しむとしたら、もつと、もつと人間的に苦しまねばいけない。枯木のような尼僧の生活そこには人生にある案外の楽しみ、それすらも有りよう筈がないではないか。」

枯木ですまされぬ人間としたら、それこそ、もつと多くの破戒と虚偽を積み重ねなければならぬ。私は銭湯を出ると、二人の友と別れて、真直ぐ帽子屋へ飛び込んだのでした。そして円い頭をかくす帽子を胸に抱いた時、初めて晴々とした胸の鼓動をきいたのでした。

壊された尼寺

その頃はもう庵主の權威はすっかり地に墜ちて行われなくなつていました。悪い噂を伝え聞いた親達は、一人、二人と齒を抜くように娘を引取つて、遂には尼僧の世話をやく人さえ居なくなりまして。

一度、尼僧の餅肌を抱れて、歡喜にむせび泣いた事もある私でしたから、広い寺内を一人で清掃している庵主の事を思うと訪ねてゆきたい氣持も起らないわけでもありません。

然し、やはり女は男なしでは生きてゆけないのです。特に私のような淫奔な女は。

今、内でお披露をやつています。幾も大分伸びて来ましたので、パーマをかけようかと思つていま



す。

断髪にした女の頭もマンザラ捨てたものでもありません。宝塚の男装の麗人ではありませんが、裾を刈り上げて、髪の毛の先の方をピンとそらしすすと、鏡で見る自分の顔ながら、惚れ／＼とする時だつてあるのです。

申す迄もなく、もう男のお友達も二三出来ています。え、勿論私の過去を十分知った人たちはばかりです。もと／＼映画は三度の御飯と同じように好きなのですが、この男のお友達と一緒に並んで見る時が一番好きなのです。

甘い／＼恋愛映画の濃厚なシーンで十分気分を興奮させてから……。その後は言わなくともお分りでしう。

尼僧に打ち込んでいた坂本さんは、市会議員の選挙違反をとわれて、失格したそうです。

あれから直ぐ袋中庵も取りこわされてしまい、今では舗装された県道が、丁度尼寺の跡の上を通過して、盛り土をして見違えるようになってしまいましたので、その当時を偲ぶ師は今では何にもありません。

私はその道を通る度にその頃の事が思い出されて、何か下腹の疼くような思いにやるせなくなるのです。

× × ×

探訪實話

〔色街ルポルタージュ〕

大木悦二

松島新地の社交喫茶ハートの一角



戦災で全滅した松島新地の新生の姿はどうであらうか？

道の商店街で買った紙包みをかゝえながら、私は急に松島新地を横ぎつてみたくなった。戦災に会う前の松島遊廊は三階建て五百軒、三千人の妓がいた。東に飛田、西に松島といえど知らない者はあるまい。だが、元の遊廊跡は、ぼうくたる雑草をぬき瓦礫を埋め、きれいに地ならしをして、清楚な市民の公園に生れ変わろうとしている。

いまでも整理人夫のツルハシやシャベルに掘つても掘つても人骨がひつかゝつて出てくるといふ。哀れな公娼たちの無惨な最後をおもひ出して仕方がない。私は、とにかく「松島」の新しい姿をのぞいてみる。

戦後の松島新地というのには、市電の本田二丁目から西南の一角、ちょうど茨住吉神社の裏側一帯を占めている。戦災前は細い小路がクネ／＼めぐり――古着屋の多い、ごみごみした商店街であつたことをおぼえて

いる。丸饅頭の跡は、昭和二十二年頃もまだ見渡す限りぼうくたる雑草の饒野であつた。雨が降つたらたちまち泥田のような水たまりが出来ると、旱天ならばもう／＼と砂埃が立つ。こんな手のつけられない戦災地にボツンと一粒、生き残りの「松島」の芽が吹いた。それがたちまち繁殖しはじめて、あれ／＼という間に、炎の拡がるように、百軒以上もの「特殊喫茶店」が押し並んでしまつた。昭和二十三年の春頃からわづか三年の間のことであるらしい。

アブレ派松島は昔のように堂々三階建、一眼で妓楼とわかるような派手なものではない。二階建木造で、ちよつと見た所では酒場とも小料理屋とも、喫茶店とも待合とも、なんとも見当のつかぬ店構えである。たゞ、ケバケバしいばかりに輝かせ赤や青や紫のネオン装飾と人口のタイル貼りの土間に何人かの厚化粧の若い女が

にぎやかに笑いさわぎながら立つたり椅子にかけたりしているのが女給でもなくダンサーでもない奇妙な空気を醸し出しているのぞかる。

それはまだいゝ方で、ほとんどの若い女は街路へ出ている。男が通れば、さつと私たちの視線が敏感に動く。商売というものの、その一べつで、いゝカモか、素寒貧か素見かが即座に判るらしい。いかにもつましい貧しいサラリーマン風の、しかも、小股に買物包をかゝえた中年男の私などは彼女たちのお好みに合うはずがない。私は苦笑しながら、足早やに本田二丁目の交叉点へ急いでいた。

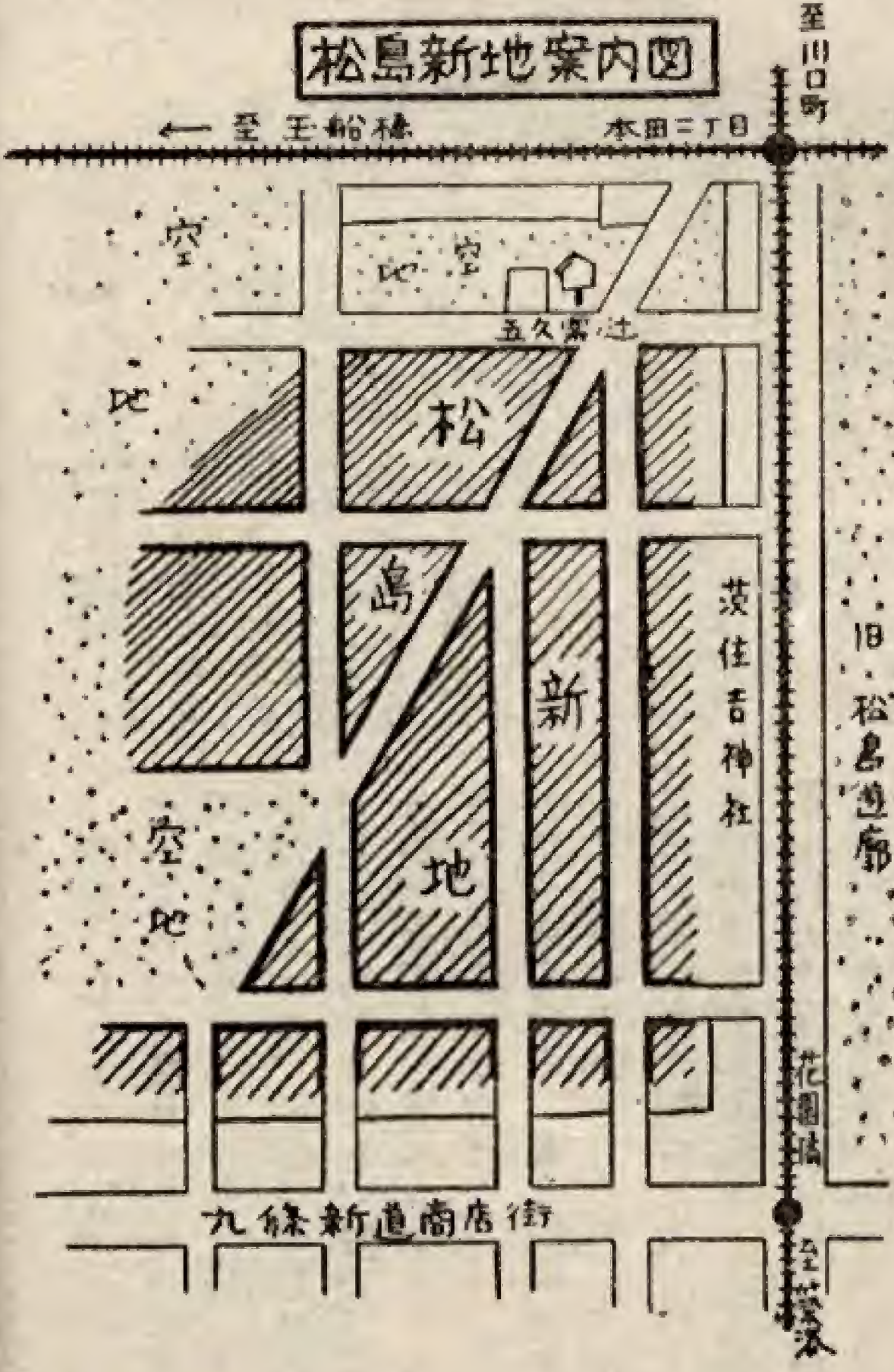
ほんとうを言えば私のふところには使つていゝ金が五六千円残っている。別に彼女たちの若い肉体を買う興味もないが、もしも彼女たちの誰かと誘つたら、買つてやつてもいゝ。明るいネオンに美しく染まりながら、割合におとなしく客を見逃す彼女たちだとおもひながら、私は五久楽の辻まで来

く 歩

一、新しい松島新地

九月の夜空は美しい。きらきらと輝く星空の下を、九条新

松島新地案内図



を 街 の 婦 客 接

〔まだ生きているボス〕

た。こゝで私の親友が茶房をやつてゐる。久しぶりに寄つてやろうと、ネオンの光の届かない軒かげを通り過ぎようとしたとたん、私は前から後から、右から左から、まるで蟻にとびつかれるように若い娘たちにぶら下られた。

「おい／＼、離せよ、おいつたら！」

「うふふ、迷がしやしないわよ、ちやんと目星をつけて追つて来たのよ」

「憎らしいわ、わざと素面しらふで知らん顔して通りぬけるなんて」

「ね、遊んで！泊りがむりな時間だつていゝわよ」

「あんた、きつと泊るお金を持つてゐるでしょ、ちやんと判つてゐるのよ」

「……まあ、ちよつと待つてくれ、第一さこんな暗がりです四人も五人も一ぺんにとびつかれちゃ話にもなんにも……」

「顔なら穴があくほど明るいところで見てちょうだい、私たちのうちの誰が好きでもいいの」

「だつたら、明るいところでなせ」

「だめねえ、道路で客引きしちゃ、警察がうるさいからよさつきから巡査がまわつてゐるじゃないの！」

「あなたから店へ入つてきて下されば文句ないのよ、でも私たちがひつぱつちや軽犯罪法の道路取締違反とかなんとかうるさいのよ」

「チエッ、ヤボな規則があるんだなあ、それじゃ、こつちから君たちの居る店へ入ればいいのかい、君たち、みんな同じ店かい？」

「ちがうわ、だから、明るいところで、私たちを見比べて、気に入った人のとこへついて行つて下さればいいのよ」

「ようし、それじゃ美人五人の首実驗か」私は笑いながら、五人の女を明るいうネオンのさす街路に並べた。

女の顔は夜見るにかぎる。それもボーツとネオンの明滅する仄明るいところで。

「うーん、みんな若いねえ」

「おほ／＼、いくら若くたつて一人前よ」女たちはクス／＼笑う。私の会社にもタイピストや交換手や事務員の若い娘が多い。年ごろは、新制高校か新制大学を出て

いるからたいてい満十九才から満二十三才である。毎日見馴れている会社の娘たちさえ、自分の娘ぐらゐに思う私は、たしかに、この五人の接客婦たちが、それよりなお若く、おそらく十八才以下だろうと直感した。髪の毛の艶や張り切つた頬から頰の線のみづ／＼しさは、二十すぎた女にはぜつたい見られないからだ。

「ねえ、誰にするの、早く決めてよ！」

「ようし、決めるよ、五人とも手を前に出したまえ、そして眼をつぶりたまえ」

私にとつては女よりも好みはない。目的は抱いて寝ることの他にある。

「よし決めた、まん中の人だ！」私はまん中の洋装の娘と握手した。

「あら、恵美子ちゃん？じや、さよなら」別に未練も残さず、別の客を探しに散つてゆく四人の娘の丸い肩と、ふくらんだ腰どんな生活だつて、若い目にははちきれりような青春の美しさが溢れている。

「ありがとう、じや来て下さる？」

恵美子は私の買物包をいそ／＼と受けとるとうれしそうに笑つた。

「どこだい、店は？」

「この角から六軒目、そら、紫色でハート形のネオンがともつてゐるでしょ」

「いくら？……泊りで」

「え／＼、いまからだと千五百円ね、でも、このごろとても不景氣でお客が少いの、だから千二百円にしたつてかまわないの」

「そこで相談だが、たしか三業分離つてことになつて君がお客とどの待合へ泊つても自由なんだろ、別に君の店へ行かなくたつて」

「そうなの、お店は特殊喫茶店ということになつていて、別にせひ泊らなければつて規則はないの、でも……」

「よそへ泊つたら、やつぱりお父さんに叱られるわ」

「お父さんつて……」

私は黙然とした。もうぜつたいにボスはいないはずだ。昔の公娼なら、楼主のおやじを、哀れな彼女たちは、お父さんと呼んで絶対服従を強いられたものだがまさか……。私はどきつと胸さわぎを感じた。

「お父さん」なんて、この若い娘が無意識に口走る以上、特殊喫茶はやはり遊廓にすぎず、接客婦は公娼とそうかけ放れてはいないはずだ！

「ほんとうに千二百円ぐらいでいいのかいそれで君の分け前は？」

「……あなた、ひよつとしたら新聞記者の探訪じやないの？こまるわ、こんなこと私が言つたなんて書かれたら」

「心配要らないさ、言つてごらん」

「大丈夫？新聞には書かないでね、私には五百円ほど入るの」

松島新地の路上を歩く娘



「あとの七百円は？」

「税金やなにやかやが半分と、お父さんの方に食事代や部屋代に半分入れるの」

「わかった！……おもつてた通りさ、惠美ちゃんとかいつたね、君にこれだけ別にあげる」

「……まあ、五百円？いたゞいていゝの？」

「いゝかい、店の方へは君がさつき言つたように千二百円で泊りを承知したといえはいゝんだよ、わかつたね？」

「あなたいつたい誰なの、値切るお客ばかりなのに、別に私にくださるなんてあなたのはじめてよ」

「あはは、なあに、君が好きになつたからさ、甘ちゃんのお呆のおじさんが、こすつからい世間に一人ぐらいいはいるものさ」

「酔つてらつしやるの？」

「いゝや、ちつとも、その証拠に、酒くさくないだろう」

私はふと立ちどまると惠美子を抱いて軽く接吻した。

「まあ、それより早く君の部屋へ落ちつてよ」

私はやわらかい女の肩を抱いた。哀れさがじんとこみあげた。

二、生きてゐるボス

戦前の松島遊廓、それはおもい出すだにひどい搾取と封建の特殊部落だつた。帝王のように君臨する楼主と、悪らつで口汚ないやり手婆と、豚のように無智で無力な娼妓たちと。毎月二回、検徴をうけに行く娼妓たちの、白粉やけしたとす黒い顔と、異様にふくれた動物じみたふとい腰、がくりと根のゆるんだ髪と、びら／＼のふだん着

と……。日光の下でみる彼女達の印象はまさに泥まみれのふとつた野良猫だつた。第二期徴毒で髪や眉毛が薄くぬけることを「トヤについた」と喜び、客に台の物をすゝめ、自分もありつくために、ふだんの食事はきわめて粗末なものをあたえられていた。私はおぼえてゐる……。あまいものに餓えしよつ中空腹な彼女たちが、部屋のダンスの抽斗に、枕と高下駄と、それから食パンと白砂糖を入れていたことを。又、しつこく台の物をせがんで、十人前ほどの鮓が大量で運ばれると、隣近所の同輩を大きな声で呼びあつめ、客への礼儀もなにもそのけで、動物のように兩手でつかんで口へねじこんだことも。

そのくせ、赤ん坊や幼な子や小鳥などが好きで、うつかり風間赤ん坊を抱いて松島を通つたりすると、歓声をあげて集つてきて、奪いあつて赤ん坊をあやしたが、幼な子をつれて通ると、すれちがいさまに「坊つちゃん、これあげましよ」

と紙に包んだ菓子を見知らぬ妓がくれたり、せまい部屋の中に、カナリヤや目白やを飼つていたり……。とにかく、無智そのもののの中にとても美しい神と、泥んこに汚れた豚がいっしょくたに住んでゐるのが娼妓であつた。

そんな思い出にふけりながら、チャブ台に膝をついてタバコをふかす私に、おつと

「おこつてらつしやるの？さつきのこと」

シユミーズ一枚になつた惠美子は悲しうに、べたんとチャブ台の向う側に横すわりになつていた。

「いや、なんでもないさ、あれが店の規則なんだらうからね」

さつきのことというのは、惠美子とこの店へ入つたときのことである。ぎら／＼するような照明の下、ちよつとダンスでもできそうな床のある喫茶室の椅子へ、惠美子に案内されてかけると同時に、なにもたのまないのにコーヒーとケーキが二人分運ばれてきたのである。なにげなくコーヒーに口をつけた私はそれが、シロップを湯に溶いたもので知るとすぐ卓においた。ケーキは見た眼にも古く固いものだつた。こんなところ、いつさい

不粹なヤボはいゝた。だが、たゞ型式のために、何人もの客に、飲めもせぬコーヒーを出し、食いもせぬケーキをならべて見せる。こゝにもやはり元の「遊廓」が生きてゐるのか。卑しいとおもう、寂しいとおもう。

むつとり黙つてゐる私に氣兼ねしたのか、惠美子が「お願い……、デンをつけたげてね」

と耳許でさゝやく。私は黙つて百円札を三枚卓の上においた。それを待ちかねたように、コーヒーとケーキは消え失せた。それが、番頭とか女中とか名前こそ変つても、抹茶一杯をわざ／＼盆の上にのせて、客と妓の前に運び、祝儀にありつくまで、ねち／＼と粘つた昔のやり手婆の手口と一体どれだけ変つてゐるのか……。私は嘔吐を催しそりになつた。解放され



たはずの籠の鳥はいまでも止り木に足を縛りつけられてゐる！。これで探訪の目的は十分達した。もうすぐ帰りたい。昔の松島遊廓はやつぱり生きて、女たちの若い生血を吸つてゐるのだ！

「ねえ……、もうおやすみにならない？」

「そうだな、それより少し下へ降りて踊らないか」

「えゝ」

私の不気味な治つたとみたのか、惠美子はいそいそとブラウスをひつかけた。

「何時だね今は？」

「十一時四十分よ、どうして？」

「営業時間はたしか十一時限りだろう、十一時になつたら、君たちは自由に下宿へ帰つて寝ていゝんだろ……、お客と待合へ泊る以外は」

「……」

私はまだ道路で、お茶を引くまいと客を導くあう若い女たちの金切り声を耳にした。

「やつぱりみんなお父さんが怖いんだね」

「えゝ、でも」

「だしぬけだが、惠美ちゃんはこの店に前借がいくらあるの？、二万円、それとも三万円かい？」

「はじめは三万円だつたのだけれど」

「いまは」

「四万五六千円あるんだつて」

「お客がないのかい、惠美ちゃんにお客が

「いなくてふしぎだな」
「あることはあるわ、毎晩時間の花が二人か三人ときく、泊り花もつくけど」
「じゃあ、一カ月二万円にはなるじやないか、その中から三千円か四千円づつでも返してゆけば」
「それがかんたんに出来ないのよ、私はまだいけど、文ちゃんつて友人なんか、このごろヒロポンを一日二十本も打つてすもの、借金を返すどころか増える一方なの



「ヒロポン？」
「え、接客婦の人たち、身体にずいぶんむりするでしょう、だから、ヒロポンでも打たなければ、とても毎日お客をとれないわ」
「ヒロポンは禁止のはずだよ、どうして手に入れるの？」
「××人のブローカーが持つてくるわ、一本二十円だけ」
「じゃあ、二十本も打つたら四百円とぶわけだね、時間のお客を二人や三人とつても

追いつきやしない」
「でも打たなければ身体が保たないわ」
「そうかなあ」
「ねえ、こんなお話より愉快に踊りまじやうよ」
「あゝ行こう」
私は恵美子を抱くと、久しぶりでおぼつかないワルツのステップをふみはじめた。

三、接客婦勤め

恵美子の肉体はすばりかつた。顔だけ見ていると、まだどこかに幼い少女の面影が残っているのに、金裸になると、よく発達した乳房やゆたかな腰や、やわらかい太股は、たしかに「一人前」に成熟しきつてゐる女だつた。だが、それは、自然に恋愛し結婚した女の素直な成熟ぶりではなかつた。

まだ青い未熟なクダモノを撈ぎとり、むりに温室の中で熟させたような哀れな不自然さなのである。満十八才と云えば、ふつうなら新制大学の一年生ぐらいの処女である。それがどうして接客婦勤めをしなければならぬのか、それはむしろ聞いてやらない方がいい。私はほんとうは恵美子の体を抱きたくなかなかつた。しかし、一旦金を渡した接客婦を抱かないということは相手を引きつてゐる……とられ、かえつて大きな怒りを買うものである。接客婦はそれがどんな醜婦であらうとも、客が抱かなかつたとなれば、客にふられたとなつて、朋輩の間で大きな恥辱になる。

客を十分に満足させたということが彼女たちの誇りである。自尊心を高めることにもなる。それからもう一つ哀れにおもつた

のは、恵美子たちがパンパンに対してひどい反感をもっていることだつた。

だつて、あの女たちは宿なし犬よ、道であつた男を安ホテルへくわえこんだり、公園のベンチに寝たり、そんなのいやだわ、こゝろ見えたつて私たちはチャンと税金を納めて、お部屋を持つてゐるのよ、パンパンなんかとちがうのよ」

夜具の上に腹ばいになつて、タバコの煙をふうつと吐きながら彼女は昂然と呟いた。肉体を売りながら、接客婦は玄人としての自尊心を持つてゐる。笑うにも笑えない悲慘な誇りを捨てない。パンパンの方こそ、君たちよりもつと濫刺と身体を賭けて生きている過ましい自由を持つてゐるよ、このごろの男性は君たちよりもパンパンの方に魅力を感じるとだ、私は心の中で寂しい苦笑をうかべた。

その夜明け。

「また来てね、きつとよ、待つてゐるわ」

とおきまりの殺し文句をならべる彼女に送られて私は玄関で靴をはいた。一夜の激しい労働で、恵美子のパーマネントの髪は海藻のように乱れ、腫れぼつたい眼と、どんなより灰色の寝不足の顔の描き眉毛が半分消えていた。

そのくせ毒のようになま／＼しい赤い口紅だけが妙に妖艶だつた。銀のよつたシユミーズの胸にゆりべ愛撫させた二つの乳房がふくらんで見える。

「またよ、きつと」

私は入口を出かけに、恵美人が玄関の柱につかまりながら、マニキュアした手ですばやく投げキッスをするのを見た。

朝の松島新地の佗しさ。西の方に四貫島の八本煙突がニョッキリ聳え、戦災地跡ら

しい雑草がはびこり、昨夜あんなに妖しい夢をそつたネオンも、冷たいガラスの管が、異様にまがりくねつてゐる正体をあらわ／＼と見せていた。まだどの店も起きてゐない、凸凹だらけの道路にはもう砂埃がもう／＼と舞つていた。それはさく／＼とした享樂のあとのつめたい現実そのものだつた。

私がふた／＼松島新地で遊ぶことはないだろう。恵美子もやがて朋輩と同じようにヒロポンをうち、中毒にかゝり、前借金や雪ダルマのようにかさんでゆくだろう。そうでなければ、いずれは脳髄毒かなにかで発狂してしまふかも知れぬ。

接客婦で三十才まで寿命のある女は半数あるかなしだと私は聞いている。素人の女も二十三を越えれば肌がゆるむ。まして、肉体を酷使する接客婦ならば、いつそ花の盛りは短かいであらう。

だが、彼女たちの若い生血を吸う悪魔はむしろその方をよろこぶ。欠陥だらけのこの社会がこのまゝ続く限り、恵美子のように哀れな接客婦に落ちてくる娘たちは無根に生れてくるのである。吸血鬼はそれ待っている。

その背後にもつと巨大な吸血鬼が居るのだ。この吸血鬼どもの怖ろしい犯罪はかつて罰せられたことがないのである。

本田二丁目から私を乗せた満員の市電には、弁当を抱えた勤め人が、講和会議の事を声高に話し合つてゐた。

(完)

【註】文中の恵美子は仮名である。

こんど・あまどりあ



竹世田 豊
画・沖 研二

1. 最後迄讀まなくてはいけな話 (別名御婦人方が讀むと一生得をする話)

「じゃあ、山本信二つて人、御存知？」

「山本信二？知らないね」

「矢張り、株屋さんらしいけど」

「夜更けのバー」

「客とウエイトレス」

「どうかしたのかね、その男が？」

「？」

「とてもひどい奴らしいの」

「らしい？君は会った事がないの？」

「？」

「けど、此の近所は、そいつの噂で持ち切りよ」

「一体、何をしでかしたと言うん

だね？」

「色魔つて云うのか知ら。相当の被害者がいてよ。早い話が此処の」

「マダム、良い歳をしてのめく引」

「つかけられたの、挙句の果てがお」

「腹にプレゼント迄貰つて。今頃病」

「院で呻いているでしょうよ。しか」

「しマダムも好くないのよ。幾ら商」

「売柄でも桃色遊戯が過ぎるんだわ」

「流石に今度の事でけりたらしい」

「けど……」

「成程。それで今夜は、君がピン」

「チ・ヒッターと云う訳か。しかし」

「マダムともあろう者が、とんだへ」

「マをやつたものだ」

「でも、聞いて見れば無理もない」

「のよ。何しろ凄惨な美男子だと」

「云うし、相当の教養も身につけて」

「いるらしいの。おまけに金離れが」

「とてもいいらしいわ——尤も、最」

「初の内だけだ。とに角、条件」

「が揃っているわね。海千山千のマ」

「ダムが嬉し泣きしているのを見逃」

「したのが重ねく残念だわ。それ」

「にしても、マダムはもう少し用心」

「すべきだったのよ。男の香ばしく」

「ない噂がとび始めていたし、それ」

「を証明するような事実が目の前に」

「転つていたんだから、当然男を見直さなければならなかつたのだわ——御存じ、角の煙草屋？その看板娘のお腹が、その時もう人の目につく程大きくなつていたのよ可哀想に、毎日目をはらして苦しそりに肩で息をし乍ら、あの子は店に坐つていたわ。マダムはそれを見た筈なのに」

「どうしたね、娘は？」

「さあどうしたかしら。急に見えなくなつたわ。何でもひどく純情な女だつたらしく、そんな体になつても矢張り男を愛していたらしいわね。どうしても子供を生むと云つてきかなかつたそうだし、遂に親にも相手の名前を打明けなかつたと云うの。親に見れば、随分無念な話に違いないわ。でも私に云わせればその娘は馬鹿よ。美徳も程度を過ぎれば悪徳になるつて事を知らないんだわ。私ならそいつを殺すわ——処女を奪われ残酷に棄てられた女に最適な復讐法だと思ふの、それが又同性の危険を防止する事にもなるし——」

「全くひどい。君の憤慨するのも尤もだ」
「処で何とか云つたね、その男」
「山本信一よ」
「山本信一ね……？矢張り心当りが無い」
「もつと酷い話を聞いわ——事もあろうに、人妻に手を出したんですつて。しかし悪い事は出来ないものね、旦那様に現場を見られて」

「了つたのよ。でも其の御主人は好く出来た方で、成るべく隠かに話を進めようとなさつたそうだがそれ程の御執心なら気持よくお譲りしましょうつて。処が男の云草が癪じやないの。御執心は奥様の方で、僕はたゞその犠牲に過ぎないんですつて。それから斯うも云つたそうよ。此れは僕とあなたの問題じやなく、あなたと奥様の問題ですつて。男は巧みに逃げて了つたの。可哀想なのは奥様よ。御主人には冷い目で見られ、恋人には捨てられ、遂に思い余つて首吊り迄しかけたそうだわ」

「成程、実に怪しからん。ドン・ファン、カザノヴァ——いや、彼等だつてもつと人情味を持つているだろうよ。全く残酷なやり方だね。放つて置けば大変な事になるよ。毒牙にかけられて泣く善良な婦女子がますく殖えるその中には君、君自身にだつて起り得る可能性がある事なんだぜ」
「私に？冗談じやない。塩をふりかけて、ほうきで叩き出してやるわ」

「ほう、大変な鼻息だね。しかし其の元氣なら大丈夫。他の犠牲者の敵討と思つて半殺しにしてやればいい。色男には、それでも有難すぎる位だよ。ええと——何んと云つたつけ、その男？」
「忘れっぽいのね、山本信一だわよ」

「そう、山本信一。僕だつて斯んな話を聞いた以上、そいつを此儘にはして置かないよ。これで僕は、なかくのフェミニストなんだから……」

「フェミニスト？」

「いや、御婦人の方の為に命を投げ出しても惜しくない立派な男の事だよ」

「頼もしいわね。でも勝てる？」

「柔道の選手なんだよ、大学時代は」

「まあ素敵、学士様ね？道理で云う事がインテリ臭いと思つたわ」

「客のあくび。」

「さあ、そろそろ退出するよ。今夜は面白い話をきかせてくれて有

難う」

「まだ早いじゃないの、もつと話していらつしやいよ。サーヴィスするわ、私あなたが大好きになつちやつた。他にお客は居ないし、あなたが帰つて了えば野暮な独り寝よ。あの色婆のお蔭でとんだ災難だわ」

「とに角、僕は帰らせて貰うよ」

客立ちかけて、椅子と共に倒れる。呻いたまゝ起上らない。女カウスターから急ぎ出る。

「だから云わない事じやない。云う事を素直にきいていけば、斯んな目に会わなくてすんだのに」

「つい足許が狂つて」

「おや、血が、頭から血が」

「で？……」

「で、とに角乗つたのさ。処が、うまい工合に次の舞子で、前の席が空いてね……」

「坐つたんだろ？」

「勿論。けどね、やれ……と思つたのも東の間、程なく僕は、それが余り大した幸運でなかつたのに氣付き始めた——と云うのは外でもない。隣に掛けた泳ぎ帰らしい男が、こくり／＼やつては僕に寄り掛つて来るんだ。お終いにはその渋皮色に日焼けた余り立派で

女憐て、客を奥の部屋へ担ぎ込む朝。

男と女。

「私の敗けだわ。あなたに斯んな陰謀があるなど夢にも思わなかつた。それを私に——あゝ思い出し

ても口惜しい——真剣に、あなたの事を心配したりして……」

「しかし君も満更でもなかつたよ

うだが……」

「大變な事を忘れていたわ——何

んてお名前なの？」

「山本信一」

【FIN】

「素敵な女が目の前に立つたのさ」

「ほう……」

「見たいと云つて、さらに見られる美しさじやない。年恰好は——

そうさ、かれこれ三十にもなろうか。白と紺縞のワンピースが好く

似合う、良家の若奥様と云つたタイプだ」

「畜生、大した幸運じやないか

！」

「その上、脚が実に素晴らしい——

勿論、僕の常々讃嘆するダニエル・ドリユウ程の事はないにしても

恐らく、日本の女達が達し得る最

高級のものとは云えるだろう」

「驚いたね……」

「驚くのは未だ早いよ——彼女のバスケットから覗いていた本が何

だつたと思う？」

「さあ？……」

「チャタレイ夫人の恋人」

「それがね、僕の愛読するカマノ

ン・レスコー」だつたのさ。しかも、原書の……」

「彼女は、フランス語が出来るんだね？」

僕は、青山君の挙げる種々の属性を綜合して、一人の女性を心中に造り上げた。それは略々、僕の理想に近い女人像であつた。

氷水は、すつかり済んで了つた。

蟬は再び鳴き始めた。にも拘らず、

もう僕は余り暑さを氣にしなくなつた。多分、話に

身が入り出したからかも知れない。

「君は、彼女が僕に微笑みかけたと云つたら、本当にするかい？」

青山君は、からから様に僕を見つめた。

「若し、それを正当化する理由があればね——例えば

「素敵な女さ」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」

「何だつて？」



知り合いだとか、その場での君の一寸した親切だとか」

「她が、そうした関係は全然ない」

「じゃ、他の人へだろ？」

「始めはそうも思つた。しかし、周囲にはそれに応ずる様に見える人もいないし、第一、彼女の顔は真正面を向いた儘だ」

「不思議だ！」

「不思議さ！　そこで僕は、一生懸命記憶を辿つた、A子、B江、C代……自慢じゃないが女に不自由はしない。しかし、これ程の女に会つた覚えはさらにない。僕はいら／＼して来た。彼女の微笑はその間も消えない……」

「君に、何か、失敗があつたのじやないかね？」

「その点、僕は確信を持つていた」

「だとすると、思い出し笑いか？」

「それより外に考え様がない。結局、僕もそう思つて落着く事にした」

会話は暫く途切れた。

「その中、僕は彼女の表情に、微妙な変化を認め出した——」

今度は促す迄もなく、青山君の方から口を切つた。

「矢張り、微笑の影が口許に残つてはいたが、目は何時か閉じ、頬の染り様は人工の程度を出ていた——彼女は、明らかに昂奮している……」



「……」

「唇の微かな震え……耳朶の朱さ……僕は何気なく胸に目をやつた疑いなく激しく喘いでいる……」

「……」

「彼女の姿態には、一種、魔氣の様なものが動いていた。憑かれた美しさでも云おうか……」

「……」

「白い額に、じつとり汗の玉が滲む……形の好い小鼻が苦しそくに動く……僕は不思議な残忍さで観察を続けた。どう云う思いが、彼女の胸に渦巻いているのかを疑いもした……」

僕はすっかり、青山君の話術に魅せられて了つた。陽は何時か西に寄つて、夕風が動き出した青山君は、思い出した様に腕時計を見ると、急に慌て始めた。

「話に夢中で、つい時間の経つ……」

も忘れて了つた。急いで結末にとばす——結局、僕は謎を解いたんだ……」

「謎を解いたつて？」

「そうさ。しかし、出来れば君に教えたくないんだ」

青山君は微笑を浮べた。僕は其の中に、ある悪意に似たものを感じた。

「君は話す義務があるよ」

「じゃ話そう」

青山君は、もう一度氣に掛る笑い方をした。

「彼女の素早い視線が或る方向に向うのを、僕はふと認めたのさ」

「彼女が降りる時にね」

「それだな、問題は」

「何だつたと思う？」

「さあ……」

「隣の男さ」

「え？……」

「僕に寄りかゝつて眠つていた男さ。そいつのボタンが見事に外れていてね、覗いていたんだよ一件が……」

僕の偶像是音を立て、壊れた。僕は青山君を呪つた。

「しかし、偉大な結果が必ずしも偉大な原因を要しないと云う事は」

3. 嫉妬は女を魔物にするという話

それは初夏の或る宵であつた。

出産のため親許に帰つてゐる友人を見舞つた私は、彼女の部屋に充てられた六畳の離れ座敷で、差しさわりのない世間話に興じていた

私は、彼女の視線が、話の間も始終、小さな赤いふとんに寢息を立て、いる可愛い嬰兒に注がれるのに氣付いていた。その目はもう、私が以前に知つていたものとは、全く異つていた。愛撫を待つ弱い処女のそれではなく、慈愛と献身に満ちた強い母のそれであつた。産後に固有なやつれを通して

腰々ほの見えるそうした強さは、何時か見つたふてぶてしい迄に思える自信と相俟つて、ともすれば私に軽い反感を抱かせた。

反感？——いや、嫉妬と云つた方が当つてゐるかも知れない。何故なら、二十九才の老嬢が同年齡の始めて母になつた幸福な友人に對する感情は、反感と云うより遙かに嫉妬に近いからである。

本当だね」

青山君は平然と話し続けた。

「だつてそうじやないか。彼女の美しさを倍加したものは、微小な肉の一片に過ぎないんだから……」僕は斯う云う青山君を眺め乍ら自分の完全な敗北を認めない訳には行かなかつた。〔FIN〕

私は次第に、その場のそうした雰囲気、一種の苛立たしさを感じ始めた。此の気分には又、朝から変に蒸暑くどんよりした天候も

妙からず与つていたに違いない。爽快な筈の青葉さえも、心を重くする様な目であつた。

私達の会話は、その間も、のろ／＼進んでゐた。学校友達の噂、食物の話、向う三軒の出来事——凡てが小市民階級の色彩を帯び、醜聞と悪口と嫉妬と虚榮の入り交る、愚にもつかない退屈な匂いを放つていた。

私は遂にやり切れなくなつて、少くとも私にとつては遙かに本質的であると思えた問題を、会話に載せて見ようと考へた。此の考へに悪意が含まれてゐたとは、私は今も思わない。しかし、結果から見れば此の弁明に偽りがあると攻撃する人があつても、私は敢て反駁しようとは思わない。論争の中心が、純粹に心のデリケートな

動きに因する場合、徒らに泥仕合を惹起すばかりだからである。

「且那様の事不安にならなかつて？」

彼女は、私の質問を一笑に附した。

「愚問だわ」

「だって、もう二ヵ月近くになるぢやないの？」

「問題は、月日ぢやなくつて愛情よ」

「でも、男一人の生活は危険よ。」

「あなたには、夫婦つてもものがどんなかお分りにならないのだわ」

彼女は、憐れむように私を見つめた。明らかに嘲笑の色が浮んでいた。

「それに、もうお父さんぢやないの」

彼女は斯う云い乍ら、幼児の額に接吻した。その態度には、毫も動揺が見られなかつた。家庭に於ける母と云う地位の強大さを、彼女は本能的に理解していた。

私は、こうした彼女から必然的に感じ取られる安心し切つた幸福に、積極的な憎悪を抱き始めた。

此の感情は、何時か私の胸の中で或る形を取り出した。

彼女は、眠っている子供に、じつと目を落していた。明るい電燈の光が、横顔に、こぼれる様な微笑を彫つて、私の気付かなかつた美くしさを示していた。彼女は、夢見るように呟いた。

「幸福だわ……」

此の時であつた——私が悪魔の囁きを聞き聞いたのは。一瞬、私は愕然とした。しかし、次の瞬間、私の目は喜びに輝いていた。

破壊的な喜びに、私の血は激しく燃えた。秋は今も覚えている、あの不気味な嗟声を、残酷な笑いを悪魔は云つた。

「分つてゐるね？ 今だ。今、今……」

私は彼女を見つめた。そして、ひきつれ勝ちな唇を噛みしめ乍らおもむろに口を切つた。

「そうね。無知つて事は幸福だわ」

「無知ですつて？」

彼女は、微笑の消えた顔を上げ乍ら、私を見た。

「何の事なの、それ？」

「さあ、何の事かしら？」

私は思う。此の時の私の顔には悪魔の笑いが浮んでいたに違いない。

「はつきり仰やつて！ 齒に物の挟まつた様な云い方は止して頂戴」

「怒らないつて約束出来る？」

「分らないわ、そんな事」

「ぢや話さない」

私の術策は、完全に成功を収めた。苛立ちは彼女の平衡を乱し、昂奮を惹起した。彼女は遂に折れた。

「約束するわ」

「ぢや好く聞いていらつしやい」

私は、胸に会心の微笑を漏らし乍ら、悪魔の道を辿つた。

「昨夜お宅を訪ねたのよ、且那様の御言伝でもあれば、こちらへ伺う序でお伝えしようと思つて」

「……」

「且那様は丁度、晩酌を召上つていらしたわ。もう好い御機嫌で、どうしても私に上れつてきかないの」

「まあ……」

「余りしつこく仰言るので、私も仕方なく上つただけ……今度はお酒を飲めつて云うの。私、随分困つて了つた。しかし、これだけなら何も大した事ぢやないわね？」

私は、意味あり気に彼女を眺めた。瞬間、彼女の顔色が蒼白に変わった。私は激しい喜びを感じた。体中の血が逆流する様な歡喜であつた。

「あなたの御主人悪い方よ。私を酔わせて置いて何をしたと思つて？」

これ程残酷な質問があつたらうか。彼女の顔は苦痛に歪んだ。

「突然且那様は私を突き倒したのよ。目が燃えていたわ——そう、悪魔のように。勿論私は出来る限り抵抗したわ。けれど、それが何になつて？ 女の、それも酔に導かれた力など高が知れてるわね。私は強く抱かれた——身動き一つ出来ぬ位強くよ。後はお定りのコース——あなた自身、よく御存知の筈だわ。接吻して、オッパイを舐つて、それから——」

「止して頂戴！ もう沢山だわ」

彼女の覆れ声を無視して、私が話に最後のピリオドを打つた。

「お分りになつて？ これがあなたの信賴する且那様よ。どう、矢張り幸福？」

私は、表に出て始めて、犯した罪の怖ろしさに気付いた。しかしもう遅すぎた。

巧みに語られた虚構が、真実以上の真実性を有すると云ふ事の証明は、それから一日を経ずしてなされた。

彼女はその夜、嬰兒を殺して自殺した。

【FIN】

讀者通信

交際を望む

二俣志津子

妾は本年満二十才の未婚の処女です。身長は五尺一寸、体重十三貫、恋愛の経験はありません。容貌は八十点（自分で辛くつけたもの）趣味は名酒、ヌード・フォートの調賞、小説を書くこと、旅行等です。文通を御希望の方はドシ／＼お便りを下さいます。同性の方、男性の方でも結構です。では、お便りお待ち致します。

二俣志津子さんは、本月より奇譚クラブ誌上に麗筆をふるわれる可憐美貌のお嬢さんで、豊富な話題の持主です。編集部が付二俣志津子さん宛御通信下されば、お取次致します。

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部

編集部



六本指の女

日向路雄

蠻人部落の崖の上にそそりたつ

ナゾの白壁の洋館一戸

そこに白面の淫女が住んでいた

森あきら画

一、マニラ捕虜收容所

マニラの夕焼は美しいと言いますが、その頃捕虜だった私には、胸の奥底深くにまでしみ入るようなその物悲しいまでに美しい夕焼の色に、切ない郷愁がせつせつと湧き上るのでした。

単調な作業、変化のない明暮れ、お互の身の上話もつき果て、捕虜達は一様に退屈して誰もが新しい話題や刺戟を求めています。

私が収容されましたのは二十年の九月でしたが、たつた一人の、そして最も新しい捕虜である月田が私達の幕舎へ入つて来たのはそれから五カ月も過ぎた二十一年の二月でした。

捕虜達はもの珍らしげな視線を、無遠慮に月田に投げ乍ら、何か変つた新しい話題を聞き出そうとしきりに水を向けるのでしたが、彼は語る事が迷惑らしく「最近迄山に居て、出て来た所を住民に捕えられたのだ」と言葉少なに語るだけでした。

もつともこれには皆の興味を惹くに足る立派な理由があつたのです。捕虜達はすでに貸与されている米軍の作業服にPWと白ペンキで書かれてあるのを着ていたのですが彼はよりゆとりとした紳士ズボンに生地の良い薄ねずみ色のアロハ・シャツを着ていました。尤も靴には幾種類もの泥が乾いてこびりつき、シャツについている泥と汚れとしわが、彼の幾日かの苦勞を雄弁に物語っていました。

月田は見た所二十四五、仲々の美男子で五尺七寸位はありましたでしようか？堂々たる健康美の所有者でもあり、終戦後五カ月も山の中でどんな生活をしていたのか、我々よりずつと勝れた血色をしていました。彼と共に数回農耕作業に行きましたが、

彼は黙々と良く働きました。どちらも無口な彼と私は滅多に話し合うような事もありませんでした。が、魂がふれ合うとでも云うのでしようか、私は彼に肉身の弟に対するような親密感を抱いていました。

彼が入所して約一カ月程過ぎたある土曜の夕食後の事です。日曜日は作業が休みなので土曜の夜は何となし気分がゆつたりして、良く夜更しなどするものでしたが、その時みんなは散歩にでも行つたのか、幕舎内に残つていたのは私と月田の二人切りでした。

「月田さん外に出て見ましようか？」

私が誘うと、彼は直ぐ素直に同意しました。同じ型の幕舎が規則正しく立並んでいる黄昏の所内は見ようによつては、町と何等変りなく、プロムナードを遊歩する雑踏のここかしこに、オイチョカブの賭場があり、物々交換所があり、野外劇場というといささか大げさですが芝居小屋もあり、間もなく開演されるのでしよう、手製の楽器の音が賑やかに聞えていました。

私と彼はそれらの雑踏と反対側の、柵に近い広場の静かな芝生の上に並んで腰を下しました。

フェンスの所々に五百ワットの電燈が煌々と輝き、その下には、拾つて来た英字雑誌をテキストにして懸命に筆記している勉強家の姿なども見られました。

今夜に移ろうとする寸前、左手の方にば、落陽の残光をフット・ライトのように浴びた秀麗なマキリン山が、たとえようのない美しい色調でそびえていました。

「綺麗ですね！」

言い合はしたように嘆息が二人の口から洩れるのでした。

「山の生活を思い出します！聞いて下さいますか？」

どういふ風の吹き廻しか、無口の彼が珍らしくもその夜何かに憑かれたかの様に雄弁に語つて呉れたのが、次の様な話でした

二、白骨の道標

貴方はどの辺に居られたのか知りませんが私達の部隊は北部ルソンの西海岸一帯を警備していたのです。連合軍上陸後、約三カ月辛うじて持ちこたえただけで、連合軍の猛攻と糧秣の欠乏の為、犠牲者が続出し遂に転進命令が出ました。転進というとなんて良いようですが、二十年の四月一日陣地を撤退したその夕方から、死の行進が始まつたのです。

飢餓線上を彷徨している兵隊達は、眼ばかりギョロつかせ乍ら、栄養失調の体をけだるげに牛のような歩みを運ぶのでした。

行軍は一日の行程も多くて四五里、速度ものろいものでしたが、それが四十日余りも続くと、隊列も櫛の歯の抜けたように目立つて佻しくなりました。

悲した犠牲者の死体が、白骨が、後続部隊の道標となるのでした。悲しい道標は点々と続き、友軍の進路を示していました。

三八式歩兵銃をあんなに重く感じた事はありませんでした。私はよろめく足を踏みしめては、あらゆる担ぎ方をして見たのですが、どんな風にしても軽くなるどころかだんだん重みが増し、弱り果てた病兵の私は、やがて銃のために押し倒されそうな気がしました。マラリアの発熱のために、私も落伍して、ただ一人で部隊を追求していたのです。

（部隊に追付く迄は暗くなつても歩こう！）私は歯を喰いしばつて、じつと前方をにらみつけ乍ら懸命に歩きました。

そろそろと迫つて来る夕闇の中で、私は又発熱の前兆である膝関節の異常と、背すじにゾクゾクする悪寒を覚えすした。

カラカラカラ軽い響きの連続音、それは平野の村や町を走るカルマタ（ロバの様に小さい比島の馬がひく軽快な二輪馬車）の轍のひびきに似た音で、それが絶えず何処からか聞えてくるような気がし、ブラネタリウムの星座の移りよりもと遠く宙を流れ、渦巻き停止する無数の赤い花の様なものが網膜に写つている様な気持でした。それはかつて平野で見慣れた燃え上るような仏桑花の幻影でしたのでしょうか？

三、蠻人部落

私は高熱時の夢幻状態から醒め、辺りを見廻しましたが、私を包む闇は、地球上にこれ程暗い闇があるのかと感心する程の暗さでした。

熱のために喉が痛い程乾き、手探りで水筒をつかむと、半分程残つていた水を息もつかずに呑み干しました。

空を仰いでも星一つ見えません。しかし眼が闇に慣れて来ると、夜光樹の妖しい光が、無気味に冷たく眼に映つて来ました。腐敗した植物の匂い、ジジジジと鳴く名も知らぬ虫の音が心細く聞えて来ます。私は地球の果てに迷い込んだような寂寥感にとらわれました。



濕つた大地を押しつけるように、身を起そうとして見ましたが、それは果せませんでした。何か大きなものに押えつけられてゐるような感じで、頭を少し上げるとズキズキと烈しく痛み、ついには息苦しくなり私は再び地上に倒れて仕舞いました。

極度の衰弱と、過労の為に俺もこゝで、白骨の道標になるのか！

そんな思いが一瞬、疲れ果てた脳裏をかすめ去りました。そのまゝ泥の様に眠つたものでしょうか？その後は記憶にありません。

どこからともなく聞えて来るかすかな物音、それが次第に大きくなり、意外に近い所で鶏がときをつくる声がありました。

それは私が、意識をとり戻した瞬間、最初にはつきりと聞いたものでした。永い間聞く事もなかつた鶏の音が確かに聞えたのを不思議に思い乍ら眼を開けて見て私は驚いてしまいました。

私の寝ている所が、発熱時倒れていたジヤングルではなく、家の中なのです。それよりもつと驚いた事は、薄暗い小屋のような家の隅で、私が眼を開いたのをじつとのそきこむようにしている年寄りの番人が居た事でした。全身の血が逆流する思いでハツと身構えようとしたのですが、体がいう事をききません、私はとつさにどうにでもなれ、という気持ちになり運を天に任せました。

別に危害を加える様子もなく、むしろ私の病状を気付かつているといった風でした。五十過ぎに見えましたが、デブブリと肥えどことなく落付きがあり、立派な男でした。何かの骨で作つたもののような首飾りと、ねずみ色のサロンの様なものを身につけてゐるだけで、上は裸体で筋肉逞しい体は赤銅色でした。

その彼が何か話しかけて来るのですがさっぱり解りません。私が知っている比島の

国語タガログ語でない事だけは確かでした。不明の旨の身振りをしますと、今度は手真似でなにかを飲む真似をして、床に置いてあつた椰子の実で作つた碗を差出すのでした。碗の中にはブドウ酒のような色をした液体がなみなみと注がれてあり、顔を近寄せると、何か薬品のような臭いがほのかに匂つて来ました。

私は言われるままに薄気味悪く思い乍らグツと飲み下ろしました別に取り立てて言う程の味はありませんでしたがしばらくすると何となく気分が爽快になりました。私はそのまま其処へ居ついて仕舞いました。後で解つた事ですが、その男はこの部落の長であり、私が寝ている所は彼の家の一棟でした。彼は日に一回は必ず顔を見せ（御気分は？）といった表情を私に向けるのでした。

薬や食事の世話をして呉れるのは十七八位の娘で、浅黒い皮膚こそしていましたがキリリと引締つたその顔には野生的な美しさがあり、彼女が部落長の娘である事も後で解りました。彼女もただサロンのようなものを纏っているだけで、もうすでに成熟した乳房が胸一杯にひろがつていました。食事には仲々氣を使つてゐるらしく肉類野菜、果実等を黒檀に似た大きな盆に山盛り運んで来るのでしたが、未だ体が回復してない私はいつもその半分も喰べられませんでした。

しかし此処へ来てから、あの薬のせいかなと思ひに発熱しませんでしたので、十日も養生しているうちに次第に元氣になりました。が最初に抱いた疑問（何の目的で私をこゝへ連れて来たのか？何故こんなに優遇するの？）これから先一体どうしよう

というのか？が瞬時も胸から消えませんでした。

それらの事は丸つきり想像もつきません元氣になるにしたがつてこれ等の疑問は強まり、いらだたしくなり、烈しい焦燥を覚えしました。

薄暗い屋内で部隊や戦友の事を想つていると、何か腹立たしくなり、じつとしている事に大きな苦痛を覚え始めました。

或る日何日になく気分が良いので、起き上つて入口の所迄行き、外を眺めました。

この部落長の屋敷は小高い山の中腹にあつて、床の高い小屋のような独立家屋が五棟あり、可成り広い庭はきれいに掃かれてあり、周囲にザボンの木が沢山あつて、もう大分大きくなつた実が鈴成りになつていました。

丁度私が居る場所からこのザボンの葉の

しげみごしに、七八十戸の部落が見え、その真中を小川が流れていました。部落はすり鉢の底にあるかたちで、四方を山に囲まれていました。珍らしく思つた事は、こんな奥地であるのにトタン屋根の家が多い事でした。家屋の周囲に大抵野菜畑があり、

その他の所は山の傾斜面迄が階段式の水田で見渡す限り青々と稲が波打つていました。平和そのものの部落を眺めているうちに私は久し振りに故郷や肉親の事をふと思ひ浮べました。

何気なく視線を転じた私は、約五十米程高い崖の上に建っている白亜の洋館に氣付きました。全く意外な氣持がしました。何故こんな所にあんな洋館があるの？

う？一体何者が住んでいるのか？

烈しい好奇心と疑問を持つて、それから毎日のようにその洋館を仰いで、いろいろ

な想像をめぐらせました。

四、日本語を話す女

部落長の家で二十日も養生しているうちに私はすっかり元氣を回復し、屋内にとじこもっているのにも退屈し、外へ出て見ました。氣晴しに山の頂上へでも登つて見ようと思ひ、あの醜めいた洋館に近づいて見たいという氣持も多分にあつたのですが、

路を探すと、丁度部落長が寝起きしている家屋の背後に、山へ通ずるそれらしい道を見付け、その方へ歩きかけた私はギクリとして立止りました。

その路をさえ切るようにして立つているのは精悍な番人の若者で（どこへ行くのだ？こゝは通さんぞ！）

燭の典を挙げるという超スピード振りを発揮させた。

内心不満なのは千恵だつた。恋愛の経過もなしに好きでも嫌いでもない男に処女を与えるのは淋しかつた。そうかといつて十七の體の肉体を抛り出す術も知らなかつた。明日は葬式だといふその前日彼女は無二の親友、桂子を誘つて山を下つた。

「ねえ桂子さん、今日は思いきり楽しめない。あたしの最初で、最後の目を……」
「同情するわ。大いにうつ憤を晴らしましょう。毎日黒ダイヤと睨めツ子、くそ面白くない」
「それであたしプランがあるわ」
「プログラムは用意しちやつたの？」
「この通り実行したいわ」
千恵はハンドバッグから手帳を取出し

炭都娘無軌道行狀記

破瓜前夜行進曲

野中愛三

山の娘たちは早熟である。

乙女十七、もう初夜に憧れる。それは地下の石炭に温められ、上は南風に煽られるからだろ。メを突き出したムチくんと肥つた肉体の始末に困り果てる。

その証拠に鉱員住宅の共同便所には、一見してソレとわかる液体が南と北の仕切板へ流れているのを見てもわかるだろ

う。禁断の奥、正に熱れたりに言うところである。

炭炭婦の千恵がそうだつた。ヒフはビチビチ張り切つてゐる。この正体を見た彼女の父親は取越苦勞の末智慧をめぐらした。というのは彼自身が若手の穴ホリ時代、地下数千尺の坑道で愛のテープをまさちらした経験が、身に染みていたからである。

トコロテンのように押出しの子を孕まないうちに、早速若手の探炭夫と見合をさせた。うんすうもなく明後日は、華

といった表情で私を見下ろしているのです。よく光つた投槍を手にかけているその男が身につけているものは、相当古い赤（元は赤だつた）と思えるのです、その時は黒茶色に見えましたが、ふんどしと小さい緑の、ないカンカン帽の様なものをチョコンと頭に乗せているだけで、あとは木のさやにさらされた登刀を細い紐で腰から下げているだけでした。

（監視されている！）

そう直感した私はくろるときびすを返しました。矢張り何かの目的で監視されているのだ！不安と不快と疑問、そういうものが混然と一体にない、私は重苦しい圧迫感で身が異様に引締るのを覚えました。

一体、何日、どうしようというのか？その疑問が意外に速く解ける日が来たのです。

私が部落長に連れられて、その洋館へ行ったのはそれから三日目の朝の事でした。近づいて見ると、そう立派な建物でもなく建ててから大分経っているのでしょう白ベソキも所々剥げ落ちていて、遠くから見るといたより美しいものではありませんでした。玄関を入つた右手が八帖位の応接間で、彼と私はそこへ入りました。私は一体どんな人物が現れるのだろうかと思ひ深く思ひ乍ら、いやにかしこまつている部落長と部屋の間立つたまゝでした。壁の額や置物などはそう高価なものとも思われませんでした。壁の額や置物なども思われませんでした、そうかと言つて別に安つぱいとも思いませんでした。

やがて奥に通ずるドアが開き、そこへ姿を現した女を見て私は思はず眼を見はりました。番人とのコントラストが余りにも対

た。

「先ずスタートはデパートへそれからビンゴ、次は中華飯店で屋敷、純喫茶廻りラストはダンスホールで踊りまくるの」

「まア、なんて素晴らしいンでしょう。まるで夢のようだわ」

桂子は瞳をパチパチさせる

「これは序の口よ」

「えッ！」

「ホールで疲勞を覚えなかつたら、ナイトクラブで徹夜するわ」

「大丈夫？」

「あたしに任せてよ。ほれお錢ならこの通りだわ」

千恵は千円札のハダカ束を、桂子の眼前へつき出した。それは、明日の宴会の費用にと、父親から仕出し屋へ払うように頼まれた金であつた。

「しつかりなさい。山から処女が一人減るといふのに、これ位のことなんでもありやしないわ」

「じゃ、じゃン、遊ぶわ」

「桂ちゃん、現金ねえ。さあ急ぎましょ」

心ウキウキ。二人娘は憧れの街へ、さつそうと下りていった。

デパートで舶来の香水を二瓶買った。

五階の化粧室で顔を洗つて、外へ出た。

ビンゴ屋へ行く。都会のオナガレを覗く

炭都街は、それでも賭け事が好きらしくねぢり鉢巻の兄哥連中や、キヤップランプをつけた魔鏡マンたちが、血走つた眸でゲームを追つていた。こうして予定通



りのコースを終えて夜になつた。千恵も桂子も五体がむず／＼している。腹は満腹だが何か食いたらないヒフの嘆きだつた。

「さア、ホールへ行きましょ」

千恵が意氣込んで云えば

「もちよ……」

桂子も負けてはいない。ネオンに渦巻く炭都ダンスホールの門を、ぐいと開いた。

そこには一夜の偽装された拙戦的な顔粉が充満していた。アルコールと札束の乱舞。肉体と肉体との密着絡んだ手と手肌と肌とがびつたりかちあつた、間隙のないブルースへ、踊手は胡弓のように遣瀬ながる。

「踊りましょ、桂子さん」

千恵は素早くフロアへ降りた。一刻もじつとしていたことが、何だが口惜しいように思われる肉体の疼きだつた。

二人は思ひのまゝヒフをくねらせ、四肢の技巧に懸命だつた。ふんわり波うつ腰の動きは、ソレへの連想をしつこくさせ、肌膚に食い込む相手のヒフは、心を

躍らせた。

とう／＼ラストになり二人は、ホールを出た。行く先はなかつた。外はもうすつかり更けていた。しかしこのまゝ別れるのがつらかつた。

「ねえ桂子さん、あたし家へ帰りたくないわ。このまゝ何処かへ、行つちまいたくなつちやつたの」

「あたしも……」

「誓つてー」

明日は千恵の結婚式だといふ事も忘れて果てた二人は、大阪行の終列車に乗つたそれから一週間経過した夕方無軌道娘の親達は、神戸市警察署から

「ホゴシタスグイ」の電報を受取つた

千恵と桂子の父親二人は、取るものも取り敢えず神戸へ来てみると、屏を毒々染めた娘たちが、もちくちやにした紙屑のように保護室の畳の上につつむいていた。

二人の娘の身体を穴の開くほど、かわるがわる眺めた父親たちは、家を出る時着ていたものは、すつかり違つたまだ見たこともないヨレ／＼の中古の派手なワンピースをつけていることで、二人の純潔が失れたことを鋭敏な鼻で嗅ぎわけていた。

そして何にも言わず家で握つてきた盛り飯を差し出した。

——おわり——

照的なので余計そう見えたのか知れませんが、いや矢張り美しいのです。こんな奥地でこんなに美しい女を見ようなどは全く夢にも思っていないでしたので、その美しさには打たれて仕舞いました。

二十七八でしようか或いは三十位かも知れませんが、白く、白い簡単な洋服に身を包んだ大柄の体から発散する濃艶な魅力、私は思わず後ずさりした程でした。

色はあく迄白く、髪の毛はしつ黒、大きな眸は黒曜石のようなうるおいをもつて輝き、肉感的な唇には微笑さえ浮んでいました。

彼女が部落長へ小声で何か言うと彼は鄭重に頭を下げて私をそこへ残したまゝ帰って行きました。女は蕃人達に対し余程の権力又はそのようなものを持つてゐるのに違いないとその時思いました。

私は手持ち無沙汰でモヂモヂしていると彼女は私の顔を見つめていました。

「何も御心配要りません！あなたは今日から私の捕虜！あなたの部屋行きましよ！」

情外にも彼女の唇をついて出たのはいくらかアクセントに変な所はありますが、まあ鮮やかと言えりる日本語なのです。大きな驚きのために私は狐につままれたようにボカンとしていました。

さして広い家ではありませんでしたが、平家造りで五間程あり、この他に浴場、炊事場、物置き等がありました。

「お湯沸いてます、きれいにきれいに洗うのですよ！」

彼女は私を浴場へ案内するとまるで母親の様な口調で入浴をすすめるのでした。湯へ入るといくらすつても、あとからあとから垢が出て来て、私はたつぷり二時間も

入っていたでしよう、すっかり良い気持ちになつて浴場を出ると

「大変きれいです私の捕虜さん、さあ、あなたの部屋行きましよ！」

と言つて先に立ちました。案内された部屋は六帖位の小じんまりした広さで、ベッドの上にはサツパリしたシャツや下着やズボンが置いてあるのです。

言われるままに軍服を脱ぎ捨てたのですが、その時は大きな罪悪感に胸が苦しくなりました。服を着替え、さつぱりして涼しい気持ちになり乍ら、心の中では時機を見て逃れよう逃げて見せるぞと叫びました。

「こゝで休んでいなさいこの鈴が鳴つたらさつき教えた私の部屋へ来るのですよ！なんにも心配ありません。逃げる事出来ませんよ解りましたね」

安心を与える様にニコリ笑うと彼女は部屋を出てゆきました。

命令的なひびきの彼女の言葉に、反感も湧かないのが不思議でした。私は彼女の美貌にすっかり魅されていたのかも知れませんが。

一体あの女は俺をどうしようと言うのだ何か心細くなり乍ら、それはそれとしてあの女は一体何者なのだろうと考えたりしました。あの眼の色、髪の毛の色から判断するとどうもスペイン系らしいが日本語をどうして知つてゐるのかという事については全然判断もつかず、想像することさえ難かしいことでした。

もう考える事も面倒臭くなつてベッドの上にゴロリと寝転びました。今迄野や山に寝てルンペンよりもひどい生活をしていましたので、やわらかいベッドの上でそうしているとまるで夢の中に居るような快適な

気分になりました。

風呂と夕食はそれが女中なのでしようか小ざつぱりした簡単な服を着た十五六の土人の娘が食事を持つて来しました。

夕食後窓に倚つて眼下の部落の灯を眺めていまして、チリチリと鈴が鳴りました。私はハッとして揺れ鳴つてゐるラムネの玉大の鈴を見乍ら部屋を出て、彼女の部屋のドアをノックしました。

答があつたので恐る／＼入つてゆくと、灯を消した真暗な部屋の中から、いきなりしなやかな彼女の腕が伸びて来て、私の体に蛇の様にからみつき、火の様に熱い唇が私の唇をビタリと封じて仕舞いました。

むせるような烈しい女体の熱した匂い、からみつく豊満な素肌若い私の肉体は理性も意志をも無視して、歓声をあげて烈しく女体へと突進して行きました。

そんな風にして私はすっかり彼女のとりこになつて仕舞つたのです。全精力を、彼女との肉の戦いへ集中し、彼女の求むるまゝに応じ、そうする事によつてすべての苦悩を忘れようとしたのです。

五、六本指の女

幾月かが夢の様に打過ぎ、彼女の肉の隅々迄知り盡したつもりでいました。彼女によつて鍛られた私は、いつでも彼女に満足を与えるだけの智識と技巧を得たのでした。そして自分が人並外れに精力家である事を知つたのですが、彼女の要求は病的という位烈しいもので、どうもかなわない、自分の方が負けだと思ふの衰えを感じるようになりました。

そんな頃の或る夜、二人ともぐつたりとなつて裸体のまゝベッドに横たわつていたので、いつも真黒の彼女の部屋がいつもと違つて少し明るく感ぜられました。私は頭をあげて見まわしました。いつも嚴重に閉め切つてある窓が一方所だけ半開きになつて居り、そこから青白い月光が部屋の中へまで射込んでゐるのです。

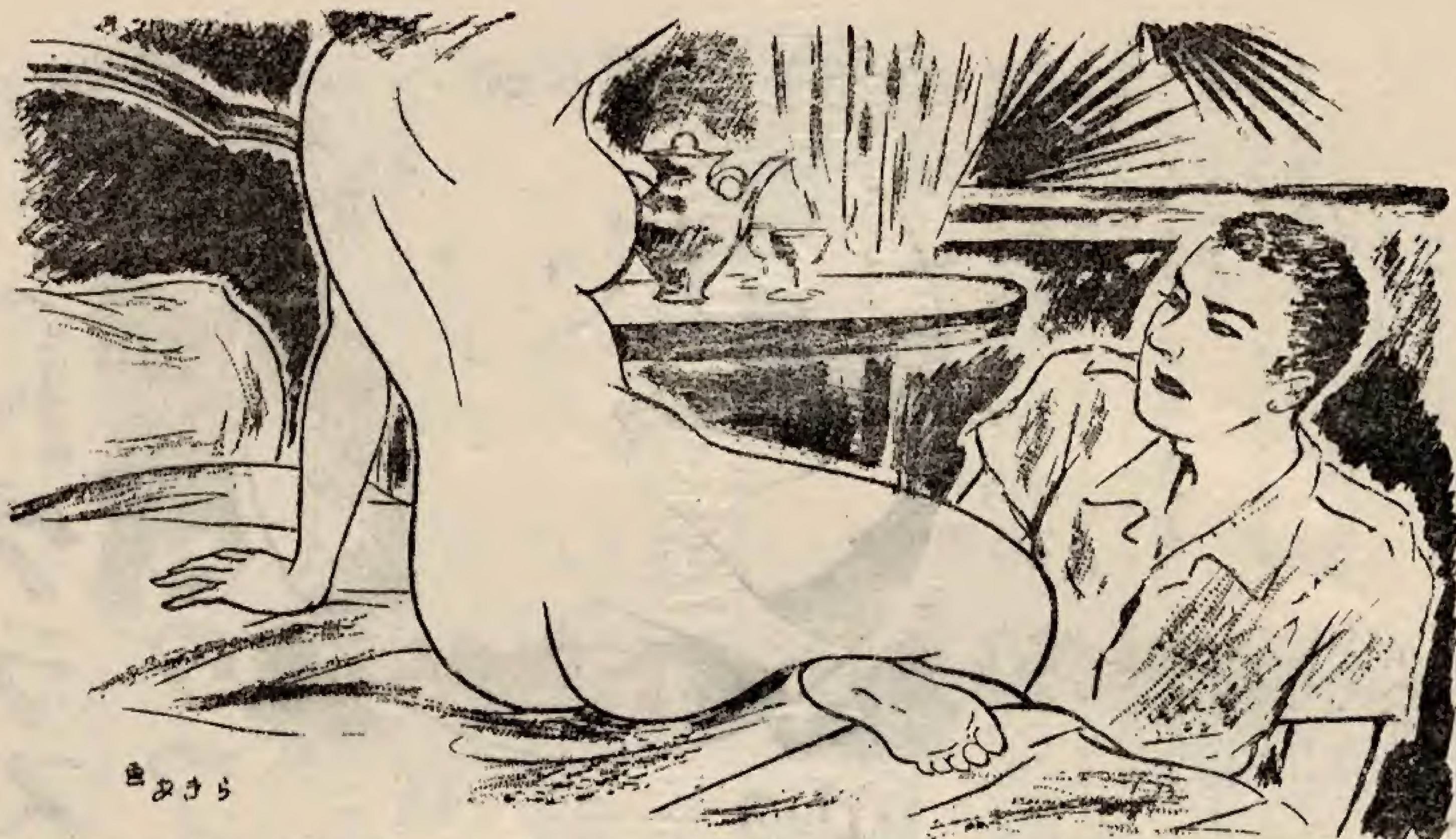
私は隣りで眠つた様に横たわつてゐる彼女の美しい裸身へむさぼる様な視線を走らせました。そしてとび上る程驚き、烈しいせんりつを覚えしました。彼女の体の一部に異様なものを見つけたからです。

見違ひではないかと顔を近づけて、幾度となく見直しましたが決して見違ひではありません、確かに美しい彼女の両手の親指の付け根にもう一本づつ指がくつついてゐるのです。

六本指の女！私はぞつとし乍ら彼女の顔をうかがいますと、どうやら寝入つてゐるらしいので私は迷がれるようにベッドを降り自室へ帰るとよりやくホッと思いました。彼女が美しいだけに余計憐愍といつたものを感じたのでしようが、どうして今迄気付かなかつたのかと自分を呪い度くなりました。

何故気付かなかつたのか？という事に就いて考えて見ましたが、その結果私が得た結論というべきものは彼女が私を近づけるのは灯を消した夜の彼女の部屋だけに限られていて、昼間は初めてこゝへ来た時を除いては一度もなかつたからだ、という事になりました。

私はもうすっかり彼女が嫌になりましたいや恐ろしくなつたという方が本当です！もうこれ以上この家にとどまる事は出来ません。音のしない様にドアを開け、外の闇



色あきら

へまぎれ出ました。追われるように約十歩程歩いた時、私は腕を過ましい力でつかまれ、そのまま今出たドアの所迄押返えされました。相手はずつと無言でしたが、それは闇でも充分眼が見えるという警人の歩哨？に違いありません。

私は脱出の難かしさを覚り、自分のベツトの上でその夜はまんじりともせずもの思いにふけりました。

彼女の肉体の一部に奇怪な秘密を知った私の生活は全く生地獄でした。たとえようのない嫌悪感！忘れようとしても何時の間にか彼女の六本指の手が幻のように脳裡に浮び上るのです。

でも私はその秘密を知っている事を、彼女に気取られぬように細心の注意を払う事を忘れませんでした。がどうしても以前のようない気持で彼女に接する事が出来ず仮病をつかつて交渉を避けるようになりますと彼女はヒステリックになり、目が経つ

にしたがつてそれが烈しいものになり益々私を悩ませ、困らせました。

私は脱出計画を樹てました。それは家に火を放ちその混乱に乗じて逃れようというのです。

ある夜遂にそれを実行に移しました。かねてからひそかに集めて置いたボロ切れや食油などを取出し、夜の更けるのを待つて火を放ちました。

案ずるより生むが易しと云いますが、脱出は成功しました。力の続く限り夜の山道を走り続け、追手の来ないのにホッとして振り返ると、もうはるかな距離をおいて、赤い炎が狂つたようにメラメラと燃え上つていました。

しかしこうして離れて見ると、何だか山の生活が、そしてあの不思議な女がなつかしくさえなります。火をつけるなんてあの場合仕方がなかつたのですが悪い事をしたものだ後悔する時があります。若しあの女が生きていたら私の事をどんなにか怒っているだろう？と時々思います。

.....

そう言つて彼が長い特異な話を結んだ時には収容所全体がしんと静まりかえつて、もう芝生の草もしつとりと夜露に濡れ、辺りの空気も冷えびえとしていたのですから夜も大分更けていたのです。

月田が収容所から姿を消したのは、その話をして呉れてから十日程のちの事で、彼は青空に消えた煙のようにそれつきり姿を見せませんでした。

彼はどこへ去つたのでしょうか？

或いは六本指の女が居たと言う山へ、再び帰つて行つたのでしょうか？

私は今も彼が元気で何処かにいるような気がしてなりません。

(完)

ハナヲタカウスル

(問) 私は鼻が低くて悩んでいます。最近隆鼻術というのをよく聞きますが効果があるものでしょうか。

(答) 先づ特殊薬注入法があります。本法は従来のパラフィン系の欠点を一掃した劃期的な新法です。最近これが永久不変のものであることが認められ、希望者が増えています。一回ですみ、入院通院の必要なく無痛で遠方の方でも、すぐ帰れます。次に象牙挿入法があります。本法は古来から使用されいまだに使用されている方法ですが、施行者の技術の良否による点が多いので医師も患部も仲々危惧の念にかられていたのですが、最近では進歩した独創的な器具の使用により簡単に手術が出来ます。やはり捨てられない方法です。更に合成樹脂挿入法があります。本法は以前から歯科医が使用していたものを、最近、隆鼻用に使用しています。御希望の方には施行して居ります。

次に肉質法があります。少しづつ、高くしたい方にはこれも良い方法です。(費用約六千円)

大阪市北区梅田新道交又点
東一丁電車道三山医院内

三山隆鼻法研究所長談

(広告)

ピントグラスに

うつる女身



研二 色
丹羽二郎

涼風がたつと、俄然人出が多くなつてきた、片波良治は、夏枯れのみじめさを一氣にとり返そうと、ミノルタを首にさげて毎日我橋の上に立つた。ピントグラスをのぞいて右往左往、道行く人の前進を阻むような動作をくり返した。

片波にかゝるカモというと語弊があるが街頭写真師に金を払うような客は、カモという言葉がびつたり合ふ、手連れの女か、お上りさんにかぎつてゐる。

「たくまざる自然のお姿を御記念にどうぞ」

片波写真館と印刷した紙片を差出すと、殆んどは見向きもせず行つてしまふのであるが、なかには一応は立ちどまつて色気を含めるものもある、商売始めというと昨年の今頃だつたがコッの判らぬ片波は、よくファイルが無駄にした

が、そんな修練の期間を過ぎると、街頭写真師として一人前の腕になつた。

なによりも片波を喜ばせることは、艶姿豊満な女性を、ピントグラスで、思いのまゝ眺められることであつた。

今日も片波は我橋の上で大奮闘、ハリキ

ツテ活躍していた、こうと睨んだ眼には狂いなく、十五組も撮影してすつかり氣をよくして、まだ日は高かつたが、下寺町のねぐらへ帰ろうと思つていたとき、南へ渡つてくる、ろうたけた女性の姿をみると、急いでミノルタをのぞきこんだ。

ピントグラスの上で女は艶然と笑いながら近づいてくる、片波はピントを合すような動作をしつゝ、あとずさりしていった。

「写真屋さん、いゝのよ」

思い散けぬその女性が足早に近づいてきて、片波の肩を押した。「たくまざる自然のお姿を……」

「いゝのよ、ご勉強ね、あとでこれをごらんになつて」

反対に女から紙片を渡され、片波は呆然として和服を袴に着こなした女性の後姿を見送つていた。

女の姿が我橋の雑踏にまぎれこんでしまふと、片波は振りしめていた紙片を、皺をのぼしながらひろげて見た。

いろいろのポーズを撮影していたゞきたく思います、今晚、十時、我橋北詰までお迎えに参ります故、わたしの希望を叶えて下さいまし。では、お待ち下さい。

「うゝむ」

片波は、その文字を三回も読み返した。

この要求に応じたものか否か、我橋筋の喫茶店でコーヒーとケーキをとつて、食つてしまつたが決心がつかかなかつた、御堂筋の食堂で銚子を二本空にし、めしを腹一ぱいづつめこんで思案したが、まだ決心がつかかなかつた。

そのくせ、約束の十時を待つようになんども腕時計をのぞいた。

「片波さん、えらい、こん夜は深靄な顔してんのやな、失態でもしたンかい」

食堂のおやぢが意味深なやり笑いをし、からんできた。

「実はこれこれ、こういうことだな」

風聞のことを話すと

「なんやい、そんなことかいな、行つてき行つてきい商売実利というもんや、わいやつたら、そんな別嬪にものを頼まれたら、とびついていくんや、どんなえゝことが待つてるか知れへん、」

おやぢに煽動されて、片波はようよう決心がついた。

「わしが、もう一本景気づけに、おごつたるさかいに、うまいこと女も攻略してきたらよいねンや、したらしどくや」

おやぢは舌なめずりしながら、調子にのつてますます、片波をおだてあげた。

十時かつきり、閃光器まで準備して片波は我橋の北詰へ行つた、十時はまだ宵の口我橋筋から心齋橋筋は人の波であつた。

あんなことを言つておきながら、かつがれるのではないかしらと、片波は一瞬、疑つたが、自動車のドアまで開け待ち構えてゐる女の姿に、片波は勢いこんで歩みよつた。

「約束を間違えずによく来て下さつたわねさあ、どうぞ」

女は風聞とはちがつて、軽快な洋装をしてゐた。

片波が自動車に乗ると続いて女が乗つたドアがボタンと閉まると、それが合図のようになり自動車は東へ向つてすべり出した。

上町の坂にかゝると女はすりよつてきて「ねえ、めかくしをするのよ、わたし都合で住居が知られたくないの」

変だと思つた、と同時に軽い不安がつきあげてきた。

「眼かくし？」

「えゝ、いやだつたら、いゝの、こゝで降りていたゞくわ」

女の凄まじいような真剣な眼差に、片波は射

すくまされてしまった。

「ねえ、いゝでしよう、わたしの希望を叶えてね」

あでやかにニツコリと笑った。えゝまゝよ、どうなとなれ、三本の酒の酔が片波のためらう心をひっぱたいた。

「眼かくしOK」

勇を誇して快諾した。

「なかなか話せるわねえ、お礼は沢山差上げるわ」

女の白い手が、器用にガーゼを小さくたゝみ、それが眼帯の上にのせられた。

「さあ、顔を……」

むつと、むせるような女の鼻息が、若い片波の官能をかきたてた。

「見える、見えない？」

「見えませんよ」

「そうッ、しばらく辛抱してね」

自動車はカーブした、二度も三度もどこかをカーブしているうちに、片波はすっかり地理からはぐらかされてしまつて、自動車がどこを走っているか、見当がつかなくなつてしまつた。

「どこだか判る？」

「判りません」

「そう、フ……ッ」

女は満足そうに笑つた。おおよそ、三十分も走つただろうか、急に停車した。

「さあ降りましょう、手をひいてあげるわ足元に気をつけてね」

あらかじめ打合せがしてあつたのか、自動車はすうつと走り去つてしまつた、その音の反響から、附近は高層建築が建ならん

でいると、片波は鋭敏に感じとつた。

ドアを開けて家のなかへ入つた、迎える人もない、暗いらしく女は蝸牛の歩みをつ

づける。

「下へ降りるのよ、階段に気をつけてね」地下室らしく濕つぽい、かび臭い匂がぶらんと鼻へきた。

「さあ、眼かくしをとつてちようだい」明りがつくのと、片波が眼帯をはずすのと同時であつた、眼の眩みそうなる明るい光の下に、地下室と思えぬ豪華な調度品が翫めかしくならんでいた。

「どんなところを撮影するんですか、早く準備して下さい」

好奇心と職業意識が燃えあがつてきて、片波はミノルタを首にかけ、閃光器の準備をした。

「待つて、距離を合せてもらうわ、あそこが写してもらいたい」

指さした方には、ピンク色の紗のカーテンがおりていた、寝室らしい

「あなたは、このカーテンの陰にかくれていて、わたしが口笛を吹くのを合図に、どんな場面でも躊躇せず写すのよ」

「モード」

「それもあるわ、なかなか理解があるわねえ、あなたは……」

「でないかと思つただけです」

「あの寝台の上で、どんなことが展開されても、肝をつぶしちや駄目よ、わたしだつて真剣なのだから、ピンボケにならぬようお願いしますわ……しばらく待つてね、わたし準備してくるから、カーテンの間から気をつけていてね」

言い残して女は消えるように奥へ入つてしまつた。

片波は後悔の念がもりあがつてきた、女の美貌と、食堂のオヤヂの煽動とによつてこゝへ来たことが、とり返しのかね失敗

だつたように思えてきた。

女の去つたあと、片波は神経を働かせてこゝがどこであるか、と嗅ぎ出そうと焦つた、地底のような無気味な静寂、片波の感覚はそこが、オフィス街の地下であることを感じとつた、船場の北浜、今橋、高麗橋あたりと思えた。

と、同時に、女がどんな姿態を撮影さすのかと、不安と好奇心をないまぜたおちつきのない気持に襲われた。

人が現れた気配に、カーテンの間からのぞくと、寝台の上で女が衣服を一枚一枚脱いでいた。

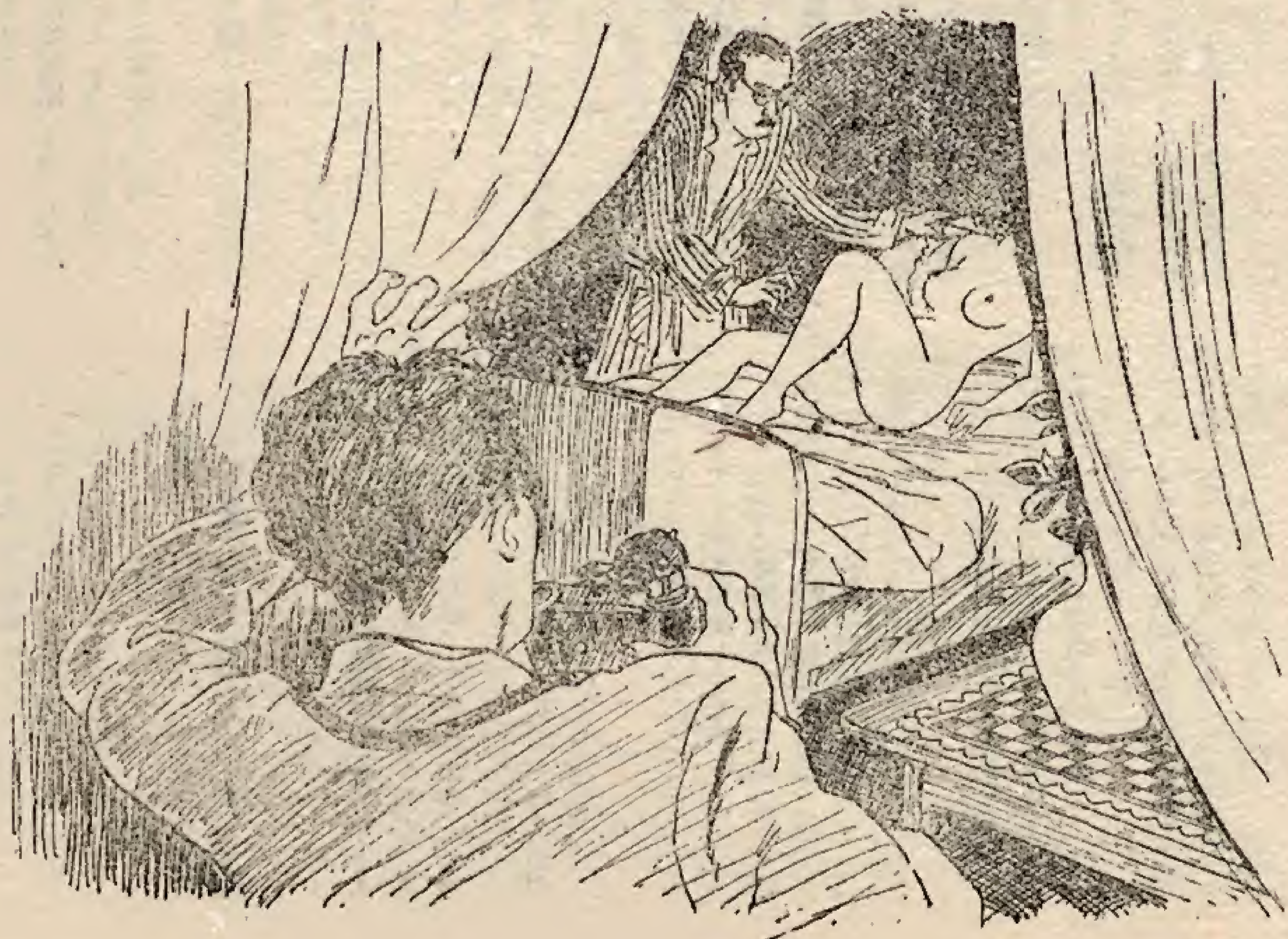
まさかと思つていたのに、みるみるうちに全裸になつた、濡れているような盛満な肉体は、片波の官能をかき乱した、心を非常に保ち得られない、煽情的な女のポーズに、片波は生蠍をぐくんとのみおろした。

欲情に油をかけて火をつけられたように、妖しく心は躍る、だが、飛

び出すことはできなかった。片波の心をわずかに支えているものは、与えられた職業意識だけであつた。

一糸まとわぬ姿をダブルベットに横たえて女はえん然と笑つた。

「写真屋さん、準備しておいてよ、フッ



シユもね、もうすぐだから」
と、いゝつゝ、女はうすい羽根ぶとんを
顎までひいて眼をつむつた。

息づまるような時が立つていつた、ミノ
ルタのピントを合し、閃光器を片手に、心
をふるわせながら、合図の口笛を待った。
「そこにいるのを誰にも気づかれちゃ駄目
よ」

女はちよつと皷しい顔をして注意をした
やがて、人が入ってくる気配がした、背広
を着た男だつた、女の方を向いて立つてい
るその後姿が、片波の記憶にあつたが、誰
だとも判らなかつた。

女との会話がはじまる。

「とうとう、来て下さつたのねえ」

「うゝむ」

「わたしもう、みかぎられてしまつたのか
と思つていたの、あなたのドンファンには
わたし心配でならないの、今晚は泊つて下
さるでしょう」

「そうはできないのだ」

「まあ憎らしい、また、どつかへ、しけこ
むのでしょう」

「この頃はとても忙しくて……君、あゝ度
々電話をかけるのはよしてくれ」

「迷惑なの……でも、わたしの心だけは汲
んでいたゞきたいわ、ねえ、ちゃんと準備
して待つてゐるのよ、この通りにね」

女はかけぶとをはねて上臍を現した。

「早く抱いてちょうだい、寒いわ、風邪を
ひくわ」

女の妖しい攻撃の前に屈服したのか、男
は背広を脱ぎ、ズボンを脱いだ。女が差出
したパジャマに着替えて、ダブルベットに
こしかけたとき、女は起きあがつて裸臍を
男にからませた、態勢が変つて男の横顔が

片波の眼にうつつたとき、合図の口笛がピ
ューツと鳴つた、その機をはずさず、閃光
器はボウツと鳴つて、あられない男女の
狂態を、ミノルタのなかのフィルムがキヤ
ツチした。

「あつツ」

男は悲痛な叫び声をあげて、こちらを向
いたとき、片波も思わず「あつツ」と叫んだ
こちらを向いた男は、片波の記憶にある
はずである、男は市会議員の桂木修三であ
つた、清麗潔白の氏であり、町内に住む品
行方正の人望ある氏でもある、それにして
この行動、片波は啞然とするばかりだつた
「誰だツ、写真をうつしたのは」

満面朱をそゝいだ桂木の顔が、こちらの
カーテンを睨らみつけた。

「どうです、御感想は……人望家の仮面が
はがれましたわ」

いつの間に身につけたのか、女はナイト
ガウンの姿で、桂木の横に立つていた。

「きさまは」

桂木は、女のアップに結いあげた髪をわ
しづかみにした。

「よしてよ、これはわたしの復讐よ、捨て
られた女の怒りだわ」

女は冷然と笑つた。

「なにツ」

「痛いわ、誰か来てエ」

女の悲鳴に、飛びこんできた男が、桂木
を突きとばした。

「ふゝん、ざまあみろ」

「きさまたちは美人局か」

「なんとでも言え、わしは、きさまの人望
家面が気に入らぬのだ、もつと清く正しい
世の中にしたいんだ、さいぜんうつした写
真がなによりの証拠だ、きさまの裏面を世

の批判の前にたゝせてやる」

片波は、その言葉には同感であつた。け
れど、同じ町内に住むよしみがこみあけて
きて、とつさにフィルムを葬ろうと、ミノ
ルタに手をかけた。

「おい、貴重な証拠物件をどうする気な
んだ、変な真似はよせツ」

その手をぐつと握られた、いつの間にか
鋭い眼をした男がよりそつていた。

「いや、なにも」

「写真機をこちらへよこせ」

ミノルタは乱暴な男の手に渡つた。

「写真機は僕の生命です、僕がフィルムを
はずしますから」

男ともつれてカーテンの外へ飛び出した
「鉄ちゃん、そんな無茶なことをせずに、
フィルムは写真屋に任せておきなさいよ、
こわすと大変だから」

女はさとすように言つた。

「ぢやあ、早く、いまのフィルムを出せ」
ミノルタは片波の手へ返つてきた。片波
はフィルムをとり出しながら、ぢろりと桂
木の方を見て

「桂木さん、醜態ですわ」
「えゝゝ、君は……」

「ごそんじないでしょう、僕は選挙のとき
には、あなたを絶対に信頼して、あなたの
支持者でした、だが、今晚の醜態を拝見し
て……」

桂木はうなだれてしまつた。
「おや、写真屋さんは、このひとを知つて
いたのね……鉄ちゃん、写真屋さんからフ
イルムをもらつて……」

鉄に渡したフィルムを女はうけとつて弄
びながら。

「桂木さん、人望家の仮面をつけているた
めには、二十万円は安いわね、どうするつ
もり、こゝにれつきとした生きた証人もあ
るんだし、しつかりした御返事がいたゞき
たいわ」

女は事務的な口調で言つた。桂木はうな
だれてちつと考えこんでいたが、やがて顔
をあげて

「僕がわるかつた、君たちの気のむくまゝ
にやつてくれ、社会から葬つてもらつても
結構だ、桂木修三は凡てをなげうつて、人
生の新規壽きなおしだ……それから、要求
の二十万円は……」

桂木はこゝろ言つてから、革靴から小切手
帳をとり出して、すらすらと書いた。

「さあ、これを……」

女は、ちらつと小切手をみて

「このフィルムをお渡しするわ」
「いらないよ、取捨は君たちの良心に一任
しておこり……それから写真屋君、君はこ
のグループではなさそうだ、帰ろう」

桂木に促されて、片波は急いでそのあと
に従つた。

外は片波の想像通り、伏見町だつた。
昨夜の事件など忘れたような顔をして、
片波は今日も我橋の上に立つていた。

「あつツ」

ピントグラスにうつつたのは昨夜の女で
あつた。明るく笑いなから近づいて、
「これ、お返しするわ、それから、これは
お礼よ」

数枚の千円札とフィルムが片波の手に握
らされた。

「写真屋さん、お礼を言うわよ、わたし、
すつとりに生きる気になつたの」
そう言い捨てゝ女は、さつさと我橋の雑
踏へまぎれこんでしまつた。
……完……

元禄浪花ざんざん

天王寺 星七
繪・今 幾々藏



前篇

色若衆變化の巻

師走の夕ぐれ、町角の辻は底冷えの寒さが襟にしむ。

「では、これから始めるが、見たからと言つて後で見料を取るの、ガマの油を買いえのとは言わぬから安心して、もつと前へ寄れ。むかし元龜天正のころ果心居士先生こ

れを創始せられ、かつては安土城において織田信長公の御覽に供された事もある應可不思議なる世々相伝の幻術を今日はタダで見せてやる、先づ最初はこれだ」

袴の前紐にはさんだ小扇を右手で抜き群集を見廻しニツコリ笑つた。

道頓堀の坂町あたりの蔭間茶屋か、野郎歌舞伎の舞台から出てきたような水もしたたる色若衆。若紫の縮緬肌着に鶯色羽二重の五つ紋羽織、白柄細身の大小もなで角の黄金罽、樺茶縹の絹袴に漆塗りの虚無僧下駄という大名の色小姓とも芸人ともトンと得態の知れぬ前髪美青年。ちよつと見ると十八九だが、案外年を喰つて二十二三にはなつてるか知れない。姿は優しいが言葉つきは恐ろしく江戸前の人をなめた伝次口調である。

「御覽の通り、ただの扇子」

サツと開いて裏表を踊して見せる。なるほど両面とも白いだけで何の装飾もない。

「これをこう畳んで、こう拡げると」

喋り乍ら畳んで再び開いて見せると表は極彩色で描いた蓮の花咲く池畔で円光を背に立つお釈迦様、裏は赤一色の血の池地獄。

「とかく浮世は地獄極楽紙一重——」

早口な口上を述べつつ美青年の女みたいニヤけた眼が、ほんの一瞬ではあつたがキツと鋭く引きしまつて群集の一人を見すえた。誰にも知れなかつたが、睨まれた当人、当時大坂きつての暴れん坊、羅金文七だけは本能的に気づいて、腰にブチ込んだ大脇差の柄の上に骨太い腕をくんだなり、タカの知れた前髪の、ワイに何ぞ怨みでもあるのんかい、と鼻先にシワを作つて笑ひ返した。

再び三たび扇をたたんでは拡げて、富士御所車、役者の似顔、雪景色と扇面の絵を変えてみせ、

「次ぎはいよく本芸に取りかかる」

美青年は絹物づくめの袖口をまくつた。

ほつそりした腕が抜けるほど白い。扇の要についてる茄子紺の紐に右手の白魚のような人差し指を引っかけ、頭上でキリ／＼廻しだした。扇と紐の長さを半径にした円が美青年の頭上で次第に速度を増し、遂に目にも止らぬ早さで廻転を続ける。

「ヨ——オツ、はい、どんなもんでえ」

ぱつと指先で扇の紐をはじき飛ばすと、扇子が宙に描いていた円がそのまま一枚の吉鯛笠となつて、まるで重量感を失つたように、ゆるやかな廻転運動をつづけながらフワフワ前髪立の頭へかぶさり落ちた。

「ふん。女笠では洒落にもならぬな、よし、お次ぎは腕にヨリをかけての見どころ見せどころ、そら！、天への掛け梯子だッ」

ぬいだ吉鯛笠を無造作に片手で引つくり返せば元の小扇子。そいつを力一杯、空へ投げ上げた。半開きの扇子が垂直に無際限な黄昏の空へ素晴らしい早さで登つて行く。何ほどとなり針ほどになり、小さな点となり、しまいに夕焼雲の切れはなしに溶け込んでしまつた。

「風さえなければ——」呟いた前髪立は華奢な左手を水平に伸ばし掌を上にして臉を閉じた。

ポチリ一点。真上の雲間に瞬く星みたいに光つたものが現われたと思ふと、みる／＼恐ろしい速度で天からまっしぐらに落ちてきた一本の短刀。ズブリ、美青年の掌

から裏の手の甲まで切先あまつて二三寸も貫き通した。たちまち鮮血が吹きこぼれ、真赤な無数のミミズが這うように地上を流れる。

その時だつた。

「あッ、いけねえ」

見物の群衆の中で少年らしい叫び声と同時に、商家の小僧風の小さな駄か、腕を血だらけにした暴れん坊雁金文七に取り押えられてる。どつと人の輪が崩れる。

「何だ喧嘩か、つまらねえ、人が折角氣が乗りかけてるのに——クソ面白くもねえもう止めだ」

不気味な眉をひそめた美青年は短刀の突き立つてる掌をヒョイと裏返した。短刀と見えたは紅さし指と中指の間に要を挟まれた。

た元の扇子、彼の掌から流れ出た血など跡かたもない。

その小扇で白鯨革の柄頭をポンとたたき着物の袖口をおろして群衆を後に歩きかけた孔雀のように美しい前髪姿へ、歓声と共に投げ銭が雨と降つたが見向きもせず、

「これ、あわてるなゼイ六ども、そんな汚ねえ投げ銭が欲しさに見せたんじやねえや」

一声残し、悠々と立ち去つた。

二

「あッ、いけねえ」

思はず口をついて出た時、もう腹をきめた。



銭を落す

巾着切りにかけては江戸随一と言われた名人、坊主小兵衛に仕込まれて少年ながら減多なドジは踏まない害の疾風の兎吉も、

盗るものが前代未聞の品物だつただけにどうにも逃げきれなかつた。みる／＼勝ち氣な顔で紫陽花のように青くして立ちすくんだ。

「おい、静かにせえ、大坂もこのごろ氣が荒いよつてな、大けな声を出すや寄つてたかつて半殺しや、黙つて従いてこい」

耳もとでささやくと文七はさつと兎吉の手を握つたまま大股に歩き出した。

「チボや、チボや殺してまえ」

「なんや彼奴、まだ子供のくせに太い奴やな、石ぶつてたれ」

口々にわめいて後から従ってくるヤジ馬へ

「やかましいわい、この子はチボと違ふんや、お前ら向うへ行きさらせ」

雁金文七が群衆へ怒鳴りつけた。

やられた方からアベコベに騒ぐなど言われりや世話はない。全くこれでは江戸からワザ／＼恥をかきに來たようなもの。何とか手を振りきつて——と思うが彼の手首を

チヨイと掴んだ相手の指と人差し指は鉄のタガミたいに頑丈であつた。

家並の軒行燈へ次ぎ次ぎにボーツと灯かともると急に人通りが多くなつた。さすがは繁都大阪の色町にふさわしい夕ぐれど

き。藝商のお駕籠が通る。番頭手代の奈良草履が通る。身分があつて懷中のお寒い武家の忍び遊びか、頭巾と編笠のホロ酔い氣

嫌の二人連れが通る。お七指の加賀笠を片手にウネ足袋をはいた歌比久尼がなまめか

しく腹をふつて、すれちがいざま黒羽二重の頭巾の蔭から薄化粧の顔で微笑みかけ

る。

フン、大坂ゼイ六にも骨のある奴が居やがらあ——。文七の腰の大脇差しへ恐怖のまぢつた眼をチラリとくれて兎吉は素直について行つた。

江戸で修業時代。兎吉はスリに対する私刑のきびしさを嫌になるほど見聞きして

た。

彼の兄貴分に当る男がスリそこなつて永代橋から飛び込み、水面に顔を出すたび橋の上のヤジ馬連が、てんでに石をぶつけて

ナブリ殺しにした事や、彼の弟分に当るトシボ頭が両国の見世物小屋で失敗した時、

「まだ小さいから命だけは助けてやらあ」と言つてくれたのは好いが被害者の宅へ連れ込まれ、竹の筒の中へ左右十本の指を一本づつ突込んでピシ／＼情状もな

くヘシ折られ、生れもつかぬ片輪者にされたことだの——。

それらを考え合せると恐らく大坂だつて同じだらう。この長脇差しめ、一体この俺をどうするつもりか知らと氣にもなる。

ところが相手の長脇差し、雁金文七の方は斬り裂かれた袖を肩から引きちぎり左腕の傷をしぼつてゐるものの、傷口は浅いが相当幅広に斬られたと見え、歩いててもズキズキ疼く。どう考えてもこの小僧め、俺を

だいぶん前からつけ狙うてたに違わん。そう思えばこの小僧、ここ二三日不思議によく見かけた。近郊の丁字風呂で二度ばかり

バクチ場の帰りや、この新町界隈でも時おり見かけた記憶がある。何のために？

一体何が目当て俺に斬りつけやがつたんやろ？——。

道みち考え乍ら、うなだれた小僧の横顔をグイと睨みつけて歩いてゐるうち、ヒョ

いとさつき見た幻術師の美男面が眼の前に浮んできた。

「そうや、俺の方を見やがつて何とか吐したぜ、あの化け狐みたいな青二才。ええと何や化体な文句やつたな。とかく浮世は地獄極楽紙一重——」

「とかく浮世は地獄極楽紙一重——」

ついに口に出して吐いた羅金文七。忽ちあつた。貧富老若を問はず享楽好色の風が盛んで関東をしのご自由経済の中心地、大坂では新町だけでも公娼数は太夫三十八人、天神九十一人、魔悪五十二人以下端女郎まで総計すると八百人余、娼屋の数は二十五軒、茶屋は四十五軒もあつたという。それに北曾根崎新地、島の内、難波新地の私娼数を加算したら驚く数になるだろう。

そのころ、江戸の紀文や奈良茂、京の中村内蔵助は大名も及ばぬ贅沢さで成金風を吹かせたが、それらを尻目に、大坂堂島川南詰に店を持つ豪商で初代が材木で産を作り二代三代は諸国から集る大名の廻漕米のセリ売で儲けに儲けていたと言われる大坂財界の巨頭、淀屋辰五郎は天下一の金使いの荒さで世間の耳目をそばださせていた。

同じ時代に同じ町人に生れながら貧しいばかりに紺屋の徳兵衛は八両、紙屋の治兵衛は十三両、鍛冶屋の平兵衛は四両などという僅かな借財の果に想う女と悲惨な情死を遂げねばならなかった。

金が特定の箇所には偏在しだしたのだ。幕

府は経済たてなおしのため、元禄八年以来たび／＼通貨の改悪と云う苦しまぎれの手をうつたが、結果は豪商を増々富ましたばかりで小大名以下の武士階級と小商人農村の疲弊は救えなかった。

こんな時代の繁華街に、自然と顔を出たものか、先祖伝来の職に見切りをつけた貧農の息子、小商人の子弟の寄り集りて出来上つた「宿なし喧嘩屋」という無頼の徒である。

羅金文七は岡波座廻で羅金屋と言えは一通り名の知れた娼物屋の後家の一人息子だつたが酒と女に、かなり有つた家産を傾けつくして母親をはじめ親類縁故から勘当を言い渡されると至極氣楽に「宿なし喧嘩屋」の群に入つた。

生れつきの豪胆さと、強い腕力、育ちの良い人間によくある、おうらかな氣の好さなどが買われて何時の間にか仲間うちで兄貴とか親分とか呼ばれるようになった。

その文七が群を囃んだのは——。

まだ羅金屋の若旦那で遊ぶ金に不自由しなかつた頃。彼は新町花菱屋の菊川太夫に夢中で入れあげていた。相手の菊川も文七に負けず熱を上げて互いの腕に恋しい名前を彫り合うまでの仲だつたが、羅金屋の没落と共に自然と菊川は冷たくなつていつた。真実、彼女が文七を好いていたのなら身銭を切つてでも彼を遊ばせる筈だかそうまでしてくれなかつた。もつとも、そうしてくれなかつたところで色男氣取りにヤニ下り、通いつめる文七の氣象ではなかつたらうけ

れど。

家財蕩盡しての、勘当直後の彼は、何事も金の切れ目が縁の切れめやから、と空うそぶいていたが心の中を吹きぬける野分けの風の寂しさをしみじみ味わつたに違いない。

その菊川が、美貌で大金持の、ある若侍にちかく落籍されるといふ話を五六日前、小耳にはさんだ。その若侍は名前を笠塚由之丞とか言い、非常に嫉妬深い男で、菊川の腕の刺青「文七いのち」のうち「文七」の二字を焼きコテで消さしたとか、それだけでは気がすまず彼女の以前の恋人羅金文七の腕から「お菊命」のうち菊川太夫の本名「お菊」の二字を何とかして無くしたいと躍氣になつてるとかの噂もあつた。

「地獄極楽紙一重——」

ワイが腕を双腕でチョイといかれて怒つてゐるのが地獄で、扇子の紙一重裏の極楽いふのは、すぐそここの花菱屋の座敷でこれから菊川太夫の腰枕で腕に入る奴の意味やな。罷めたぞ、年恰好、あの面つき、きつとさつきの幻術使いが噂に聞いた笠塚由之丞に違いない。頭を下げて頼みにきたら、くされ女の名を彫つた刺青の一字や二字、氣持ように目の前で皮ごとハギ取り剥ぎま

でつけてやるんやけど、チボを使つて斬り盗らせるとは侍のくせに男らしい卑怯な奴。畜生、今に覚えてけつかれ、眼を廻すな！腹の中でわめいた羅金文七、大膽差しの鍔元を片手で押さえ荒々しく兎吉を引きずつて近くの「鳴海屋」と書いた居酒屋の油障子を足で蹴飛ばした。

腰掛け代りの空樽に腰を下し、初めて文七は兎吉から手を離した。店はかなりたて

込んでゐる。酒の匂い、おでんの汁の煮えこぼれる匂い、酔つた男たちのクダを巻くさざめき。外とちかいムツとするほどの暖さである。

「姐さん、冷のまま餅で一合、それから熱燗を一本、肴は湯豆腐でええさかい」

安つぱい居酒屋でも、色町に近いだけに使われている小女も色つばい。郡内編の元祿袖の先につけた小鈴を猫の仔みたいに鳴らして皿や銚子を運ぶのに追われていた。歩きたびに肴物の裾がはね上り紅絹裏が見えたり、目野腰巻がしどけなくめくられて、時にはあぶな絵めいた白い臍が大きく覗いたりする。当世流行の鉛玉でも腰巻の前裾に縫い込んでゐるのか知れぬ。

酒を言いつけると文七、改つた態度で兎吉の方へ静かに顔を向けた。

色は酒焼けしてゐるし、頃から頬へかけての不精髭も多少目につくとはいへ、利かん氣らしい濃い太い眉、魔のように鋭い眼つき、意志の強さを示す弓型の唇、二十五六の苦味走つた男ぶりである。

「小僧、お前名前わい？」

「はつ、申し遅れまして、手前生国は相州小田原の薩、縁持ちましての親分は——」

「やめとけ、チボにもやくざなみに仁義があるか知らんけど、お前まだ年十五か六やろ、子供は子供らしいに問われた事だけ素直に返事せえ、ワイはキザな江戸弁きくと齒が浮いて酒が不味い」

文七が不用意にもらした「チボ」の一言に居合せた客連中から店の小女まで一斉にこちらを見たようだったか、それも一瞬、またもとのクダを巻く声、酔つた鼻息のぶつや、節などに各自勝手に氣を取られていつたらしい。

「ところでお前、何という名や？」
「仲間うちの呼名は疾風の兎吉と申しま
すんで」

「兎公か、そいで親は生きとんのか？」
「親父は七つのときに死にましてお袋だ
けです」

「そうか、ワイと同じや、どうも後家育ち
の息子は真直に行かん」

一寸しんみりした寂しい笑いだつた。笑
うと嬉しい頬に思いもかけぬ笑靨が浮び、
人なつこい典型的な大坂のボンチ育ちの顔
になる。

「時に兎公、ワイとお前に恨みの貸借り
はない筈やぞ、見も知らぬ赤の他人と他人
や、何でワイを斬りやがつた？ お前の手
口は相当上手なチボの手口で、しかも、や
つたことは喧嘩屋なみや、誰かに頼まれた
なら頼まれたとハッキリ言え、正直に言う
たらワイは別に荒つばい真似せん氣や」

「へい……」
寒そうな目を光らせた兎吉、しよんぼり
下をむいた。

四

だいぶん長い思案の後、疾風の兎吉が語
つたところによると。

江戸スリ界の名人、坊主小兵衛から、年
は行かぬがどうやら一人前になつたと褒め
られた兎吉はすっかり嬉しくなり、スリ修
業の旅に出たのが一月前である。大坂は江
戸以上に金銀の集る土地と聞いたので旅を
重ねて此処へ来た。

大坂にはチボは多いが、双物の本場堺に
近いだけに双物を使う方が殆どだ。江
戸では特殊な双物に不自由なためか、江戸

ツ子の氣質にもよるのか、双物を使うのを
下手と臆しみ、専ら指先による熟練の妙を
誇つた。

例えば以前は通行人にドンと突き当り相
手のヒルむ隙にスリ取つたものが、元祿末
期の当世では、曲り角で通行人と顔を合す
相手の避ける方へ此方も避ける、あれ／＼
突き当ると相手の心が動揺して一髪、
燕の素早さで身をかわしすれ違ふ。その瞬
間に相手の懐から此方の懐へ巾着が移つ
てくることは勿論である。この方法を佐々木
小次郎なみに「つばめ返し」と名づけてい
る。たしかにスリ技術だけは太坂のチボよ
り江戸のスリの方が垢ぬけがして一枚上手
だつた。

つばめ返しも器用にやれる兎吉が太坂の
チボをなぐさめ、ゼイ六の通行人をなめき
つていたのも無理はない。

ところが或る日、道頓堀の芝居茶屋から
出てきた豪華な衣装の色若衆から巾着を抜
こうとしたとき、相手の眼に射すくめられ
不動金しぼりに逢つたみたい手足が痺れ
て動けなくなつた。

その相手から耳なつかしい江戸弁でサン
ザン油をしぼられたあげく、百両の前金ま
で貰い、引き受けたのが羅金文七から刺青
を斬り盗るという前代未聞のスリの仕事で
あつた。

あまりに無造作に大金をくれるから偽金
つくりかと不審に思い、いろ／＼内緒で様
子を探つてみたら、淀屋の屋敷に遊んでる
食客で笠塚由之丞という若侍。もとは江戸
本所松坂町の吉良様のお小姓だとか、上杉
様の家老千坂兵部郎の隠密で、つい先ごろま
で京の山科に住み酒と色ごとに溺れきつて
いた赤穂の城代の本心を祇園の遊女の口か

ら色仕掛けで
聞き出さすた
め莫大なお手
許金を主家か
ら頂き猿橋右
門とかいう武
士と一緒に土
方へ来たんだ
とか、いや、
あんな酒呑み
の田舎城代に
何が出来る、
と隠密の仕事
が馬鹿／＼し
く、道縁に当
る淀屋の屋敷
へ秋ごろから
腰をすえ、京
へも行かず、
江戸へも歸ら
ず、主家から
逃げ隠れして
どうやら此頃
では大坂へ住
みつゝ心算ら
しいとか、噂
とりどりであ
る。また剣術
の方は大した
事ないが妖し



からぬ若衆侍であつた。

だが貰つた百両が本物の小判であり、必
ずやりますと引受けた以上は、いくら相手
が喧嘩屋の暴れ者でも命にかけてやりとげ
ねば江戸スリの面汚しになる。もつとも一
応は、貴方の得意の妖術で御自身おやりに

なつたら如何なもので？ と訊ねてみたが、「馬鹿者、武士はとうから捨てる氣だが、これでも男だ、女出入りにや見栄があらうな」色男には本能的に嫉妬を隠したがる虚榮心があるらしい。

仕方がない。兎吉は文七の住居をさかし彼をよく行く銭湯をたしかめた。風呂屋で一度彼の裸身を眺めて刺青の位置を胸にきざんだ。

本職のスリが一度盗むべき目的物の位置を見定めたり、何枚拾を着ようと綿入を重ねようと一分一厘狂わす的確に着物の上から狙いをつけることが出来る。

大坂デボを真似て刃物を指に挟み、三日四日、五日とつけねらつたけれど品物と違ひ、生きてる皮膚を斬り盗るんだから難かしい。もともと相手に知れずヤレル芸当ではないのだ。文七のそばへ寄れば「お菊」の二字を斬り盗るより先に此方の首が圓から離れてしまふような殺氣と血氣が満ちあふれてるのを感じる。早く言えば町人ながら文七には油断とか隙とか間の抜けた所が全然見当らないのだ。

口惜しいけれど兎吉、思案に余つて色若衆の笠塚由之丞へ何とか相手の氣を散らす方法はないものかと相談に行つた。依頼主だけに笠塚も返事は早い。それから先が文七の通りかかるのを知つて始めた幻術の見世物であつたと言う。

「よし、わかつた」

ほぼ彼の思つた通りだ。

熱燗を盃で二三杯あふつた文七、やあら左腕の傷口をしぼつた破れ袖を解き、血汐で汚れた傷口の刺青を櫛の冷酒で洗つた。

「どうや兎公、これを見、お前の仕事

非處女初夜姦告白集

盆踊りの夜二人の男に輪姦された私

木村 由紀子

八月の十六日その日は丁度F町で盆踊りのあつた晩でした。私（由紀子）は二人の暴漢に巧みに誘惑され、そして人氣の無い鎮守の森で輪姦されてしまつたのです。私は無惨に犯された処女に恨みを云いたくてなりません。お前は誘惑される心の隙を持つていたからよ。何故毒牙から逃げられなかつたの。もつと賢明だつたら犯されはしないのにと。私は良心の呵責に日夜悩まされていきます。でも今更どんなに後悔したつて、弁解したつて、元の処女には帰れません。せめて世の同性の方々にあの夜の呪わしい悪夢をお伝えし、貴女を狙っている恐ろしい毒牙から身を守られるようお祈り致します。

その呪わしい夜、私は一里程離れたF町の盆踊り大会を観に行きました。心持ち派手なワンピースを着け、丹念に化粧して参りました。私達働く者の娯楽と云えば、祝祭日と月に三、四度の休日を利用しての観映、観劇しかありません。それも、「若い娘がよく出歩く、お母さんなんか年に二、三度しか行かないのに」と叱言を言われるのです。でも今夜はお隣りの留美ちゃんと一緒にだというので、快く家を出して貰えました。

本通りを歩く人の波は、長い行列のよう

に、そろ／＼と高等学校へ続いていまし

た。着飾つた女、リーゼントした若い男、老若男女、入り乱れての花模様のようにでした。学校のグラウンドでは、今しも踊りの最中でした。ぐる／＼と作つた円を観衆は八重に取り巻いて、なか／＼見えそうにも無く、櫓の上で太鼓を叩く若い男のおどけた様子だけ目にはいります。留美ちゃんは、私を引つ張るようにして、人混みの中へはいります。人いきれでじつくりと汗をかいてしまいました。でもやつと見え始めて喜こんだのも東の間、留美ちゃんを見失つてしまいました。あちこち見廻りましたが駄目でした。私は、あきらめると、やつと落着いて踊りを見初めました。打上花火が夏の夜空に美しい絵模様を色どりました。太鼓の音、手振り身振り宜敷く踊る踊り子そしてそれをじつと物守る大観衆、私は、その浮かれた雰囲気自然に浸されてしまいました。

この町の人達のスクエアーダンスも終りに近い頃誰かの手がお尻りにびつたりとついてくるのに気づいて、嫌な気持ちになりました。でも身動きも出来ない程なんです。その後の人もまさか、私に悪戯をするんではないんだとその儘でいました。でも、そんな考えを持つたのがいけません。男の節くれ立つた手はじり／＼と臀部を撫で廻し始め、私がそれを払い退けよ

うと左手を廻したその手を強く握つて放しません。私は後を振り向いて其の男の顔をにらみつけました。

刈上げた男の髪はデカ／＼と油で光りみだらな汗と視線がびつたり会いました。私は強も手を振りほどこうとしましたが、まるで蛇のように絡みつき、強い力のため手が痺れるのでした。男つて獣と同じだわ。

私は憎々しさを憶え、一刻も早く其処を逃げ去りたいと思いましたが、人波は、後から／＼押し寄せ、出ようたつて無理なんです。ど、どつと音を立てて人波がよめきました。男は絶好の機会でも見つけたように、私に寄りかゝり煙草臭い息を私の首筋に吹つ掛けます。何といやらしい男なんでしょう。私は声を上げようとしたが恥かしさに喉元は震え、処女の身体は小刻みに震えました。もう踊りなんか観る心の余裕はありません。私は男の手を揮身の力を指先に集めてつねつてやりました。これに身に応えたのか、それからは悪戯しませんでした。私は安堵に胸を撫でおろしましたが、踊りはもう其の時、終りに近ずいて引き上げる人々は、列をなして校門へ急いでいました。時計を見ると十一時少し前、十一時半の臨時列車に乗り遅れたら大変と人混みの中を分けて進む私の前に先刻の男が、大きく立ちどかっているのに気付くと憎々しさと恐ろしさに身の毛もよだつ想いでした。私はでも其の男を退けるように足早に人の中を縫いくぐつて彼から逃れようとしたが、其の男は執拗に喰いさがつて参ります。知つた人でもあればと思つたが駄目でした仕方無く私は夜店の人混みに隠れて、じつとしていました。男は私を

は半人前や、貰うた百両のうち五十両は此方へ出せ」

空欄の上に片胡座を組んだままグイと傷口を突きつけて言つたとき。

「金の兄貴、ずいぶん探したぜ、早う来てんか、多葉粉屋七兵衛とこの博奕場で今もめてる最中や」

イナセな職人醫を松葉くづしの手拭でネデ鉢巻した男が、いきなり早口に飛び込んできた。文七の膝下のゴロツキ、庚申の勘兵衛である。

(前篇終)

少年スリ兎吉をそゝのかして雁金文七の刺青を切り取ろうとした幻術師謎の色若衆笠塚由之丞とは一体何者でしようか？

文七の嘗ての恋人、菊川太夫は、妖艶な笑を淫奔な頬に浮かべて、新たな男、由之丞と乳繰り合つてゐるのです。

泰平の世、金の渦巻く浪花の町に起つた意地と度胸に生きる浪花やくざ雁金文七の行狀を描く異色時代小説！

次号、後篇は益々佳境に入ります。どうぞ御期待下さい。

入院・分娩・手術

中井産婦人科

大阪市阿倍野区晴明通一丁目八〇
(南海上町線東天下茶屋下車)
電話天下茶屋 三三八七番

見失なつたらしくきよ／＼しながら、駅前の方へ行つてしまいました。お馬鹿さんと背に馬鹿を落しおとすと引き返してもすると面倒だと、小路を少しはいつた飲食店にとび込んで水を求めました。張りつめた心の弦が初めてゆるみ、暑さのため汗ににじんだ肌や、濡いた口にはとつても冷たく心よい味覚に酔つてゐるうちに、不図氣付くと時計は十一時三十分を廻つてゐるのでした。汽車に乗り遅れてしまつた私は泣き出した。汽車で一杯でした。泊る知り合いとて無い私は、長い夜道を女一人で歩いて帰らなくてはなりません。駅の北側の田圃道にでると、私は帰りの若い男を避けて遠足で歩き出しました。家遠約一里、でも涼しい夜風にあたり、満月を見つめながら歩く私は醗りの愛憎と正反對に、静かなそして楽しいような氣持になつてゐました。

一間幅の道を歩く私に声を掛けた自転車の男がありました。「K村へ帰るんでしょ。乗せて上げよう」と優しく云いました。見るとあの妙な男と対象的な純真そうな青年でした。後半里以上も歩かなくては帰れない。家の者が心配してゐるに違いない。夜道を女一人で歩くのは物騒だ、そう思うとつい見知らずの自転車に横乗りさせて貰いました。無口そうな青年はそれ以後、何も云いませんでした。親切で、真面目そうな青年、私は乙女心が湧き出てくるのに氣付くと顔を赤らめてしまいました。黒々とした山々を左に眺めて、夜風をきつて進む自転車は本心に快いものでした。私は此の青年にどう云つてお礼しようかと考えあぐんでいました。

鎮守の森の側で自転車を止めた青年は、小用を済ませてくるからと森の中へはいりました。私は夜露にぬれた芝草の上に腰をおろし、側を流れる小川に耳を傾けてゐるうち、恋の錯覚に陥り、夢のような氣持でいました。だがその夢は悪夢だつたのです。青年は私の側へ腰掛けると煙草を取り出し、甘味そうに煙を吐き出しました。そして十分位、いや五分位経つたでしようか青年の手が私の肩に伸びて来ました。だが其の時私は青年を信賴してゐたので手を振り切りうとはしませんでした。其の時です。青年は還きしい力で私を横抱きにしてしまつたのは。そして杉の木蔭から飛び出したもう一人の男(あのいやらしいさつき)の男だつたのです。は素早く私の口へ厚いタオルをかぶせました。示し合せてやつたに違いない一瞬の出来事なのです。私は手と足とで男の当り構わず力任せにたたき、そして蹴りました。でも、女一人に男二人それも肉慾に血走つた青年。私の足と頸を抱いた二人の男は境内へ連れて行きすした。声を限り助けを求めました。でも厚いタオルのため外へは洩れなかつたでしよう。か弱い女の最後の抵抗も過ぎしい男にとつては何の役に立ちましよう。処女を守ろうとする私の本能的な防禦も全く無意に終つてしまいました。強い侮辱に対する怒りにゆがめられた私の顔は次第に哀願へと移り変つていきました。「許して、それだけは許して頂戴！」でも男の情慾に狂つた心には響かなかつたことでしょう。処女との別れ、母の顔が涙のさゞ波を透してぼんやりと映りました。その間にも二人の男は言葉一つ掛けるでもなく、肌膚を奪ひ私は

下半身を露わにされてしまいました。下半身に冷たい夜風が吹き過ぎました。激しい抵抗の後に、私はぐつたりとした身体を横たえ次第に意識は遠退いてしまいました。どれ程経つたでしようか、松を過ぎる風の音にふと我に帰つた私は境内の草むらに投げ出された見るも無惨な姿に目を覆うばかりでした。意識が次第に平靜に帰ると、私は死のうと決心しました。男に犯された私の肉体は最早拭い切れぬ呪わしき、罪惡の結晶としか思われせんでした。私は、よろ／＼と立ち上ると、杉の太木に身をまかせました。死のうと誓つた私は樹立の風の音に耳を傾け、心の静まるおもひでした。無立たしき、怒り、憎惡、五体も裂けよとばかり煮えたぎつていたそれ等のものは凡て何処かへ消え失せてしまいました。そして遠く呼ぶ母と父の由紀子オ由紀ちゃん、という声が微かに耳にとどきました。家へ帰ろう。そうおもふと私は身縋ろいをして立ち上りました。これで私の手記は終ります。お若い同性の方々、私の生き方は間違つてゐるでしようか。私はあの日から激しい心の動揺に見舞われ、悩み抜きました。そして私は強く正しく生きようと心に誓つてゐます。私は前にいゝましたように心に幾つかの障を持ち、そして無惨にもあんな目に会つたのです。皆さん、どうか心に武装して下さい。私は世の女性方に御忠告申し上げると共に男性の方にもお願い致します。どうか理性(良心)のもとに行動して下さい。一寸した出来心の惡戯も女にとつては生死にかゝる重大な問題だということを

(終)

くう かん しや せい
空 間 射 精

港 三 四 郎
画・沖 研 二

性 の 悩 み に 答 え る

1

私は十二年前に妻を亡くした、
ことし六十二才の老人ですが、こ
の頃、もりくゝと軀が若返つたよ
うで、一日も早く、適当な相手と
結婚したいと思つています。
老らくのどうこうといわれるこ
とは、もとより覚悟の上ですが、
結婚でもないことには、夜毎の
罪悪感から、脱がれる術がないの
です。

この年になつて、自分がこのような変態
性であろうとは全く私は自分の健康な軀を
恨みたくありません。
いや私の場合、軀より、この両眼を「春
琴抄」の佐吉ではないが、つぶしてしまつ
た方が、早道かもしれません。
まあおき下さい。

世は相談欄全盛時代である或る性生活相談所へ毎日
送られてくる夥しい通信の中に一きわ變つた老人の
性の悩みを訴える手紙が混つていた。

私は女の子ばかり三人の父親で、大阪か
ら汽車で一時間ばかりでゆける地方都市の
農家です。

長女が卅一、婿との間に孫が二人。次女
は工場事務員と恋愛結婚しましたが、家
ないので同居して、大阪に近い町の勤め先
へ通つています。こゝは孫一人。

三女は山を越えた隣村の小学校の先生と
新婚二年目ですが、この春から、こちらの
学校へ転任したので、まだ孫のないこの夫
婦も私の家に帰つていきます。

つまり、私の家には、三組の娘夫婦がい
るわけなのです。

孫を加えて九人の口から、おじいちゃん
と、目に何十回も呼びかけられる生活
というものは、これは決して悪いものでは
ありません。

長女とその婿が、よく出来た夫婦で、次



しまいます。
まあ、平和な家族アパート
と想つていたゞければ私の家
の様子はお分りと存じます。
さて態々、寢室の模様です
が――。

2

私が妙な癖をおぼえたのは
三女夫婦のせいですが、実は
部落の口さがない茶のみ仲間
に唆のかされた潜在意識も多
分にあつたようです。

「お前とこの婿はん夫婦は復
員してから一度も子が出来ん
が、一体夜はどないしよるん
ぞい？」

こう云われてみると成程、
孫二人は十と八ツで、婿が応
召前の子です。婿は終戦の年
の初冬に復員したのでもう六
年、長女は妊娠しない訳で

す。

女、三女の連れ合いも居辛いことはないよ
うだし、時機がくれば、それ／＼一軒家を
もつ希望がある訳だから、今のうちよと、
炊事も一切共同で、経費分担に専らな
のは私一人、和氣あい／＼なことは部落で
も評判の一家です。

朝の食事は土間つゞきの茶の間で大抵一
緒にやるが、夕食はそれ／＼各自の部屋で
します。というのも私が長女の婿と同膳で
晩酌を傾けると、夕食から朝までは、こ
れは夫婦同士でいたいという自然の現れで
しうね。

夕食後三人の孫だけが部屋を往つたり来
たりしますが、それも僅かの間で直ぐ寝て

むしろ夫婦間に関係があることは分つて
います。何か工作しているに違いありませ
ん。そう思うと今度は次女夫婦の方も氣に
なります。この方は終戦翌年の結婚で直ぐ
一女を挙げ、これも後が出来ません。いず
れ姉夫婦と同じことをやつているのでしよ
うが、それがどんな手段と方法であれ、男
の私が干渉する必要はありませんし、また
特別の興味をもつというのも、良いことで
はないでしう。

あゝそれなのにです。

この春から我が家族アパートに加わつた
三女夫婦のいとなみが俄かに私の「聴く」

「見る」神経を挑発し、娘夫婦ら不妊の因深夜の性態に絶大な関心を抱かせることになりました。

もと／＼と云つても十二年前、妻を亡くしてからですが―私は、男性ホルモン体の表徴に引導を渡してありました。即ち
「なんじ今日より放尿専用器具たるべし、喝！」と。

そしてこの春まで、よく専用器具たるの本分を守つてきたのは、戦時中の環境の緊張と、老來の心境、適宜な野良仕事などによるもので、我ながら健気な奴と賞でゝいました。にもかゝらず、三月下旬、三女夫婦の嬌声は、この健気な「表徴」に、はからずも「回春」の野望をもたせるに至つたのです。

私の家は、南向きに入畳の間が三つ並び北側に入畳と六畳があつて、この入畳は冬は爐を切る茶の間―西が入坪の土間で、土間を上がつた直ぐの入畳が長女夫婦、その次ぎの入畳に私と上の孫、奥の入畳が次女夫婦、三女夫婦は北側の六畳というのが、我が家の寝間の位置です。お分りでしょう。私の三方が娘夫婦の寝室という訳です。

それまで両側の入畳の、長女次女夫婦はつゝしみがよいというのか、或は私への遠慮からか、和合の始まりも事後処理の気配も、私に感じさせなかつたのですが、あれがアプレ派というものでしょうか。

3

両側の入畳は襖仕切り、三女夫婦の六畳とは半分壁、半分襖の仕切りです。そこから、クツ／＼含み笑いが聴えます。ふと眼をさました夜中でした……。

鳳間は三組の中で一番控え目な温和しい夫婦なのですが、それだけに夜は派手なのもかもしれないと、父親らしい微笑を洩らし、寝返りをうつた時です。

「痛い！ いや！ あ！」

含み笑いが突如、三女の恐怖のうめきに變つたらしいのに、私は思わず腰を浮かして、境の襖にいざり寄りしました。

丁度、目の高さの辺りに、孫が玩具でも投げてこしらえた小さな穴がありましたよ。（余談ですが老人ともなればあまり孫の悪戯を叱つてはいけないことを後で思い知りしましたな）

穴に目を当てた時、私は、危くその場へ躍り込もうとした位です。

三女夫婦の姿態は、私の想像を遙かに絶したものでありました。

掛け蒲団をハネのけた夜具に、こんなに大きかつたかと思ふほど膨らんだ三女の尻の、白い山が、先ず私の目を奪ひ、何と鏡餅にくらいつくように、ムコドノがその白い山の一つに齒を立てゝいるではありませんか。

「痛い！ いや！ あ！」

という言葉が、文字で表現すると反対の意味を持つてゐることも、瞬間、私に諒解できました。

三女が、いつの間に驚くべきマゾヒズムとなり、そのムコドノは小学校教官でありながら、何処の師範学校でサド侯の垂流を汲んだのであるかと―次の光景を私は、片唾を呑んで見守つたのです。

併し安心しました。淫虐的前戯はそのあたりがクライマックスであつたと見え、もはや三女の尻にどのような癖がついたかは私に見る機会も権利もないわけで、たゞ六

畳の間を吹き荒れる若夫婦の寝息が、チカ／＼と私の眼に桃色の火花を散らすばかりでした。

足音を忍んで自分の寢床へ横になろうとした時、意外、わが放尿用具が、かなりの緊張を来しているのに気がついた私は、愕然としました。

放尿時の高度を上廻ることまさに五度位「当惑の喜び」とは、あんな時にも符合する言葉ですね。

だが、その夜は、その程度の緊張だけで十二年振りの、ほのかな目ざめを認識したに過ぎませんが、みつめてゐる裡に、嬰えてゆくわが海綿体へ「望みなきに非ず」の声が、身内の

何処からか聴えてきました……。

4

あれこれと亡妻のことなどと思ひ出し、てゐる裡にその夜は寝てしまいましたが翌晩期待していたのに不覚にもうつら／＼としてしまい、はつとしてあわてゝ六畳と境の襖へ馳け寄つた時は、残念にも、三女の部

屋は、かなり前に済んだものか、行儀よく抱き合つて寝ていました。

さあこうなると煩惱が承知しません。私は左右の入畳へ気を配りました。

長女夫婦が六年間一度も妊娠せんのは、どないしよるぞいという、部落の茶飲み仲間の影にも胸に泛かんできました。

先ず長女夫婦の部屋を窺いました。あゝ男として嘗てない所業です。黄泉の亡妻が見たら、この浅間しさを何と云うでしょう。しかし、私の放尿専用器具は、六畳を覗いて落胆するどころか、はや昨夜と同じ位の高度を保っている始末です。畳をすり足で、四枚襖の中程に近寄り合



せ目の隙間を探がしましたが、すぐ恰好の覗き場所が見つかりました。

二枚目と三枚目の、敷居の溝ちがいの間から、長女夫婦の寝姿が斜めですが覗けたのです。

併し、こゝも手遅れ、いや時機を失したことは一ト目で明らかでした。いつも下の孫を真ッ中にして、例の川という字に寝ている筈が、今は、孫が長女の背中におり、彼女は嬌の胸深く抱かれています。

空しく私は、今度は次女の部屋の方へ、及び腰で近寄りました。

浮氣封じの奥の手

結婚生活五年、近頃坂井君は浮氣をはじめている。毎晩お帰りの遅いのはアツタリ前でしよ、と言うと奥さんの菅子さんにドヤサレるかも知れない。所が或る日例によつて……「ウーイ、いささかメイテイ致したぞ、(ガラ／＼)たゞ今帰つたよ」

「ア、あなた、お帰りなさいませ」いと優しき声で菅子さんのお出迎え、と思いきや、

「レレレッ？あああなたは、た田中絹代さん、こりや家を間違えたかな？」今結つたばかりの丸髪姿も艶めく田中絹代そつくりの女性ではないか？

「あなた、ホホ、何驚いていらつしやるの、私よ、菅子じゃないの、どう、お氣に召して？」

「ほんとだ、ウーンすばらしいぞ！」さてその夜の二人の仲のよかつたこと翌日――

「ただいま――」
「お帰りなさいませ、あなたお疲れになつたでしょう」

不思議なことに、私の海綿体の充血はますます度を増したようで、もはや、何十年も忘れていた独身青年の頃の復讐を、やつてみなければならぬ緊迫感さえ加わつてきたようです。

三人の娘の中、次女は五尺二寸もある肥満型で、工場事務員のムコドノの方が小さく見える位でした。

この二人の営みは、想像するだに老の頬を紅潮させるものがありましように。今夜まで気がつかなくつた迂調さは、何としても惜しいことでした。

「オオッ、今日は又どうだ、アツプの本暮奥千代！おい、好いぞ好いぞ」

翌々日――

「今帰つたよ――」

「あらあなた、お帰りなさい」

「ギョッ、京マチ子！カールがとつても似合うぞ、惚れなおしたよ！」

翌々々日――

「只今、帰つたよ――」

「あら、お帰り、どう？今日は」

「スス、スンバラシイゾッ、高島田の高峰三枝子――どうぞお手を、キッスを――」

かくて坂井君の浮氣はピタリと止つた。そこで、ある日坂井君の出勤した後菅子さんはベンを執つてMHK宛左の様な手紙を書いた。

×月×日婦人の時間の放送、夫の浮氣止妙策を早速実行致しました処、三日間でピタリと浮氣が止り、今では同様な甘い幸福な夫婦生活を致しておりまず。先は感謝御礼まで　かしこ

長女の部屋を覗いた時と同じように二枚目と三枚目の間に目を向けました。

何と………とき／＼と胸に早鐘が打ち始めました。こゝはまさに、桃源郷の豪華版でした。

三女の倍もあるかと思われる次女のでん部が見え、夏みかんの如き両乳房が、見えるのです。

――私の両眼は必死にこの光景を捉えていました……

5

十二年振りの放尿具に、私は限らない満足と自信を覚えました。

それからの私は、体よく尿をむさぼり三つの部屋の境目や、合の襖に見頃の穴工作を行い、三組の娘夫婦の、深夜の絵図を堪能するのが、夜の仕事となりました。

長女夫婦が横臥位を得意とし、妊娠をさけていることも、………

次女夫婦は、女上位の体勢を実行していること、「完全なる結婚」という書物で熱心な勉強の結果、実験的に、三女夫婦がマゾ、サディを時折り行うことなど、等々……私が十二年前までの亡妻との思い出にはなかつた数々の、新知識を得たのですが………

――さて欲すれば、覗きの視野の対象は、三部屋のいずれか一つは毎夜の如く健在なのですが、わが生涯の最後の回春を自認して既に約半歳。

最初に中上げたように、漸く私は、このような行為が、決して正常なものでないという反省に、苦し／＼つてきたのです。農家の殆んどがそうおしようと思ひます

が、人の居る部屋の電氣を消さない習慣も思い切つて改めることを、娘たちに相談しようかと考えたこともありましたが………暗闇に氣配を探ぐる意馬心猿の浅ましい我が姿を想像すると、一層みじめな氣持になるので、それも出来兼ねております。

結局就寝時の消燈は、私が適当な相手を探求め得た時に、三夫婦に堂々と宣言するほかはあるまいと存じます。

だが、性欲年令の若返つた私を、まだ誰れも氣付いてはくれません。

(醜匠淫而亡……)

の中国の語の運命を

このまゝ待つとしたら、私の健康な軀が、そして衰えを知らぬ視力が、余りに可哀そうだと思ふのですが………物分りのいゝ長女夫婦にも「相手が欲しい」とは、六十二才の成年々令がどうしても云わせません。

……今年もいよ／＼秋から冬の夜長になります。

天高肥馬の候……わが食欲も孫たちと同断の快調です。困つた軀です。

願くば、この変態老生に、快刀乱麻の名策を与えて下さい。

×
以上のような手記を受取つた大阪性生活相談所長佐々吐憂博士は、にんまりと笑みを浮かべ、スラ／＼と便箋へ次のように書いていた。

(空間射撃工作中、襖と共に長女夫婦の枕許へ転げ出づべし)

――番いの塩からとんぼが、ビルの窓外を舞つている長閑かな秋の午後であつた。

(おわり)

春

面

師

利

八

男女の私戯も
描く男の妖しき
恋物語

處女と春畫

上村人志



のうちにやあ俺のような
のが一人位いてもいいぢ
やないか」

春畫師利八の部屋を訪
れる者は彼の持論を傾聴
させられる。合鍵を打ち
ながら聴いてやると彼は
秘蔵の蒐集品を見せてく
れる。これは焼酎でも一
杯提供して御氣様のいい
時でないかと滅多に見せる
ものではない。三十五才

平凡な顔ながら、どこか
に一徹の面魂と憂愁を秘
めて陰影深い面影があつ
た。新宿花園町裏の露路
の一割、平家三間の小家
が彼の住居である。彼の
仕事部屋は奥の六疊の間
床の間には美術に関する
書籍が積み重ねられ、利
八が単なる市井の繪師で
ないことを物語っている
が、最も目につくものは
荘重な本箱である。等身
大の高さ。内部の棚の上

段が日本もの、中段が中国もの、下段が欧
州もの、抽斗には南洋諸国ものの春畫が丁
寧に藏されている。勿論全部嚴重に鍵がか
けられている。

色彩の濃艶なものは中国ものに指を屈す
るであらう。紅い格子窓の内側、やはり赤
く塗られた鏡張りの寝台に相愛男女の恍惚
姿態がもも色の帳をすかして匂うように描
かれたものが圧巻である。欧州ものは概し
てリアズムが勝つて、それこそあの部分の

毛の一本一本まで精密に描かれ、男のもの
の緊張度も迫真の写実だつた。南洋ものは
単純でむしろ稚氣さを感じる。それに較べ
ると日本ものは独得の趣がある。奇抜な体
位、極端に誇張されたあの部分。利八自身
も日本ものを最も珍重した。利八は元來が
洋画家志望だつた。某私立美術学校に通つ
ていた時分、下宿の娘直美に恋していた。
「直美さんが一度僕のモデルになつてくれ
るといいんだが」

純情な画学生の彼は何回か頼むのだが、
「でも……」と渋る直美だつた。

直美は当時未だ女学校を出たこの初々し
い娘で、その堅い乳房のふくらみはブラウ
スを突きあげるように豊かで新鮮な処女の
清潔と美しさに溢れているが、全身は優美
な堅肥りの均整とれた肉体を持つていた。
画学生の利八がモデルにしたいと思うのも
無理はない。

「君のその素晴らしい若さの持つ独得の美し
さを僕は芸術作品にしたいんだ」

「恥しいわ。裸になるんでしょ？」

「勿論。裸体は女の最も美しい宝物なんだ
ギリシヤの神々を見たまえ。あの美と均整
の典型を。或いは印度の仏像、日本の飛鳥
仏、あれだつて薄物をまとつてはいるが、
矢張り肉体の裸線の典雅優麗を見逃すわけ
にはゆかない——」

「でも……あたし、恥しい」

「いつになつたら描かせて貰えるの？」

「待つて、もう少し待つて。あたしがあなた
の為すべてを捧げる決心がついた時」

ぱつと顔紅にが散つた。豊満な乳房を両
手で抱いて、俯向いた。そのポーズこそ利
八が裸にして描いてみたいところのものだ
題はもう決まつている。

「何処の国にも、いつの時代にも、枕絵の
存在しなかつたことはないんだ。絶対の必
要品だということがわかる。俺は生命をか
けて描く。今迄の誰かが描いたことのない
絶品を。それは愛の極致、快楽の絶頂にあ
る人間像の赤裸々な肢体なんだ」

利八は濃い眉の下に瞳を輝かしながら熱
狂的な語調で、相手にからだを乗出すよう
に言うのだ。
「例えば、だ。ボンベイの壁面を見るがい

い。男女相愛の図が家々の壁に描き連らね
られてある。大胆、率直。人間が今頃にな
つた性の解放なんて叫ぶのが阿呆らしい位
だ。日本だつて、世界一の春畫国だ。歌麿
だろが豊國も春信も、みんな描いている
しかも堂々たる署名入りだ。日本中、大抵
の家で春畫を持たない家はあるまい。公然
たる秘密さ。俺の仕事あ、春畫を立派な絵
画に引きあげることなんだ。俺あこの仕事
に生甲斐を見出している。日本人八千万人

「処女」である。

「ありがとう、直美さん、その日まで辛抱強く待つよ」

利八は彼女の愛を得つつあると思うと楽しかった。

「それなら、コスチュームでモデルになってくれる？」

「ええ」

「着衣の処女」と題する直美をモデルにした作品は進級成績品の最高点を得る級友の注目を浴びた。中の一人で俊吉と呼ばれる才子肌の男が或る日、それは夏休が始まった頃利八の下宿にやつて来た。

「おい、利八。君のモデルに会わせろよ。」

素晴らしいシャンだというではないか」

某大会社の重役を父に持つ好男子で女に惚れつづいので有名な友人だったから利八は警戒した。

「直美さんは留守だろう。夕方の買物に出ているかも知れない」

「残念だな。彼女は君のレコかい？」

俊吉は利八の目の前に小指をつき出してみせた。利八は不快を露骨に見せて言下に否定した。

「そんなことがあるものか。僕がたとえ惚れていても彼女はどうかかわらない」

利八は直美が女学生の頃から恋していたのだが、俊吉の前にそれを言わなかつた。それが俊吉の乗ずるところとなつた訳である。

しばらく二人は二階の利八の部屋で広い庭の木立に目をやりながら団扇を使つていた。ところへ直美が盥を提げて現われた。いちぢくの葉影に置くとバケツで熱湯を運んだ。行水をしようとしているのは明かだつた。

「あ、あれか」

俊吉は目ざとく見つけて叫んだ。

「君、俺最近モリゼアニの画集を買つたぜ」利八は彼女から俊吉の目をそらせせようとして話題を転じようとしたが、俊吉は手摺にへばりついた。

「おい、止めろよ」

処女の神聖を犯すことだと利八は俊吉を制した。

「ほか、見ろよ。天女の行水だ。これを見逃しては絵描き冥利につきる」

利八は直美の裸身を俊吉に独占させるわけに行なくなつた。二人は畳に膝をつき、手摺に顔をおし当てて見下した。そんなことを直美は全く知らない大胆さで、めくるようにワンピースを脱いだ。シユミーズを脱いだ。青い葉影に純白の裸身が妖術のように浮んだ。むくるようにズロースもつた。腰から太腿へむちむちするよう脂肪がつて、青く艶めいた。腰を曲げると臀が半円を描いて快感をそそつた。直美は女学生気分が未だ抜け切らないらしく、股をひらき、両手をあげたり下げたりしながら体操の真似を始めた。二人は思わず唸つた。妖しい美しさを持つ純白の肉体の腋の下と三角地帯の黒々とした柔毛が二人の目を灼いた。乳房が揺れる。腿の付け根が青いまでに白く張り切る。体操終つた彼女は鹽の湯につかり、玉のように濡れる輝く胸の隆起を抱きかかえた。利八はもう見ていられなくなつた。自分の愛する女の神聖な裸身を友人の目に曝して置きたくなかつた。

「おい」

利八は俊吉を畳の上に引き倒した。

「凄え。もつと見せろ」

「駄目だ、止めろ」

二人は暫くの闘争つたのだつた。

その日はそれで済んだ。やがて利八は広島の伯父の家への旅に立つた。瀬戸内海の海景を心ゆくまで写生する目的だつた。旅先から引續いて便りを直美に出し、直美からも必ず返事があつたが、それは次第に少くなり、全く絶えた。東京では利八の思ひも及ばぬ事件が彼女の身の上起きていたのである。

俊吉は目につけた女は必ずものにすると豪語する男である。美貌な処女に利八の留守を好機と近接したのは当然だつた。絵の

展覧会に誘う。映画や音楽会に誘う。両親に取り入つて信用を博す。才子肌の彼にはいとも容易な術策だつた。

「美しい、あなたは全くミロのグイーナスのように美しい。日本人離れした肉体。あなたは自分の美しさを知つていないのですよ。現代の美神だ。ああ描きたいなあ。僕に傑作を描かしてくれないかなあ。きつと後世に残る傑作ができる。あなたの若さは永遠に残されるのが……」

巧みな讚美は若い女の心をとろかさずにはいない。俊吉は自分の言葉の効果を知り彼の財力彼は富家の一人息子だ美男、弁舌に充分自信を持つ。遂に直美は海水浴のモデルになることを許した。

「水着になれば次は裸体だ」と俊吉はひそかに快心の笑を洩らし、彼女を自分のアトリエに誘つた。

画の完成間際の或る午後の休息の時だつた。俊吉は居間に去り、彼女は一人モデル台の上に炒りつくような囁の声をききながら、ものうい暑さの中に身を置いていた。ふと傍の机の上にある絵草紙を手にとつた開いた瞬間彼女の胸はかつと燃えた。あわてて周囲を見廻し、急いで本を伏せた。どきどきする胸を抑え、しばらく昂奮を鎮めようとしたが、好奇心の誘惑に負けて、そつと再び見入つた。明らかな男女交合の大胆な姿態が極彩色で描かれてある。彼女はいつか夢中になつて魅せられた。後にぎらぎら光る目をして俊吉が迫っているのを知らずに。

急に俊吉の両腕が彼女の腰を後から抱き緊めた。

「あッ」直美は羞恥で顔を染め、水着の胸を守つた。だが既に抵抗する意志は失つて

古今東西を問わず春画のない國はなかつた。洵爛たる極彩色の繪筆に托して、脂ぎつた肉体ののたうつ男女性愛の極致、悦樂の瞬間を捕えようとした、一春画師利八の悲願は、その春画の故に、かけがえない初戀の女を友の手に奪れたのであつた。



いた。俊吉は満足と喜悅のうちに直美の純潔な肉体に男性の印を強く捺してしまつたのである。

覗き商賣

「西洋のリアリズムと日本の誇張を融合させて新機軸の春画は描けないだろうか、何にしても日本のその男女の体格はあまり立派でない。刺青師が快心の作をものするためには美しい肉体を求めるといふが……」

純真な画学生の利八が現在の春画師になるには十年近い歳月とその間の種々な人生の起伏を経験していた。恋人を奪われて自暴自棄、酒に狂い、学校をやめ、放蕩に身を崩しやがて兵隊にとられて南洋から大陸へと転戦し、終戦後引揚げて来てみれば肉

身は故郷広島で全滅している状態に投げやりなその日暮しの生活が戦災都市東京の廢墟に始まつたというわけである、風呂屋の絵を描く、キャバレーの壁面を描く、ストリップ劇場の煽情的な看板に荒いタッチの筆をとばす。夜の街に似顔絵を描く。そして、遂に枕絵に絵筆を染めるに到つたのである。

「文学にも肉体文学が起つたんだ。絵画にも文字通りの肉体派があつてもよからう」彼はこう自己弁護して筆を運ぶ。需要は多く、生活も飢えないですんだ。

しかし彼は時とすると苦しむことがある。直美はどうして居るであらうか。彼女の家の後吉の家の跡にも今は他人の家が新築されてた。彼女を思出す時彼の画筆は鈍つたが、敢てその感傷を打消すように描いた

自虐の快感をそれにより覚えたこともある。彼ははじめ専ら既にある春画の模写につとめていたが、次第にあきたらなくなつた。昔の絵は確かに巧妙だが、生命の光が画面に稀薄な点を彼は不満にした。要するに官能を刺戟するだけのものに過ぎない。彼は春画に生命を与えたかつた。どんな君子人も石部金吉も本能の火を燃やさずにはいられない程のものを描きたいのだ。人間本来の性の歡喜にふるえる人間至高の美の画像でなければならぬ。それには真のモデルが必要になる。利八は一策を案じた。

「貸間あり」

彼は家の玄関と次の間の四畳半を貸すことにした。対称を夜の女と限定した。直ぐ申込みがあつた。崩れかかつた牡丹のような春婦だつた。

「間代はおいくら？」

「いらぬ」

「あら！それでは？……」

女の不審顔に利八は平然と、
「あんたのからだが好きなんでは言わない。充分利用して構わない。その代り……あんたが使つてゐる時、いつも俺あ横一重へだてた隣の部屋にいる。それでも構わないか？」

「ふ、ふん、面白いわ。よがり声をききながら堪能しようというわけね」

「それだけではない」

「まあ！あんた何をしようというの？」

「見てえんだ」

「……………」

女は濃く厚く塗つた唇を半開きにして利八を見つめ、やがて高く笑つた。

「変態？あんたは」
「なんでもいい。勿論お二人にはわからないようにやる。見せるのを承知なら間代はいらない」

真剣な目の光に圧倒されて、女は承知することになる。

その夜から毎夜、否、毎朝からでも女は男をくわえこんでは肉体の取引を行う。利八は襖の外側に机を置き、その上に立つて襖の上部にあけた穴から見下す。見ながら昂奮してはいけぬ。冷静に筋肉の緊張、弛緩を観察し重なり、入り組む様々な肢体をスケッチにとつた。それは様々な技巧に満ちていた。彼はそのスケッチを下絵として種々の作品をものした、だが次第に疑問を自らに持ち始めた。

「商売女の歡喜の表情も肉体の痙攣も、いつてみれば客をよろこばせる為の真似事にすぎない。偽りの肢体をうつして、それで立派な絵ができるはずはない」

第一、女は既に肉体の酷使によつて、肌の輝きを失い、乳房は子を生んだ証に垂れてたるんでいる。永久にオルガスムスを忘れたような娼婦の肉体は彼の「芸術作品」のモデルには程遠い。それに男の方もまた類腰の影を宿した中年者だつたり、酒に酔ひ痴れた若者だつたりする。慾望の猛りはあつても生命のよろこびと輝きをみなぎらした性愛の美しさは殆ど見られない。性愛の極致とはそんなものだろうか——否、もつと内部に輝くいのちの燃焼が男女二人の表情に、全身に溢れるはずだつた。利八は失望する。すると妙に身内に慾情を感じた。女は客を送り出すと化粧を直すために帰つて来た。女は既に利八の「仕事」を知つていた。襖越しに声をかけた。

「あんた、いい絵ができた？」

「できないね、一向に」

襦を開いて女は濃艶な顔を見せた。

「だめねえ。あたいは、ね、お客さんを嬉しがらせるより、あんたにいい絵を描いて貰おうとして一生懸命なんだよ」

「できないものはできない」

「一寸見せてよ」

緋の長襦袢の前から白い太腿も露わに女がはい寄つて来た。

「駄目だよ」

「いいじゃないの」

「あんたが見て何になる」

「あたいだつて真底から慾情したいんだよ」

女の腫が異様に光り、べつたり横坐りしていた片膝を立てた。少し腿を開いてみせた。下に何もはいていない。

「どう、こういう恰好は」

「ほかッ」

烈しく叫んだ利八は次の瞬間女に真正面から迫っていた。待ちかまえて女は両腕を彼の首にまきつけた。女は今真剣に利八の氣持に調子を合わせようとしている。

商売とはちがう烈しい女ごころの変化である。

間もなく彼を離れた、女は恥しそうに取乱した前を整えながら、呆然と見送る利八を後にして部屋を去つた。やがて外に出て行つたのは、尙も客をキャッチに行く為なのか。利八は女の旺盛な商魂に驚くのだ。

やがて隣室に女と男の声が出た。利八はきき耳をたてた。

「銀ッて名かい、君は」

「ええ」

甘つたるい女の声だ。

「いい名だな」

酔っている男の声に何処かきき覚えがあった。利八は机の上に立つ。覗き穴に目を当てた。女が布団を敷くと男はその上に仰向いて倒れた。

「俊吉だッ」

利八の目は血走り、胸に火の塊ができた初恋の女を尋い、今日迄消息不明だつた仇敵の男が胸まで酒焼けさせて好色な目を春婦に向けているではないか。彼は憎悪に燃える目で睨み、スケッチブックを握つた。顔には既にあぶら汗だ。

俊吉は簡単に長くのびてしずつた。女がそれを起こす。

「あんた、起きないの？」

「いいじゃないか」

「終電車がなくなるわ」

「泊めてくれ」

「駄目」

じやけんに銀は追い出そうとする。夜はそれ程更けていない。取引がすんでしまえば一刻も早く客を追い出して、次の客をとろうとするのが娼婦の常套手段である。しぶしぶ俊吉は出てゆく。利八は快哉を叫んだ。さきア見ろ、俺に真から慾情を感じた女に抱かれてあのさまだ。

素早く身なりを整え、利八は夜の街へ俊吉を追う。和服に草履。月光に乱れた頭髮が青く光つた。

激情の夜

利八は雨戸の僅かの隙き間に目をおしつけて夫婦の寝室を覗いた。彼は復讐の快感に全身おのゝかせながら時を待つてゐる。

俊吉夫婦の房事を描いて、世間に売りひろげてやるのだ。障子は開かれていたので部屋は隠されるところなく見られた。簾簾も新しい、畳も青い。綺麗な花模様の絹の夜具、白いシート、仄暗い緑色の電燈。そこできり展ろげられる情痴は殺風景な娼婦の部屋でのは違ふ趣を呈するに違ひない

やがて俊吉がよろめき現われ、布団の上にぶつ倒れて、叫んだ。
「おーい、おいッ、何を愚図々々しとるんだ、早く水を持つて来ないかッ」
妻らしい和服の女が現われた時利八は目を疑つた。

「直美さんだッ」

正しく直美が何処か裏れた顔で水を持つて現われた。俊吉は嗷鳴り続けた。

「ほかッ。もつと早く持つてくるもんだ。お前はどうものろでいかん。夫が隣つて帰るのが判つてたり、枕許に水ぐらい置いと



男は俊吉では物足りないが漁色家の彼は多分相当な女を妻にしていることだろう。
利八は俊吉の後を追つて小田急沿線の彼の家をつきとめたのである。

くもんだ
水を飲み終つた夫の胸へ手をやつてネ

クタイを解こうとする直美を俊吉に力まかせにつき倒した。

「うるさいッ。お前はあつちへ行つてろッ
澄子はいないか、澄子を呼べ」

「あなた」

直美は顔を歪めた。

「うるさいな、奥さんに用はない。あつち
に行つて早く寝ろ」

「あなたは何処まであたしを苦しめるお積
りなの……」

「めそぐするな。うるさい。俺が冷い理
由はお前の胸にきいてみろ」

「次から次へ女をこしらえて、家に引き入
れて……あたしはもう我慢できません」

「ふん、我慢できなけりやあ、出て行くが
いい。行くところは無いだろう。家は焼け
た。両親は死んでいる。勝手にするがいい」

「畜生ッ」利八は歯をかみ鳴らした。

廊下を走る足音がして、豪華なナイトガ
ウンの裾をひいた、若い華麗な女が寝化粧
も鮮かに現われて俊吉にしだれかゝつた。

「あんたア、また酔つて来たの、ばかねえ
あたしという女がありながら」

「あゝ、澄子か。もつと早く来るもんだ。
ネクタイ解いてくれ、シャツを脱がしてく
れ。お前、いゝ匂がするな」

女は俊吉の胸をはだけ、そこへキスした

耐え兼ねた直美は逃げるように去つた。

利八の胸は益々波立つた。俊吉のやりそう
なことだ。妻妾同居。澄子と呼ばれる女は

ガウンを脱いだ。下には何も着ていない。
豊満な餅肌。盛りあがつた乳房の先は上を

向いてどのストリップバーにも負けない見事
さには利八も目を丸くした。澄子は乳房を

俊吉にふくませた。

「あゝ、かわいい坊や」

忽ち二人の腕がからみ合い、共に宙でも

つれた。利八は憎悪も忘れて見つめた。彼

の作品のモデルは見事な体格と充実した肉

体を持ち、燃える慾情に輝き、恍惚となる

女でなければならなかつた。初々しい処女

でも、性につかれた人妻でもないけない。よ

うやく性のよろこびを覚え始めた新鮮な女

体、それが必要だつた。今、目の前にその

溢れるよろこびに全身を紅潮させた女が口

唇から呻きをあげて利八の目前にある、彼

は網膜に焼きつけようとして見続けた。

「凄く作品ができるぞ」

目は充血し、戸の隙間におしつけた額に

は薄く血さえにじんだ。

その時後に近寄つて来た人影がある。直

美だつた。

「まあ」

庭にうずくまる怪しい人影を発見した彼

女は驚きと恐怖の雨をあげた。利八は愕然

として振向き、幽鬼のように青い顔で女を

睨み据えた。

「誰だッ」

「あなたこそ」

利八は相手をその場に打ち倒す勢で女に

近寄つた。

「行け、あつちへ行けッ」

その時、直美は電流を通ぜられたように

全身を震盪させて、叫んだ。

「あ、あなたはッ」

利八の昂奮は水をあびせられた。

「直美、直美さんかッ」

「利八さん」

倒れるように直美は利八の胸の中に飛び

込んだ。

「あなたは、あなたは、利八さん」

「直美さん、どうして今頃こゝへ？」

「会いたかつたわ、会いたかつたわ」

直美はうわ言のように言い続けた。

「あなたは幸福な人妻になつていと思つ

ていたら、矢張り俊吉と一緒に……苦労し

たらうなあ」

「すみません。あたしの軽率のため……。

苦労は当然の報い。あたしはあなたを裏切

つてしまつた……」

「言うな、昔のことだ」



Mimomola

「いゝえ、言わして。あなたに許して下さい」とは言いません。でも、聴いて下さい」

「大体は知つてゐる」

「俊吉はあたしを騙したのです。あたしに美しい絵を見せて」

利八は胸まで青靄めてゆく。女はさすがにうらやまする。

「娘を産んでしまつたので、結婚しました。

ちつとも好いてゐなかつたのに。生れた子は半年で死ぬ。すると、胎んだ女のからだは駄目だ、あれは利八の子だろう、とあたしに見向きもしない。その上、女を家に引き入れて、あたしの目の前で」

利八は直美の手を握りしめた。

「あたしは、利八さんに会える日をたのしみにするだけで生きて来ました。お詫びし

てから、死ぬなり、夜の女になるなり決心しようとしてました……ああ、利八さん、会えて嬉しい。あたしは今夜こそ俊吉の家を飛び出して来たのです」

「悪いのは俺だつた。可哀想に……」

「ね、お別れのしるしに、一度強く抱いて頂戴。一度だけ……抱きしめて……キスして……」

利八は胸打たれて不幸な女の半生を想つてみた。彼女が処女を奪われたのは、春画を娯楽として用いた俊吉の奸計だつたのである。今日のこの直美の不幸は一冊の春画草紙にあつた。何ということだ。彼女は今も俺を愛している。その俺は春画師に過ぎない。春画を芸術にまで高める……そんなことが出来るのだろうか。俺は白屋夢を見

ていたのではないのか。生活のためとはい

え、俺は間違つてゐたのかもしれない。芸術つて奴は、人を高め清める感動を与えるものだ。俺の意図する絵はどうだ。……一切は俺自身を胡魔化するための言訳ではなかつたか……

直美の手が彼の背へ廻らされた。放心したように唇が半ば開かれて喘ぎ、目薄く閉

されてゐる。月光がせんだいな瞳毛の影を頬に置いた。

「利八さん……あなた、今何をなさつてゐるの？……十年ぶりにお目に会つたのは……」

「その位になる」

「あの頃、あなたはむつくりして画ばかり描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

裸を描きたがつてゐたのを……」

「ああ」

利八の懐からスケッチブックが地下にすべり落ちた。彼は意を決して荒々しく踏み

にじつた。そして直美を強く抱きしめた。

「直美、もう俺から離れるな」

新しい更生の熱意が溢れ、自然に腕に力は満ちた。

「嬉しい、利八さん」

長い接吻だつた。澄んだ月光が一ツになつた二人の影を地上に置いてゐた。

(完)

民間放送

伊勢みどり

義毛宣傳劇

社長「中村君、君はちよいと小から、其の間に傑作をものにして

脱なんか書いとるそりやが、少くれ給え」

我が喜楽社の新発売の義毛だがね

あれを宣伝する為に民間放送のコン

ト劇を、一つ君に書いて貰いた

いんだよ」

中村「新発売の義毛と言うと、例

のアソコ用ですね」

社長「そりなんだ」

中村「ワーツ、弱つたな」

社長「二日間の慰勞休暇をあげる

第一景

娘「お母さん、わたし、やつぱり

結婚止そうかしら」

母「今になつてお前何を言うんだ

よ、明後日は結婚式だと言うのに

……」

娘「でも、わたし心配だわ」

「あの頃、あなたはむつくりして画ばかり描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

描いてたわ。覚えてる、あなたはあたしの

第二景

母「初夜のことかい？ それなら

昨夜ちやんと教えてあげたじやない

いか、旦那様の言う通りにしてい

たらいいんだよ」

娘「それはわかつてゐるわ、わた

しの言うのは……思ひきつて言う

わ、……あるべき処に無いんです

もの」

母「え？ あゝそりかい、それな

ら心配しなくつてもいいよ、喜楽

社から本物をつくりの義毛が発売

されてゐるから、それはもう一た

ん貼付けたら絶対お風呂へ入つて

もとれず、誰が見たつて義毛とは

わからない絶対保証付のものだか

らね」

「どうしたの？」

「けけ、毛虫、大きな、大きな」

「どこに？」

「そこ、其処、湯に浮いたり、沈

んだり……」

「どれ／＼——あッ、こりやいけ

ない、しまつた」

「どうしたの？ 毛虫じやないの」

「ウ、うん、これは、その、ぎ、

義毛なんだよ、じ、じつは……」

「あら、ホホ、ホホ、わかたわ、

いゝのよ、いゝのよ、いゝのよ、

ホ、ホ、私もおんなだよ」

「え？ 君もおんな？」

「ホホ、えゝそりよ、でも私の

は喜楽社のものなの、湯に入つた

つてホラ、こんなにちつともはげ

ないわ」

雑女部落の住人たち

花木実



既婚の女は娘たちの純潔を守るために、部落の男には誰彼なしに、身体を投げ出した。この部落では男女は平気で大ぴらに雑姦が行われていた。この原始的な性の乱脈境、雑姦部落にも、清浄な童貞男と處女娘があつた。この可憐な處女も手荒くむしり取られる時がきた。

かけの書物を閉じ

「何ごとだね小母さん」

と呼んだ。タミは振返えつて、

「カチ平が辭つてね、この娘になにするのさ。あの親父猛烈だからね私相手してやつて置くよ。そうしたらまた当分温和しく働くから……」

そこへドタドタと足もとの定まらない歩き方で近づいた者がある。

「雪か？そこにいるのは」

声はカチ平であつた。

「雪か、もないものだね。家の雪にへんなことをしないで頂戴。娘に手をかけるなんて、この町の者の、カチ平さんらしくないよ」

「うふん、アハハハ……」

ああカチ平が照れている。哲は安メザマシ時計のような丸まつちいカチ平の姿を思ひだして苦笑した。

そのうち表のようすが變つて来た。二人が近よつてこそこそと耳うちをけじめている。

タミが「ここでもいいの？」含んだ声で言

つたが、それだけが風の具合で哲の耳に入つた。二人の影は崩折れて、暮れてきている暗に溶けこんだが、一種異様な息づかいで、哲には何がはじまっているか想像はつ

いた。

この部落ではそんなことは平氣なのだ。

暫くして一人は立去り、タミがおくれ毛を掻きあげながら土間へ入つてきた。ずつと雪は哲の傍に坐つて、紙を切つては鶴を折つていた。十六才の雪に聞えていた表の物音は大きな刺戟であらうのに、雪の表情は風のない水面のように静かである。しらつぶくれていると哲は、雪という子が憎らしくなつていた。

「多謝、森島さん。ああアレで私もさつぱりした」

どたりと重い尻で腰掛けてタミはポリポリと首筋を掻いた。

陽に灼けたワンピースは、もとの色がわからぬ位に変色し、ブロンと汗と埃のまじつた女の体臭が匂つてきた。それは野良犬の臭さによく似ていた。籠をかついで巷のゴミ箱をあさりまわるタミの生活は野良犬に通じている。似てくるのも無理がなかつた。

「森島さんは、今日仕事は？」

「硝子の積込みだけだつたから帰つて来た

——仕方ないから本職の方を今日は一日家に居てしまいましたよ。本職の方じや一銭のゼニにもならないけれど」

森島哲は鼻の頭に皺をため、淋しく笑つ

た。彼は詩を書いている間に窮迫のどん底

に落ち、社会の底のこの部落へ流れこんだのだ。今はパンを得るために沖仲仕だ。あの俗称を風太郎といわれる労働者の群に身を投じ、あふれると、これだけは手離し得ない芸術の古里へ帰つてゆくのだ。

タミは三疊の内部に雑然と所せまく積まれている書物を、つまらなそうに見ながら「森島さんはあれが奥さんなんだつてね。本なんかじやちつとも面白いことなんかないのにさ。抱いても寝られやしない」と言つた。

「抱いて寝るよ小母さん。読みながら眠くなると翌朝起きたらしつかり抱いてヨダレで汚していたりする」

「あらいやだ。それじやまるで女房で、女の……」

と淫猥なことを言いかけたが、雪の方を一瞥し、言葉を呑んだ。

雪はそ知らぬ顔で、哲が使いおきの鉛筆を一本一本小刀で削つてやつていた。

「森島さん、じやア童貞ね」

「ああそうだよ」

彼は二十五才で、本当に、まだ童貞であつた。

タミはのけぞつて「ウワァーいい」と叫んだ。森島哲は赤面し、何がいいんだ、と

思つた。タミ自身にもそれはわからなく、ただそういう清純な男もこの部落にいたというのが素晴らしいと思つたのであつた。

三年前までここは東海道線沿線の国有林の傍地で、いたづらに雑草の繁茂している一帯だつたのが、いつの間にか浮浪者が寄り集つて小屋を掛けはじめたのが草分けで現在は人口二百人程の、横に長い、地図にない町を形勢してしまつた。沖仲仕、屑ひらい、糞尿汲取の日傭人夫、猫取り、犬殺し、安パンペン、泥棒、世捨人等で、まともな夫婦生活をしている者は少く、ここでは雑姦が平気で行われていた。それは主にタミのように娘の純潔を守るため既婚の女が男の慾望を満足させる犠となつていたのであるが、それでいて女の方にも悔いはないらしいのが變つていた。

「あなたがきれいなからだの人だつたら雪をお嫁にやつてもいいなあ」

「こんな風太郎じゃ駄目だよ。雪ちゃんはお母さんの希望じゃないか。処女で置いて立派な所へ嫁にだし、雪ちゃんの代からまともに浮世の表街道を歩かせたいという口ぐせはどうしたんだ」

「そうね。森島さんむづかしそうな本なんか読んでるものだから何だか立派な人みたいに錯覚しちゃつたのよ。矢張りしがない私たちの仲間だつたつけねえ」

タミのいまさら気づいたらしい正直な述懐も、哲は氣にならず聞けた。タミは大陸の引揚者である。

その時突然深くなつた暗のどこやらか、「ヒー」というか弱い悲鳴が起つた。声をききつけた人達が、哲の小屋の前をバタバタと走つてゆく。哲も草履を突つ掛け表へ出た。上り東京行が哲の鼻先をかすめ地ひ

びきたてて走りすぎた。

ののしりある人達の聲がだんだん近づき人垣の中にある泣き咽んでいる娘と、うなだれている学生服の青年がはつきりと見えできた。懐中電燈を振つてゐるのはつい先刻、性に餓えていたカチ平である。ゆかたの袖を胸に抱いて泣いてゐるのは十八歳の艶子で、人々は口々に艶子がシャバの学生に強姦されたとののしりあつてゐるのだつた。

艶子の父は猫とりだ。町中へでて、またたびを嗅がして猫を釣り、その場で皮を剥ぐのもあり、吊つて帰つて家で剥ぐのもある。むろん剥いだ皮は三味線屋へ卸した。肉は喰つた。その太吉が息せき切つて駈けてくると、いきなり学生の頬を平手でパンパンと殴りつけた。

「太い奴だ。大事な娘に手を掛けやがつてこの町じや娘のからだを犯した者は息の根がとまるまで叩きあげるオキテなんだ。その位い娘のからだを大切にしているところで、だいそれた邪心を起しやがつてこの糞たれ奴！」

学生は驚たれる度びに「ウツウツ」と叫いて顔を左右に振つていたが、泣き声で「僕、なにもしません」と抗議した。

「道に迷つて、こちらの灯をめあてに歩いてきたら、突然この人の姿がみえ、だから声を掛けたら大声で助けを呼ぶんだもの、僕こそ愕いた」

学生はやつと一息つけたので、いつきに喋りたてた。太吉が半信半疑の面持で、艶子へ、

「おい本当にそうか。嘘だろ？」

ときいた。

艶子はしやくりあげながら、

「この奴隷からぬツと出てくるから私びつくりして、てつきり何かされると思つたわ。びつくりさせたんだからそれ位いの罰はあつても当り前だわ」

「へーえ、それじや辱づかしめは受けてないのかい」

カチ平が懐中電燈で艶子のゆかたの前を照らした。乱れていなかつた。

「そうよ。ただびつくりしただけだわ」

「まあまあそれは良かつた」

一同はほつとし、自分らの淫らな想像に興奮した肉体を持てあましていた。夫婦でもない男女が、その場で意気投合して、もつれあつて姿を消すのも居た。

事情を聞くと学生は、東京へ出るつもりで家出をしてきたが、金は東京へ行つてから必要と思ひ、道中は出来るだけ節約する予定で、農家で「貰い」をしては空腹を満し、徒歩でここ迄来たときわめてけちんぼなことを告白した。その夜は哲の所へ泊めてやることにして、哲は三好朋というこの中学生を自分の小屋へ案内した。彼は善悪症で、おまけにわきが臭かつた。

旅疲れの三好朋を寝かせてポツポツと語る彼の身の上話をきいているうちに三好朋は漸をかいいて眠りこんだ。



哲は、やりかけの芸術に熱中しているとあけ放しの表から「今晚は」若い女が声をかけた。「やあ潤さんか」「はい私」潤子は酒臭い息を吐きながら、手提げをぶるぶるん振つて入つてきた。立派な舶来品の手提げである。潤子の垢じみた身なりにふさわしくなく、その手提げは王族の冠のうりに光つていた。スリ、置引き、持逃げ、そんなだいそれたことが潤子の職業であつた。哲が不機嫌な目で、キラリキラリと目眩し提げの躍動を注視していると、

「男の上り目裏いわ。そうやつて怒つたら

つしやい。よけいハンサム！」

とけたけた笑いこけた。よろよろと来て坐っている哲の膝へどしんと尻をぶつけ

「ねえ痒いのよ」

うつとりとするやさしい声で言つた。

「痒い？どこ」

ま正直に取つて反問する男を、ながし目に潤子は見た。

「いえもういいの。放つて置いて頂戴。ちよつと寝かせて」

哲によりかかつたまま長い睫毛を閉じかけたが、寝返えりをうつた三好明にぎくりとし、

「まあ嫌だ。なあにこれ」

荷物みたいな言い方をした。

「東京へ出て一旗あげるつもりで学生さ。

今晚泊つて呉れたんだ」

毎夜こうして峯潤子の男欲しい訪問に悩

まされる森島哲にとつて、三好明の泊つた

ことは感謝にたえなかつた。潤子の美貌に

は誘われるものがあつたが、精神と肉体の

不潔を思うと、もう哲には我慢ならぬのだ

つた。精神と肉体の不潔が凝つて湧き出し

た一種奇怪な美貌は恐しい魅力をもたえて

いた。哲は危く崩れそうになる度びに自分

のやわらかいものの皮をぎゆうぎゆう振り

あげ、興奮から冷たくさめるのであつた。

潤子の肉体は害毒の巣である。一緒に川

行水をしたという韓国人の老婆の語るとこ

ろによると、潤子の皮膚は潰瘍だらけで、

ことに女としての部位がはなはだしいらし

かつた。さもありなんとうなづけることは

男を誘う手管として、潤子がやりそうな衣

類をストリップするようなことはやつたこ

とがないのだつた。いつも着物だけはきち

んと着ていた。

皮膚はそんなでも男を充分堪能させるら

しく、潤子とまじわりをした男達は、潤子

が肉慾をそれだけの為のみに生れてきた女性

のように隆々発達し、しかも巧妙を極めて

いたと畏敬してバクロした。不思議な女で

ある。潤子が軽い寢息をたてながらウソ寝

をしていることを森島哲はよく知つていた

薄目をあけて彼を見ながら、手の指が意志

力のないものの如く動いて、突は、激しい

意志を表現していた。潤子は自分の指で生

殖器をかたちづくり、哲に見えるように振

り動かしていた。自分が渴望しているもの

を暗示で知らせ、男にその氣を起させよう

と虎視眈々と狙つていたのであつた。森島

はその手をビシリ叩いた。発情しそうにな

つた己れの不甲斐なさを叩いたとも言える

強い火花の出そうな音がした。

「なに？」

潤子が起こき上り、哲を白眼で睨んだ。

「蠅ッ蚊だよ。此頃の蚊は生命の終りが近

いのでじつに貪婪だからなあ」

潤子は深く溜息をついた。それから急に

口三味線にあわせてドド逸をうたつた。

へ入れれあびんとする抜きやぐにやとなる

ちりめエン細工のオたばこ入イレエ

た。三好明が目をつたま「へへ」と笑つ

た。「助平ッ」潤子は手提げを振り下ろし

て三好明をバチンと打ち、そのまま切られ

て日なたに放られた百合の花のようにうつ

むいてしーんとしたまき帰つていつた。霞

られて許りいて、三好明は不運な男であつ

た。

手拭で顔

を拭きな

がら入つ

てきた。

「雪さん

という娘

さんのい

る小屋で

水を貰つて顔を洗つてきま

した。前の流れは上みに牛

が入つていて真黒に濁つて

いますよ。森島さんお出掛

けなら僕も一緒に出発しま

す」

「君はゆつくり休んでいつ

ていいんだよ。好きな時に

立つて行つたら良い」

「いいえ出掛けます。もし

か途中で氣がかわつたら僕

も今日一日仲仕の仕事をし

てみたいですから」

「そうか、それなら僕とクスブリ横丁でホ

ルモン汁でも呑んで、一日頑張つたら、い

い日当になるからな」

あわただしく行違ふ町の人々に挨拶し、

二人は港へ向つた。三好明は

「あの町いいなあ。僕すつかり氣に入りま

したよ」

と歩きながら感嘆した。誰から聞いたのか

「だいいち女があつさり手に入るといふ習

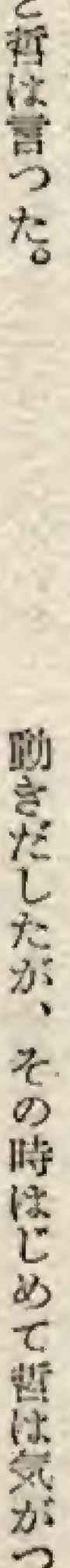
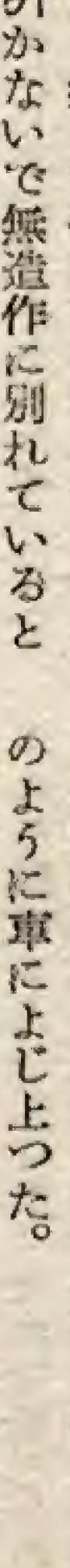
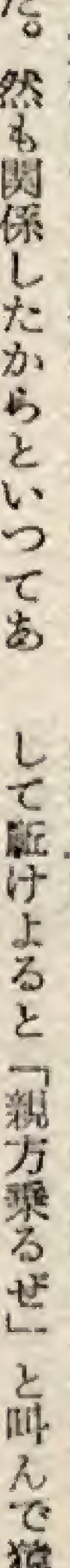
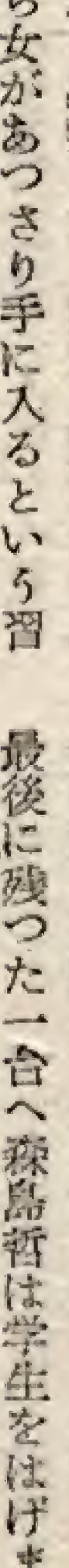
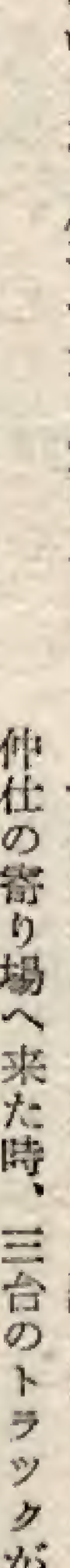
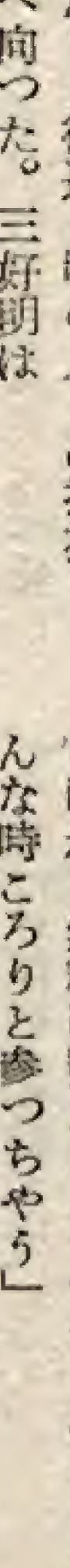
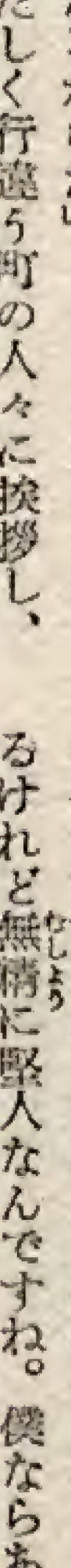
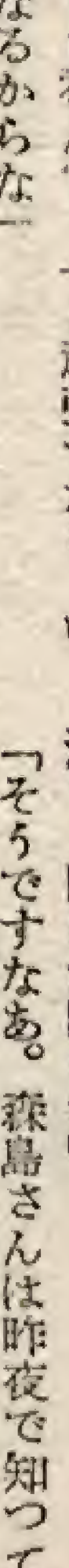
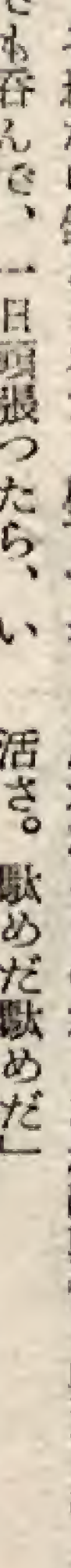
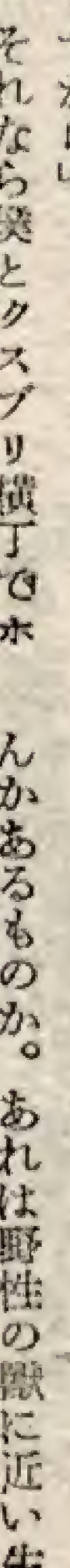
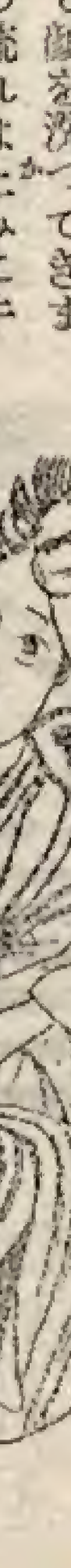
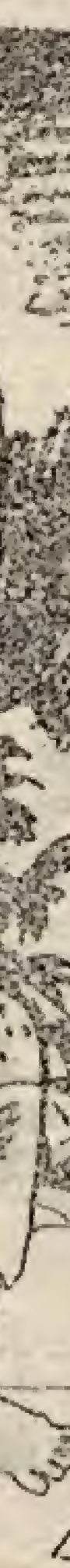
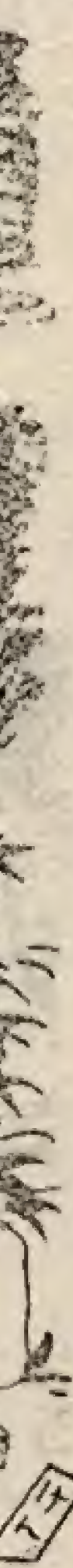
慣は満点だ。然も関係したからといつてあ

と迄紐を引かないで無造作に別れていると

ころが爽に氣にいつた」

「バカ」と哲は言つた。

「若い将来のある軀で何を言つてゐるんだ。あんな責任がないところに人間性の尊厳な



親方は運転台から首をねじ向けた。
「今迄黙っていたが、硝酸の積出しだよ。
普通の荷より二十円手間賃を奮発するから
頼むぜ」と白い歯をむいた。

硝酸は手足の傷口に激しくしみ、うつかりすると軀が腐蝕することもあつて仲仕達の一番嫌う仕事だつた。哲は足指の傷を思ひ出し「止めた止めた」と言う、と、ぐんぐんスピードを加えて来た自動車から脱兎のように飛びおりた。つづいて学生服も落下してきた。二人は路上に尻もちをつき、トラクタが巻きあげていったガソリン臭い埃を頭から浴びた。

寄せ場へ戻つたが、もう風太郎集めの車は無く、哲は今日もまたあぶれたのだつた。「森島さん、今日は方面を変えて農家へ買いに行つてみませんか。僕がご案内しますよ」

三好明が学生服を脱いで肩にかつぎながら誘つた。

「物貰いはしたくねえな」

「そんなこと言わづにすア一度やつて御覧なさい。一日したら止められん収穫があるんですよ。若い者が田圃へでたあとで、老盛り共が藪ん中でいちやついていたりする現場へ行つたら、迷惑な位握り飯やらたくあんやらトマトを持たせすね。そんな時は六十の婆さんでも中々色っぽい顔になつてゐるもんです」

三好明が矢鱈に誘うので哲は不承々々つて行つた。一時間程歩くとO村に來た。のどかに鶏が囀をつくり、村の小学校からは唱歌の合唱が流れてくる。

「先づ小手調べに……」などと言ひながら三好明は、構えの大きい一軒の門をくぐつた。表から哲が見ていると、三好はその家の

の入口に立つと先づ「えへん」と暖かいをして自分の存在を家人に知らせ、それから黙つて頭ばかり下げている。

戻つてきた三好明は、ほかほか湯気のたつ大握り飯の竹皮に包んだのを持つていた。「若い娘さん一人でしたから薄気味悪がつて直ぐ呉れましたよ」

二人は鎮守の森でその梅干の入つた握りを口突がらせてフウフウ吹きながら喰つた。

三好明は時に応じ機を掴んでは「オーオ」と泣声をあげたり、ただ喧しいばかりのお経を唱えたりして物を貰つて歩いた。

家人は、この厚釜しい貰ひやを追つ払うため兎に角有りあつた物を呉れてやるのであつた。五六軒廻るうちに二人は両手に余るほどの荷物が出来た。蒸し馬鈴薯など一口嚙つては棄てて歩いた。

追分の石地藏の所までくると、石に腰掛けていた女が「あら森島はん。なんやねお貰ひに転向しやはつたの」と、とんきような声で呼んだ。部落の花輪澄子だつた。彼女もひしやげたアケビ籠をふくらませ、仕事は豊漁のようであつた。

花輪澄子に逢つたのを機にして三好明は帽子を脱いでお辞儀をすると別れていつた。

澄子のあけてくれた石に哲も腰を下ろし

「花輪さん、この商売も楽しや無いね」

しみじみと言つた。哲は犬に吠えられて

はおびえ、無慈悲に手を振られては冷汗を

掻き、とうてい三好明のように虚心坦懐風

吹かば吹こうとすま買わなければ動けない

式の名人芸は出来なかつた。精神が参つて

しまふのだ。

「うち変態やさかい平氣やわ」

澄子は奥歯の金を見せて笑つた。彼女は何でも自分を変態にして割りきつてしまふ

癖があつた。無声映画時代妖婦役で売つた一流の女優の日の面影がまだ匂つてゐる女だつた。

「急に男が欲しゆうなつてなあ。誰か通らへんかと待つていたんやけど、女ぎらいの森島はんやつたらあかへんなあ」

澄子は口惜しそりに言つた。事実彼女は物貰いをするかたわら安い金で農家の男達にからだを売つてゐた。

「うち撮影所にいた時分好きやつた人に森島はんは瓜二つの男がいたのや。あんな見ると思ひ出されてくるの。うちをこんな変態にしたのその男なんよ」

花輪澄子はびつたりと哲に身をすりつけて過ぎた目を追う目の色だつた。

暫く沈黙し追想にふけてゐる様子だつたが、はらはらとその頬に涙がつつた。

「いやや。すつかり思ひ出したんか。夢さめたら五十のお婆ちゃんや、みつともない浮浪者やわ」

澄子は極めて自然に哲の手を握つた。

「さわつて欲しわ。せめて触れてくれる手でも現実のものやつたら今の幻想もそんなに無慚なものでもあらへんのや」

花輪澄子は目をつぶつて甘くあえいだ。

着物の合せ目がひらいて其処から男を悩殺する匂やかなものが立ちのぼつてくる感じだつた。女性なら誰もが身につけている服性である。さわるぐらいなら。森島哲の二十五歳の肉体がそううづいて、肯定しそり

になつた。幼い頃、母に連れられて行つた映画館のスクリーン一杯に躍つた彼女。胸

ときめかせてあこがれたあの花輪澄子の若い面影が、哲の心に幾つも浮んでは消えた危険な錯覚であつた。五十に近い花輪澄子にかわつて十九歳か二十のみづみづしい彼

女が、哲の傍らで本能の発火に喘いでいた。哲の手が花輪澄子の腰を抱いた。

「ああ苦しい。濡れるわ」

澄子は逆上した、雌猫のように鼻で思つた。——とたん、森島哲は冷水を浴びたように我に返つた。哲の指はささぐるものにかすかに触れた感触があつたがしかとはわかない。ただ、これは違ふと心の奥で何かが叫んだ時、哲の情慾は十里の先へ飛びのいてゐた。

哲の想像にあつた花輪澄子の肉体はこんな汚穢な、美しからざるものではない筈であつた。今の花輪澄子の肉体は、剛毛も枯れた葦原に木枯しの蕭々と吹き渡る佗びしさしかないのだつた。男から男へ、醜使し持ち頼した花輪澄子の衰え果てた性に呪あれ！森島哲は大地を踏みしめて立ちあがつた。一度彼の手を取つた澄子も、あきらめて空しく手を自分の膝へおろした。見下ろせば薄汚い婆さんが、しょんぼり坐つてゐるにすぎなかつた。哲の軽蔑したような、自責をまぜた複雑な目に見据えられて、花輪澄子の肩はガクツガクツと震えていたが「わつ」と顔をアケビ籠にかくして囁き出した。

「うちが若い華やかやつた日から時がすぎづにいて呉れはつたら良かつたんや。何故時は流れてしまふのやろ」

彼女は泣き咽ぶ合間にはそう言う意味の言葉をきれぎれに洩らしてゐた。哲は其処を離れた。学校の門から子供達が若鮎のよりに溢れてゐた。

四

森島哲が彼らの町へ帰ると、雪が今朝寝



ている間に三好明に犯された噂でどつたがえしていた。早朝地見屋を兼て一働きしてくるタミが出たあと、三好明が入つて来てまだ床の中に居た雪を手ごめにしたというのである。タミが帰つて来た時雪はすでに失神したようになって、床の中で呻いていた。「艶子のかわりに雪坊を犯して出てゆきおつたのだ。昨夜もどんな心で艶子に近づいたかわからないぞ。騒がれたので従順らしくしていたけれど、あいつは一筋縄ではゆかねえ小僧だと睨んでいたよ」

艶子の父の猫取りの太吉が、タミを気の

毒そうに力づけながら嘔んで吐き捨てるように罵つた。

部落事多し——無然として森島哲が流れて足を洗つていると、帰りかけた男達の三四人が、いやしく笑いながら哲の後を通つた。

「雪が処女宝を落したら、天下晴れて手が出せるから男達は太よろこびだな」

「道理でお前今夜は機嫌がいいな。早速今夜からつてもりだろうが、まあ最初は俺に任せて呉れや」

「雪のからだに男共が飽きるまで又取りあ

いで流血騒ぎが起ることだろうて。十六だつてな。可哀そうにこれから揉まれどうしか。早く婆婆へ逃げだしたらいいのだ」

「黙つてろ爺さん。婆婆へでたつて所詮パンパンか、地ごくに落ちるのが筋道なら、この部落で気苦勞なく男のおもちやになつていた方がいいと言ふものさ。お前だつて雪が街角で春を売つたら金をはたいて買いにゆくだろう」

「違えねえ。いづれ俺もおこぼれを貰うとしよう」

森島哲はやり切れないように首を振りな

がら小屋へ戻つた。机の上に一冊の本と、潤子の名前を書いた手紙が置いてあつた。本は謄写版刷りの淫書らしく、手紙は金釘流の読み憎い字で、

「ムズカシイ本ナンカヤメ、コレデモ読ンデ、少シハハナセルヨ一ニナツテヨ」

と書いてあつた。哲は淫書を窓から外へ放り棄てて、ゴロリと仰向きに寝転んだ。

部落事多し——そんな言葉がまた唇に浮んでいた。

——完——

パチンコ娘は唄う 左瀬鯛子

一、底がついたアルバイト

だめだめ、今年は事務系統のアルバイトはすつかりだめだつたのよ。暑中休暇の前あたりになると、去年までは大きな銀行や保険会社や百貨店から沢山アルバイト学生を雇いたい申し込みがあつたのに、今年はさつぱりないの。系へん会社も去年はたい

へんな鼻息だつたのに、今年はシューンとして一人の申しこみもなかつたわ。私たちの新制大学は関西で有名なミツシヨンスクールでしよう、だから卒業生はみんな相当な会社に入つてゐるのですもの、いつもなら学生課長が巡訪すれば、一社に十人や二十人なら、筆耕や伝票整理のアルバイトは楽にさばけたはずなの、それさえもだめだつたから、ずいぶん景気が偏つてゐるわけね、いゝ社会学の勉強になつたわ。

私たちのアルバイト幹旋には学徒援護会学生相談所つてのがやつてくれるの。早くいうと学生専門の公共職業安定所だわ、学校にもその出張所が来てくれているのよ。でもたいへんよ、暑い盛りに毎日三百人もの男女学生がアルバイト探しに押しかけるんだけど、求人の方はその一割にも足りない

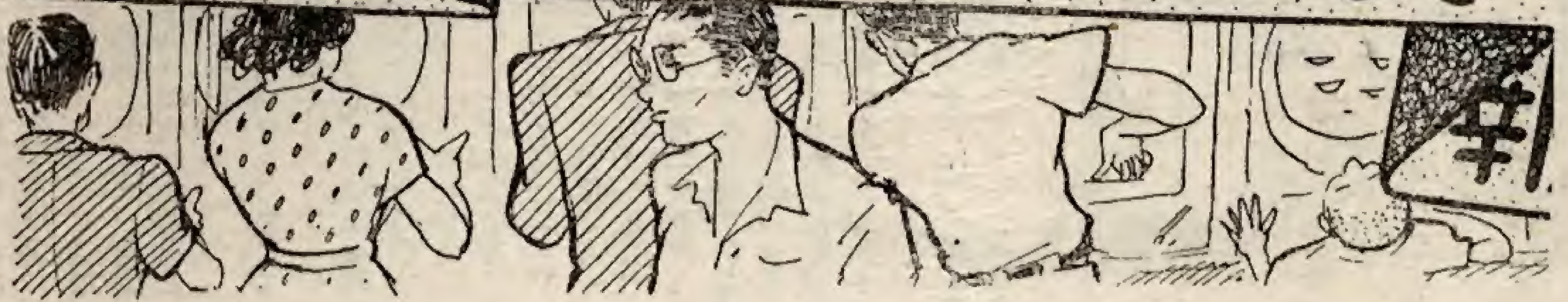
いんですもの、係員だつてワイシャツを汗びつしよりにして青息吐息ついてるばかりよ。

それでも男学生の方は、肉体労働をする覚悟ならなくてもないわ……、雑役夫、運搬工、夜警、道路掃除夫、配達夫、外交員なんか大体日給百五十円から三百円ぐらい朝八時から晩五時まで、交通費と昼食自弁という条件で、血眼で奪いあひなの。こまつつたのは私たち女学生の方なの。そりやなんといつたつて女学生の方は、いゝ家庭のお嬢さんが多いんですもの、そんなに学資にこするんだの、下宿の払いに悩むだのつてことは少いけど、やつぱりお父さんやお母さんにポケットマネーをねだるより、自分で働いて、自由に使えるお金が欲しいわよ、映画も見たいし、ダンスもしたいし、

泳ぎにも行きたいし、キャンプもしたいしねえ……、いつも男友達にばかりおごつてもらふのはいやよ。

女学生に限るアルバイト、うふふ、お判りになるかしら？。一番儲かるのは、洋画研究所のモデルよ、一日三時間ぐらいポーズをとつたら五百円にはなるわ、私、去年は勇気を出してやつてみたの、……ほんものゝ画家ならじつと裸をみられてもちつとも恥ずかしくないけど、素人の多い研究所のモデル合に立つといやになるわ、女の裸を見にくるのが目的の男が多いんですものストリップショウとまちがえてゐるのね、大の男が涎をたらして目尻をさげて、あれで画が描けるはずはないわ。ヌード写真のモデルならもつとたくさんお礼がもらえるのだつていやだわ、どんな雑誌にのつて誰に見られるかわからないし、もしも学校に知れたら退学か無期停学よ、あぶない、あぶない。その他のアルバイトなら、一番多いのは、お中元売出しで忙しい百貨店の売子展覧会や催し場の受付や接待係ね、これは一日百七十円ぐらい。大胆な女学生は、

アルバイト 夏期 女学生



ンスホールの臨時ダンサーや、バーや喫茶店の女給さん、キャバレーの踊子になつたりするわ、……でもまわりはそれで食べている玄人の女ばかりですもの、やつぱり素人の女学生はサービスがきこえないし、愛嬌もたりないから収入がすくないわ、それに一番こまるのは衣裳よ……、うちの筆箆にしまつてあるドレスを代る……お母さんに内緒で着て出るんだけど、数が知れてますもの、男の脂や汗やお酒のシミで汚されて洗濯屋へまわしたら、一日五百円や六百円もらつたつてなんにもならないわよ。それぐらいなら、すこし疲れるけれどゴルフ練習所のサービスガールの方がまだましよ来る人はだいたい一流会社の重役さん級だし、それにお日様がかん／＼照る真夏間ですもの、キツスされたり膝の上に抱かれたりして悲鳴をあげる心配がないわ、この方はだいたい一ヶ月五千円ぐらい。でも希望者が多すぎて、宝くじにあたるよりもつと競争が激しいから、とてもだめとあきらめたわ。

二、パチンコ・ガール

それでね、私とう／＼援護会へ頼むのをあきらめて自分でアルバイトを探しに、街へ飛び出したのよ。北浜や中之島や淀屋橋界限をあるいたつて、日本銀行や市役所や株式取引所や裁判所や阪大病院なんてところへ、アルバイトは要りませんかと飛びこむ勇氣は出やしないわ。だから私、気軽に飛びこめそうな中ぐらいの会社か事務所のところはないかしらと、横眼で一軒ずつ睨みながら、曾根崎警察前から天六の方へ歩いて行つたのよ。あの辺は、インチキをう

な酒場や喫茶店がずいぶんたくさん並んでるのねえ、たいがいの店の入口に「女給さん募集」と書いて貼つてあるわ。世間つて皮肉ね、アルバイトに不向きな女の商売はワンサ／＼と手をひろげて待つてゐるんですもの。

私はじめて判つたんだけど、梅田と天六の間に中崎町つて停留所があるわね、映画館があつて、とても繁華な商店街がずつと続いて東の方は天神橋筋へつきあたるのねちようどお隣の扇町公園の大阪プールで全国都市対抗の水泳大会が開催中なもので、見物の行き帰りの群衆でたいへんな混雑だつたわ。その中に揉まれて歩いてみると、だしぬけにガシャン、パチン、ガラガラつてさわがしい音が街の両側からひびき出したのよ。どれもこれも同じ音でしよう。びつくりして立ちどまると、おどろいたことに、街の両側がずらつとパチンコ屋ばかりなのよ。

私ね、パチンコつて子供の遊戯だと考えていたら、とんでもない！。軒なみのパチンコで、押すな／＼と血眼で、パチ／＼やつてるのは大人ばかりじゃないの。女の人もずいぶん多いわ。あとで判つたけど、曾根崎警察の管内には四十軒もパチンコ屋があつて、二千台も機械があるんですつて。それが毎日どん／＼新規開業してるんですもの、たいへんな繁昌ねえ……。

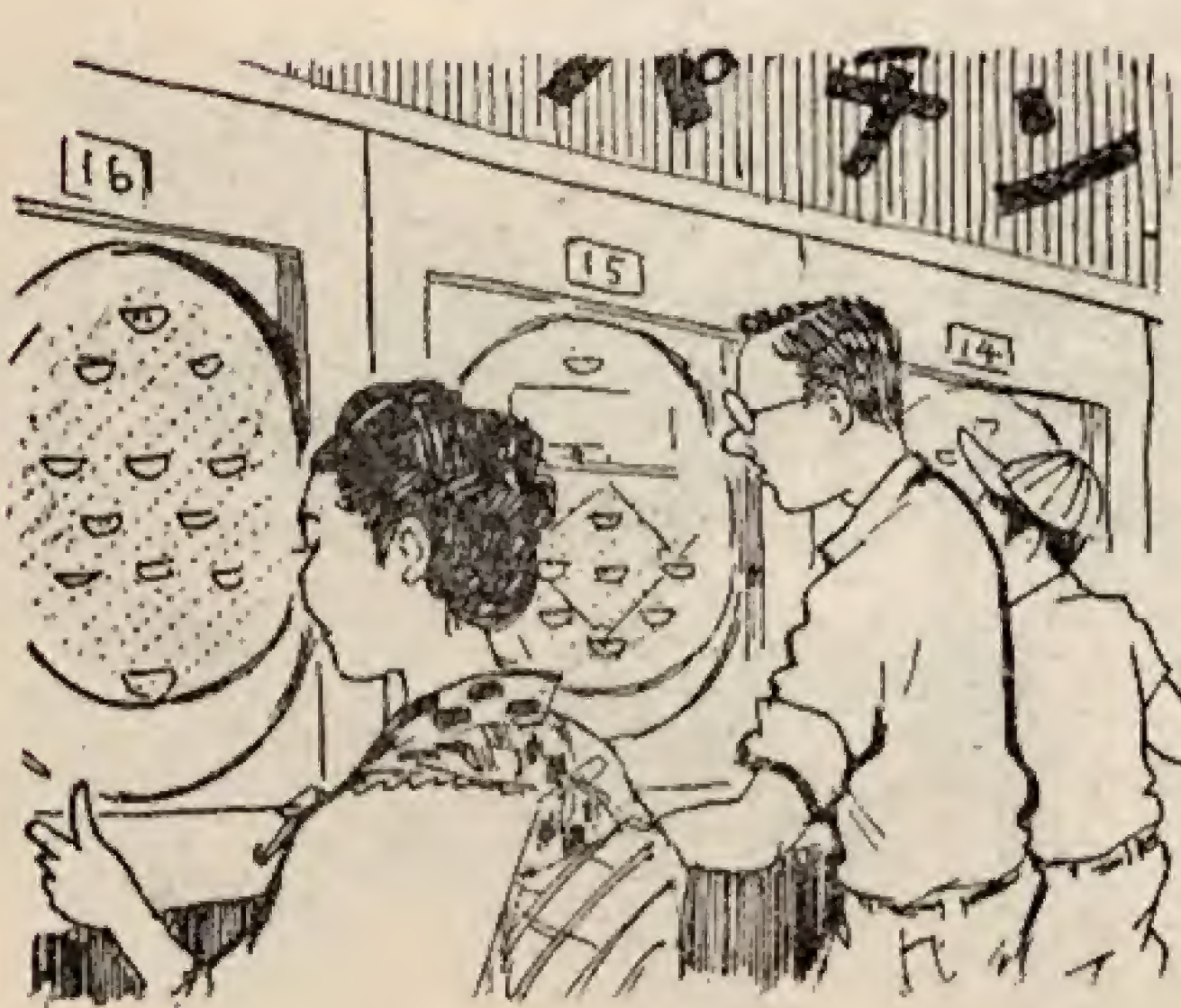
とつても愉快そうだし、どの店も大入り満員だから、私こゝで一つアルバイトしてみようと決心したの。ちようど「計算できる女の人一名入用」と下手くそな字で書いた紙が入口にひら／＼していたから、さつそく申しこんだわ。

「たのみまつさ、わい一人やさかいどない

もこないもならしまへんねん、……どないだす、一日七百円ぐらい出したらよろしおますかいな、なるべく休まんといとくなはれや」

ランニングシャツにステテコ、禿頭に玉のよりに吹き出す汗をタオルで拭きながら店の奥から出てきたおじさんは、天の助けとばかりと私にたのむんですもの、いやもおうもありませんわ、即座にOKよ。どう？、アルバイト探しの名人でしろう、私はおほほ。

さつそくおじさんに教えてもらつて、パチンコ台のうしろへまわつたの。三十台ぐらいあるんですもの、ガラガラ、パチン、ガシャンとひつきりなしに鳴るんですものさるで鉄工所へ行つたみたいで、耳がつんぽになりそうよ。私のお仕事は、タマを売ること、大あたりの人に賞品を渡すことなの。といえど誰でもできそうだけど、忙しいのには目がまわるわ。銀メッキしたタ



マは十円で七つ、大あたりの賞品はタマ二十八個でタバコの光一つと交換するのよ、キヤラメルはタマ十七個で一つなの、この計算や、つこしいわ、混雑してきて、血眼のお客さんがわい／＼口々に喚き立てるとこつちの頭がボーッとするわ。

それに三十台のバチンコ台をあつちこつちこすめに走りまわつて立ちずめでものとつても足が疲れるわ。でも、朝の九時から晩の九時まで、店をあけたら、たちまちどつと溢れるんですもの、一日にいつたい何人お客が入るのかしら。一台に五十人。三十台なら千五百人ね。一回十円だから、まあおどろいた！、このバチンコ屋さん一日に一万五千円から二万円をケロリと稼いでいるわけねえ。いゝや、一日に千五百人くらいじゃないわ、二千五百人は越すかも知れないわ、そうしたら二万五千円、一カ月で五十万円は楽に儲かつてるわけねえ、……でも、電気代や賞品代がずいぶんかさ

むから純益は十万円位かな？、それにしても私に一日七百円ぐらい出すのは、なるほど平氣の平座のはづだわ！

それにしても、この店のおじさんは、なんとまあ上方演芸会の芦の家雁玉に似てることよ！、私はおじさんと固苦しく呼ばずに、サイラとニツクネームで呼ぶことにしよう。さて、サイラさんは至つて好人物らしい。はじめ二三日、私がお雇にサンドイツチをお弁当に持つてきたら、

「なんやいな、そない水臭いことせんかてえゝがな、この近所の好きな食堂へ行つてあんさんの好きなもん食べてきなはれ、うちの店の名前を云うとかはつたらえゝのんや、ゼニはわしがかためて払うがな、弁当持つてきたり貧乏くさいがな」

と出儲を見せてニコ／＼笑つたわ。私の家の芦屋からこゝまでの電車賃だと、ボンと千円札をはじめに二枚ほうり出したのも氣に入つたわ。どう？、こんなすばらしいアルバイトが他にあるかしら？。

「えゝとこのお嬢さんのあんさんに、晩おそうまで手伝うてもらうのんは親御さんにすまんと思ふとりまんねん、帰り道にこわいことおすへんか」

いつぞやは、店をしめたあと、喫茶店でアイスクリームをおごつてくれて、サイラさんは心配そうに私の顔をのぞいたわ。店が一番いそがしいのは夜の六時から九時でこの時間より早く帰つては、サイラさん一人がきり／＼まいする。

「いゝえ、かまいませんのよ、ちつとも」「さよ／＼、それで安心や、あんさんが頼みの綱だすさかい、いそがしいやろうけどがんばつとくはなはれや」

サイラさんは喜んで今度はビールと海老

フライを注文した。そこぬけにいゝ人らしいけど、女にはもてぬらしいわ、この御面相では、ゴリラの靴の他に惚れてくる女はないわ、おほほ。

そのサイラさんにもニガ手が二つあるの。一つは税務署で、一つはバチンコ屋あらし。税務署の方とは、バチンコ屋組合がすつたもんだの大さわぎで、どうやらひとまずケリがついたらしいけど、もう一つのバチンコ屋あらしの方は、サイラさんの頭痛の種らしいわ。バチンコ屋あらしなんていうと、なんだか、ヒゲをはやした怖い暴力団みたいだけど、そうじゃないのよ。

いつだつたかしら、晩の七時ごろ、混雑している店の中へ、すばらしいハンサムボーイがひよつこり入つて来たの。

「ねえちゃん、たのむよ」

服装はバリツとしてゐるし、まるで池部良のような美青年なのよ。笑うと健康な白い歯がちらつとのぞいて、片エタボができるの。私ドギマギして、ぼろつとしたわ。

「おいくら？」

「三十円」

出した百円札が手の切れるようにあたらしいの。七十円のおつりと、タマを二十一個渡すとき私の手がふるえたわ。そのハンサムボーイはゆつくりと上衣のポケットから細帯をとり出すと、右の掌にまきはじめたの。別にケガもしてないのに……と、私がふしぎにおもつてゐると、混みあうお客をかき分け、押しのけてサイラさんがあわてゝ飛び出してきたのよ。

そして、ハンサムボーイに米つきバツタみたいにお辭儀して、賞品用の光を五箱相手のポケットに押しこむと、半泣きのペソをかい、なにか、たのんでるの。ガチャ



／＼、バチン、ガラ／＼とひどいバチンコの音でなにを言つてゐるかわかんなくつたけど、やがて、ハンサムボーイが悠々と店を出てゆくと、サイラさんは、冷汗びつしよりで、私にさゝやいたわ。

「いまの男の顔おぼえときなはれや、あれにかゝつたら、賞品をみんな一人で取つてしまひよるさかいになあ、掌に細帯まくのはよつほどバチンコになれた玄人や、細帯まいてたら何時間バチ／＼やつても手が痛うならへんもんやさかいなあ、怖いんやでいまみたいなのが、バチンコ屋泣かせやがな」

……すつかり悲観しちやつたわよ。ひどい池部良ね。

三、ハンサムボーイ

怖いのは大人ばかりじゃないの、子供でもバチンコの天才がずいぶんいるわ。子供

はパチンコ屋へ入つてはいけないことになつてゐるらしいの。警察でも、学校でも、「悪い遊びはやめましょう」とパチンコ禁止令を出してゐるし、パチンコ屋の方も、自発的に「子供入場お断り」「未成年者入るべからず」「同伴者なき子供お断り」など入口に紙を貼つてゐるけど、パチンコはもと／＼子供の遊戯ですもの、禁止する方がむりだわ。それに夏休だつたら遊び場のない街中の子供が集つてくるのはあたりまえね。

十円でタマが七つ。ガチャン、ガラガラとその一つのタマが「本壘打」か「二十の扉」に入つたら、下の方の穴からタマが二十ころがり出すのよ。パチンコ台には一つ一つクセがあるから、そのクセを知つたらパネのはじきぐあい一つで、大穴をつけて落すのはなんでもないのよ。小学校の五年生ぐらいの女の子が、十円でキヤラメル五箱、新制中学の男の子が二十円で光を七箱、むぞうさに取つて行つたのにはおどろいたわ。なににでも天才は居るものねえ、……けれど、パチンコの豆天才つてのは、あまり賢いそふな顔をしてゐないわ、学校の成績の方はからつきしだめにきまつてゐるわ、あら、とんでもない悪口をお客さまに言つたりしてごめんなさいね。

それから、パチンコ屋の賞品は、警察の許可では大人にはタバコ、子供にはキヤラメルと定められてゐるんだけど、たいていの店は守つてやしないらしいわね、この間もウイスキーやビールを賞品に出した店があるとかないとかで、パチンコ屋組合が大分ごた／＼したらしいんですつて。サイラさんは正義派の固パンで、ちつとも融通がきかないから、組合の規則を破るのはけしかりんと、かん／＼におこつてたけど……。

「こないに同業者が殖えたら共食いの共倒れやがな、流行するもんやさかい、一頃二千円ぐらいやつたパチンコ台は今時五千円もするし、その上に、賞品の競争はじめたら、大した儲けどころか、えらい赤字になるがな、あほんだらやで、ほんきに！」

サイラさんは大いにぼやくけど、さあこれからはどうなるのかしら？。私など夏休のアルバイト程度だから、どちらでもいゝようなものゝ、パチンコ屋さんもそれで食べてゐる商売なら、心配で寝られないかも知れないわ。

一番おもしろいのは、近所のキヤバレーや酒場の女給さんが、ぐでん／＼に酔つたお客につれられて、パチンコ屋へくるときだわ。男の人つてお酒を飲んで、傍にきれいな女の人がつきそつてゐると、気が大きくなるものらしいわね。

「おい、ねえちゃん！」

とほりり出すのがたいがい千円札なの。こまつてしまふわ。

「おいくらさし上げますの？」

「うん……百円もおうか？」

百円といつたらタマが七十でしょう。つる／＼滑るし、相当重いわよ。それに酔つてゐるから、足許があぶないでしょう。あら／＼といつてゐる間に、バラ／＼とタマを床に落してしまふの。女給さんが眉をひそめて、

「だめよ、そんなに酔つちや！」

「なにを……一升や二升でビクともせんわい！」

とえらそうに言つたとたんに、ころがつたタマを踏んづけて、まるでローラースケートみたいに滑りながら、



「アリヤリヤ、助けてくれ、人殺し！」と悲鳴をあげながら、大の男が蛙をぶつ／＼けたように転んじやうの。いつべんこの格好をお宅で待つてらつしやる貞淑な奥様方がごらんになるといゝわ、おほほ。ほんとに大きな赤ん坊ばかりね、男の人つて。でも、考えてみると、パチンコがこんな流行するのは、結局一番安上りで誰にでも手軽に遊べるからだわ。マージャン、碁将棋、玉突といろ／＼遊びはあるけれど、それ／＼相手がなければ一人でしたつてちつともおもしろくないし、相手が強かつたら一日かゝつても勝てる見込がないけど、パチンコの方は、五十円も出して、タマを三十五個持てばパチ／＼やつていけば、二時間や三時間は十分楽しめる。それも腕次第で、大穴にポインと一個タマが入つたら気持のいゝベルがひびきわたつて、二十個のタマが、下の穴からザラ／＼ところがり出す。このスリルの味はたまらないらしいわ。

わ。五十円といえどタバコ一箱か氷金時一杯だもの、誰だつて、ふつとパチンコやつてみたくなるわ……。

私もお客のすいたとき試しにちよい／＼パチ／＼やつてゐるの、むろんタダよ、半月も練習したら、五つに一つは、きつとタマが大穴に入る自信がついたわよ。……それに、これは秘密だけど、ぐつとあのパネを押さえてばつと離すとき、なんだか身体がぞく／＼するやうな快感があるの……、おほほ、ちやうど男友達と握手して放すときのようにねえ。

あら、男友達があるなんて白状してゐのかしら、お願いよ、お父さんやお母さんに言つてはだめよ！。うちのお父さんはとつても厳格なんだから……。

私のパチンコ娘アルバイトはこれでおしまひ。えゝと、八月の五日から三十一日までだつたから正味二十六日、毎日七百円をもらつたから合計一万八千二百円。それに電車賃をはじめに二千円もらひ、毎日お昼と夕食にさんざんおいしい好きな物をお腹いっぱい食べさせてもらつたから、この方が実費で一日三百円として八千四百円……、そうすると合計いくらになるのかしら。ちよつと三万円近くなるんじゃない？……。

ねえ、どう？、他のアルバイトなすつた女学生の人で、これ以上に儲かつたアルバイトの方あるかしら？。

でも、毎日一日も休まなかつたから、楽しみにしてゐた映画にもダンスにも水泳にもキヤンプにも一回も行けなかつたのが残念だわ。

私の彼氏、私が夏休中一回もおつきあいをしなかつたつて、海豚のようにおこつてふくれてゐるらしいわ。

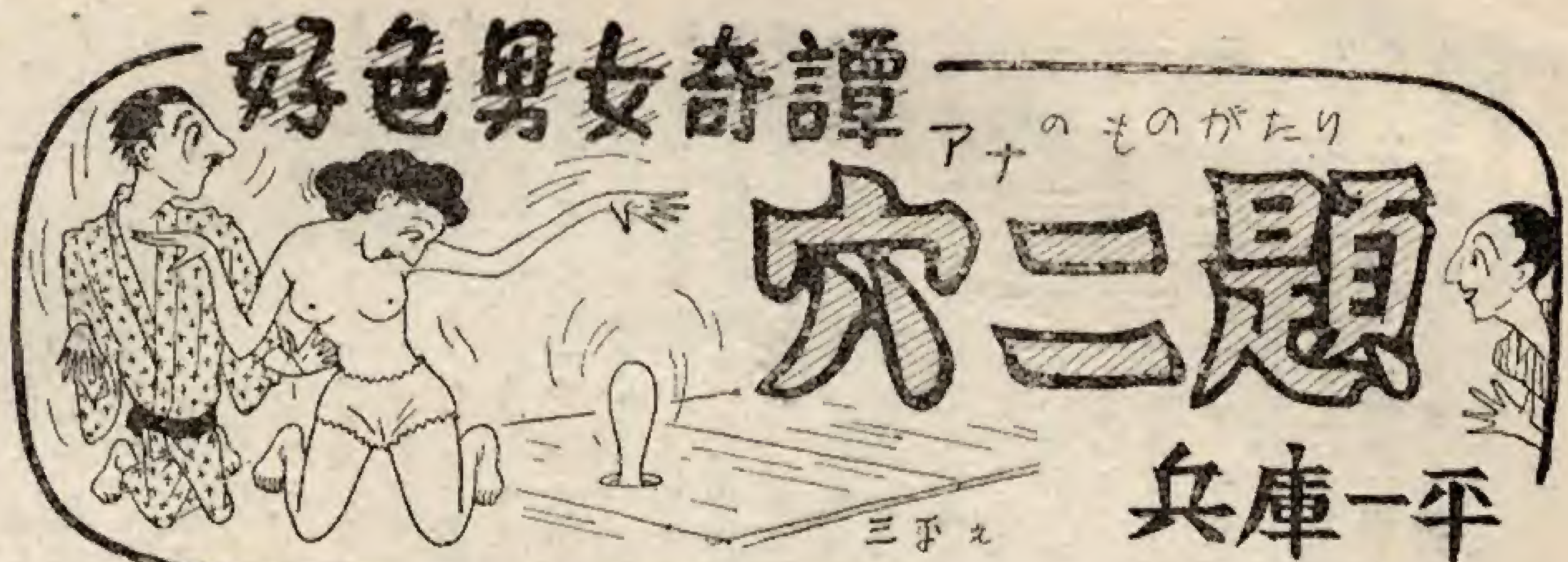
(完)

譚奇男女色好

ア+のものがたり

穴二題

兵庫一平



村のことだから、どうせ泥くさく、肥くさく、垢ぬけのせぬ話と相場がきまつている、都会のように華やかさはなくとも、それはそれなりで、また野趣横溢でよからう穴二題など大仰に名乗つて出たが、諸君穴は穴でも、穴には数々、とても数えられぬほどある、競馬や競輪の慾のつたつた大穴ではなく、という、は、んと……変な場所へ気をまわして、早合点してもらつても困る、これから述べんとする穴は、もつと純真無垢？なものであること疑いなし風呂屋を覗く痴漢と、ストリップ・シヨウのフアンのうす汚れた中年男、世の中にこれほどの、ど甲斐性なしはまたとない、眺めるだけで満足するのは貧乏性根であり、人生最大の悲劇でなくてはならぬであろうこれから書こうと意図しているのは、その悲劇の主人公の物語りである、ど甲斐性なしの男の話なのである。

ごそんじの方があつたかもしれないが、田舎の家風呂は、家の入口につき出ているかそれとも裏へでばつてゐるか、一様に露出型である、もつとも戦後の建築、改築に於ける露出性は正して、奥深く鎮座することになつたが、まだまだ、旧態依然の風呂の多いこと、それが、悲劇の主人公大助の活躍の舞台を残している。

大助は、純情？悲恋型の青年、平常は猫のような、大きな声も出

さぬ男だが、夜になると俄然性格が大変化をして、さかりのついた猫のように物凄いいギョウソウを示す。

猫は春秋二回の定期的発情だが大助は夜になると、われ今宵欲情す、だから尙始末がわるい、映画の名題ではないが一年三百六十五夜、一夜として性的昂奮を覚えぬ日はない、

のべつ幕なしにいきり立つて、夜の村内を彷徨する。

この旺盛な昂奮を、大助は風呂覗きによつて抑制する、まことに悲劇の主人公なのである、風呂を覗き歩くことを、単に覗きという太助は覗きの名人なのである。

こと名人と名のつく以上は、この道にかけては他の追従を許さない、今夜の欲情を発散さす家は、あすこと定めると、大助は宵の口からその準備行動を開始する、四辺が黄昏れ、やがて夜のとりりが降りると、猛然と目的の家に向う準備工作の第一課は、まず貰い風呂をすることにはじまる。

「今晚は、風呂があいてましたらすんまへんけど」

大助は、いんぎんに訪れ、辞を低くして貰い風呂を懇頭する。

「どうぞ、あいてまつせ、あんた男やさかいに、先に入つとくれ」どこでも、大助の人柄を信じてこゝろよく入浴をすゝめる。

大助の入浴は春夏秋冬を通じて鳥の行水の如く、湯を浴びるなり

風呂場を飛び出し家人に少しの手数もかけない、こんなことも名人としての貫禄は充分なのである

田舎の風呂は、外気との遮断に紙ばりの障子、その外側に板戸がある、大助の入浴の目的は、この板戸の移動にあるのだ、まず、板戸をほどよく移動させると飛び出すのだから、風呂の早い訳であるもちろん障子には五円硬貨の真中の穴くらいのを開けておくのを忘れない。

「おゝきに、どうも、おさきに、すんまへんでした」

さつさと引きあげて、家人に少しの迷惑もかけない。

だが、外へ出ると、大助の足は納屋のかげで立ちどまり、おもむろに自己満足の行動にうつる。大助は娘の肉体などには少しの興味もない、中年女の、風呂場での大胆な行動に垂涎おくあたわさる魅力を禁じえないのだ、だからこの家の女房の入浴時を、夏は蚊軍の襲撃に耐え、冬は寒風にふるえながらもいつまでもその時期の来るのを待つ。

貰い風呂の偵察によつて、あ



らかじめ女房の入浴時刻がわかつてゐるから、大助はその時になると好機至れりとばかりに、蝸牛の歩みで風呂場に近づく、万々がめられたらそのときの用意に、言葉の言葉も準備している周倒さである。

やもりの如く建物をけうようにして目的地へ進行する、ぼちや、ぼちやと湯を動かす端めかしい音に大助は体がぞくつとふるえる、頭のなかでは、帯をするすると解く女、赤い腰巻をとく指の動き、着物を脱ぐと、下襦袢と、眼の覚めるような真赤な腰巻、下襦袢のほだけた胸にだらりとさがつてゐる乳房、白い指が腰巻のを紐とく、やがて一糸まとわぬ裸像が、大きく眼の前に出現する、大助は思わず生唾をぐくんとのみおろした、想像するだけでも胸は高鳴る、ま

して寸秒の後はあられもない人妻の、大胆な風呂場での行為が眼前に展開されると思うと、大助の心は妖しく沸きたつてきた。

蝸牛の歩みも、近い風呂場へはすぐ到着する。

大助は、そうつと障子の穴に眼をあてたかねて貰い風呂したときに爪であけておいた穴である。眼をあてるまでに大きく息を吸いこんで、顔をよせた。

「あつ」

大助は思わず心のうちで叫んだあれほど期待して、胸をとどろかせていたのに、眼に入つたのは、なんとグロテスクな、男性のシムボルであつたとは……

覗きの名人の失敗を第一話として、さて次は……

第二話

板床の穴

話はひどくクラシックめいて恐る次第だが、最初に断つておいた通り、泥くさく肥くさくと断つておいたから諒とされたい。

穴、第二話は、田舎でなければ得られぬ泥くさくがある、床の穴と、題をつけておく。お波という淫奔な妻女があつた、夫一人では到底満足のできぬという豪の者、

火遊び、つまみぐいなどの生やしき言葉ではかたづけられぬ精力家である、男出入など日常茶飯事片時たりとも男なくては日が暮れぬ、超精力家である。

お波は情事について天才的であり、夫をロウラクする術も実に鮮やかである。

男に接触していなければ、どこか魅のなかのくさびが一木抜けているような、たよりなさを覚え、夫との情事以外に、満足を得る手段を、その天才的頭腦を活躍させて考えた、思いついたのが、男を床下にしのぼせることであつた。大工は雇わずに、その工事にかゝつた。

田舎の台所は、板張りの床が多い、床下に男が仰臥できる台を作つた、ほどよきところに、床に穴一つ。その穴の上に乗つたりと坐りこむ、このからくりをお波は考へついたのである、この巧妙な計画に、思わず北叟笑み、これまで関係した男の数々を頭に描いて、誰から招こうかと思案した。

どうせ、お波のような女だから愛情によつて結ばれるなどという高尚なものではない、たゞ性的満足さええればそれで足りるのだから、相手となる男も、それ相応の者ばかり、愛情もへつたくれもない、あとくされなど全然ない。

お波がこの計画を最初に洩らしたのは、いつでも、一番に喜ばせてくれる大薬物の所持者である、

村の青年源吾であつた。

「そりや面白い、わいが一番槍と行つて、しつくり合つか調節してみたる、うまうまかなかつた改造することや、けんど、六分板一枚の隔てがあるのは残念や」

とさも、残念そうに言いながらお波の家へやつてきた。

折悪しく他出から帰つていたお波の夫とばつたり顔があつた。

「やあ、すまんなあ」

なんと言うことなしに源吾は照れ臭さそうに言つた、夫がいては少々具合が悪い、その眼の前で床下へもぐりこむような器用な真似はできない。

「お波さん、置物をなんとかしてくれなくては困るやないか」

置物、亭主のことである。

「晩までに、かたづけとくから晩にしろくれ、その方がよい、けんど、ちよつと見て、おいとくれ」

台所へ入つて

板の間をのりりと見廻すとぼすんと板に穴があけてある。

「ちいと、小さいわい、あれやつたら、痛いぞ……」

「フホ……ホ、もつと、大きく

しとくわな」

「そげがたゝぬように、よく聞いといておくれよフア……ハ」

源吾が咽喉仏まで見えるような大きな口で笑つた。

「なにが、そんなに面白いんや」

お波の夫が出てきて、不審そうに顔をした。

「あんたの知つたことぢやないわいなフアハ」

源吾は笑い声を残してそのまま帰つてしまつた。

お波は夜になるのを、心を疼かせながら待つた、夫の目の前で男をくわえるスリルが、心を浮きださせる。

夕食がすむとあと片付けもそこそこに、お波は、針箱とぼろぎれを出してきて、べたりと穴の上に坐つた。

「お波、そんなとこで坐つたら冷

えるぜ」

夫の思いやりのある言葉などうわの空で、いまにも床下から、響撃が来ないかと胸をとどろかせて待つた。

「お波、魅でも悪いのかい、どうしたんだ」

「いえ、なんでもあらへん、ちいつと、下腹が」

「痛むのかい」

「いゝえ」

肩でする荒い息を、夫は不安そうにみつめていた、やがて、お波は濡れたような媚めかしい眼をあげた。

「ほゝう、もう、癒つたのかい、それけよかつた、ところで、今日

はこれだけ集金ができた、なおしといてくれぬか」

夫が差出した財布、色もさかんだが、慾なおさかなお波は、財布をわしづかみにするなり、すつくと立つた。

そのあとには丸い頭が、ちよとなんと床上に残つてゐる。

「お波、おまえが立つたあとにある、それはなんぢや」

めざとい夫にみつけれられ、一ときお波はどきつとしたが、そこはこの道にかけては剛の者のお波、

「なんや、こんなとこに芋が一つ転つていたのかいな」

その手際も鮮やかに、芋をつかみとるやうにして、床下へおしこんでしまつた。

穴、第二話はこれで終り。





日尾灘郎・箕田京二

密林秘話

①

暗灰色の皮膚がねつとりとしめりを帯びてにぶく光っている。見れば見る程無気味で、グロテスクな容貌の大とかげだつた。

とかげは観念したものか、前肢のすぐ後をくぐられたまゝ、もう逃げようとせず細い火焔のような赤い舌をペロペロと、氣忙しく動かし乍ら、眼玉をパチパチしていた。

「さて、仕事にかゝろうか！」

小野兵長は二人を促すようにして立上りロープの端を車の後部にしっかりとくくりつけた。マカツサル海峡を前にひかえた秘境！ホルネオの南海岸、赤道直下の灼熱の地だつた。海岸警備隊が彼等の所屬隊で、小野兵長は飲料水運搬の使役に當つていた。

②

海岸にある小隊の位置から約二軒のこの地点に小さな湖があり、その美しい水を彼等は飲料水にしていた。怪物はロープに引ずられ、ひっくり返り、跳ね上り

さまざな姿態でバウンドし乍ら小野達の小隊迄運ばれた。「おーい土産持つて帰つたぞッ！」彼が車から降り乍ら怒鳴ると、小隊に残っている数名の兵隊が、ニッパ葺きの細長い小屋から、ゾロゾロと出て来た。

「うおつ！こりや褒いぞ！」喰つて見ようと云う組と、飼おうと云う組が対立したが、結局、その奇怪な愛嬌者は、小隊一同で飼う事に決つた。

二三日すると、その大とかげが雌である事を発見した兵隊があつて、棒切れで目茶苦茶に生殖器をいじりまわしていた。

「おい！無茶するなよ、可愛い想じやないか！」

一人の兵隊がそれを制止すると、その兵隊は意地になつて、やめようとしなかつた。彼等は退屈し切つていたのである。彼等の隊はこゝへ移つて来る前、ミンダナオ島のダバオの街にいた。こゝへ来て、前に居た部隊と交替してから、未だ二十日程しかならぬのに、兵隊達は変化のない毎日の生活に飽き切つて仕舞つていた。

対空対船監視勤務、海岸地帯の陣地構築が彼等の主な仕事だつた。単調な勤務、単調な作業、何の刺激もない日々が続いた。連合軍の飛行機も、時折思い出したようにやつて来ては、氣紛れにバラバラと機銃掃射をする程度のもので、兵隊達にとつては、饒けつくような炎熱とのかゝいかいの方が大きい仕事だつた。

彼等の警備地区の何所にも、彼等の欲求を充てて呉れる設備がなかつた。

「ダバオは良かったなあ！」

「うん！ベリゴールよ！」

「あゝ、第一慰安所の久子良かったなあ！」

「あゝ俺は甘党食堂のせんざいを腹一杯喰

い度くなつたよ！」

ため息のような、同じ会話が毎日繰返された。

③

暮色が迫り、限り無く美しい夕焼けが、辺り一面を真紅に染める頃になると、彼等はやつと饒けつくような鼻息から解放されて、ホットするのである。

夕食が済むと、彼等は椰子の木蔭のニッパ小屋から港の方へ、ゆるい斜面を降りて行つた。

「景色だけは良えとこじやのう！」

老兵達は手製の釣竿をかついでいた。

右手の水平線には美しい鳥影が夢のように浮び、その上の夕空は、鮮やかな程綺麗な夕焼けに染まっていた。振り返ると、椰子の林を透して、秀麗な山脈が赤い空にくつきりと黒くそびえていた。

まだ風間の熱気が残っている砂の上に坐し、彼等は忘れていた郷愁をとり戻していた。頬を過ぎる風は鹽のように冷たかつたその風に乗つて、土人部落の方から、哀愁を帯びた土人の唄声が聞えて来た。

それが当然の帰結でもあるかのうちに、兵隊達は自分達の近くに住む異人種の生活に興味を持つようになった。会話の代りに手真似物真似で意志を通じ合つた。

その異人種はダイヤ族に属し、人間としての生活様式は最下層で、猿に近い暮らしをしていた。男は木の皮で作つた棒と短刀だけを身につけていて、一様に敏捷だつた。

猿よりも巧みに木に登り、岩の上を跳ぶように走つた。彼等の足の裏は、安物の地下足袋の裏より厚く、火の様に焼けた砂の上を平気で歩いた。狩りにかけては天才的だつた。弓や吹き矢を使用して、闇の中で鳥を正確に射落した。彼等は猫のように暗闇の中でも眼が見えるのだつた。

前に居た部隊の申送り事項の中に、土人に関する事項があつた。土人の家を訪問すると茶を出す代りに、彼等は酒を出す、それを飲めぬと氣を悪くするどころか、大いに反感を持つから注意を要すると云う事と決して女に手を出すなと云う事だつた。

兵隊達は土人の家を訪問した場合、酒を出されると注意深く飲んだ、どぶろくに似たその酒は意外に強烈で、少し飲んでも足元がフラフラした。

併し女に関する注意事項は、杞憂に過ぎないのでないかと兵隊達は思った。若い女の姿がどこにも見られなかつたからである。女と名の附くものは腰の曲つた婆さんか、子供に限られていた。

兵隊達は少なからず失望した。未だ見ぬダイヤ族の娘達はジャングルの奥深く身をひそめているのであろうか？永遠に、我々の眼前に現われぬ心算か？と兵隊達は残念がつた。

④ 或る夜土人部落の方から、賑やかな太鼓の音に混つて、リズムミカルな唄声が聞えてきた。十数名の兵隊は、吸込れるように部落の方へ出掛けていった。

部落から少し離れた広場の真中に大きな焚火が赤々と燃えていて、それを四五十人の土人が円く囲んで坐り、いろんな打楽器を、狂つたように打鳴らし乍ら唄っている土人達は、一様に赤い派手なサロンを腰に纏っていた。

兵隊達は眼前に展開されているその光景に、少し気押された形で、ふと、かつて日本で見つたアフリカ探険映画の一齣を眼裏に浮べた。そして、アツと叫んだ。彼等の眼を見せられたものは円陣と火の間の踊り狂う五人の娘の姿であつた。

それがこの何かの祭の衣裳で、でもあるのか、小さい花模様のサロンを腰に纏い、蟬の翅の様に薄い、しやの様な布を胸につけて、身をくねらせ媚情的な姿態で踊っているのだ。

娘達の皮膚は奇蹟のように白く、日本の娘達と何等変るところがなかつた。のびやかな姿体の乱舞豊かな乳房が薄い布をすかして焚火に映え、時折りチラツとその影をくつきりと宙に浮べた。

兵隊達は放心したように身動きもせず、露らわな若い女体の動きを茫然として眺めていた。

さつきから、またゝきもせず、娘達の軀を喰入る様に見つめて一人の兵隊がいた。異様な緊張が、彼の表情を石の様に固くしていた。無気味に輝く眼は、獲物を狙う冷たい蛇の眼だつた。

酒癖が悪く、皆から嫌われている黒田上等兵だつた。今も、相当な酒量に彼の肉体に入つていた。

夜が更けて、兵隊達の姿はすでに無かつた。黒田は踊りの輪から少し離れた木蔭の暗闇に身を潜め、忍耐強く獲物を得つた。

ようやく踊りが済むと土人達は四散し、家路についた。娘の一群が彼の前を通り過ぎようとした時、彼は一人の娘へ豹のように襲いかゝつた。アッとおびえた、短かい叫びが娘の唇を割つてとび出した。

彼は娘の体を小脇に抱えたさう、脱兎の様に部落の外れの森近く迄走つた。彼は無我夢中だつたが、かすかなどよめ物を背後で聞いたような気がしたが、誰も追つては来なかつた。



つた。

手足をバタバタさせ乍ら、何かしきりに哀願する娘を下サリと草の上に下ろすと、彼は悪鬼の様に女を押えつけた。弾力のある若い女の肉体、彼の感覚には女以外の何ものもなかつた。

⑤ 彼等の小隊は翌朝、七時の日朝点呼時限に彼の不在を知つた。迷ひ……とり合えず小隊の半数が三班にわかれ、捜索に出発したが出発後間もなく第一班の伝令が息せききつて小隊長の元へ報告に來た。小隊長が駆けつけて見ると、小隊の位置から約二百

米、土人部落との中間の林の中の小道に、彼はうつぶせになつて息絶えていた。彼の防曇衣を貫き、グサリと肩の肉の奥深くつき刺つているのは、土人達が使用する吹矢だつた。手足の露出部は暗紫色に変色していた。

吹矢に獲物が穿たれてあつたのだろうか？彼等には事の全貌が解つたように思えた。腐つた魚のように横たわつてゐる彼の屍を取り囲んで兵隊達は、今こそ前に居た部隊の申送り事項の真の姿に触れ得たかのように、一言もなく、曇つた顔をうなだれ、いつまでも力のない視線を彼の屍の上に落していた。

昭和二十年二月三日、良く晴れた朝の事だつた。

⑥ 毒矢、首狩人種ダイヤ族、犯人ははつきりと彼等一味とわかつていても、疲労しきつた海岸警備隊では、真相究明の部隊を派遣するどころか、隊長命令で夜間の外出禁止の会報が出る仕末だつた。

椰子の樹の間から、今宵も又、ガメランの音に混つて嘶子の声が洩れ聞えてきた。小野兵長は圓へ立つてから、フラ／＼と誘い込められるように土人部落の方へ向つて歩き出した。広場の真中に赤々と燃えた焚火のまわりに行われている踊りの奇怪さに、あッと思わず声を出しそゝになつた。髪をふり乱した老婆が、手にふりまわしているのは、今皮を剥いたばかりの生々しい人間の首であつた。

小野兵長は禁制の夜間外出をした事も忘れて、月明りの小道を兵舎の方へ夢中で走つていった。

(終)

変態性慾者群像

記色男囚人



男色告白記

異性より隔絶された刑務所の鐵環の中に芽ばえた

一 稚子遊び

僕の家は京では古くから続いた
扇子商です。早くから父がなく、
母の手一つで育ちました。幼い頃
から、今日のことが暗示されてい
たんでしよう。僕は男の子と遊ん
だりする事は滅多になく、女の子
とばかり遊びました。

学生時代、同性愛に陥り、完全
に変質者になつてしまつたのです
クラスの中に、僕を求める者が三
人ありました。僕はその三人に、
三様の異つた魅力を味ひ耽溺して
いました。中でも柏木は色の浅黒
いたくましい体軀の持主で、僕と
一番感情が合うのでした。次第に
他の二人に遠のいても、柏木だけ
は何ら変わりありませんでした。所
が或る夜、入浴中二人の痴戯が家
の職人である画工の青木に覗かれ
たのです。

青木は腕の良い職人で、忙しい
時にはよく泊つていました。彼は
二十五でした。賭博が好きで、よ
く負けた、勝つたというのを聞か
れますが、その頃彼には何の関心も
ありませんでした。あれは祇園祭
も近づいた夜だつたと思います。
僕は浴後、ゆかたを着て二階の窓
辺に坐つていました。

「坊ん」と呼ぶ声に下を見ると、
ブルウ・グリーンのズボンをはき
白のカッターを着た青木がたつて
います。映画にいくつというので

す。僕は退屈なまゝに連れ立つて
ヤサカ・グラントへ出掛けました
映画の帰り青木は喫茶店へ僕を誘
つて、コーヒーやケーキを奢つて
くれ加茂川堤に一緒に下りました
涼しい川風が快く吹いています。
「えゝ氣持や」僕が振返つていつ
た時「坊ん」と熱い声で青木が
矢庭に唇を重ねてくるのです。遠
い街の灯に浮び上つた青木の眼は
、今迄に感じたことのない情熱的
な輝きを帯び、青々とした刺り後
が厭だなしにくつと引摺む様な底
しれない魅力で迫つて来るのでし
た。

しびれる様な抱擁のひとゝきが
過ぎると、彼は真つ裸になりました
た。その時、僕は今迄に感じたこ
とのない興奮に硬直した様になり
ました。白い肌に見事に彫られた
朱と青の大蛇の刺青が、生きてい
る様にさえ見えるのです。大蛇は
背から腹部へかけてどろろを巻き
更に、臀部をくゞつて、股間の器
物の先端が頭になつてゐる壮大な
ものです。がつしりとした青木の
その体軀と、濡れた様にきらめく
眼の色は、あらゆる体内の血潮を
湧立たせました。

僕はそれから後、青木のとりこ
になつてしまいました。彼は仕事
をたてに泊る日が多くなりまし
た。祖父も大事な職人ではあるし
僕の部屋で寝ても異議は唱えませ
んでした。青木は嫉妬深く時折り
友が遊びに来たりする時は、押入

れの中に連れ込んだりして、より
強い激情をぶちまけるのでした。

僕はこの青木が乱酒家であり、
賭博の前科もあると聞込んでから
急にそのしつようさに興味を減じ
てゆきました。それに最近青木の
手が落ちたと聞くに及んで、もし
祖父や母に分つたらという懸念で
遠のいていつたのです。僕は夜は
だん／＼家を明ける日が多くなり
ました。柏木の家泊る様になつ
たのです。祖父や母には、夏の間
涼しいこの加茂川べりで送らして
貰うと、いつて置きました。青木
はその真意を知り僕のあとをつけ
る様になり、とう／＼恐ろしい夜
が来ました。柏木は僕の行動を不
思議によく知つていました。その
夜も川に向い窓を開きふとんの上
に寝転んでウイスキーを飲み乍ら
柏木の相手になつていました。

何におびえたのか、柏木は「あ
つ」といつて起上りました。僕はそ
の方へ視線を向けて「あつ」と同
じく叫びました。青白く乱暴した
青木が、ジャック・ナイフを片手
に、じつとたつてゐるのです。そ
の形相の凄さに、冷たい恐怖が稀
妻の様に走りました。逃げなけれ
ば、と、思うばかりで足が思うま
ゝ動かないのです。それでも必死
になつて廊下にはい出ようとした
時、後から、ぐつと刺されたので
す。僕はそのまま氣を失い、氣づ
いた時には病院のベットで母の心
配な顔が直ぐ目の前にありまし

た。柏木は刺され所が悪くつて、つい先刻亡くなつたと言うのです。「お前もとんだ目にあつて、青木は警察に引っぱられていつたよでもね、青木はなんのために、この様な事件を引起したかについて何にも云わないそらだよ。お前もどうせ調べは受けるだろうね」

どういつていゝのでしよう。僕の頭は混乱しました。と共に、留置場に坐っている青木に不思議に哀れをおぼえました。僕が憎かつたら、どうにでも云えるのです。それなのに、黙している彼の心中に、未だ僕のことを秘められていたものでしょうか。そして僕を刺す前の切ない表情が胸を熱くしました。その時、急につき込む様に傷の痛みを感じてうなづてしまいました。

青木が真相を話せば、新聞や世間の好奇の眼に、家人は勿論、柏木の家も親類も、この上ない恥をうけねばなりません。僕は自分一人で、相談する者もなく、その事について悩みつゞけました。そしてとうとう酒をよく呑む青木の乱酔の酔ひの口論から起つた、という事にしてしまつたのです。青木は犯行後、僕達を病院に運んだ

点は認められましたが、賭博前科もあり、八年の刑を言渡されました。京都の山科刑務所に収容されたとき聞きました、僕はそれなりに青木のこととは忘れてしまひました。僕は長い間、家の中に閉じこもつて外に出ず母も、祖父も、たまには遊んで来たら、と心配氣にうながす程でした。

二 變態の誘惑

でも僕の変態性は又々誘発する機会にふれたのです。偶然と云えばそれまでですが、誠に不思議な縁の糸が綱を展げていました。

秋も深まつた一日。黄昏の町を裁判所前から公園の方へ歩いて居りましたが、その公園の中で尿意を催し、樹立の一隅にたてられた便所の中に入つたのです。

荒れた、もう長い間手入のしてないその建物に風雨に曝され板という板は、割れたり、故意に汚されたりして居りました。滅多に公衆便所に來た事のない僕は、その壁の落書きにかつと上氣してしまひました。

その時です、「おい」と太い声で呼ばれてギクツとしました。開かれた扉の外に、茶色つばい背広

に、チヨコレイト色のラバをかけた二十七、八の男が濃いグリーン

のサン・グラスをかけて立つてゐるのです。

僕は突如としてどうしていゝか、考へもありませんでした。「出ろよ」命令的な口調を残して人影もな

い公園の暗い樹立にその男は歩いてゆくのです。仄かな香水が匂います。幅広い肩、時々ふりむく顔は、眼鏡故はつきりと分りませんが鼻すじも、唇元も彫刻の様に端正なのです。樹立の蔭に枯芝に青年は腰を下すと、ポケットから煙草を取り出しました。

「坐れよ」ぶつきらに云つて「お前、青木をしつとるだろう」というのです。「家の職人です」「お前が可愛がつて貰つた男だな」青年はにやりと笑つたのです。

「俺は三日程前に山科から帰つたが、行く所はなし、金はなし、青木にお前のこときいたので今朝も二回程お前の店へいつたんだ、俺は青木に何もかもきいてゐる。お前も案外やるじやねえか。青木を巧くあしらつてしまふ所なんか、ハツハツハツ」

青年の言葉は脅迫じみてゐました。「青木はお前に惚れてゐたんだな」

幼い時から女の子とばかり遊んだ僕は、いつの間にかやら、男でありながら同性の男を慕う男となつてしまつたのです。そして長ずるに従つて、いつとはなしに男の肉体の味を知るようになったのです。それは僕の悲しい生れながらの宿命だつたのです。

だなあ、いつも言つてやがつた、お前のことを。面会に一度位はいつてやれよ、おい」サン・グラスがきらりと光つて僕を見ました。彼は佇つたまゝ呆んやりしてゐる僕を引つぱる様に引よせました。

彼は僕の両肩を抱いて「青木が嫌になつたのか青木は殺そうとしてもお前を殺せなかつたそらだ手がすべつたといつてゐた。青木はお前を死ぬ程思つてゐるのだ。お前の様に美しいのが、離れてしまつて見向きもしなくなれば、俺だつて青木の様になるさ」彼の息は僕の頬に燃える様でした。

「だが青木は一寸帰つて来やしない。お前にや幾らでも男がいるだろうし、のんびり出来る矢先だつたろうが、俺はお前を自由にさせやしない。俺のものになるのだ。厭なら厭でいゝ、そのかわりお前の立場も、頼も今迄の様に澄ましていられなくなるまでだから」

彼は青木にすべてをきき、僕を狙つてやつて來たのです。彼は両手に力を入ると静かに唇をもつて來ました。彼の頬の鬚がちくちくと痛く刺す様です。彼は青木よりも執拗でした。馬場の出現によつて、僕の静かだつた日常は一変してしまひました。馬場はいつも命令的でした。

彼は逢う度に「金を呉れ」と云うのです。そのため僕は馬場の身体に引きつけられ乍らも、何処となく感情がこわばつてゆくので

したがそれも暫くの間でした。馬場に渡す金額も相当なものでした。祖父や母の不審の眼に僕は耐え切れなく、馬場に許して呉れと言ひましたが、馬場は一笑しただけで更に難問題を出しました。

二人で旅に出ようといふのです。僕はすつかり、おびえてしまひました。

「お前が家にいてもいゝさ。一件をばらせば、どうせ居れなくなるのだ。俺はお前が、俺なしで我慢出来ないことは分つてゐると同時に俺もお前なしで居れない身体なのだ」と耳朶をかなりするるのでした。底しれない深い谷間をずるとすべり落ちてゆく思ひは自嘲に変わり、祖父の手提金庫から、通帳と印鑑を出して、十五万円の金を握ると、其の儘二人で旅に出たのです。

そして山陰の温泉町で暫くなにもかも、忘れた様に遊び暮らした彼は居も夜もなしに、僕の身体を求めたのです。彼の僕を愛撫するために喰ひ込む様につけてゆく幽型に、身体中青や紫の斑点が一面に散らばりました。

彼は裸体の僕を見たゞけで興奮し、より強い傷痕を加えてゆくのでした。その度毛深い彼の胸に腹に足に、僕はしがみつき乍らいつも、ほとぼる様な熱氣にもだえるのでした。

持金も使いはたし、寒空にふと京の街や祖父、母が恋しく思ひ出

れる時、何度馬場から逃げようとした事でしよう。でも馬場はそんな僕に、動けなくなる程の私刑を加えました。夜更けの街に村に、僕は夜盗を働く馬場の見張をさせられ、その金品によつて果てのない旅に、九州から四国へと一度も踏んだことない地をさまよい廻りました。

三 囚人男色記

岡山から大阪行きの汽車で大阪駅前へ出たのは深夜でした。そこで不審訊問にかゝり、所持の贓品から足がつき、とうとうそのまゝ逮捕されてしまいました。馬場は累犯で懲役三年六月、僕は一年でした。僕達二人は間もなく京都に移監されたのです。祖父と、母の面会に、僕は唯哀しくなつてろく／＼物も云えませんでした。山科で青木に逢つた時は何も云えずうつむいてしまいました。僕は新入房で糸つなぎをしていたのです。彼はよく肥り、青い囚服に掃除夫という腕章が巻いていました。青木は僕達新入囚の収容されている一舎房の掃除夫でした。「坊んどろしたんや」家でいた頃の様に青木の眼は温さに溢れていました。僕は馬場とのことを話したのです。「悪い奴にかゝつたな。僕も悪かつたあんな奴に話したのがもて、心配せんでもええ、一年や

つたら、半年で出られる」何にも他のことに触れず、汲々と黙めて呉れる青木に、落まなさで一杯でした。

考查の結果、僕は思いがけなく考查夫となり、考查室の事務の仕事に就く様になつたのです。

「坊んは幸や」青木が心から喜んで呉れたのですが僕が考查に来て最早や一生変りない自分の宿命というものをばつきりとしつたのです。馬場は構内作業に廻され、和日土方の様な仕事に就いていました。陽に灼けた肌を丸出しにしながら、僕と視線が合う時、馬場はにらみつける様にするのです。担当に連れられて考查のために僕はよく工場を廻りました。考查室は課長と、担当（看守）が二人、そして僕との四人の小人数です。簡易事務室というのがありました。そんな所だろうと思ふ位でした。でも仕事は仲々重要で、きびしい適格検査が此処で行われるのです。その上、工場、医務、事務、計算、洋裁、大工、農耕等々の方面へあらゆる仕事に服務さすのです。考查での僕は只、担当より与えられる帳簿の記入をするだけでした。

娑婆のオフィスと変りない室で事務をとるのはほんとうにこの自分囚人なのだろうか、と思ふ位でした。三月目に三級者に昇進し五カ月目には独歩になつたのです。今迄担当づきでなければ歩け

なかつたのが、自由に歩ける様になつたのです。特殊の仕事についてたためでしょうか、僕の真面目さが認められてでしょうか。兎に角特別進級でした。その間の僕は今迄の内では一番清らかな時代でした。馬場は未だ四級でした。僕が独歩の腕章をつけ、靴をけき露降りの服に、帽子をかむつて歩く時の恰好は風爽としたものでした。

二千人余りの囚人の模範者として選ばれるのが独歩です。僕の外に十二人ありました。でも僕が最年少で、上は五十才から下は二十四才まででした。独歩はそれぞれの工場其の他の囚人の代表者であり担当の補助代理でもあるのです。独歩

は朝、囚人の工場へ舎房より出てゆくのを、夜は工場より舎房へ入るのを整理する担当の応援をするのです。が、或る朝、腹痛のため変つて貰つた秋田独歩と、僕

は急に親しくなりました。

秋田独歩は二十四で年も若く何となく一番好感の持てる独歩です。彼は強盗で六年の刑でしたが、もう三年も務めているのです。或る麦秋の頃でした。「君とよく話している様になつて、皆にからかわれて困る」

と、えくぼの出来る頬を押え乍ら秋田は無邪気に言うのです。

秋田の言葉でなくつても、囚人達の淫らな眼付はよく分つていました。僕は独歩風呂に入つた日です。独歩はいつも思つた時、ひとり気儘に風呂に入れます。その風呂番に三級の土田という三十七、

入の男がいます。彼はよく反則を起すので仲々進級しないのです。もう二年半も刑務所に居るのでその男が僕の入浴している所に佇んでいて動かないのです。

「お前はええな、楽な所で働いて進級は早いし、煙草も喫つとんのやろ」言葉は横柄でした。独歩も僕の様におとなしなかつたら恐ろしくないでしょう。独歩となれば入房の際検査はありません。で反則者がよく挙げられ、独歩から、四級へよく降下するのです。囚人は勿論たばこは喫えませんが、独歩は何処かで工面してはこっそり喫う者がいます。「僕は喫えへ



ん、家で居た頃から」土田は「ふん」と鼻の先でいつて「秋田に可愛がつて貰つたら、何にもいらんやろ」といふのです。「なんでもんな事いうね」と怒ると、「なんでもて、えらい評判や」阿呆なこゝと、いわんとけ」僕はそいうなり飛出したのです。土田は身体をしずくをきれいに拭き切らず、服を着ている傍に来て僕をからかう様に「俺に抱かしてくれんか」といふのです。「阿呆」僕はたゞきつける様に云うと、服をもつて廊下に出て着ました。土田は廊下まで出て来ません。又出られないのです。

その事を思い出して僕は一人でおかしくなり笑つたのです。秋田とは囚人間の噂に輪をかける様に親しくなり、入浴場での土田の態度に不安を持っていた僕は

秋田を誘い遁入る様になつてから土田の誇張もあり、だん／＼大きくひろまり、誰しらないものがない様にまでなつたのです。

僕は長い間押えていた情熱を再び燃やし始めました。

秋田と僕はよく浴場でふざけ合いましたが、秋田の鼻葉の煙草がきいてかいつも土田は、二人の見張りに立ちました。でも秋田は僕の快感を知る術は分りませんでした。単に僕との噂に満足しているだけなのです。僕は積極的に迫つて来る他の独歩達とも接する様になりましたが、どれも自己満足だけでした。そんな時、よく見かける馬場が無性に恋しくなつたのです。或る日僕は作業場に出掛けてゆきました。馬場はたくましく真つ黒になつて働いていました。六月の暑い太陽が半裸の背に光つて

油汗が流れているのです。土運びの最中です。破れた地下足袋に色褪せた青いズボン、彼はちらと僕を見ましたが、直ぐ眼をそらしました。

担当が立つて彼等の作業を監督して居ましたが、近づいて行く僕に、「丘、何だい」と尋ねました。「馬場に一寸用事があるのですが貸して戴けませんか」

考査用務と思つたのでしよう。

「馬場、一寸こい」と呼びますと氣易く「考査に何か用事があるそうだい」といふます。「ちや担当さん連れてゆきます」挨拶して僕は馬場と並んで耕作場を横切り舎房内に入りました。この刑務所は中央に監視台があり、そこから放射線状に六つの廊下が走り、両側が居房になつていきます。工場はこの廊下の突当りの鉄扉の向うに脱

衣場を抜けて続いています。独歩が下級囚人を連れてくるのは所内では認められていました。

監視台の担当に挨拶し僕は鉄扉を開け、又元通りに閉めると脱衣場には入りました。こゝで毎朝、舎房着を脱ぎ工場着を着て工場に出るのです。森閑とした部屋の中に突立つている馬場を前に、僕はもう辛抱出来ませんでした。からからに乾いたのどに生唾をのみこむ様にして馬場を見ました。

僕は彼を抱きつきました。土臭い匂いが鼻をつきます。彼の裸体にしがみついて、僕は強くつよく唇を吸つたのです。

脱衣場が僕達の逢ひきの場所になりました。馬場はvariなく大胆でした。

僕は彼に「今度指紋事務をやる様になるから、そうなれば一人指紋夫を採用するそうだからその方にうまく課長に話してやる。そうなれば同じ所で仕事も出来る」そう言つて煙草を喫わしたり、飯を喰べさしたりしました。限りある食事に囚人達はいつも満腹感はないのです。

独歩は腹が減れば、炊事で自由に喰べることが出来ます。勿論公然とはありません。或る日僕は課長に、馬場をそれとなく指紋夫にはと話して見ました。課長は「丘の共犯者だらう。それにあの男は累犯者であり、それや一寸無理だな」と笑つて断られてしまいました。

馬場もまつていた様ですが僕の返事に対して別にがっかりしませんでした。

午の食事の一時間はいつも、僕は馬場と過しました。馬場の肉体は僕の肉体でした。時間が来て、明日まで又逢えないと思えば、二人共その切なさ炎の様な感情が狂いもだえました。

日曜はそのかわり、二時間でも三時間でもたのしく過せました。青と赤の囚服のかけられた脱衣場の薄暗い中で、高い天窓のほのかな光もさける様に片隅によつて淫猥がもつれ合い痴戯の限りをつくすのです。

木犀の花の胸に沁む様な日、僕は出獄しました。三カ月の仮釈放を貰つたのです。出る前僕は馬場に逢いました。

馬場はちつとも寂しそうな顔もしません。物足りない位です。彼の様に変情の変化を見ない男を僕はしりません。多分彼は、彼以外愛することの出来ない僕をしつてゐるからでしょう。手紙だけ呉れ」といつて「余り遊ばなよ」といふのでした。家に帰つて二月目正月過ぎて間もなく母のすゝめで結婚しましたが、女に対して愛情のない僕との間は、どうしてうまく行く筈がありません。でも妻は人形のように愛のない生活にもめげず、未だじつと居ります。僕は妻との生活に圧迫を覚える。と何の前ぶれもなしに旅に出るんです。

(終)



漫画

悩ましき脚線美

山 彫 三

娘「柿貰つたら、向うに行くのよ」

子供「ウーン、とても凄いな」

妖淫
奇話

名色聴症患者

えいぢろ 画

ハ瀬田音児 竹中



一、読めぬラブレター

バサツ、バタリ——バサツ、バタバタ。さつきから窓硝子の外側で団扇みたいなものが当てるらしい。

浜中三吉は「ウーム」と大きく寝返りを打つて、やつと目がさめた。昨夜は隣室の先輩と一杯機嫌で千日前のストリップショーを見てからヘンな気になりついフラク

とも一つヘンなムニヤ／＼方面へ足を伸ばし、まだ童貞の癖にお白粉くさい町を、さん／＼ヒヤカシ歩いて終電で帰ったのだ。そのせいか枕もとの置時計は十一時近いのにまだ眠い何だい今の首？——

彼は起き上つてカーテンを開き窓硝子を明けた。外は如何にも日曜らしい秋晴れの好天気はるか窓下の唐辛子と鶏頭の紅が目にしみる。彼の部屋は三階である。××病院の独身者寮、三階建のテツペンに住む彼を先輩の医者や、すぐ向いの寮に住む看護婦達は屋根裏三ちゃんと呼ぶが浜中三吉は漫画の三ちゃんみたいな不精ツたらしいところは一つもない。ニュースタイルのズボンの折目も正しい二十四才の美青年。今春大阪医大を卒業した美貌の実習期間生だ。もう少しすれば医者のヒョコになる男なのだ。ところで日曜の朝、三階の窓をたゞく超

ヒモに止つて苦しそりにバタ／＼やつてゐる。遠げようともしないのですぐ揺まえられた。羽から血が流れていた。空気が何かでやられてるらしい。

医者の部だつて部屋には一寸した外傷の手当てをする薬ぐらい持つてる。彼は傷口をオキシフルで洗いモナフラシン軟膏を塗り綿帯でく／＼つてやつた。そのとき彼は鳩の細い足に小さな紙片が結びつけてあるのに気がついた。

開いてみると半紙大のうすい離皮紙に鉛筆書きの小さい字がギッシリ詰つてる。

五日間お逢いしなかつたら私けもう十年も待たされた気がしています。ジェイン夫人の嗜血も昨日すみしました。今はもうたくましいジョントマスに面会する夜を夢見心で待つてるの。今夜はどんなことがあつても万陰困の万通晩也真へ来て下さいませ。やはり時刻は天にしておくわよ。あなにたよつてふくらむことを知つた嫌える麻蓮万阿のときめきをお察し遊ばせ。あられもな／＼今朝からはもう——

以下まだ相当長い文句が続いている。どうやらこれはラブレターらしい。だが何という訳のわからぬ手紙だろう。おまけに差出人や宛名も書いてない。多分、差出人と

宛名はこの傷ついた鳩が知つてゐるから書く必要はなかつたのだらう。素晴らしいぞこれは——と三吉は思つた。

日曜の朝の青空から舞い込んできた原始的な無料航空郵便。彼には心あたりのない他人から他人へのラブレターにすぎないがジェイン夫人とは何者だろう？ ジョントマスとは誰だろう？ 万陰困とは？ 万通晩也真とは？ 天の時刻とは？ 意味のわからぬ文字の行列が随所に出てくる。きつとこれは暗号でや／＼こしく煙幕を張つたものらしい。探偵小説なんて面倒くさくて大嫌いの三吉だが俄かにこの文章を意味のわかるように読みこなしたい好奇心が湧いた。

朝食を喰いそこなつた空腹をかゝえて寝ころんだまゝ、さ／＼に読み方を考えてるとき「おい、起きてるかい三ちゃん、煙草をきらしたんだ、一本たのむ」

廊下で声がするとノックもなくドアが開いて隣室の先輩竹村幸平が水色の地に赤い格子縞のついた派手なバジャマで這入つてきた。これも今まで眠つてたのだらう、フチなし眼鏡の奥の目がシヨボ／＼している。

「やあ昨夜は、どうも——」三吉はそべつた姿勢乍ら起きなおつて机の上のひかりを彼の方へ差し出した。医者のヒョコの竹村はドカリと大あくらをくんだ。女物みたいなバジャマの裾がめくられて学生時代スポーツで鍛えたらしい赤銅色の太い脛がニユツと出る。真黒い毛むくじやらの動物的な匂いのする足だつた。ゆつくり煙の輪を吐いた彼は机の下にモグリこんでる綿帯だらけの鳩を見つけた。

「おや、こんなところに俺んとこの鳩が帰つてるぞ」

「フーム、あんたんとこの鳩ですか、こいつは……フーム——こいつに変な手紙が附いてたですぜ、これなんですよ、悪いと知りつゝ失は読んでしまったんですがね、これやあ一体何のことなんです？ チンブンカンブンさつぱりわからんのですが——」

「やつぱりね、ハッハハハ、もう読んだのか、仕方がないなども、しかし解らんだらう？ わからんのが当り前さ、俺も一寸その女にはヨリ／＼してるとこだからちようど好い折だ。君にゆづろう、君はまだ女を知らないんだから、そんな女に最初当つておくと後でいろ／＼の女性と交際するとき非常に参考になるぜ、実はこうなんだ」

まるで猫の子でも呉れるみたいな呑気な口調で話した竹村の説明によれば、つい半年ほど前までこの病院の外科病棟に宇井青江という看護婦がいた。

外科医長の多治見博士など大手術の執刀にとりかゝるときは彼女が居なければ機嫌が悪いと言われたほどよく気の利く少女だった。年は十八才、健康そうな丸顔で、快活な気性とビチ／＼はね返る小鮎のようにひきしまつた乳色の肉脉を持つていた。とりわけ目が美しかった。実に涼しげなみづ／＼しい大きな瞳だった。その女が年や顔に似合わぬ多淫な少女で、人目を忍んでは患者の誰彼となしに関係する。同僚の金を借りつばなしにする。

おまけに寝小便のくせと盗癖がある。更に奇妙なことには時おり——これは彼女の精神が特殊な興奮状態にある場合に限るんだが——自分の名を呼ばれると、その一瞬に周囲の事物一さいが淡紅色や黄色をおびた緑色に見えてくるという不可思議な幻覚症状を起す。こんな異常な少女けたいが

い智能指数も低く白痴に近いのが普通とされているが青江はその方でも極端に白痴的な半面と常人以上に鋭い才気の閃きを見せる半面があつて、異常心理学の研究材料には持つてこいの女だった。とにかくその魅力的な明眸や可愛らしい話ぶりを聞いてると暗い不潔な印象など全然なく、明るい清潔な感じがしたそう。

医者のヒヨコの竹村幸平は最初彼女を看護婦としてでなく一人の患者として研究するために近づいた。それがどうも誠に妙な仕題に相成つて、ミイラ取りがミイラになつたといふのか、いつの間にか青江の性の対象の相手を勤めさゝれるようになってしまつた。他の患者や看護婦から噂が拡がる。以前彼女の相手をした入院患者から非難の声が上がります。待つてましたとばかり彼女と同室に住む看護婦たちからフトンが臭くてたまらないと苦情が出る。そのころから頻々と盗難が起り出した。どうせクビになるなら今のうちに——と破れかぶれになつたものらしい。

初めのうちは何のかのと彼女をかばつていた多治見博士もついにシャツボをぬいで青江は解雇になつた。そして明石の父母のもとへ帰つたがその後竹村との関係はまだ続いている。

青江の方から二日目か三日目に電話か連達で逢う場所と時刻を知らしめる。そのにに応じていた竹村もあまりに執拗な相手に興ざめて、こゝ一月ほど逃げ廻つていた五日前の夜、彼の部屋へ乗り込んで来た。そして

「別れるものなら別れて御覧、私はY新聞の社会部の記者に心安い人があるんだから貴方の医者としての前途が滅茶々々になる

記事を書いて貰うから、ほんとに腹の立つ医者のくせに何よ貴方は——うまく私をだましこんで処女を奪い、さん／＼おもちやにしておきながら今更になつて逃げるなんか卑怯よ、卑怯者！ 貴方は、色魔！ 色事師！ 女たらしの強姦医オ！」

と大声でわめき散らされ、見かけ倒しで気の小さいヒヨコ医者の竹村はちぎみ上つた。処女が聞いて呆れらあ、俺の前に何人男を喰つたか自分でも数えきれねえくせにそれに俺は強姦どころかあの手この手で無理矢理にスエ臍を喰わされたんじやねえかよ、と言いたい文句が山ほどあつたが、捨バチ娘をこれ以上怒らしたら何処で何を喋り出すか知れないので、

「まあそり大きな声を出すなよ、静かな声でも話は出来るじやないか、外の部屋の手前もある、頼む、頼む」

となだめすかしてゐるうち、つゝまたまた味な気分になりヨリを戻してしまつた。

幾度となく挑みかゝる彼女を満足させ、グツタリ眠つた竹村が翌朝、洗濯ダライへ尻餅をついた夢からハッと眼さめた時、いつの間に帰つたか、彼と一つ蒲団に寝てる筈の青江はもう居なかつた。そして彼が脚氣の研究の実験に使うため、ひそかに病院の動物箱から貰つてきて飼育してゐる一羽の鳩も一緒に消えていた。

青江の奴、やつぱり変つてやがる。盗むにことを欠いて妙な物を持つて行きやあがつたな。うと思ひながら、どうも腰のまわ

りが冷たいのでパジャマの上から尻のあたりを撫ぜまわすと、ビショ／＼濡れてる。アレレ？ こりや一体何だろ？ 急いでパジャマを脱ぎ濡れた所へ鼻を押しつけてみた。少々臭い変てこな匂いがする。昨夜のアレかな、いや幾ら何でも朝まで乾かずにいる筈がない。

さてよ——ひよつとしたら？ 竹村はばつと掛蒲団をはねのけた。敷蒲団の真白い敷布の一箇所、ちやうど今朝がたまで青江が寝ていたあたりに大きく描かれたまだ湯気の出るような朝鮮の地図。うわア、ひでえ事をやりやあがつた、寝小便の大洪水だい……彼は思わずギョッ／＼のグアとなつて悲鳴を上げた。

それから今まで一週間足らず、どうやら呼び出し電話もなく寄りつきもしないからあれ位の被害で厄払いが出来れば先づ幸せ



と喜んでいたところ、青江は彼の部屋から盗んだ鳩を窓の郵便屋に使った訳である。

二、読めたラブレター

伝書鳩——どんなに速く飛び去つても必ず自分の巢を忘れず帰ってくる切ない鳩の本能。この特異性を利用して古来これを戦場に使つたり密文の使者に用いた例は数限りない。宇井青江も一寸した思いつきからこれを真似たものかも知れないが、ヒヨコ医者の竹村に実験のため病身にされた鳩が、たとえ僅かに閉石から大阪までの距離とはいふものゝ、弱つた羽を懸命にばたかせ、途中、心ない空気に傷つけられてもなお一途に、この窓の窓を慕つて帰つてきた、いぢらしい心を思うとき、話を聞きながら三吉は鳩の真意がそのまゝ青江の哀れな女心に思えて、何故か彼女が純情な乙女に考えられ、目の前の竹村が不道徳な悪魔みたいな気がした。しかし竹村がいくらヒヨコドクトルでも彼より先輩でありまだタマゴ的存在なんだからあまり威張つた口をきくわけにいかぬ。

「で、この手紙の文句はどんなに読むんですか？」

「それじやて、その文句がまたなか／＼難かしい。暗号を教えられて読み馴れてる俺にも時には判断のつかんことがある。何時もくる連達でさへ別に暗号にしないでいい普通の文句まで暗号で書きまくる癖があるんだ。今度は鳩の足にく／＼りつけただけのいつ他人に読まれるやらわからぬ危険性のソンドンにある手紙だから特に読みにく／＼してあるに違いない。一寸こちらへその手紙をくれ」

竹村は派手なバジヤマの

腰へ鉛筆書きの腹皮紙をひろげ、消えかゝつた文字の透かしたりしながらボツボツ判読して聞かした。

それによる意味の通じぬ箇所で傍点の打つてある漢字は音読して上の音だけを拾つて読めば個有名詞を

除きドイツ語か英語か中国語か何かになる。それをまた日本語になおせば意味が通じる。たゞし「ン」の字だけは「運」の字を使つてあるそう。傍点の打つてない漢字で意味のわからぬのはそのまゝ全部発音して読み常識で判断するという。そうすると万陰図は、マン、イン、コン、で各漢字の第一音だけを読めばマイコ、つまり舞子であり、万通也真は、マン、ツウ、バンヤ、シン、だからマツバヤシすなわち松林となる。天は傍点が打つてないからテンとそのまゝ読む。この場合は時刻を意味したものだから英語のテン、一〇のことで前方の文句に今夜とあるから午後十時の事と判読する。運万阿は、マン、ン、マン、ア、でマンマアと読む。これはドイツ語だ。日本語に訳せば乳房となる。ジェン夫



「宇井青江、ウ、イ、ア、オ、エ、うーいーあーおーえ」
夫が妻に呼びかけるような親しい聲音で呼んだ

のを聞いてると三吉は顔が紅くなつた。彼は、女というものはたしかに男より秘密を好くというがこれを書いた宇井青江という異常心理の少女はもう秘密を好むとか秘密そのものに興味をもつなどの類ではない。秘密の溺愛者で色情狂なんだと思つた。

秘密のベールをかむり暗号の仮面をつけ言葉の声色を変えた世界で、事與彼女は男も顔負けの大胆露骨すべき性の挑戦状を平然と書きつらねている。それを全部この雑誌に竹村の口を借りて説明しながら書いてゆくとなると発売禁止になるならぬはともかく、異常少女の手紙が芸術作品でないだけに作者の人格を疑われるおそれがあるから残念ながらやめておくが、ヒヨコドクトル君が全文の中ばくらいまで読んでくれた

とき三吉はもう呆れてしまつて。

「竹村さん、もう好いですよ。僕は聞かして貰わなくて結構です、どうぞ貴方の部屋へ帰つてゆつくり読んで下さい」とビリオドを打った。

「そうか、じや止めておくかな、ラブレターなんかいくら読んでみたところで空き腹はフクレねえかな。どうだい、食堂へ行こうか？、もう風飯が出来てるだろう。」

「ええ、行きましよう。ところでその字井青江という女は語学の方が大したもんですね。その手紙でみると――」

「アツハハハ、買いかぶつてはいかん。字井は此処の看護婦養成所の入所試験のとき英語は二十五点、国語が四十点という落第点だつたんだぜ、まともに看護婦になれる成績じゃなかつたよ。誰か身内の者でも裏面工作してやつと入所出来たんじやないかな。あの女は、まともな語学は何一つ出来ねえくせに半端な外国語のキレハシだけは何処で仕入れたか突によく知つてる」

「そうすると語学の才能と、いろ／＼他国の言葉のハシクレだけ知つてるといふことは別なものなんですかね」

もう一度、三吉は竹村の投げ出した手紙を手を取つてみた。

難かしい漢字には誤字が多いし、文章にしてもひどく乱雑だ。初めの書き出しは「とても丁寧なのに途中ごろでは「天にしておくわよ」なんてゾンザイな文句が飛び出す。それから「お察し遊ばせ」などと最上級の敬語にまた返つてくる。字も決して上手な方ではない。こりやだいぶん変つた女だな、三吉も軽い興味を感じたが、そのときは字井青江という見も知らぬ色情狂の興味より空腹の方が痛切な先決問題だ

何しろ朝からさだ何も喰つてない。ヒヨコとタマゴの二人は顔も洗わず食堂へ急いだ。

がらんとした食堂で、二人は風飯一番乗りをバクついた。眼鏡の奥から悪戯っぽい目玉をちらつかせ、口をモグモグやつては何か言いたそうに三吉の顔を盗み見ていた竹村が、とう／＼冗談とも本気をもつかぬ口調で、

「おい三ちゃん、物は相談だがな、俺の身変りに今夜舞子へ行つてみないかい？俺はもう彼奴には顔を出してゐるんだ。あの女は男に饒えてゐるんだから別に俺でなくつた男なら誰でも好いんだぜ」

ガイと箸を伸ばしてきて三吉の皿から卵焼きをムシヤリ頬張つた。まさに、アレヨ／＼と言う間だつた。自分勝手に女と卵焼きを交換した量見かも知れぬ。少々は興味の動いてた三吉もこの突飛な註文には面喰らつて、

「そりや無茶ですよ竹村さん、その女の好きなのは貴方なんだから一面識もない私が行つたて相手にせんだらうし、私だつてまだ盗食こそ守つてゐるがイザ鎌倉となりやあそんなコワイみたいな女を相手にしないで女日照りじやあるまいし、不自由せんだけの自惚れも自信もありますよ」

卵焼きを喰われた腹イセでもあるまいが三吉はムキになつてことわつた。

三、月見草は夜ひらく

前夜の夜遊びが悪かつたか、三吉から巻き上げた卵焼きの天罰か、その夜から竹村ヒヨコクトルは悪性の下痢が續いて忽ち医者から病人に転落、寝込んでしまつた。

おかげで二人とも舞子へ行かなかつた。

それから二週間ほど後。三吉は京都四条河原町に住む兄の結婚式に列席してグデン／＼に酔つばらい、浜村温泉へ新婚旅行に旅立つ兄夫婦を京都駅の山陰ホームで見送つてから大阪へ帰るべく国電に乗つた。

ふと酔いざめの眼裏さに眼をさし車窓を覗くと、海が見える、島が見える――。ハテナ、京都から大阪までの間に海はなかつた筈――。不審の眉をひそめるうち、次ぎに停つた駅が何と驚いたことに垂水だつた。こりや寝すぎた、大変な乗り越しと、

さるで危さんに負けた鬼みたいに大あわてで座席を立ちドアへ駆けつけたら彼の鼻先で自動ドアはびしやり閉つた。まことに文明の利器は不便である。ええい、何とでも勝手になりやがれ。三吉はムクテ釣革にぶら下つた。

空席は沢山あつたが、また寝込んだら今度こそ困ると思つたからだ。ようやく次ぎの停車駅舞子のプラットホームに下りた。

改札口で乗乗証明を頼み、また大阪へ引き返えそうと考へながら無意識に駅の電氣時計を見上げた。

内側に、ほのぼのとオレンジ色の灯がともつて、満月みたいな丸い大きなスリ硝子の文字板へ、二本の針が示してゐる時刻は九時五十五分。それを見た瞬間三吉は気が変つた。外へ出て松林を歩いてみたくなつた。

竹村幸平のそこへ字井青江が伝書鳩を飛ばせて誘いの手紙を寄こしたのは半月も前だから、今ごろ松林をウロついたところで喧嘩過ぎの棒ちぎれで、さつぱり意味ないようなものの、此処まで来たついでに彼らの逢い引きの予定地だつた場所をどんな

処か、よそながら一応拝見しておきたい気がしたのだ。

乗り越し賃を払つて改札口を出るとすぐ汐の香のする松林である。

人気のない暗い木下闇を抜ける。

月の明るいアスファルトの道に出る。

ハークツション――でかいクサメをしたさぞ今ごろは兄貴の奴、うまくやつてやがるなと思ふ。

秋の夜の潮風は酔いざめの首すぢに冷たく足もとの青白い海も冷たい。本物の月はなく／＼電氣時計のお月さんみたいに暖かそうな色をしておらん。ヒヂ鉄砲の好きな尼さんの頭みたいに薄情に澄ましてる。

何だか三吉は、こんな処でウロ／＼して二十四才の自分の青春が可哀想になつてきた。猫の子一匹通らぬ舗道を銀色の海に沿つて歩いてみる。あまり寂しかつたから

「道という道はすべてローマに通ずれば、ドンキホーテ上デタラメに歩け！」とか「月が鏡であつたなら、鳴く小鳩よ何とかなるよ」なんて好いかげんな文句を出放題に怒鳴り散らして歩くうち、酔つた頭もハツキリしたし足が疲れた。先輩のかつてのランデブー予定地に立つて何日君再来の夢を空想するなんて気分は案にしたくも湧きそうにない。駅の方へ引き返えす。何ぶん足が疲れてゐるから少しでも近道を、と松林を通り抜けることにした。

こぼれ松葉の砂の上に曲りくねつた松の巨木が影を重ねあつて、一足毎に靴が砂へメリ込む厄介さは、アスファルトを歩くより手間どつた。華僑の某富豪が建てた、満朝文化の粋を蒐集してると聞く移清閣――あの青銅の尖つた屋根のちやうど真正面あたりまで来た時である。



廿六

松喰虫のために枯れ太い幹を中ほどから切られた松の根もとに凭れて立つ一人の若い女を見た。

そこだけ梢のない天上から月光が無限にふりそそぎ周囲の闇を大きく切り抜いている。むかしの竹取物語には、青い竹藪の中に五光を放つて現われるカグヤ姫の囁があるが、このとき彼の眼には、木の間洩り地上を照らす直径二米ほどの、その月光の円までが女の体から闇を破つてほとぼしり出る五光のような気がした。

月光は魔術使いの美容師である。屋見れば案外それほどの顔だちでないかも知れぬが、気取った姿勢で月を浴びて立つ女の灰白い横顔は冷たいほどの美しさに冴えきつていた。そのくせ季節遅れを咲き残った月見草の精みたいな哀れさを感じるのは何故だろう。夜目にもハッキリ

見えるその服装のせいかな知れない。

夜露をいとおつてか、黄色いナイロンの風呂敷をネツカチーフ代りに頭から引つかぶり、頤で結んだ女は朱色のバラの花を散らした青つばいワンピースを着ていた。うすら寒げな小柄の肩をそびやかし、腕を組んだ胸のあたりのふくよかな二つの丘が妙にみづみづしく情感をそそる。

月光が砂地に描いた光の円をよぎつて女の前を通りぬけかける三吉へ、

「兄さん、どこへ行くの？」

何の邪気もない朗かな声だった。聞き流して更に足を早める後から追つかぶせて、「逃げるの？——兄さん」

ときた。いつもの彼なら何と言われたてこんな場合は無言のまま三十六計をきめこむが、今夜は違う。何しろ兄貴の婚礼で肉体の郷愁を感じてる処へもつてきて、まだ少々アルコール分が体の節々に残ってるんだ。もつとヤヤコシイ表現をすれば、形をなさぬモヤモヤとした仄かな情念と人恋しい感傷が、時雨のように霧のようにやるせない胸の底に煙っているのである。勇気を出して足を停め、首だけ廻れ右をした。

「何か用——？」

ニヤリ、笑つて訊ねてみた。別に訊ねなかつて今ごろこんな処に、たつた一人居る若い女が通行人へ兄さんなんて心安く呼びかけたら、先づ普通の人間とは思えない。聖徳太子の幾枚かの御利益で必ず何とかなる品物と相場がきまつてる。それを承知の上で、何か用？、と訊いた三吉もたしかにトンマ以上の何者でもない。

女は近寄つてきた。

「さみしいのよ、少し話して行つてよ」

低い甘えた声だった。聞いた途端、身内が

ゾーツとなり両足にガタ／＼震いがきた。

そのくせ心の何処かで変な好奇心が動く。話すだけなら別に構うまいと思つた。何だか少し不安な気もする。この間、色街をヒヤカシた時は先輩竹村と二人づれだったから大いに気強かつたが、どうも一人では心細いのだ。とは言ふものの竹村だつて、彼と同じ生れ故郷の、浜松中学時代より、色事と蹴球にかけては俺の腰から下は天下無敵と称し、盛んに色男ぶつたり空豪傑ぶりを発揮してるが、イザとなれば何事によらず案外気が弱く、意久地のないお人好しであることを、三吉も充分承知してるんだが——。

そばへ寄つてきた女へ三吉はオツカナビツクリ、話しかけてみた。

「君は毎晩ここに居るの？」

「ええ、雨さえ降らなければね」

「そんなら一寸、妙な事を聞くようだけど十四五日前の晩、ここへ君と同じ年ぐらいの女が一人来てたの知ってるかい？」

「さあどうだつたかしら、そんなこといちいち覚えてないけど」

「知らないかなア、先々週の日曜日、ここで待つてた宇井青江という女——」

「ええ？、宇井やて？——、あんた誰かいな、ちよつと——」

女は驚いた拍子にヨソイキの標準語から一足飛びで大阪弁の平常着へ着変えた。よつぽど吃驚したとみえる。

「その口ぶりだと知ってるんだね？」

「宇井青江いうたらワテやけど、あんた一体、誰やねん？」

「ふーん、君が宇井さんか——、僕は××病院の浜中三吉」

「まあ、××病院の方でつか、あんたは。」

ほんなら竹村はんいうタケノコ先生知つてはる？」

女が身近く詰めよつてきた。

三吉は妙な気がした。竹村を知つてるところをみると、これは行きずりのペン助の戯言でもあるまい。本当にこれは宇井青江なんだらう。そうするとこの女は何の用で此処に居るんだらうか。二週間前の日曜日なら、宇井自身この場所を指定したんだから、此処で、来もせぬ竹村に待ち呆けを喰わされてションボリ立つてゐるに不思議ないが、あれから毎晩ここで、来るアテもない相手を今も待ち侘びぬいてるとすれば、一夜の待ち呆けが、往年の渋谷駅に旅ける忠犬ハチ公と同じく一種の習慣になつたものだらうか。それとも根強い女心の執念で、竹村が来なければ永久に、例え十年二十年でも待ちくたびれて死ぬるまで毎晩そこへやつてくる気なんだらうか。いや、いくら何でもそんな非常識なことがあつては堪らない。伝言鳩の誘いが駄目なら電話なり速達で第二第三の誘惑の手を伸ばすのが順当だ。彼は思考の混乱に迷いながら女の顔を眺めた。いつの間にか彼女は三吉の体にピッタリ密着するようにひつついてきて、彼の背広の襟をなげながら、うつとり、月を仰いでいた。

吐く息が頬に触れるほど身近な位置で無心に仰向いてる女の顔を彼は放心したように見つめた。ほっそり長い眉の下に二重瞼の瞳は涼しく見ひらかれて、男心をそる不可思議な魅力があつた。

「何をそんなに人の顔ばかり見てはるの、恥かしいやないの」

「いや失礼——、ところで君は毎晩こうして竹村さんを待つてゐるのかい」

「アホクサ、何でもそんなにあんなタケノコ先生の尻をアテが追ひ廻さんならんねん、あの人ばかりが男やあるまいし、アテは竹村はんは鳩で呼び出し手紙出したけど、その前から毎晩ここで体を張つた商売してまんね。ただあの人を此処へ引っぱり出してアテがどんなに外の男にモテてるか見せてやりたかつただけでんね。ホホッホあんただいぶんバーマクマクやわ」

「何だいそのバーマクマクてのは？」

「シヤム語であんたみたいなのを。そう言いますね。日本語で言うたら脳足りん」

「ウヘッ、かんにしてくれ」

三吉は青江の純情を買いかぶりすぎていた自分に気づいて興ざめた。これじゃあ本物の立派なパンベンだ。もう何処へ出しても恥かしくない。オット違つた、何処の人前へも出られぬ恥かしいパンベンに心身ともに落ちきつてゐるではないか。女つて何処まで図太く出来上つてゐる代物だらう、竹村の話と少々くいちがうぜこれは、あのタケノコめが今の文句を聞いたらどんな顔をするか見ものだ、早く寮へ帰つて話してやりたいもんだと思つて立ち去ろうとする。青江の体はますます彼の体へ喰ひ込んでくる。これはイカンと思つた時はもう遅い。三吉はハッとした。何時の間にか、彼の手はアラレもない所へ押しつけられていた。

その時になつて彼は初めてヘンな事に気がついた。女は十月の、このうすら寒い夜空にワンピースの下へ何も身につけていないのだ。シュミーズも、ブラジャーも、そしてスカートの下に当然はいていべき管の物までも——。いやはやばに驚き入つた超モダンなアプレ型カギャ姫ではある。

最高級の赤いビロードで作つた襦の花びらみたいな厚ぼつたい、口紅の濃い唇が、ニツコリ、笑をふくんで二つに割れ、皓い八重歯が微笑んだまま彼の唇に重なつてきた。口紅の甘い香りと、なよなよした唇と舌の柔かな感触。三吉には生れて初めて味あり息づまる世界だつた。

貝をすり合わせるような歯と歯のキシメキを聞きながら、三吉はもう体はナマコにイカリをおろしてブレイキかけたみたいに、松の木にへたばりついたまま動けなかつた。

すべては夢見心地の出来事だつた。

「下手糞！」

青江の、しなやかな手が三吉の頬でピシヤリ鳴つた。

正常な位置を取らぬ間に、焦つた彼はダラシなく、女のスカートを汚してしまつたのである。

「もつと落ちついてよ」

女は顔をしかめ、睫毛の翼の美しい臉を閉ぢた。ゆらり三吉の眼の前で大きな月見草の幻影が傾く。青江が黄色いネツカチーフの首を三吉の肩になげかけ、囁きついてきたのだ。

竹村よ、何とでも言え！、童貞よ、汝は失う事により価値を生ずる——。こんな寝言が三吉の胸をかすめては通りすぎる。梢の松ガサがぼとんと彼女の柔かな肩をうつて落ちた。

青江が彼の首に手を廻したまま、妖しいまでに濡れた瞳をパツチリ見開いて、低いやさしい声でささやく。

「呼んで、アテの名を呼んで頂戴——」

変なことを言うと思つたけど、また頬を撲られては堪らぬから註文に応じてやつた。

「宇井さん、宇井青江、ウ、イ、ア、オ、エ、うーいーあーおえー」

女はじつと動かなかつた。鮮烈な魅力が溢れた濡れ色の瞳が瞬光を放つて妖しく宙を見すえ、瞬きすらしなかつた。神とも狂人とも天才とも例えようのない異様に緊迫した目の色を覗きながら三吉は幾回ともなく青江の名を呼んでゐた。まるで夫が女房に話しかけるみたいに親しみのある声音だつた。

四、色 聴

五六分後、青江と三吉は松の根株に彼女の頭からハッした黄色いナイロンの風呂敷を広げ腰を下してゐた。

潮風のさざめきと松風の音が身にしむ。つい目の前にころがつてゐる青江の丸めて捨てた白い紙が、何だか哀しく見辛かつた。

「アテは立つたまま、あんなにして名前を呼んで貰てる時がこの世の仕合せなんやわ」

そのときだけは月の光と、この松林と闇ばかりの周囲がプリズムで覗いた花園みたいに綺麗に見えるんよ。ただ暗いだけの、この闇の色までが夢でより外に見ようもないお美味しい果物みたいな色になるの。そり、どない言つたら解つて貰えるかしらん

闇夜に走つてゐる市電のパンダグラフが火花するとき、その瞬間だけ人の顔や道路や家の白壁が青白う浮びあがりまつしやろ。ちやうどあんな工合に何もかも染つて見えすねん。それも電車のスパークみたいに青一色の一瞬のもんやなしに、虹のようにほの／＼と長い余韻を引いて染つては褪せてゆく美しい桃色や黄色がねえ、そのときど

魔都上海の田舎山

嫌う娘さんで口笛の巧みなのは多分に男性的心理をもっている例が多いとか、味盲といつて視覚の場合の色盲みたいに味覚にもある特殊な味——主として苦味——に全然無感な人間が一人か二人の割合であるといふことなど、嘘か本当か解らぬなりに医学書類や心理学雑誌のナマカジリでだんく〜と知つていつた浜中三吉は或る日こんな記事を見つけた。「健康な人間でも色聴——Audition Colorree といふのが、

るではないか。アイウエオの並び順が出鱈目に入り混つて出来上つてゐる名前、ウイアオエー……。彼女は立つたまま肉慾の快感に耽るとき自分の名を呼ばれると、この色聴現象を感じ、それによつて更にまた恍惚とした快美感に溺れるらしいが……。三吉は神が手加減を間違えて創つた「人間」の神秘的複雑さに今更のように目を見張つた。

胡弓すゝり泣く上海の裏街でふと知り初めた可憐な姑娘秀扇、白蠟の姿態を紅帳に埋めてじつと私にながし目を注ぐのであつた。

八仙橋の雌鹿

その日の昼間、店の裏手の槐の樹蔭で驢馬が交尾しているのを、目を光らせて、小窓から盗み見していた。それが春の夜半の彼女の慾情をゆすぶつたものであらう。脂の乗り切つた餅膚の、よい女であつたが。

そんなことを思い浮かべながら、四馬路の横通りの居酒屋で紹興酒を飲んでゐるうちに、いつか誰かに聞かせられていた八仙橋をのぞいてみる氣になつた

車夫はその通りに入つてから三つ目の左側の露地に車を曳き入れた。

露地の両側には、軒先に、四角い白い瑤瑯びきのトタン板に××記と屋号を記した看板を吊したり、四角いガラスの軒燈をかゝげた、閤門のある家が並んでいる。

私の案内された家には第四新記と書いた門燈があがつていた。

玄關を入つた正面には、古い大がかりな

広東路で黄包を拾つて、西へ二十分余りそこから南に向つて十分も行くと、広い通りに出た。

車夫に向つて、よき姑娘クニヤンのいるのはどこ

祭壇の裏側は家人の居室になつていた。その前の通りすがりに、入口の垂帳の隙間をひよいとのぞくと、室内から、
「あゝ、旦那、ようこそ……」

106

でも、西施でもお世話しなければ顔が立ちませんわい。」

「銭さんの部屋」というより、彼の第五号か六号夫人の部屋で、私はまたジョニウオ

カをふるまわれ、頗る醜態してしまつた。銭さんの遊び仲間らしいのが迎えにきたのをしおに私が立ち上ると三十年増のま

顔を覗き、いさゝかよろめく足どりで寝台に行つて、酔に弛んだ体をぬいシーツの上に投げかけた。そしていつの間にか眠り込んでいた。

女の笑い声に眠りを醒まされて、酔眼をみひらくと、寝台の傍に、阿媽と一人の姑娘が佇んで、笑つていた。私がとても大きな鼻をかき、廊下から聞くと、きるで大砲の音のようだと言ふのである。

「それはすことに失礼した。私はそもそも砲兵隊にいた人間なので、鼻もその通り大きいのである。今後は十分に心得る」

私が起き上つて、おどけてそう言ふと、

阿媽は、笑つてからかうのである。

「先生は砲兵であつたか。それでは東西へ品物」もさぞ素晴らしいだろう」

三

阿媽が去つて間もなくすると、薄い下着一枚になつて、先刻の姑娘が台に入り、白い垂帳をおろした。

「もう、電燈消しましょうか？」

若い美しい声である。

その声にひかれて、私は今はじめてまじまじと姑娘の顔を見た。色は白くはないが素膚らしく整つた顔立ちと、綺麗な體をもつた妓である。年の頃は十七、八といふところ。思わずゴクリと咽喉が鳴つた。

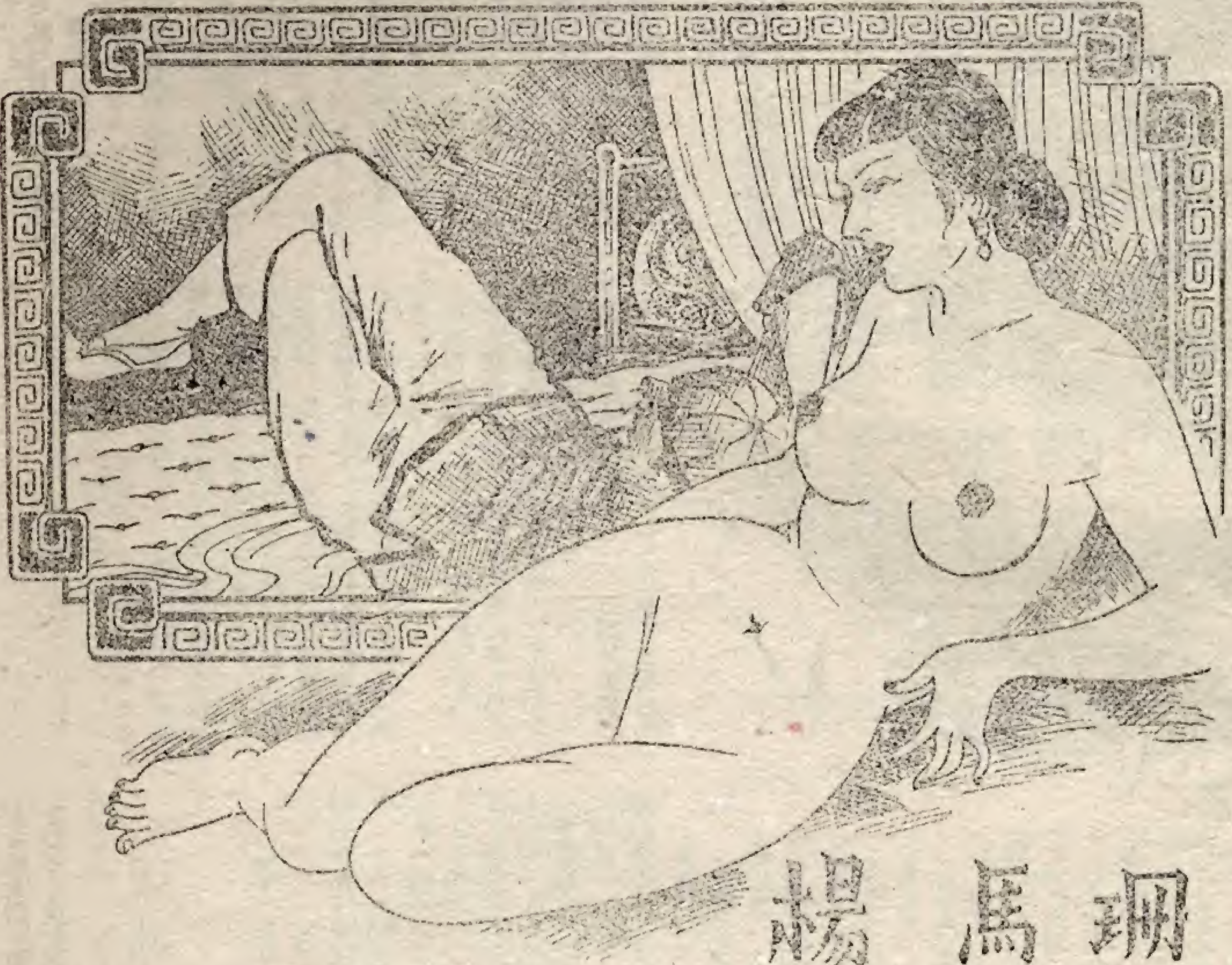
「消しますの、それともまだ点けておく？」

「消すのは惜しい。君のその美しい顔と、それからこの素敵な肉体とを、私は一晩中眺めていたい」

枕頭のスイッチを握つて私の傍に坐つてゐる姑娘の褲又児（さるまた）からのぞいてゐるむつちりと肉のついた円い太股に、

脚行慾愛上海

シャンハイ あいよく あんぎや



楊馬珊

美濃村晃繪

三十年増のまゝの顔の夫人が、低い声で、阿媽を呼んで阿媽と二人で私を二階の部屋に送りこんでくれた。四圍の壁は浅藍色に塗られて、入口には緋の錦帳がかゝつていた。卓子も椅子も、そしてダブルの寝台も艶のよい黒檀作りで、寝台のシーツも蒲団カバーも真新しいものがしつらえてあり、一方の壁際にはタイルの洗面盤が白く目立ち、部屋全体が清潔な感じを与えた。

阿媽が淹れて行つた茶を吸つてから、

私は思わず手をやめた。

電燈を点けたまゝで私たちは並んで寝た。彼女の体温と共に、麝香と伽羅のまじつた匂いが、その薄い襯衫（シヤツ）の裏から、ほのぼのと漂い出て、私の心をゆすぶる。

女は仰向けに寝たまゝ、黙つて寝台の天井に張られた白布をみつめていた。

すつと通つた美しい鼻梁である。

股体の整つた若々しい弾み出しそうな肉体。すらりと伸びた脚線。腰腹の肉づきのみごとき。その上、耳の切れ込みの深さ。

若い、美しい、申し分のない雌鹿！

寝台の腰に張りめぐらされた鏡に、その全姿態が、くつきりと映つてゐる。

私は、静かに電燈のスイッチを切つた。

枕もとの豆電球だけが、ほんのりと淡桃色の光を、寝台の垂帳のなかに匂わせていた。

た。

四

彼女の名は、胡秀扇。十七才。杭州で生れ、幼少から歌芸をしこまれ、銭大川の庇護のもとに成長して、極く最近迄で杭州の舞台に出て、人気を高めていた。

ところが、福建から来ていた行商人にだまされて、今まで彼女も彼女の庇護者の銭大川も誇りにしていた彼女の純潔を穢されてしまい、果ては男には逃げられた上、舞台の人気も落ちてしまった。

銭大川は彼女に対する失望と憤怒から、彼女を舞台から退かせて、上海に連れ出し一昨日からこの境涯に突き落してしまつたと言ふのである。

秀扇の身上話を聞いて、私は同情を禁じ得なかつたが、われわれとは住む世界のち

がう銭大川の憤怒の気持も、どこか私は銭をひどく憎む気持にもなれなかつた。

茉莉花の頃

一

その頃。租界内の単独の夜歩きが物騒だつたので、私は、当時住つていた競馬場前静安寺路に聳え立つ十八層樓のパーク、ホテルから「第四新記」に電話して、彼女を度々八階の部屋に呼びよせた。

六月頃であつた。ある夜電話したところが、秀扇は杭州に行つてゐるが二三日したら帰つてくると阿媽の返事であつた。

乍甫路の「東語」で宴会を終えて、ホテルに帰つて、エレベーターから出ると、八階の係のボーイが、私に小指を突き出してニヤリと笑つた。

部屋の扉を開くと、ぶんと麝香と伽羅のまじり合つた匂いが鼻をかすめた。秀扇だと直感して、ベット・ルームをのぞくと、案の定彼女が壁の方に向いてベッドに横つてゐた。眠りこんでゐるらしい。

こちらの部屋の中央のテーブルの上に、何かの紙包みが二つ置いてある。開いてみると、一つは緑の包みであり一つは杭州土産の茶であつた。

私も茶が好きであり、秀扇も、高級な茶を好んだ。

故郷へ帰つてきた土産として私に持つてきたものであらうと思つて、私は心ほころびる思いであつた。ペルを押してボーイを呼んでおいて、静かにベッドに近づいて行つた。

枕もとに手をついて、さしのぞくと、秀扇はまだ何も分らずに眠つてゐる。

そつと頸に片手を差し入れ、片手に向う側の頬を抱いて、顔をこちらに向けようとすると、彼女は静かに半眼を開いて、私をみて微笑んだ。

「秀扇、你回来了！」

私が唇をおしつけると、彼女は力一ぱい私の頸を抱いた。

ドアをノックする音に、急いで二人は離れた。

ボーイに熱い湯を持つて来させ、私は愛用の万古焼の急須で茶を淹れた。

季節はもう暖かく、私たちはシヤツだけになつて、テーブルに向い合い、線を食べ、茶を飲んだ。秀扇の好物の、茉莉の花の入つた茉莉花茶であつた。

何故かむし暑い夜であつた。

その夜の秀扇は、いつになく慾性がたかぶり、私は圧倒されそうであつた。

「どうしたの？何か薬でものんだの？」

そんなことを聞くと、彼女は目をつぶつたまゝ首を振つて、私の頸が痛むほど強く二本の腕で抱きしめた。が、急にその腕をゆるめると、私の体をそつと押しのけて慌てゝうつ伏せになり、ぐんと肩を揺すぶつて、両手で口をふさいだ。

「どうしたの？あまり激しいから、そんなことになるんだ。ハッハハ……」

私は思わず笑つて彼女の背をさすつていたが、彼女の苦しみようが異状なので、慌てバスルームに飛び込み、湯上りタオルを取つてきて彼女の顔の下に敷いてやり、こんどはいたわりをこめて背をさすつた。彼女はまた大きく肩を揺すつたと思つとゴボゴボと咽喉を鳴らして、血を咯いた。



と、阿媽は持前の円らかな瞳を輝かせた。

「一週間に成るか、一カ月になるか、今のところ見当がつかない。けれども私は秀扇を愛しているから、彼女が上海に帰つたら、きつと夢でそのことを知るだろう。そしたらいつでも、何も捨ておいても、上海に舞い戻つてくる」

私がニヤニヤしてそう言ふと、阿媽は、怨じた瞳を見せて、私の尻をギョツとつねつた。

「おのろけはもう沢山よ。おのろけの罰金に、今晚はどうしても泊つて貰いますよ。さあ、あの部屋が空いてるか、行きましょう」

阿媽は私を強引に二階に引き上げようとする。

「今晚はどうしても駄目だ。だが、阿媽さんが一しよに寝てくれるなら、泊つてもよいがね」

私は、小柄で、円顔で、きめの細い白い膚をもつたこの中年の阿媽の、部厚い胸を背後からぎゅつと抱きしめた。

柔い、だが形の崩れていない、豊かな乳房が、薄い夏衣にびつたりとくつついていて、ぶるんと揺れた。

阿媽は、その私の手に迷おろとせず、そのまゝ姿勢でひよいと顔をのけぞらして私の瞳をみた。意外にも真面目な、応える眼であつた。

「亭主があるの？」

「あるのよ。だけどヤクザモノで、蘇州や杭州をほつき歩いて、滅多に上海に帰つてこないわ」

「こない、体で、ひとり暮らしは不自由だ

ろう」

私はそう言いながら、彼女のむつちりした臀部に、私の腰を押しつけて、彼女の胸を揺すぶるようにした。

「このまゝ遊ばせておくのは、もつたないことだ」

露地の三和土を二三人の靴音がした。

私は彼女から手を離した。

「ね、冗談よして、部屋に行きましょう」

私は阿媽にひきおかれて、急な階段を登つて行つた。

「お前が来てくれるならいいが、今夜は他の女は要らない」

「泊つて頂くなれば、やつぱり女の子を呼んで貰うことにしないと、下の女将に悪いわ」

「それでは帰ろう」

私が部屋を出ようとする、阿媽は急に慌て、私を抱えて寝台に押しつけた。

「とに角、休んで下さい。私がよいようにしますから」……

阿媽は目で何か言つて部屋を出て行つた電燈を消して寝台に寝転んだが、もう一時前なのに、何故か眠れない。

後悔に似たものと、阿媽への期待が混り合つて、変な気持である。

ふと耳を立てると、階段を忍び足で登つてくる音がする。

錦張がスツと動いた気配に、はつと期待の目を向けると阿媽が風のように入つてきた。入つて壁際に佇んで躊躇する様子だったが、私が体を奥に退いて、蒲団を拾げると、阿媽は決意を面に見せて、服の紐を外しながら寝台につかつかと寄つてきた。服を脱いで枕もとに置き、寝台に上つて垂帳を落すと、するりと私の傍に這り込んだ。

私が、健康そのものの雌鹿とみていた秀扇は、肺を病んでいたのである。

彼女は、その翌日から「第四新記」で静養していたが、もう役に立たぬと見られて四五日目には、杭州の田舎の生家に戻り返されることになった。

僅か四五日で、すっかり生色劣えた秀扇は阿媽に附添われて、屋前の汽車で上海を發つた。

彼女の發つ日の朝、私は、私にとつては数カ月生活を切り詰めなければならなくなることを覚悟の上で、饒別を奮発し、例の永安公司の薬品売場で、英國製の高価な肺疾特效薬を買い求めて、八仙橋を訪ね、彼女に手渡した。

一一

上海に炎夏が訪れて、街頭巷尾菜に莉花

mimomola 見

孤閨の島

一

英租界のバンドから崇明通いの汽船に乗った。

からりと晴れた暑い日で、黄浦江を出るまでは風がなく汗が滲み出たが、楊子江に出ると、江口の潮風に汗がひき、私は昨夜の疲れから、狭い一等船室でぐっすり眠った。

島の南岸の崇明の碼頭に着くと、私と雑穀商の共同経営者である李少白君が出迎えてくれた。李君は数日前から私に先行して、島内の雜穀商と連絡をとつてくれたのである。

小さな川沿いの町のまんなかの旅社に入つて冷い真水で体を拭いて暫くすると、島はたそがれてきた。李君に案内され、川岸の料理屋に行くと、この島切つての有力者の、陳孟予さんが、彼の店の支配人の刻さんを連れて待つていてくれた。

商談は李君と陳さんとの間に既に纏つていたので、私たちは上海の商況や、崇明の物価等を中心に、四方山話を交しながら、卓子を囲んで酒を飲み、島の料理を食つた。鰻の油煮き、豆腐と塩菜の油煎りは、私の胃の腑を動けないところまで満してくれた。その翌日は、風間は、この港町の警察隊長と会食し、夜は、舟山列島を網張りにしているという海賊の頭領顧氏と会食した。何でも、元海軍中將の肩書をもっているとかで、年は六十才を余程過ぎていらしいが、脂切つた重顔の、好々爺然とした大男であつた。

この席には警察隊長も列したが、彼は終

始、顧氏に敬意を示していた。

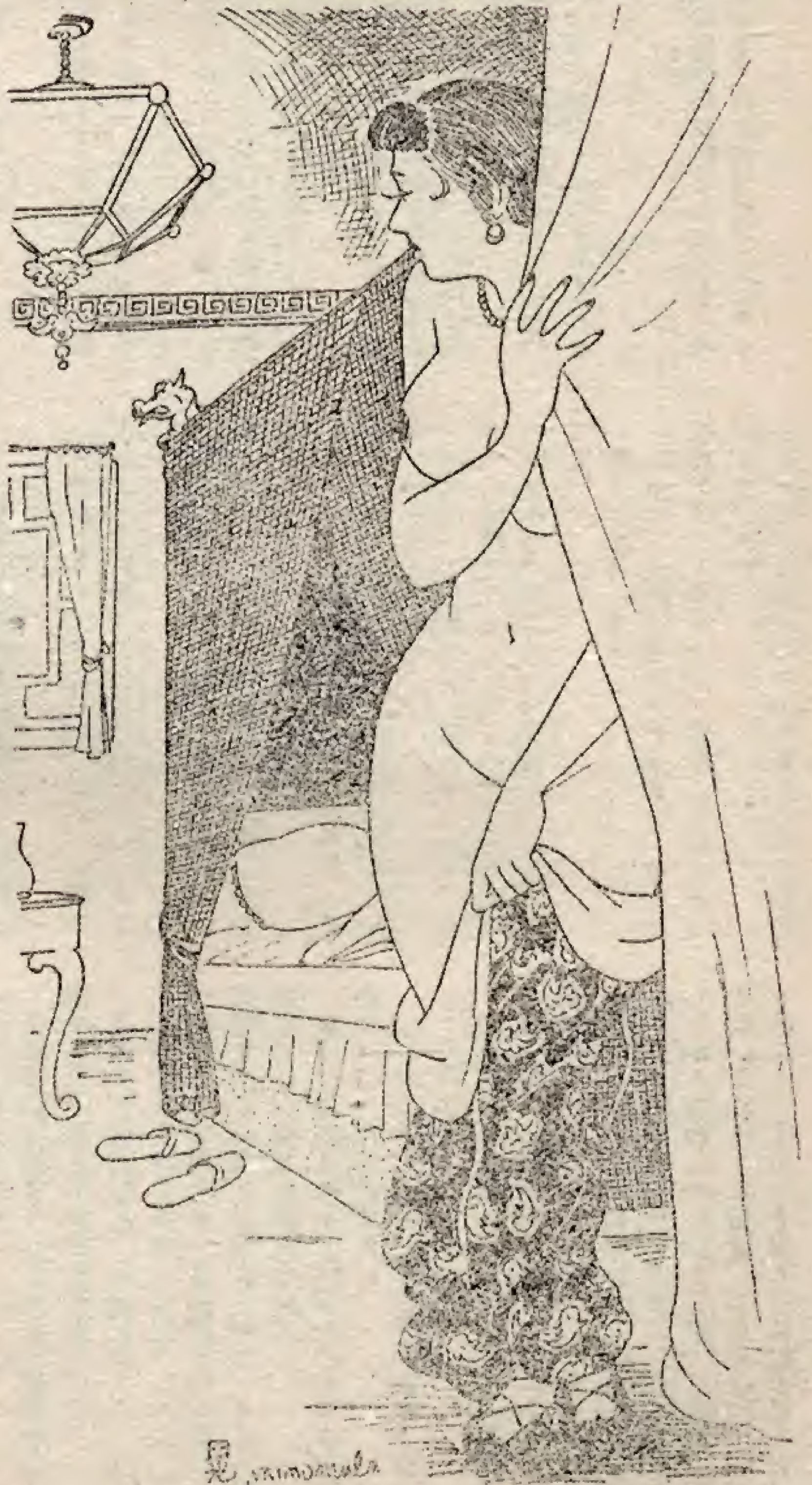
顧氏は、上海駐在の海軍には保護を受け、陸軍方面にはまだ連絡がない。

それで、今後私の高粱の集荷には全幅的に協力するから、陸軍方面の保護が受けられるよう斡旋してほしいとのことであつた。

日に夜を継いでの会食が数日続いて、私の肉体はエネルギーをもて余すばかりになつていた。

島内の顧役や商人との一応の顔つなぎが終つたので、その日私と李君とは、例の川添いの料理屋で豆腐と塩菜の油煎りで夕飯を食ひ、碼頭の附近を散歩して、警察隊の碼頭検問所で、女警察隊員の蔣小姐（女の船客の検査をする）と冗談口を交しながら陽の暮れるまで過ぎた。

彼女は二十才、上海で女子師範学校を卒業して、小学校教員をしていたとのことである。知的な割合に整つた顔をしていた。なかなかの男勝りで、この検問所に、他の男の職員と輪番で宿直もすることになつており、昨夜はその当直であつたとのことであつた。



あつた。

交代の職員が来たので、彼女は私たちと連れ立つて月夜の路を町へ帰つた。

李君が、上海から持つてきているコーヒを御馳走するから、私たちの宿へ寄つて行けと奨めると、彼女は素直について来た。海風のよく通る二階の私の部屋で、上海から持参の洋菓子を食べ、コーヒを啜りながら、私たちは相変らず冗談口を叩き合つていたが、途中で李君が急にこんなことを言い出した。

「楊先生は、暫らく女に触れていないから張り切つてゐるでしょう。どうです、今夜あたり、一寸、遊んでゆきませんか？」
「いや、私は上海に愛人が待つていたのでそんな罪なことは、彼女のためにもできない

い」

私がそう言つて笑うと、李君は。

「この島の男の人は、漁夫とか苦力の出稼ぎが多いでしょう。そして一月も二月、甚だしきに至つては、半年も一年も帰つて来ないんです。だからその間、彼等の女房連中は孤閨を守つてゐる。然し、皆が皆、孤閨を守るものじゃない。そこで夫の留守間に、その淋しさをまぎらすためと、もう一つには生活のために、体で稼ぐものが多いいんですよ」

「そんなことじゃ、夫たるもの、他郷で晏如として働いてるわけにゆきませんね。よく問題が起ることでしょうな」
「いや、露通の現場を夫に見つけられなければいゝということになつてゐるんですよ

自分の女房が、他の男と交渉があつたなんて噂が耳に入つても、夫の方でも、あまり気にしないんです。自分が女房を置き去りにして、出稼ぎに出なければならぬような運命を背負つて生れてきているんだから仕方がない。女房が留守の間に、他の男と関係しても、それは運命がそうさせているのだからという風に、昔から馴らされてきているんですね」

そんなことを詳しく話してから、李君は今夜は執拗く私に遊んで来いと奨める。この宿屋の親父が、既に二三日前から私のために、よい女をお膳立てしているから、これからそこへ案内させるといふのである。それでは、今晚は遊ぶのでなく、一応検分して来ようということにして、私は李君

と蔣小姐を部屋に残して、宿屋の主と共に家を出た。

途中まで行つてから、私は錢を持つて来なかつたことに気づき、主を路上に待たせて宿屋に引き返した。

部屋に帰つてみると、もう李君も蔣小姐もいなく、卓子の上はきれいにかたづいて

いる。寝台の枠もとのポストン・バックから紙幣を抜き出して、ひよいと耳を澄ますと、隣の李君の部屋から激しい息づかいが聞こえる。

さては……と感づいて、悪いことゝは知りながら、壁板の隙に貼つてある紙の破れから隣室を覗いてみた。

明け放つた窓から月光が射し込んでいる

部屋の片隅の寝台の上に、私は、李君と蔣小姐の二つの裸形をみて、息を呑んだ。静かに壁際を離れた私は、布靴の音を忍ばせて部屋を出て、月の戸外に出ると、はじめて深い息を吐いた。

二

宿屋の主について、狭い裏街の、石畳み道を辿つてゆくと、傾いた古い軒並の、とある戸口に主は立ち止つた。

あたりの様子にチラリと目を配つてから静かに戸を叩いた。中からは何の返事もない。そこでもう一度叩いてから、

「俺だよ、平安旅社の俺だよ」と、戸の引手近くに口を寄せて、囁くように声をかけた。

静かに門をはづす音がして戸が開き、中から三十前の女の白い顔が覗いた。

宿屋の主は、私の袖をひいて、サツと屋内に入つた。

「上海から来られた客人だ。崇明県の有力者とは皆知り合いだ金持ちで人格者だから、粗末なことのないようにしてくれ」

私にはくすぐつたような、そんな紹介をしておいて宿屋の主は帰つてしまつた。

夫は舟乗りで、夜克に乗つて三カ月前から台湾に渡つてゐる。これまで、夫以外の男には一度も膚を許したことがないと、その女は、汗ばんだ厚い胸の膚を、今

脱いだ襦袢をまるめて拭きながら言つた。

種子（ももひき）を締めつけて

いる細紐のあとが、下腹部にくびれを作つていた。

風が全然通らないので、息苦しい程蒸し暑い、暗がりの中で、私は半ば自棄気分で彼女の腰に手をかけた。

三

それから二三日して私は、上海に引き返した。

パーク・ホテルに帰ると、数日前、秀扇が訪ねてきていたと言つて、彼女から預つていた龍井茶と、杭州の月餅を渡してくれた。

小康をとり戻したとはいへ、危険極まる体であるのに、再びあのような勤めをさせられる彼女を、私は何とかして救えぬものかと、彼女からの土産物を前にして、暗い泣きたいような氣持であつた。

差し当つての用務を済ますと、その夜私は取るものも取り敢えず早速、第四新紀を訪ねた。飛んで来て喜びに熱い抱擁を求め秀扇の嬌態を思い出して、ホロ甘い氣持を噛みしめながら扉を叩いたが、時間は夜といつても、まだ宵の口であるのに、既に彼女に執心の某大人が客で上つたとの事で入口横の応接室に待たされた。

今迄の自分の浮氣はさりながら、自分一人の愚い者と考えていた彼女が他の男に抱かれて、媚をふりまいてゐると思うと、いても立つても居られない焦立しさに胸を灼かれる思いであつた。

暫くして現れた秀扇は、裳の裾を乱したまゝ私にすがりついて、「今日のお客は泊りなのよ」と言つて、大粒の涙をぼろりと床の上に落した。

(終)

泥たけ泥



小島伸三
大曾根三郎

第一話

未亡人はいやッ

爛熟した肉体ざかりの未亡人の家へ暗夜ひそかに押し入った強盗があつた。彼は一体何を求めたか？

「あらッ、どこかで雞が鳴いているわ、もうそんな時間かしら」

ふと眼覚めた伊久子は、そう呟きながら、大きく寝返りをうつて、いま、しばらくの間の眠りを貪ろうと掛ぶとんをぐつとひいて顎を埋めたが、妙に頭の芯が冴えてきて、なかなか寝つかれなかつた。

うす眼をひらくと部屋の中央にぶらさがっている、二燭のベットルームの電灯が、なんとなく、うす気味悪く感じられてきた。

広い邸内はしんと静つていて、もの音一つきこえず、眼はますます冴えてきて、とても寝つかれそうになかつた。ふと

「いつまでも、未亡人でいるなど莫迦の骨頂よ、せつかくもつて産れた水々しい肉躰を鍛まみれにするのは惜しいわ、早く再婚しなさいよ、天の摂理に反するわ、顔に小皺が浮んだら、誰もみむきもしてくれなくなるわ、そこで狼狽しても駄目よ、どうするの伊久子さん、宮地さんのどこに不足があるの、スポーツできたえあげたあの躰、精力絶倫そのもののようなタイプ、きつとあなたを満足

させること請合よ、あなたは美貌をはなにかけているのね、そうでなかつたら宮地さんに不足のあらうはずはない、贅沢すぎるわ」

友の銀子の言葉が、今朝にかぎつてひしひしと胸をうつ、宮地との再婚をすゝめる銀子の言葉に、とびついていききたいほどの衝動を感じはしていたが、宮地が精力絶倫などと言われてみると、いかにも自分が男ほしさに悩んでいるように思えて、素直についていく気がしなかつた、また、銀子はこんなことも言つた。「宮地さんとあなたが結ばれることについて、わたしは手段を選ばないわ」

とも言つた、また。

「わたしが、伊久子さんと同じ境遇だつたら、宮地さんの胸へいきなりとびつくわ、夫があつてさえ、男性的な宮地さんにかぎりない魅力を感じるわ」

という、銀子の言葉の数々が次々と泛んで、冴えた眼を容易にとどさせなかつた。

「宮地さんと結婚しようかしら」
と思うと、急に胸がせつなくなつ

て、宮地が恋しくなつてきた、伊久子は男の躰臭を嗅ぐように、掛ぶとんをぐつと抱きしめて鼻にあてた。いままで忘れていた躰内の女がぬらぬらと頭をもたげてきた。

みしッ、みしッ。廊下を踏んで近づいてくる足音に、伊久子は枕から顔をあげた。

「ねえやなの、ときやなの、はや起きたの？まだ早いわ……どうして黙つているの、変ね、ねぼけちゃ駄目よ」

伊久子はくすりと笑つて、掛ぶとんを顎までひいた。

障子が、すうつと開いて姿を現したのは黒い布で覆面した男だつた。

「あゝッ」

はね起きようとする伊久子へ。

「騒ぐな、静かにしろ、騒ぐとためにならねえぞ」

凄い文句を、しわがれた声で言つた。

「あなたは、誰に断つて」

「笑わせるな、押入強盗が、一々断つて侵入するか」

「強盗ッ、ねえや、ときや」

「騒ぐなと言うに、これが見えねえ

か、玩具ぢやねえぞ、ひき金をひけばこの世から、大宰治の台詞ぢやねえがグットバイという、おつかねえしろものさ、ねえやは動けぬようにしぱりつけておいた、騒ぐな、おれの言う通りになりなッ」

男は悠々と伊久子の横へ、立膝をしてしやがんだ。

「おいッ、細帯を出しなッ」

「どうするの」

「しぼるのさ、命までとろうとは言わねえ、しばらくおとなしくしていな、ぢやあ、縛るぞ、むつちりと肥えて、脂がのりきつているようなえゝ躰だ、見逃すには惜しい躰だが、それも慾ばれぬ」

「まあッ失礼な」

「黙つてろ、おいッ、ちつとばかり金が借りてえんだが」

「ありません」

「笑わせるなッ、こんな大きな邸で女中との二人暮らし、金がないとは言わせねえぞ、アブレゲール強盗の残忍さを、おまえさん知らねえな、さあ、手荒いことをされるまでに、金のある場所を言えッ、それとも、脂ののりきつたその躰を自由にさせてもらうか」

「よし、それだけは」

「ぢやあ、金だ、おれは金さえありやいゝんだよ、金がありや、どんな女でも外で買える、さあ金だ」

「……」

「出さねえのかい」

「……」

譚奇難盗

めま人生色女

「ぢやあ、しかたがねえ、おめえさんの駄を」

「よしてッ、お金はそのお仏壇の下よ」

「いやに手間どらせやがつて……」

男は仏壇の下を物色した。

「ふん、やつぱりあるところにはあるものだ、一つ二つ三つ三万兩か

悪くねえ、ぢやあ借りとかぜ……おめえさんの駄に未練があるが、もう

夜明けも近い、今日は手を触れぬがいつれ駄をとりやつてくるぞ、見

逃すのには惜しいい玉だ、ぢやあ借りとかぜ、あばよ」

男はすうつと風のように立ち去つてしまつた、恐怖が去ると、ぐつたりと疲れが出て、伊久子は縛られたまふとんの上へ横倒しになつた。

「ときや、ねえや」

いく度呼んでも女中は姿を現さなかつた。

「ときや、ねえや」

寝間の上でのたうつようにもだえた、早く誰かに来てもらいたかつた

強盗が途中から引き返してきて、この駄にいどみはしないかという不安

が、どつと押しよせてきた、銀子のすゝめに従つて宮地を迎えていたな

れば、こんな憂目をみないものと思ふと、自分のかたくなさが悔まれてきた。

「宮地さん」

と思わず叫んだ、それに応えるように

「伊久子さん、伊久子さん」
と、銀子の声が廊下を走つてきた

こんな時刻に銀子が、と、不審をいだく余裕が伊久子にはなかつた。

「銀子さん、こゝよ」
ほつと救われた氣になつて声高く呼んだ。

「あらッ、どうしたの」
銀子は開け放しの障子ぎわに立つて叫んだ。

「どうつてこのざまよ、早く紐を解いてよ、強盗に見舞れちやつてね、

恐しかつたわ、寿命が一度に五年も縮んだようだつたわ、それにその強

盗つたら、いやらしい眼をしてわたしをみつめるのよ、脂ののりきつた

肉駄だなど言つてね」

「まあッ、そんなことを言つたの、それで、駄の方は」

「犯されずにすんだの、金と貞操とはかえられないわ」

「よかつたわね、でも、やつぱりこんな広いお邸で女中との二人暮らしは禁物ね」

「ほんとうだわ」

「どうツ？身にしてみた、宮地さんと結婚する？」

「えゝつ、するわ、断然するわ」

「それから、伊久子さん、ほんとうに強盗に駄を汚されなかつた」

「ひどく念を押すのね、絶対に肉駄は清浄よ」

「それで、わたしも安心したわ」

「どうして？」

「いつか、わたし言つたでしよう、宮地さんとあなたを結ぶことに手段を選ばないつて」



三太郎

「隣の強盗はお芝居よ、夫が主演したの、それで……」

「まあッ、それじゃあ、さつきの強盗はあなたの御主人だつたの、真に

迫つて、そつくりじゃないの。ギラ

くした眼で、おめえさんの駄を、だつて——。でもその点御安心なさ

いよ、わたし肉駄には指一本さゝれていないから、でも、御主人はとて

も適役よ」

「いやだ、いやだ、そんなお話はよしてよ、それよりも……宮地さん、

いらつしやい、早くいらつしやい」
銀子は声高々と呼んだ。
「でも、こんなに縛られてたら行け

ないじゃないの。早く来て解いてよ」

「心配しないで、自分で直ぐ解ける筈よ、仮に縛つてある筈だから」

銀子は伊久子の側に来て立つていた。両腕をこするようによする紐

はひとりでにすぐ解けた。

「銀子さん！」

伊久子は、あらわな姿のまゝで銀子の胸にとびついて固く抱き合つていた。

× × × ×



第二話

女へん逃走

新婚夫婦のアパートの深夜の一室へ、盗難品があつたと
言つて訪ねた男は、一体何を盗まれたのであろうか？

「どうしたらいいだろう」と富森がバジヤマ姿で憤然として訪ねてきた。

「この夜更けにどうしたんだい」

「夜更つて、まだ十時を少し廻つたとこだよ、大体、君が早く寝てゐるんだ、いくら新婚だと言つても、宵の口からくつきあつて寝て身者の僕にあてつけてくれるな」

「なんだと、いやにからむぢやないか、僕が新婚早々だろうと、洋子とちゝくつて宵の口から寝ていようと君の指図はうけぬよ」

辻は思はず怒鳴つた、いよいよ、これから夜の営みに入ろうとしていた矢先きを、富森に邪魔されたのだから、辻も面白くない、それに相手の言い草が、いやにとげをふくんでゐるので、むちやくちやに腹がたつ洋子も同じ思いなのか「いらつしやい」と言つただけで起きようともしない、もつとも洋子は煽情的な緋の長襦袢を着ているのだから、いくらなんでも、夫以外の男性にそんなあられもない姿を見せたくないのだからが。

富森はくずれるように部屋の隅に坐つてしまつた、アパートの一室きりの部屋で居坐られると、夫婦の愛情をからみ合す隙がない。

「富森、どうしたんだ、困るぢやないかそんなとこにいてくれては、早く自分の部屋へ帰つてくれよ」

また、つゝけんどんな言葉になる「そう追い立てるなよ、少しは僕自身にもなつてくれ」

「なんだい、いやにしんみりと」

辻が、その言葉につて問ひかけるとき、

「あなたッ」

と洋子が呼んだ。

「なあんだ。」

「着物をとつて頂戴、わたし起きられないのよ、こんな姿を見せるのはいやだわ」

「よしよし」

辻は立つて押入れから派手な銘仙の袷を出した、洋子は恥じらいながら起きて着物を上へ着た。

「あゝたまらぬ、そんな姿」

富森は呻くように言つた。

「変なことを言うなよ……、気を悪

くするよ一体、どんな用件だね」

「それが、僕、盗難にあつたんだよ」

「！」

「盗難？なにを盗まれたんだ、君は金がないから、衣服でも」

「いや、もつと大事なものだよ、かけがえないものを盗まれたんだ、あゝ、僕は生きるはりあいを失つてしまつた、死にたい死にたい」

富森は頭をかゝえて狂つたように身をもたえた。

「盗難なりや、交番所へ届けなければならぬ、君、もう届けたんか」

「いや、まだ」

「ぢやあ、僕が届けてきてやろう洋子、散歩に出よう」

「はいッ」

洋子はいそいそと立つて帯を結んだ。

「待つてくれ、届けたとて無駄だ、再び僕の手に戻つてはこない、僕の手に戻つてくるのだつたら、こゝも悩みけしないのだ。辻、待つてくれ君たちは幸福だ羨しい、おゝ洋子さんのそのあで姿、僕はもうたえられぬ」

富森は狂わし氣に長髪をかきむしりつゝ、長大息をした。辻夫婦はこの招かざる夜の客に困つてしまつたさいぜんまで肉牀で燃えていた欲情の火もいつしかおとろえ、しらじらとした氣になつて、富森の狂態をみつめていた。

とにかく早く富森を扉の外へ追出したかつた、二人の幸福を破るこの男がにくい。

「富森、盗難を僕にもつてきてもらつては困るよ、それとも、僕が君のものを盗んだというのならともかく僕には少しも關係がなさそうだが、早く帰つてくれ、明日は勤めだからね早く帰れよ」

「君にも關係があるかも知れない」

「変なことを言うな、君は盗人の嫌疑を僕にかけるのか」

辻は憤然として詰めよつた。

「かけるよ、あいつは浮気者だからな」

「浮気者、なんだいその話は」

「弓子のことだよ、弓子を盗まれたんだ」

「なんだ、そんなことか、盗難品は弓子さんだつたのか」

辻はほつとして吐き出すように言つた。

「あなたッ、弓子さんて、どんな方？」

洋子が嫉妬で光る眼をしているのに、辻はあわてゝ、

「僕、弓子さんなんかとは、なんの關係もないよ」

「でも、富森さんのいすのお言葉で



は、なにかそのひとと関係がありそうだけだわ」

洋子の攻撃は少しも鈍らなかつた「それですよ奥さん、辻は貴族的な容貌をしているでよう、なかなかのやり手……いや、女蕩しだつたんですよ、奥さんも氣をつけていなければ、いつ、ほいしられるかもしれないよ」

富森は急に生々として、洋子の嫉妬をあほりたてるように言つた。

「まあッ、あなたッて方は、世界中で、おまえほど可愛い、女はないなんて言つておきながら、ほかで女をつくるなんて、あんまりだわ、あんまりだわ」

がばつと、掛ふとんの上へうつぶして泣きぢやくつた、白いこの腕にからんでいる緋の袖口が艶めかしい「富森、君は僕になんの意図があつて、この平和な家庭を乱しに来たんだ君は弓子さんを誰に奪れたか知らないが、その腹藏せを僕の家庭へもち込むのは卑怯だぞ、それでも常識のある君はインテリィなのか、そんな氣でいるから最愛の女を盗まれてしまふんだ、きさきさのようなやつはこうしてやる」

辻は富森の頬へ平手打ちをくわした。

「痛いよ」「痛いかい、少しは神経があるんだね、動けぬようになるまで打ちのめしてやる」

「許してくれ」

「許すものか、逃げるな、逃がさぬぞ、弓子さんと僕とに、どんな関係

があつたか、洋子が納得のいくまで話してくれなけりや、絶対帰さぬぞさあ言え、どこで、弓子さんと僕が交渉をもつたか、早く言え」

「許してくれ、嘘を言つたのだ」

「嘘ですむと思ふのか、僕は君のよるな莫迦な男を友人にもつたことが残念だ」

「許してくれ、僕は弓子のやつが、男と連れだつて、どつかの温泉で仲よくしていると思ふと耐えられなかつたのだ、ふと、君たちの円満な夫婦仲に羨望をいだいて、自分の立場と対照して、君たちが憎らしくなつたのだ、で、ついあんなことを、許してくれ」

「莫迦なやつめが」

「ねえ奥さん、僕の言つたのはみんな嘘なんです、辻は清浄潔白な男でした、奥さんを知るまで女の手一つ握つたことのない男でした、僕が飛田へ行こうと言つたとき、がたがたとふるえて腰がたふなくなつたのも辻でした」

「余計なことを言うな」

「いや、言うぞ嘘を言つたつぐないに、君が童貞であつたことを奥さんに知らさなければならぬ」

富森は、よりよりおちついて、辻のためにちようちようと弁じたため「もういいよ、そう童貞童貞と言ふな、僕の不がいなさを、嘲笑するよりに言うなよ、それより早く帰つてくれ、僕には明日の勤めがあるんだからね」

「明日の勤め……明日より今夜の方

が大事なんだろ、ぢやあ、僕は帰るよ陳小僧でも抱いて寝るか、佗びしいことだ、女ヘンに見捨てられた、みじめな男……」

富森は無然と扉の外へ出てしまつた。

「お氣毒ね、弓子さんてそんな浮氣をなさる方なの」

洋子が同情的な眼で見送つた。

「同情は藥物藥物」

辻は洋子の肩をぐつと抱きよせた。また、ドアにノックの音、辻は「ちえッ」と舌打ちをしてから

「どなた」と、つゝけんどんに言つた。

「あおり、富森さん見えていせん？」

「富森君はさいぜん部屋に帰りましたよ」

「お留守なの」

「ぢやあ、入つてらつしやい、弓子さんでしやう」

辻は立とうとした。その隙を洋子がぐつと押えて

「同情は藥物、藥物」

と、言いながら笑つてたち、ドアのハンドルを廻した。

「どうぞ」

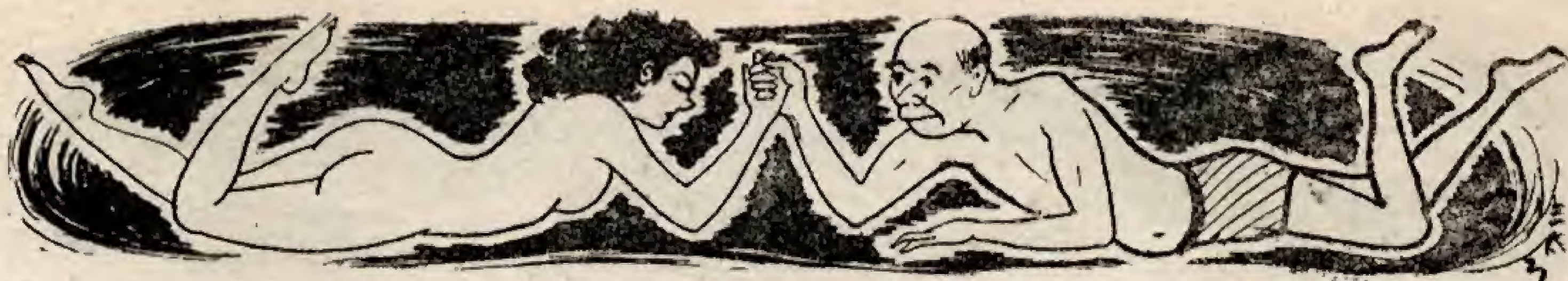


「お邪魔してすみません。お休みのところを」

弓子は静かに入つてきた。長袖の白のブラウスにグリーンのスカートどこかの事務員らしい服装だつたが鉢のこなし、言葉のはしに、水商売の垢がついていた。

「あなたは温泉へ行つていたんぢやないですか」

「温泉なんか行きませんわ。どうし



第三話

たけ泥の正体

娘を亡くした老年期の夫婦は、二人競走で娘の倅を
求めて街へ出てゆく、さてその行先は何處か？

てそんなことを」

「富森君がね、あなたを盗まれたと言つて、さいぜんまでこゝで悲観していたんです。あなたは盗難品という事になつてゐるんですよ」

「まあ、盗難品……ぢやあ、わたし富森さんには逢わずに帰りますわ」
「逢つて富森君を喜ばせてやつて下さいよ」
「ほんとうに、富森さんもお喜びに

なるわ」

洋子も口を添えたが
「この盗難品、傷ついてますのよ。大変なところを盗まれてますの。逢わずに帰る方が富森さんも幸福です

わ」

「そんなことはありませんよ」
「盗難品ですもの、そなたやすくは返りませんわ」

死んだ娘にあまりにもよく似たり
り宮田、その顔、その躰にひきつけられて通いつめた一カ月、今晚念願が叶つて食事をともにすることに
なつていた。

明日から九州へ巡業に出るこの女
と、別れを惜しむ一刻がつい眼の前に迫つてゐる。ショウの終るのが待ち遠しかつた。辰之助は娘への愛情をそのまゝリリー宮田に与えてどんな無理でもきいてやる腹になつていた。話の都合では息子の縁にでも、とそんな氣にさえなつていた。

ショウが終ると、観客がそろそろと出てしまつて、小屋のなかは急にがらんとしてしまつた。

「小父さん」

ふり返るとリリー宮田が、二人の踊子を従えて立つていた。

「無理を言いましたなあ、忙しい躰だのに」

「うゝん、わたし小父さんのおかげで肩身が広いの」

「あんなものを楽屋見舞になんかし

て、さあ、それよりも、一刻も早く御飯をたべよう」

連れ立つて外へ出て、道頓堀川に面した料理屋の座敷へあがつて、次々と運ばれる料理をリリー宮田を加えた三人の踊子はどんどん平らげる

「今晚もまたお出かけですの」

柳眉を逆立たせて、種子がつめよつた。

「うん、出るよ。わたしは基をうつより外に楽しみはないのだ。とめないでくれ」

「基、基つて、どこの基会所へ行つてらつしやるの」

「千日前の方へ行つてゐるんだ。近くでは、顔がさして具合がわるいから」

「そりッ、でも、少しは晩に家にいて、娘の冥福を祈つてやつて下さつてはいかゞ、お経の一つもあげたりして」

「そりや判つてゐる。判つてゐるからこそ出かけるのだ。娘の面影をいつまでも追つてゐるのは苦しいんだなあ、わしの最後の楽しみまでとりあげてくれるな」

辰之助は悄然として言つた。さいぜん逆立つてゐた種子の柳眉はいつの間にか折れてしまつた。

「あなたは個人主義ですわ」

「とも言えないよ、わしが出て行つたあととおまえも、毎晩どこかへ出かけるというぢやないか、おまえだつて、娘を失つた寂しさを、なにかによつてなくさめてゐるのだらう。そう思つて、わたしは、おまえの行動をとがめようとしなないのぢや。もう、お互に嫉妬などする元気な年でもなからう。娘を失つた悲しみから脱け出るまで、氣ずい氣まゝで暮そうぢやないか。息子たちにはすまないけれど」

辰之助はしんみりと言ひながら、種子の顔をいたわるようにみつめた
「そりや、わしだつて、たまには外へ出たくもなります。赤い灯、青い

灯の街もみたくりますよ」

種子は、つんと横を向いた。

「莫迦だなア、若い者でもあるまいし、いゝ年をしていながら……けれど、それもよからう」

辰之助は思わず苦笑した。娘を失つた寂しさをまぎらすために、夫婦そろつて五十歩百歩の秘密の行動をとつてゐることが、おかしくなつてきた。「莫迦だなア」たゞ、その一言でかたづけしてしまつた辰之助には自分にもひけめがあつた。種子を攻める資格がどこにあるう。

だが許せ、自分の行動を……たゞ今晚だけでいゝ、と言ひわけしながら辰之助は着替えて外へ出た。

目的地は千日前のストリップ・ショウの小屋である。辰之助は舞台のソデからちつと見上げていた。リリー宮田の出演を心を燃して待つた。



健啖ぶりを示した。辰之助はこんな女の子の姿をみつめながら、くどくどと身の上話をはじめた。リリー宮田が死んだ娘にそっくりであることを強く話したが、この女たちにはなんの反響もなかった。辰之助は自分の悲しみのなかへとけこんでくれぬ女の子たちの態度にひどく失望してしまつた。所詮他人でしかない。そんな諦めをつけて、一本の銚子をいつまでも持つていた。

食べるだけ食べると二人の連れはさつさと帰つてしまつた。

「小父さん、あなたの娘さんになるわ。でも九州へ出るのにお小遣いがほしいの、二万円ほど」

リリー宮田がとろんとした眼をして言つた。

「あげますよ。ちゃんと準備してきているんだから」

娘にせがまれるような錯覚を起して、辰之助はそくそくしながら、二万円をぽんとリリー宮田の膝の上へおいた。

「小父さん、ありがとう。うれしいわ。さあ小父さん、もう一つお座敷の約束があるの、早くして下さい」

リリー宮田は、二万円の代償を払うつもりなのだろうか、ピンカのスカートをぶりおろして、ごろりと横になつた。

「小父さん、誰か来るといや。早く早く」

リリー宮田が最初から計画していた、醜惡なみだらな行動に、辰之助

は啞然としてぽかんと口をあけたまゝ、その姿をみつめていた。「この部屋ですわね」と

乱れた足音がしていきなり障子が、がらりと開いた。

「まあッッ」

と、叫んだのは、障子の陰から現れた種子であつた。

「あらッ、小母さん」

リリー宮田はあわてゝスカートをはいた。

「あなたは、なんてことするの、主人を盗んだのね。あなたは怖い女ですね」

種子は座敷へ入つてきて踊子の前に坐りながら言つた。

「盗みはしないわ、未遂よ小父さんこれをお返しするわ」

リリー宮田は二万円札束を畳の上



へ投げ出して、逃げるように部屋を出てしまつた。

「種子、わしは幻滅を感じたよ。あまりにも娘によく似ていたので、つい情にほだされて……」

畳の上の札束をみつめながら辰之助は慨然として言つた。

「わたしも莫迦を見ました」

「ほう、すると赤い灯青い灯にさそわれての散歩は、あの踊子に」

「とんだ散歩、あなたも、とんだ碁会所だつたですね」

「親は子にかけては、底抜けの莫迦だよ」

「わたしも、もう死んだ娘のことは諦めますわ。すんでの事であなたを

とんだたけ堀に盗まれるところでしたもの」

「わしも失敗だつた。もうこれから外歩きはやめよう。だが、これでたけ堀の正体もはつきりしたからかえつて、さつぱりした」

二人は連れ立つて外へ出た。

すでに目の暮れた街路には、ネオンの広告塔がキラ／＼と明滅していた。

辰之助に寄り添いながら種子は何か夫を見直すような気持であつた。さつき見たリリー宮田との場面が彼女の生理に変化をきたしたのかも知れなかつた。

(おわり)

肉

体

の

容

聞



池長味作
山形三画

汚れなき全裸のミス。佐世保の肉体を、モデルにしようとした彫塑家は怖ろしい顔のセムシ男であつた。

1 不思議な手紙

「お前、風間さんつて方、御承知の方なの？」

母は茶の間の火鉢の傍に寄ると、艶布拭で火鉢の縁を拭き乍ら、一寸不安な面持で美しい晶子の横顔に云つた。

部屋には、鉄瓶の湯の煮える静かな音だけで、乳の香りのする五月の宵である。

「え？風間さん——誰方かしら、その方がどうかしましたの？」

晶子は、市内の商事会社の勤めから帰つて来て、漸く落着いた所だつた。

晶子の家は、佐世保駅を越して港が一目に見降せる高台にあつた。部屋の窓からは、すでに黄昏れた港が見え、大手を拡げたように突き出ている港口の山々には、乳色のもやが漂い、港に碇泊するアメリカ船には、橙色の灯がともり、乙女の感傷を誘う様に煙つていた。

「いやねエ、その方から、お前宛にお手紙が来ているんだけど——」

「まあ……お便り——その方から、変ですねエ？」

晶子は、余期していない事だけに不思議な表情だつた。

「お前のお知合の方かしらと思つていたんだけどねエ——」

そう云つて、母が茶ダンスの上のラデオの傍から持つて来た手紙を見ると、それは純白の角封筒に近頃一寸珍らしい造紙な毛

筆で、差出人は、市内早岐町三三番地風間草人となつていた。

「これだがわエ、全く心当りのない方かねエ」

「私、全く知らない方だわ」

彼女は手紙を弄び乍ら、いろ／＼と自分の友達や、今は故人となつた父の交友関係等記憶をたどつたがどうしても思い出せなかつた。

「お前に来ている事だけは確かなんだから一応拝見しては？」

母にそう云われて、晶子が恐る／＼封を切つて見ると、手紙の内容は、セピア色の太い罫線を五六本縦に無雑作に引いた便箋一枚に、こんな意味の事が筆太に書かれてあつた。

大谷晶子殿

此度はミス佐世保に御当選の事、衷心御同慶に存じ、御目出度うと小生としても最大の讃詞を捧げ申候

就ては其事につき、芸術家として折入つて御願致度儀有之候間、御多忙中甚だ御迷惑に候え共、来る日曜日に表記の拙宅迄御来賀戴ければ幸甚にて御座候。

右御待ち致居候 御願迄

彫塑家 風間草人

之を読み終つた晶子の表情は、一瞬、喜びと感動と驚愕の交錯した複雑なものになつた。

「あら！お母さん、解つたわ此の方」
「やつぱり、お前の知つてゐる方だつたのですか」

「え！ほら、彫刻家で今、中央で有名な三科会同人の風間先生なのよ」

晶子はやつと、風間草人の名を記憶に叫び出す事が出来た。

それは彼女が趣味として、学生時代から描いている洋画の關係で、いつも見る美術雑誌や何かに、最近三科会同人の彫塑家として、その確かな量感と構成等、彫刻の本質に堅実な手法を、その超現実派的作品の上に名を留めてゐる風間草人氏である事は確かであつた。

然しその風間氏は、東京に在住の筈だつた。

今、佐世保市内にアドレスがあるなんて一寸信じ難い事案だつた。そして又氏が、自分に何の用があつての事か、疑えば疑ふ余地は充分に有つた。

「おや、お前——お前のミス佐世保に關係した事なんだね、彫刻する方と云えば芸術家だから、それと全く關係のない事でもなさそうだね——」

一緒に手紙を覗いていた母親の、明るい表情を見ると、晶子も深く考える必要もないのかと、ほつとして、

「そうかしら」と、ほほえんだ。

晶子は、風間氏の便りの中にあるように一九五一年のミス佐世保として選ばれ、女性としての華やかな名譽を得た十九才の乙女である。此事に就いては、港佐世保の若い人は勿論、あらゆる階層の人々が必ず知つてゐる筈である。これは、中央の新聞に迄大きく書いたから、読者諸氏の中には、すでに御承知の方もあられるかも知れない。

女性美には、二つの型があるようである。それは、白痴美と媚婦美とでも云い得ようか。冷やかにエチ／＼にかたまつた大理石像を思わせるように、表情筋も動かないで、どこか神秘的で近より難い白痴美、そして又、熟した果物のように熟ぼく、今にも一緒に官能の中に溶かし込まれ、直ちに淫慾さえ感じせしむるような媚婦的の媚婦美、この両者の間に位置し、あるほの／＼とした暖い感覺美を持つ女性に余りにも少ない。そんな女が、大谷晶子だつた。

「お前、その方の所に行きますか、どうするの？ 大丈夫だろうか」
母はやけり、どこか不安で割り切れない様子だつた。

「そうですね、でも何もそう案ずる程でもない事でしよう、相手は芸術家ですもの」

晶子にしても一抹の不安はあつたが、母が思うように、何もかも警戒して、疑惑と脆惧の念ばかりで物を見たくはなかつた。

晶子にすれば、矢張り有名な芸術家に会つて、自分の美術趣味を豊富にしたくも有り、又、未知の彫塑の世界を覗く事に憧憬と興味を動いて来たのは事実であつた。

「決して、母さんの思つていらつしやるように、心痛める事はないと思うわ、大丈夫よ、私ばかり御訪問しようと思ふの、ね、いいでしょう」

「それはお前の氣持一つだけけれど——ともかくお前さえしつかりしていてくれればねえ——何分未知の方だから」
静かに茶を喫る母の顔には、娘を思う氣持がいっぱいに濃ゆかつた。

2

セムシの彫刻家

彼女は次の日曜日、風間草人氏のもとを訪ねて行つた。

五月のさわやかな風が、港の上を掃き、彼女の焦茶色のドレスを快く弄つて恋の臨言でも囁くような請れた目だつた。

戦災前の華やかだつた昔の通りにかわつて、進駐軍の、上品で明るい白い建物の見える川添いを抜け岸の並木の下を行くと、途中で聞いた風間氏のアトリエの赤い屋根が、右側の山手高台の松林の樹の間に黒ずんで見えた。

渡鳥の群であらうか、二三羽の小鳥が白い腹毛を見せ、かん高く囀り乍ら、彼女の行手を斜めに高く低く飛んで行つた。

彼女が、高台の方に舗装された坂道を登つて行くと、風間氏の家は、晶子にけいつの頃からこんな所にこんな家があつたのかと驚く程の、市内には一寸見かけない、どつしりと量感のある山小屋ふうの家だつた裏手に見える赤い屋根が氏のアトリエであらうか。

彼女が玄関に立つて案内を乞うと、出て来たのは能面の蠟のような氣品のある顔をした老婆だつた。

「私、大谷晶子と申しますが、風間先生御在宅でございましょうか」

「はい、はい、大谷様とおつしやるお嬢様はあなた様で、左様ですか、先生はとも御待ちかねで御座居ました、さあどうぞ」

老婆は何のくつたくも無く、和やかな応待で、常に柔和な微笑をたたえてゐるので晶子の、ともすればかたくなろとする氣持をほぐしてくれた。

老婆は、かねて主人から云いつかつていたのか、クリーム色の壁に葛の蔓の纏ひ廻つた別棟のアトリエにすぐ案内して呉れた。

通された部屋には、アトリエだけに、彫

刻用製作台やモデル台、彫刻用辛棒等彫刻用具があちこちに置かれ、彼女の美術知識の範圍でもすぐそれと解る、ギリシヤのミロのヴィナスの模型、サモトラス勝利の神、ミケランゼロのダビデの像の模型等の石膏像が、壁ぎわに所せまき迄乱立してゐた。そして特に壁ぎわに一段高く、之等の西洋彫刻には不均合な古色のある木彫の等身大の阿彌陀如来座像が金色に光つてゐた。又他の壁ぎわには、之が風間氏の作品でもあらうか、超現実派的な一寸理解に困難な、球だとか、人間の目玉だけとか、棒とか、其他いろ／＼の多角形を寄せ集めて積み重ねたような不思議な美しい彫刻のようなものもあつた。

彫刻家のアトリエと云ふものを初めて見た晶子は、何もかも珍らしく、うつとりとなつて部屋の中央におかれた長椅子により心の奥深く、静かに鳴るオルゴールのやうなものを聴き乍ら、未だ日ぬ風間氏の風貌を最も崇高なものに描いてゐた。

すると、突然、晶子の心の奥に鳴るオルゴールは止まつた。アトリエの入口のドアが開いて、人の氣配がしたからである。

あゝ、一体それは誰だ。これが風間氏であらうか。彼女はドアの方を振り向いて愕然として、驚ろきのため顔の色も変つた。今迄描いていた、美神の使徒たる風間氏の幻像を碎いてドアの入口に立つたのは、あゝ！化物？いや、おゝ！それは、四尺足らずのひどいせむしの男ではないか。

眼は顴骨のように眼窩の奥の方に光り、鼻稜は高くカギ鼻で、油気の無い髪は肩迄たれ、山羊のやうな鬚髯があつた。何の事はない、西洋の物語りにでも出て来る惡魔の姿である。

男は入口に立つて、晶子を穴のあく程凝視しながら一言も発しない。

晶子は、気味の悪い激しい驚怖の旋風におののいて、身動きさえ出来なくなつてしまつた。

分、——二分——三分——

彼女は驚怖に硬直したまづ、恐る／＼男の眼を見上げた時、一種不思議な安心感のやうなものを得た。

せむし男のその眼は、燃えるやうに光つてはいたが、少しの厭態を止めず、むしろ太古の湖のやうに静謐に澄んでいるではないか。

長い時間のようではあつたが、事実は三分ぐらい過ぎたであらうか。せむし男の唇が開いて、妙にシャガレた声が出た。

「おお、美しい、いや本当に美しい！」

そう泣くやうに叫ぶと、頭をかゝえ、晶子と向い合せの椅子に走りよると、崩れるやうにテーブルの上に顔をうずめ、肩をあぐやうにワナ／＼と打ふるわし初めた。

男は泣いているのだ、なんと云う激情の囚であらうか。

晶子は、せむし男のこの狂態を、夢のやうな気持で眺めていたが、急に本心に還り激しい驚怖のまゝ男のそばを逃げ出そうと立上つた時、せむし男は顔をあげた。その顔は涙に濡れ、邪心のない明るい顔だつた。「いや失礼しました。僕が風間草人です、態々御呼びだして本当に恐縮でした。果して御出で願えるかどうか懸念していましたが——ありがとう、僕は芸術家として以上の喜びはありません、その喜びの感動の結果が只今の仕末です、失礼を御許し下さい」

風間氏は、手細工らしい

大きな木彫のパイプに、煙草をつめるとうすやうに喫つた。

やがて、先程の能面のやうな老婆が運んで来た、コ

ーヒーやケーキを晶子に

いんぎんにすゝめると、静かに語をついだ

「僕は、ミス佐世保としての貴女の美しさを、例の容貌だけの人形的美しさではないかと、考

えていました然し今、眼のあたり貴女を拜見して、その自分の考えが単なる杞憂であつた事にどんなに嬉しいか解りません。失礼乍ら、貴女は実に美しい、貴女のもつ全身の比例均衡と肉付の美しさは、過去現在を問わず最高だと信じます。ともかく僕は、至高の美にうたれた芸術家として、今の失礼を呉々もお許し下さい」



と感動を持ちはじめた。

「あの、御用の事とあつて参上したのですが、どんな御用なのでしようか」

晶子の此の言葉に対して風間氏は、眼を輝やかせ身を乗り出すやうにすると

「そう、その事です、今から僕は、貴女の持つ肉体と精神との最高の美を通して御質問したいし、それに対して御答えを御願

いしたいのです。その上で僕のかねて抱いている或る芸術理念を体系ずけて見たいので

す」

「きあ！そんなむづかしい事、私に出来そうにありませんわ。」

晶子は、困惑するやうな顔をあげた。

3 全裸のマツス

アトリエの外には小鳥の囀りがしきりで五月の陽が、アトリエの広い天窓から金粉となつて、さん／＼と舞い降りていた。

風間氏は、一瞬間、学者的な嚴肅な表情になると一隅の台上高く置かれた阿彌陀如来像を指して、
「御承知の通りこれは、我国天平時代に造

られた名作です、勿論傑作としては各時代を通じても屈指のものである事は間違いないありません。之をごらんになつて貴女は、どんなに御感じに成りますか」

「どんなにつて、芸術的価値に於てでしょうか」

「いや、とんでもない、そんな専門的問題ではありません。この作品の顔や、肉体に人間性を御感じになりましょうか、いや、この仏像に恋を御感じになる事が出来ましようか」

この突飛な質問には、彼女は驚いてかえす言葉もすぐとは出て来なかつた。

「仏像に恋するんですて、いゝえそんな事はありせん。私共人間とは余りにも縁遠い神秘感があつて、もつたないと思ひますし、人間としては嫌です」

「では、このミケランジェロのダビテの彫刻については如何ですか」

「その方も同じだと思います、かえつて恐ろしいくらいです」

風間氏は、晶子の答を一々玩味して聴いていたが、さも満足そうにならずくと

「それでしよ、そうあるべきです。僕の芸術理念もそれから一步も出ないのです。

貴女は、作家林芙美子氏の書いた小説「放浪記」の中に、もつたないやお釈様に恋をしたと云う詩のある事を御承知でしょうがあれは人間の本能から出た恋ではないと思ふ。それは一時的な乙女の、いや人間の感傷にすぎます。如何に仏陀としての先入観をのぞいても、仏陀は仏陀であつて恋人としては余りにも遙かな存在のはずです——」

風間氏は、此頃から晶子ではなく、独り黙想するような姿で、言葉は熱情を帯び

た独り言のようになつていた。

「西洋彫刻が如何に名作であつても、真面目にそれを色情を持つてキツスする人はあり得いであらう。ミロのヴィナスが、世界的至宝の作品であつても、男性はこれを妻とする事に逡巡するだらう。——これは何故か、冷たいからだ、固いからだ、動かないからだ」

突然風間氏は、熱情的口調と動作ですつくと立上つた。そして腕は後に組み、頭は前に深く坐れ、せむしの背を益々円くしながら、足音も荒く、晶子の周りをグルグル廻りはじめた。

晶子は、この風間氏の行動に驚き、その後に来る事実に不安を感じ、どんなにこの部屋を逃げ出そうと思つた事であらう。然し彼女は、恐怖に全身をふるわせながらも蛇に魅入られた蛙のように、いつか一步も動く事の出来なくなり、放心したように風間氏の狂態を見守るばかりだつた。

風間氏は、益々足音荒く晶子の周囲をまわり乍ら、相変ずのシャガレ声で、或は低く、或は高く、うめくように、はえるように、つぶやくのだつた。

「僕は、現代迄の芸術の貧困を悲しむ。天平鎌倉の彫刻がなんだ、ギリシヤ、ローマルネッサンスの彫刻がなんだ。すべては神秘的か、官能の刺激を目的とした春画のような空虚な作品のみじやないか。あらゆるものが有難そうに本物らしく描かれ、本物らしく作られておれば傑作だと云ふし、美しいと云ふ。一体、それがなんだ。どいつもこいつも、人の好い大衆の盲目を嘲笑うようなエロとギマグの見世物じやないか。すべては作家自体の芸術的モラルの墮落だ——」

風間氏は、一層足音も荒く、後手に組んだ両手を離すと上下へ激しく打振り乍らグルグル廻つてゐる。

「いつの世、空間に浮き出した一本の線、拋物線上の球形、そんなものに動きを与え処女の肉体を感じしめた芸術作品があつたであらうか。之れを、今こそ僕が、きつと完成して見せる。一個の孤面の上に、脈々と人間の血潮と体温を送り、処女の生命を生かしたい。生きてゐる線と塊、空間を動く量感の神秘をたたえる立体——塊——塊——丁度このようにだ」

晶子が、催眠術にでもかゝつたように放心し、風間氏の独言を遠い世界の言葉のようになきいてゐる時、突然、何物かが彼女の後から飛びかゝつて来た。ハツとして我にかえり、無意識にも身体を避けようとした時には、既におそく、頑丈な手が彼女のドレスの襟を押しのけて、ムツチリとより上つたふくよかな処女の乳房を、しつかりととらえられていた。それは風間氏の手であつた。

「あつ！先生いけません、いけません、何をなさるんです、離して下さい、離して、はなして——」

彼女が必死になつて、もがき逃がれようとすれば、もう一つの手が彼女のつややかな頸を押さえて、どうにも身動き出来なかつた。風間氏の荒い呼吸が、彼女の耳にはげしく迫つて来た。

「この乳房の丘、この臍を中心としてなだらかに拡がる無限の量感、この大臀筋のふくらみの美しさどうだ。背筋の持つ肉付の動勢、あゝそして大腿部の間にある、この谷間の神秘的肉付はどうだ、これだ、これだ、僕の作品は遂に出来た」

風間氏の手は、いつまでも触感を楽しんででもゐるうちに、晶子の乳房から、腹、太股、尻、背と、全身をくまなくネチ／＼と舐めるように細い廻つた。

いつか、晶子の着てゐる洋服は下着迄も肉体をすべり露ちていた。晶子はひどい羞恥心のため、いつか気が遠くなつて、風間氏のなすがまゝにまかせられるやうになつてしまつた。そして夢の中で、自分の皮膚をなで廻る感触に陶酔を感じていた。

それから、どのくらい時間がたつたであらうか。彼女が気付いた時、彼女は全裸のまま、アトリエの中央に横たわつていた。

そして、その傍の彫刻製作台上には、油土で作られた彫刻らしいものが、煙つたやうな天窓からの陽光にたえまなく濡れていたそれは、彫刻と云えるものであらうか。

ともかく、不思議な物体であつた。大きな広い丘のやうな処があり、谷間のやうな凹みがあり、その谷間を登り上つた頂点に不思議なオベリスクの塔のやうなものが空間にのび上つてゐる。その一つ一つが、実に余りにも美しい谷間であり、丘であり塔であつた。

それは良く／＼見ると、ハツと気付くやうな物体であつた。余りにも、それは女性の肉体のある場所に似てゐるからである。そう云えば、オベリスクの塔は、静かに天空に絶えず、ヒク／＼と動き、我々の本能をかまたてるやうに光り、谷間の皺壁からは乳色の泉が湧き、天窓からの金色の光りにぬれ、地上最高の美を思わせるものがあつた。

x x x



初潮を見ると、娘はもう肉体には異性を受けられる態勢が整っている。生暖かい風が頬を撫てる黄昏時、何んとはなしに人戀しくなり、ぽつてりと膨らみかけた胸を人知れずかき抱いて、熱い吐息を洩らすのも、この年頃である。アブレゲールという勿れ。女は皆、このような思春期の時代を過して人妻となつてゆくのである。

一、覗きみる年頃

ユキ子は、はつと息を飲んだ。如何にもあたりをはぐかるらしい息使い、かすかなさゝやき……

ユキ子が息を飲んで聞き耳を立てたのは、それ等の物音がことさらに秘密らしい様子だったからというそれだけの理由ではなかった。その物音は彼女の全身をビクツとさせるものを含んでいる。

十六才、体験はなかったが知っている年頃だ。

襖をへだてた隣りは、実母君枝の部屋だった。

音のしないように、ユキ子は襖を三分ばかり開ける。丁度片眼だけの幅だ。びつたり押しつけると部屋の半分ばかりが見通せた。

暗い中で人の動いている気配があつた。

「それだけは……お願い」
母の声とは思えない。喉にひつかゝ

つたような声だ。

「大丈夫だ。ユキちゃん、よく眠つてるよ。フフフ、今更羞しがることもないだろう？」

その声もいやにひつつつていたが曾根に違いない。曾根は隣家の離れに下宿している男だ。

すがりつく君枝の腕を振り払つて、中腰で伸び上つた曾根が電燈のスイッチをひねつた。のぞき見しているユキ子のために明るくしたようなものだ。

「この足が可愛いんだ。あんな大きな娘があるとはどうしても思えないな」

曾根は小柄な君枝の足を幾度もなで廻しその指がなめくじみたいにくつくりと上へはい上つてゆく。

二人にとつて、自分がどんな顔をし、自分の身体がどんな恰好をしているかという反省はない。お互いがお互いの醜さの全てを見せ合っているということは、相手の弱点を握っているという心強さからだろう。反対に自分の弱点をもさらけ出させるのだのぞいているユキ子は息をするのもはかられる。口中がべつとりと濕つた。



急にひつそりしてしまつた。嵐が過ぎたみたい……突然

「あッ」

という暇もなかつた。電燈が消える。しかしユキ子は見た。瞬間の姿ではあつたけれど、雪みたい白い母の身体が電燈のスイッチをひねつた、そのスツクと立つた母は一条もまとつていなかつた、それはまるで展覧会で見た彫刻みたいだつたというのを、はつきりと眼の底に焼きつけたのだもの、五分とはかゝらなかつた。狸寝入りをしてゐるユキ子の枕元ににじり寄つた君枝は寝間着に伊達巻をしめてゐる。

「起きていたの？」

「ええ」

とうなづくと、月明りだけの薄暗い部屋で、母の肩のふるえが白い浴衣を通してユキ子には見えた。

ゴクツと音をさめて君枝が唾を飲んだ。

「お母さまはね」

と云つたが後が續かず、君枝は静かにユキ子の夜具の中へ入つて来た。

そしてその母を、ユキ子は妙な匂いがすると思つてゐる。たゞの汗の匂いではない身体がこわばるのほどでしょうもなかつた「お母さまはね」

ともう一度同じことを云つて、君枝は娘の堅い身体を抱いた。

全身の感情がほとぼしり出る。こんな心算ではなかつた。云うならば、ユキ子は母と曾根の行為を好奇の眼で見つめていた。

未知の世界の扉を開き、自分の将来のために役立てようという位な大それた気持もなくはなかつたのに、今、母に抱かれると急に泣き出してしまふのだ。やはり刺戟が、処女としては余りに異常であり強すぎた故であらう。

そして、娘の涙を見ると君枝もそれにさそわれて泣き出すのだ。

「ユキちゃん、ごめんね、ごめんね。お母さま、何んていけないんでしょ。でもユキちゃんもきつとわかつてくれる、お母さまみたいになつたら……」

一、青春の慕情

激しい感情の嵐も朝日と共に消えたらしい。昨夜のことを思い出すと顔の赤くなるのはどうしようもなかつたが、それでもユキ子は割合平静な気持を保つてゐた。学校の放課後、親友の秀子に打ち開ける。おしやれの女学生がよくするように、二人はハンドバックまがいの鞆を肩からかけていた。

ユキ子が口ごもりながら話すと、「無理ないわ」

我が意を得たというように、秀子は大きくうなづくのだ。

「ユキ子さんのママ、未亡人でしょ。」

男を近附けないでいられる筈がないんだもの。あの味はね、一度覚えちゃると、もうどうにも我慢出来なくなつちやうものなのよ」

「くわしいのね」

とユキ子があきれたような声で云つた。多少からかう気持も混つてゐる。

「オッホン、あたしは何でも知つてゐるわ」

と秀子も茶目つ氣な云い方だつたが急に真面目くさつて、

「あなたが余り性的に無知だつたから今まで誘惑しなかつたけど、これからあたしの裏側の世界でも親友にしてあげるわ」

「裏側の世界？」

「そう。学校での秀子は表の世界よ。表があれば裏のあるのが当然だもの。まあ何にも云わないで附いてらっしゃい。喫茶店でお茶でも飲みましょう。おごるわ。ほら、こんなにお金あるのよ」

財布を開けて中を見せる。千円札が数枚入つてゐた。

「あら、秀子さんお金持ちね」

「ウフフ、今朝、ダンスから失敬して来たの」

「そんなことして大丈夫？」

「オブコース」

胸を張つて秀子は答えた。彼女の説明によると、秀子の母は若いつばめを作つてゐるのだが、その秘密を、秀子が握つてゐるのだ。母は娘に頭が上らない。何によらず秀子の思いのまゝになることだつた。

話を聞いて、ユキ子はくらくくと眼まいがする。変つた母娘もあるものだと思つた

そしてつい彼女は考え込むのだ。どんな男でも、どんな女でも断ち切れない性の問題……

ユキ子は昨夜の母の叫び声を思い出す。この上もないほど嬉しそうな声だつた。

ユキ子がそんなことを思つてゐると、

「ちよいとユキ子さん」

と並んで歩いてゐる秀子がユキ子の肘をついた。

「ほら、向うから来る黄色いネクタイの男あの人よ。今話した若いつばめ、健ちゃんつて云うの」

健ちゃんも秀子を見つけた。ソフトの髭に手をかけて、

「やあ、秀子さん、散歩ですか？」

「お茶でも飲もうかと思つてるところよ」

「丁度よかつた。ボクも一休みしたいなと思つていたところなんです。もしよかつたら御一緒に……」

「ママが妬くわよ。どうせランデブーなんでしょ？早く行つてあげて頂戴」

「ハッハッハ冗談云つちやいけませんよ。ボクの顔を見るとすぐそんなことを云うのは秀子さんの悪い癖だな」

「でも、本当だから仕様がないわ」

「益々かなわな。ところで、この美しいお嬢さんはどなたなんですか？紹介して下さいよ」

健ちゃんもユキ子を見た。秀子が紹介すると丁寧な頭を下げる。

「ボク、長野健吉です」

ユキ子は上氣したように頬をポーツと染めた。今までは誰だつてユキ子を子供あつかいにしていた。一人前の女としてあつかわれたことは一度もない。それなのに健吉だけがこんな風に丁寧してくるので、

彼女は急に大人になったような感じ嬉しくてたまらないのだ。

三人は喫茶店に入った。

「健ちゃん、さつきからいかにユキ子さんばかり見詰めてるわね。誘惑したりなんかしちゃア駄目よ。この人はちゃんとしたヴァージンなんだから、あんたみたいなドンファンにはもつたないわ」

秀子がズケ／＼とたしなめる。

「ひどいなあ。ボクがドンファンなら世の中にドンファンでない男なんて存在しないつてことになりますよ。ボクに悪い点があるとすれば、それは気が弱いことだけなんです。女の人に求められると、つい拒

みきれなくなつちやうですよ。そしてそれも、根本はボクが未だに本当の愛情を知らないからなんです。もし、ボクが生命を捧げてほしいと思ふほどの女性に出会えたら、ボクだつて生き甲斐が出来るし、勇氣もきつと出ると思ふのですよ」

しおたれて懺悔する健吉をユキ子は可哀相に思つた。健吉の氣持がよくわかるのだ。それなのに、秀子は全く別な意見を持つてゐる。

「あら、この人つたら、もう爪を磨いてるのね、油断も隙もありやアしない。ユキ子さん、氣をつけてね、何時も健ちゃんはこの手なんだから」

そんなことを云われると健吉は赤くなつてうつむいてしまつた。

「どちらが正しいのかユキ子にはわからない。しかし、秀子のお母さんの若いつばめである以上、やはり健吉の言葉なんか信用しないに越したことはあるまい。云わば秀子はユキ子の先輩だから先輩の意見を尊重しておく方が無難なのだ。」

ユキ子はコーヒをスプーンでかき廻した。

その時だ、喫茶店のドアを押して一人の男が入つて来た。二十前後、若原雅夫をもう少し痩せ型にしたような男だが、その男の顔を見ると、

「あーら」と秀子が大声で叫んで飛び上つた。

「会いたかつたわ。よくこゝにゐるつてわかつたわね」

「窓からちらと横顔が見えたからね、そりじやアないかと思つて入つて来たんだ」

「嬉しいわ、とつても」

まるで外国映画の場面みたいに、二人は人眼もはゞからず抱擁するのだ。世事にうといユキ子にもその男が秀子の恋人だといふこと位はわかる。秀子はもうユキ子なんかにかまつてはいなかつた。ベチャクチャと話している。

「妙な具合ですね」と小声で健吉がユキ子にさゝやいた。

「我々は犬に食われてしかるべきなのかも知れない。犬に食われない内に、そつと外へ出ようじやありませんか」

「えゝ」

とユキ子はうなづく。それでも一応は秀子に言葉をかけておかなくてはいけないように思つたが、

「恋路を邪魔しちやア氣の毒ですよ」

と云われるとなるほどと思へ、彼女は健吉と一緒に立ち上つた。

うつとりと眼をつぶり、堅く抱き合つてゐる秀子は、二人が外へ出たのをちつとも氣附かないのだ。

三、幼花散華す

「どうも有難うございました。あたし、こゝで失礼しますわ」

とユキ子が立ち止つた。

「まあいゝじやありませんか。お宅までお送りしましょう。夜道は物騒ですから



玲子 繪

ね」

無理にユキ子をうながすのは健吉だ。

あたりは夜の色に塗りつぶされていた。

あの喫茶店を抜け出してから、二人は映画館に入つたのだ。小遣い銭に不自由しているユキ子のような女学生は映画に誘われるとひとたまりもない。當日頃から見たい見たいと思つてゐるし、映画位一緒に見ても別にどうこうということはないのだから、つい断り切れなくなるのだ。もつとも、夕御飯と一緒に喰べようという申し出は断乎として断つたけれど。

「さあ、お送りしましょう。それとも、ボクみたいな男と一緒に歩くのは嫌ですか？」

怒るような健吉の言葉にユキ子は返答する術を知らなかつた。

肩を並べて歩くと、時々、男の腕がユキ子の手にぶつつかる。道路の水たまりをよけたひょうしに腰にさわることもある。そんな時、ユキ子はあわてゝ飛びのくのだが、そうしながらも彼女は何か胸がワク／＼するよるような氣持を押え難い。自然にまたもよりそつて行くのだ。しかしユキ子は考へてゐる。

「もしもこの人が不意にあたしをつかまえて接吻したらどうしよう？ 秀子さんはこの人をドンファンだつて云つてたんだもの、あり得ることだわ」

だが健吉は一向に接吻する様子がなかつた。時たま腕がふれ合うのも全く自然な調子だ。いさゝかの作意もない。

映画を見ている時も同じ調子だつた。暗い中だもの、手を握る位何でもない筈だ。現にユキ子の隣りに腰かけた男女など、もつといやらしいことをしていた。しかし健

吉はおとなしく画面に見入つてゐるのだ。

秀子をも交えて、三人で話してゐた時とはまるで別人みたいに健吉は無口になつてゐた。そして健吉をドンファンだと云つた秀子の言葉を、ユキ子は嘘じやないかと思ふ。ちつともドンファンらしくないのだ。

だが、その内にユキ子は意外なことに氣附いた。

「そうだわ。この人はあたしを子供あつかいにしているのよ。きつと」

氣がつくとたまらなかつた。始めて一人前の女としてとりあつかつてくれたということだ。健吉に感謝してゐたのに、その健吉も實際は子供とより思つてゐてはくれなかつたのだ。

うらめしそりにユキ子は健吉の横顔を見た。そして、

「あら」

と彼女は叫んでしまふのだ。

「ど、どうなさいましたの？」

健吉の眼には涙が一杯たまつてゐる。街燈の光りを受けて、涙はキラツときらめいた。

「いゝえ、何でもありません」

健吉は顔をそむけたが、何でもないと云われると聞きたくなるのが当然だ。男が泣くというのはよほどのことに違ひない。ユキ子が自分からすがりつくと、

「下らないことなのですがね、笑つて下さい。あなたがボクとだけ御飯も一緒に喰べては下さらないんだと思うと、何だか悲しくなつてしまつたのですよ」

自分を嘲つてゐるような口調だ。電氣にでも触れたように、ユキ子はビリ／＼と身をふるわせた。子供あつかいされているなと考へたのは誤解だつた。それが嬉しく

て、彼女の瞳がしめつたが、

「でもね、早く帰らないと、あたし、お母さまに叱られますの」

「えゝ、よくわかつていますよ。だからボクは無理になつてお願いしてゐるのではありませんし、第一、ボクみたいな汚れた男は、あなたにお願いなんて出来る柄じやアないのです。もしも一年前にさえお会いしていたら、ボクだつてあなたと対等の地位でお話出来たでしょうけれど、今じゃ駄目です。所詮、どうにもならない恋だと諦めていきます」

「えッ？」

とユキ子が男を見上げると、健吉はさもないとしそりにユキ子の顔を見つめたが、うるんだ瞳をそらして、

「失礼。失言です。氣にしないで下さい」

だが氣にしないでくれと云うのは無理だ。恋愛小説はたくさん読んでゐるユキ子だし今さつき見た外国映画も若い男女の戀愛を描いたものだつた。恋という言葉を始めて異性からさゝやかれた今、ユキ子はどうしてもその言葉に無関心ではいられないのだ。降るような星空。

片側は黒板塀でその向いは原ツばだし、二人の姿を見ているのは電柱に取り残された街燈一つ。

遠くから自動車の警笛が聞えてくる。

氣分の盛り上る雰囲気としてはこの上もない場所だつた。

ユキ子の心が二つに乱れる。

「早く帰らねばならない。お母さまが待つてらつしやるだらうし、それにこの人はドンファンなのだもの」

しかしそう思いつゝも、彼女は健吉の涙は重大な意味を持つてゐると信じてゐる。

言葉は信用出来ないけれど、如何にドンファンでも涙を勝手氣まゝに流すわけにはいかない筈だ。健吉の涙がユキ子の心をとかつて行つた。

「お母さまはあたしの帰りのおそいのをかえつて喜んでらつしやるかも知れないわ。何故つて、曾根さんと大つびらに遊べるんだもの」

そう考へた時、ユキ子の全身から力が抜けた。

そして二人は映画の場面と同じことをしてしまつたのだが、煙草のヤニの匂いにへキエキしてる、ユキ子は舌の根が抜けるよるな異様な感觸を果ては甘い味あうのだ。健吉が地面に落ちたユキ子の鞆を拾つてくれた。

食事を摂るために二人は今来た道へ引つ返す。

「自動車に乗ろう」

「まあ素敵！」

ゆつたりしたクツシヨンに身をうずめ、始めて唇を許した女特有のでれ／＼した態度で、ユキ子は健吉にしなだれかゝる。

「うまい料理屋を知つてゐるからね」

と健吉がさゝやいた。

その料理屋、軒燈に「さゝぶね」と読めなければ、その料理屋が実は泊りの方を歓迎するとは夢にも知らないユキ子は、磨き上げた廊下を滑らないように氣をつけながら歩いている。女中が彼女を一人前の女のお客として待遇してくれることがこの上もなく嬉しいのだ。

共に食欲を満足させるということは、外交官の常に用いる術策だ。仇敵同志の間柄でも親しい氣分が時として生れる。まして接吻までした今となつては、二人が大いに

食い、且つ大いに語るのも当然だろう。

「一つ飲んでごらん」

と健吉が盃を差し出した。

「おいしいの？」

と首をかしげるユキ子……誰からも教えられた筈はないのに、幼い媚態がたゞよっている。健吉はニヤ／＼笑いながら、

「何によらず実験してみなくっちゃアわからないよ」

「そうね」

と一息に空けて、

「オ、カライ！」

ユキ子はむせてしまったが、

「始めはちよつと痛いかも知れないが、な
あに、すぐに慣れるさ。慣れたらこれほど
いゝ味のものはどこを探したつてありやア
しないよ」

健吉はわけのわからないことを云つて、
ついとユキ子の手首を握った。

四、本能の誘惑

「バカ！」

と叫んだと思うと秀子の平手がユキ子の
頬に飛んだ。見る見る頬は指の形をつけ、
そこどころだけが赤くなつた。

「だからあたしがあんなにまで云つたじや
ないの。彼はドンファンなのよ。その上、
男めかけ。仕事しないでいゝ洋服着てるの
はどこからお金が入ると思つてるの？みん
な女からしほり上げてるのよ。あたしのマ
マもしほられてる一人だわ。そんなのが
他にも三人ほどいるのよ。そりやアあの時
仙ちやんが急に飛び出して来たから、あた
し、ふら／＼つとなつちやつて、あなたの
こと放つておいたのはいけなかつたわ。で

もね、あれほど注意しなさいつて云つて
のに行くところまで行つちやうなんて、あ
なたバカよ。あたしはね、あなたに似合い
そうな、スマートで純情な青年を紹介しよ
うと思つてたの。あゝあ、みんな水の泡ね
健ちやんなんて、あんな男のどこに魅力
を感じたの？」

ずけ／＼と云いたいことを云う秀子だつ
た。そしてそれもユキ子のことを心配すれ
ばこそなのだろう。だが、ユキ子は白い眼
で秀子を見つめてゐる。見つめてゐるとい
うよりもにらんでゐる。

女の喜びを知つたことを報告し、秀子に
も喜んでもらおうという気持で話をしたユ
キ子だつたが、秀子からこんなひどいこと
を云われると顔にさわつた。

「秀子さん、あなたはあの人のことをちつ
とも知らないのよ。誤解してゐるのよ。あ
の人、云つてくれたわ。この愛は一生変ら
ない、ボクは今まであなたのような人を求
めて淋しい愛情の放浪をしていたんだつて
あの人、そう云つたわよ。こう云うと失礼
だけど、あの方はあなたのお母さまのこと
なんか何とも思つていなかったのよ。たゞ
あなたのお母さまが余りしつこいからいゝ
加減にあしらつただけなんですつて。更生
を誓つてくれたわ」

「甘いわねエ。そんな言葉で欺されたの。
ユキ子さんつてもうちよつと利口だと思つ
ていたわ。誰も彼も本当のことばかり云う
ものだなんて考え方、それこそトンデモハ
ツブンよ」

「ホ、ハ、……」

と急に身についたシナを作つてユキ子が
笑つた。

草が黄ばんでゐる。頭の上を電車がゴ

ツと走り過ぎ
た。自慢話を
打ち開けるた
めに、人眼に
つかない河原
の橋の下を選
んだ二人だつ
た。

「あたしだつ
て、秀子さん
が思つてるほ
どバカじゃな
いわ」

ユキ子はつ
んと澄ました
一人の男の愛
情をたしかに
自分の身体
の中でつかん
でゐるという
自信が、この
少女をも強く
するのだ。

まるで手品の
種を教える
みたいに、ユ
キ子は得意の
鼻をうごめか
せながら、健
吉が泣いた話
をする。それ
はユキ子の切
札だつた。

「言葉なんて
信用しないわ
でも、あの人



泣き出したのよ。涙をポロ／＼こぼして：どう？涙だけは真実よ。あたし、この眼でちゃんと見たわ」

「そんなこと云つてゐるからユキ子さんはバカなのよ。あんな男の涙、信用出来やしない」

「まだもつと云い続けようとするのへ、わかつたわ」

とユキ子がおつかぶせて、

「秀子さん、妬いてるのね？お母さまの恋人、あたしが取つてしまつたから」

「バカ！人の氣も知らないで！」

「またもユキ子の頬が鳴つた。さしもおとなしいユキ子も堪忍袋の緒が切れる。」

「何よ？ぶたなくてもいゝじやないの？」

「ぶつたのがどうしていけないの？あなたがバカだからよ。汚いわ。さあ、川で身体洗つてらつしやい」

秀子がユキ子をとんと押した。思わず二三歩よろめいて、川岸ぎり／＼まで来てしまつたが、

「妬きもち嫌き！」

「まなじりを釣り上げて、ユキ子は秀子の腰に武者振りをした。」

髪をひつつかみ、爪を立て、蹴る。

少女でもこうなると普通の女と変らな。しばらくの間、ごろ／＼とそこらあたりをころがつたが、秀子の方が力は強かつた。

「ギュー／＼云うほど押さえつけ、

「バカ！ユキ子のバカ！あいつはね、何時でも泣き棄つてもの、持つてゐるのよ。眼薬みたいな瓶に入れて。それをちよいと眼につけたら、可笑しい時でも涙がポロ／＼出るのよオ」

「えッ？」

と云つたまゝ、ユキ子はぐつたりしてしまつた。

喧嘩をしている場合ではない。

「本当？あたし、信じられない。そんなお薬あるの？」

泣き声だつた。そして秀子とても、ユキ子が憎くて馬乗りになつてゐるわけではないから、すぐ慰めつゝ、

「本当よ。あたしは嘘つかないわ。映画や芝居の俳優が使うように作つてあるのよ」

二人は河原に並んで寝そべつてゐた。何時まで経つてもユキ子の涙は止まりそうにない。

空があかね色に染まつた。

「そろ／＼帰りましょうか……」

と秀子がやゝ丁寧な言葉で云つて身を起した。そしてこの時になつて、彼女は自分が飛んでもないことをしてしまつたことに氣附くのだ。

ユキ子のスカートが縦にさけている。もつとも、秀子の服装もちゃんとしたものとは云えなかつたけれど、これほど大きな破損はなかつた。さつき喧嘩をした時に破いてしまつたのだらう。

「さあ大変！帰れないわ」

ユキ子は泣いてゐるばかりだから相談相手にはならない。秀子が一人で智慧をしぼつた。

「ユキ子さん、しばらく待つてらつしやいね。あたし、家へ歸つて何か着換え持つてくるわ」

一時の猶予も出来ない秀子は大急ぎだ。その秀子の去つたことも知らないように、ユキ子はオイ／＼と泣いてゐた。自分の失つたものへの感傷と欺かれた口惜しさ。

薄暗い影がこの橋の下を徐々に征服して行く。

破けたスカートの隙間からぞいてゐる健康そうなユキ子の太股は、もしも誰かその辺を通りかゝる男が見つけたとしたら、さぞや食欲をそゝるものだつたらう。たしかにそれは新鮮な果物を想わせた。

川のせゝらぎが耳に近い。

急いではいるのだらうが、秀子は仲々歸つて来なかつた。秀子が歸つてくるよりも先に、この橋の下を通り合せたのは中年の男だ。散歩でもしていたのだらう。

既にほとんど影ばかりになつてしまつた夜の世間で、男の眼がギロリと光つた。

「もし／＼、もし／＼、お嬢さん」

呼んでもユキ子が泣きじやくつてゐるばかりだとわかつた。

「お嬢さん、風邪をひきますよ」

そんなことを云いながら、男は四辺を見廻すのだ。もとより人影一つ動かなかつた。

五、アプレの敗北

娘の身体の変調を見抜くことにかけて、母は本能的に鋭い嗅覺を持つてゐる。

こゝ数日前からユキ子の顔色がすぐれな



いことゝ、それからもう一つ、度々御不淨に入り、その時間もぐんと永くなつたといふことで、君枝は頭を痛めてゐた。彼女は、そのことをユキ子に聞こうと思つてゐる。だが、いざ顔を合せたとなると、どうしても切り出せなかつた。

以前なら、

「ユキちゃんどうしたの？この頃、変ね？」

と軽く云えばいいことだつた。

ところが、曾根とのあのことを見られてからこちら、ユキ子ははてんで母に口をきいてくれない。自分の方から話しかけないのは勿論、必要な返事もしないのだ。家にいる間は完全な無言を守つてゐた。時々外泊することもある。

氣嫌氣嫌をとり結ぶのは君枝の方だ。まるでおろ／＼してしまふ。おとなしいユキ子をこんなにしてしまつたのも、元はと云えば自分に罪があるといふことを知つてゐるから、手のつけようがないのだ。外泊し

て、どこで泊ったとも云わない娘を叱ることも出来ない。ユキ子の気がほぐれるのを氣永に待っている。

しかし、近頃のユキ子を見ていると君枝はそう氣永にもかまえていられないのだ。思い切つて、夜、ユキ子の枕元に坐つた。疊に両手をついて、

「ユキ子さん、お母さま謝ります。この通り。申しわけございません」

妙な具合だが君枝は真剣だ。頭を下げた「悪うございました。ついあんなことになつてしまい、亡くなられたお父さまにもそむいてしまいましたし、ユキ子さんも、こんな母、母とも思つては下さいませんでし

よう。本当に悪うございました」

君枝はうつ伏してさめふくと泣いた。どうして曾根などに誘惑されてしまったのだらうかと、自分の頼りなさが悔まれる。

ユキ子は見返ろうともしなかつた。頸を夜具にうずめ、堅く眼をつぶっている。君枝の声が聞えないみたいだ。

「ユキ子さん、ユキ子さん」

とたまりかねて君枝がユキ子の肩に手をかけた。そして、

「まあ、ユキ子さん、あなた……」

君枝の声が急に変わるのだ。額に手を当てた。

「高い熱！どうして云つてくれなかつたの

？」

鼻声で、すぐ濡手拭を持つて来た。

「ユキ子さん、どこが痛むの？ねえ、ユキ子さん」

顔をのぞき込むと、ツツと閉じた眼からあられる涙がユキ子の頬をはう。

「お母さま」

と呼んだユキ子の口がいに臭かつた。

「えええ、お母さまここにいますよ。今すぐお医者さま呼んで来ますからね。神崎先生とこへ一走り行つて来ましょう」

立ち上ろうとすると、

「お母さま」

ともう一度呼んで、

「神崎先生は駄目」

「あら、どうして？何時も診ていたでいてるじゃありませんか」

「でも神崎先生、内科と小児科だけでしょ？」

力弱いユキ子の声が、どういふ意味でこんなことを云うのか、始めの内、君枝にはわからなかつた。平凡な結婚をして、今度始めて浮気に似たようなことをしただけの君枝だつたからそれも無理からぬことだろう。だが、その内に彼女は真青になるのだ「ユ、ユ、ユ、ユキ子さん、あなた」まさかと云いかけて、その言葉はぐつと飲んだまゝ君枝はその場へべつたりと坐り込んでしまつた。
(終)

異色艶色譚

(バッテリーにかゝつたうなぎの話)

女社長と女秘書

二 俣 志津子

志乃田よしる一畫

一、牛乳風呂に浸る

でつぶりのした地方銀行Sの重役丸茂は、まだいきたなく眠つていた。

智江はベットを脱け出すと、湯殿へ出掛けた。湯殿は日本風と西洋風との両方あつた。それは客をもてなすためでもあるが、智江の風呂好きも大したものであつた。彼女は朝夕必ず風呂に入つた。

彼女は、朝陽の差込む明るい西洋風呂の中でのびのびと四肢をのばして丸茂の体臭を洗い流した。湯を落してから牛乳を流し

込む。彼女は永遠に若さを失いたくないのだ。しかし、それが望めないことであるとすれば、人力で出来る限りのことをして若さを保ちたい。

と言うのが彼女の望みの一つであつた。

それから綿密的なゆとり、自由気儘に振舞えること……今、それらがおびやかされつゝある。彼女の経営しているゴム工場が具合が悪くなつてきていた。朝鮮戦線の停戦交渉が伝えられているが、中共とは貿易が出来ず、国内では製品がけなくなつてきているからだ。だが、彼女には野心があつた。折角従業員も三百名を超えるまでの

会社にしたのだ。彼女は昨夜とらとり丸茂を口説落して金の借入れの目やすをつけた量感のある脂肪肥りの五十男をあつかうには、大分精神的負担であつた。特に智江のように自我の強い女には。

彼女は牛乳風呂から上ると、ベットにながながと伏せたままムベルを押した。

秘書の君子が大きなタオルと香油壺を抱えて入つてきた。彼女は習慣的に智江をタオルでくるみ濕氣をとつた。それから、香油を塗りながらマッサージをするのだ。一年前まで智江は氣に入つた課長や事務員達にマッサージをさせていたのであるが、男

達はおどおどして、慣れると図々しくて、力の人れどころにむらがあり、良い氣持でいる時に、はつとさせられて氣分が悪くなつたりするので、この仕事は君子に任せるようになったのである。君子は大柄で太つた感じのよい娘であつた。彼女の掌、指が快く智江の肉体をもみほぐしてゆく。智江には、乳房から下へ、波の渚に奇せるようにゆれてゆくりズムにゆられながら、薄目をあけて君子を眺めた。

「君子、何か面白い話をしてくれない」「はい」

彼女は一寸遠くを見るような目付きにな

つた。しかし、指は滑らかにゆれながら下へのびているのである。

「社長さんは、うなぎ取りの密漁を御存知ですか？」

「ほー。知らないね」

「それは、電気ですね、バッテリーを使うのです。今では四千円位になったでしよ。六キロので、六十ワットの電燈が点きますが、そのバッテリーをうなぎの巢に差込んでスイッチを入れるのです。すると、うなぎがくらあん、と白い腹を返して穴から飛び出てきます。それを素早く玉網ですくつてビクに入れるのですが、放つておくと逃げ出しますの。面白いようですワ」

「お前、それをやつたことがあるのかい」

「えー」

「どうだろう、人間の穴に入り込んだらうなぎも、くらあん、と、飛び出すだろうか」

君子は丁度そのあたりをマッサージしていたのでちよつと照れた表情になった。

「どう、お前やつてみない」

智江は、悪戯児のように大きな目をくるくるさせて天井を眺めた。

「くらあん、とね」

「いやですワ、社長さん。私、それをかけられたことがあるんですもの」

「ふーん、お前がね。どうだつたね、くらあん、と、出たかね」

「入つたのですワ」

智江はおや、と云うように君子の横顔を眺めた。

「おや、お前自分で、私はまだ処女です。と言つたばかりじゃないか」

「えー、でも……」

「まあいゝからお話し」

「私、会社に入る前に胸で、ちよつとサナ

トリウムに入つていたところがあるんです。その頃医務課員の一人とよい仲になつて……あら、みんなそうですワ。看護婦さんと患者さん。女患さんとお医者さん。お医者さんと看護婦さん。いろいろ入混んだものですワ。どうせ治らない。生きてゐるうちにしたいことをしておこう。つて、それに、昼間は殆んど安静時間だと言つて寝かされてゐるんですもの、せめて夜を我が世と、重患さんが夜だけ閑なくなつたりしたものですワ。

私は個室に居て一人でしたので、わりに自由で気兼ねなしでしたの。でも、夜などドアをあけると廊下にひびくでしよ。で、庭に面した窓をのり越したり、のり越してきたりしていたんです。楽しかつたわ。

夜、月のない晩でしたけれど、水車小屋に落ちることにしていたので、そこでしばらく彼氏を待つていたのです。谷川が流れていていゝ処でしたワ。しかし、彼氏はなかなか来ないし、ひよつとすると病室に来ているのかも知れないと思つて歩き出そうとした時、ぐーん、と、衝撃を受けたのです。声もたてられずに倒れて、それで、何でやられたのかさつぱりわからなかつたんです。三、四秒してから電気だ。と、思つたのですが、電気のある処ではなし変だな

水車小屋の所で突然ぐーんときたので、聲も立てられずに倒れてしまつたのです。



と思つた時、元までずいつと、まるでバッテリーをうなぎの穴に差込むほど確かに……えー、うなぎが入つてきたのです。体がしびれていて、声をたてるにも抵抗するにもどうにもならないうちにその人が言うように、うなぎよりも簡単だつたんです。のびましたわ」

「お前ののびるところを見たかつたよ」

「その頃はもつとやせてスタイルが良かったですわ。とに角、どこの誰べえ様だかなすまゝ、するまゝ。口惜かつたわ、また来ます、だつて。」

彼氏が来る頃やつと起上つたけれど、彼氏、今日は君、少しおかしいよ。ですつ

て。当り前じゃないの。あら、あんたこそお酒飲んで来たんじゃない？ つて、それでその場はごまかしてしまつたんですけれど、あの時はこたえたわ」

「今はこたえないのかい？」

「えー、今は、ビリビリと来ても、これはバッテリーだ、これはバッテリーだ、つて胸の内、言ひ乍ら突張ると、それですんでしまふんです」

「ほー、お前がそんなに頼もしいとは思わなかつたよ。で、その男とは今でも？」

「いやですワ。うなぎ取りの話ですよ」

「いゝよいゝよ。何でも。さ、起して」

君子は智江に服を渡した。と、智江の頭

にはもう、企業経営のうづが巻いているのである。彼女は、旅館とゴム工場と遊廓を持っていた。が、今のところ黒字は、進駐軍将兵がよく泊る旅館の方だけである。服を着込むと彼女は精力的で敏活になるのだ

二、うなぎの夜釣り

君子は、ひそかに、ありもしない出たためを嘆つてしまったことを後悔した。実際に彼女は、男の性的関係がどんなものであるのか全然知らなかった。

彼女は、その日一日智江の後に従いて歩きながら、そのことに氣を病んでいた。が智江はもう、そんなことをけろつと忘れたように活動していた。

会社の給料はこゝ二、三ヶ月遅配になっていた。で、女工達の中には、仕事が終わると、智江の経営している遊廓の門前に立つて客を引く者がふえてきていた。

モデル女になる者も二、三居た。が、女工達は、身体の均整がとれていなかったりカメラフェイスが悪くてダメであつた。智江は、慾得でなく君子にそれをすゝめたことがある。が、彼女は、社長こそモデルにもつてこいだと内心思つていた。そして、自分にカメラがあつたらなア、と思うのである。それは、単に、美しいものを記録にとめておきたい。と言うばかりでなく、矢張り性的魅力を感じるのである。そして、ふと、あの社長にバッテリーをかけたらどうだろう。と。想像したりした。西洋風呂で牛乳に浸つてながながとしている時、ちよつと出来そうに思えた。くらあんと。それこそくらあんと浮いてしまふだろう。と思つた。



湯の中で感電した時、人間、女は仰向けに浮くことは、この町の電氣風呂事件の目撃者——危く被害者となつて洗くところであつた——として知つていた。午後の二時頃、銭湯はその頃が一番きれいなのでよく

出掛けたが、或日、芸者達が四、五人先に入つていた。で、彼女も入つたのであるが湯槽から出ようとした一人の芸者が悲鳴をあげて湯の中に仰向けに浮上つてしまつたのである。続いて又一人。番台から親父が

飛んでくる。三助が浮いた芸者の足を持つて湯槽から出そうとして自分ひつくり返つてしまふ。男湯からのぞきに来る、警官が来る……出るに出不れず困り切つたことがあるからである。湯槽の縁の金属にどこからか電流が通じていたのである。

君子の家は貧しかつたし、八人の大家族であるので、彼女は、会社から帰つてくると、他に用のない限り川へうなぎを取りに行くのである。その時いつも、バッテリーがあつたらなア。と、思うのである。四千元。それではとても手がとどかない。仕方がない。と、あきらめて短い竿とビクを持つて小指程の太さのうなぎを釣りに行くのである。十一時頃までにそんなのが三、四百匹釣れる。翌日、父がそれを町へ売りに行くのである。

釣仲間仲間同志にめつたなことはしない。が、時には、どうだね、俺のうなぎをみんなやるで、ちよいやらんかね。と、彼女にやにやと迫ってくる者もあつた。一度許したら、聞き伝えて釣場中の男にせよられてしまふ。そう思つて強く出るのだ。水泳が達者であつたし、軽装であるので、いざとなつたら流れに飛込んで対岸へ行つてしまふつもりでいた。

夜、男はみんな変貌するやうに彼女には思えた。三鈴化粧品店の虫も殺さぬ顔をした若主人平十が、彼女の脇に坐り込んで、ヘラヘラ笑いながら懐中電燈で、自分の股間をちらちら照らしていたが、彼女に反応がないと知ると、他人に言わないでくれ、と言つて自分のうなぎをみんな彼女のビクの中にあけていつたことがある。夏の夜の道楽としての釣であるので、獲物は第二義なのであろう。なかには騎士気取りの男が

居るかと思うと、何とかして彼女をものにしようと思つて居る者が居る。しかし、川を泳ぎ渡る自信のある者は居ないらしい。

君子は、場も良いにはいゝが、いつもビクを重くして帰ることが出来た。で、彼女は、毎日うなぎを喰わなければならなかつた。彼女がこゝ一年の間にめつきり肉付がよくなつたのはそのせいであるにちがいない。

会社では、よく友達が恋愛の話に夢中になつてゐた。が、彼女は仲間に加わらない。恋愛する相手が居なくて恋愛の話をするなど、大よそつまらないと思つてゐたからである。しかし、友達は恋人が居ないから恋の話に花を咲かせて自慰してゐるのである。それで、君子のことを、むつゝり助平で毎晩河原で何人位いとあれをしてゐる、と、言うのである。そう云う友達自身堤でよく男に簡単に引かゝつた。君子はうなぎを釣りながら女の呻き声を聞くことがあつた。しかし彼女は、釣場を離れることがない。夜はひつきりなしにうなぎが餌につくからである。

彼女が毎夜男達と関係してゐる、と言う噂は会社の友達ばかりでなく、近所の内儀さん達にまで評判らしかつた。が、噂と云うものは当の本人の耳へはなかく入らぬものである。で、彼女は平氣であつた。夕方チンピラがどうだい今夜俺と。と、寄つてくると、その鼻先にミミズを押付けてやるのだ。そして意氣地のないうなぎだね、と、笑いとばしてさつさと河原へ出掛けて行くのである。

三、豚みたいになつた女

君子の生活は、嵐と夜とで完全に違つてゐた。嵐は、鵜のけをついたほどのすきもなく流行の洋服を着こなして、智江と共にハイヤーを乗廻し、時には智江の代理にも出て、社交、外交の中に巧みに泳ぐ術も知つてゐる。女学校に居た頃英語が大嫌いであつたのが、今ではガイドも出来る程である。智江が重宝がるのも無理がなかつた。ところが夜は、薄汚いぼろ服で、乳房が見えそうな、膝小僧の出ている、すきだらけの姿で言葉も連葉になつてしまふのである。彼女は、そんな自分が内心得意でもあつたのである。

或朝、君子は風呂場で、「貧弱なものなんだね」と智江からバッテリーを渡された。それは、玉綱までついてゐる、うなぎ密漁専門につくられたものであつた。「大きなうなぎはいないからね」智江は、牛乳の中で、大びらにふざけながら、君子を見上げて意味あり氣に笑つた。

「相手に悟られちゃ面白くないし」彼女は勿論、その時の相手の男にかけることを言つてゐるのである。彼女は最近君子に情熱的な視線を授けるようになってゐた。それに彼女は君子の前に何も隠すことをしないのである。で、君子も、智江がどんなきわどい仕事をするのを見ても平氣であつた。君子はベッドを整えながら智江へ振返つた。

「不能にならないかしら」
「男なんて、みんな不能になつたてかまやしないよ。人工受精の出来る世の中だから、必要の時は絞ればいい。しかし、子供を生むことなんか、真平だね」
「私も御免ですわ」
「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

「君子、お前も今日からこの風呂にお入りな、お前話せるよ」
「すみません」
君子はバッテリーをかけられるな、と直感した。智江のことだからやり兼ねないのだ。

接吻をあげせかけた。
「抱くのだよ。遠慮することない、そうすり、もつと強く。お前、太つてゐるね。豚みたいだよ」
智江はそう言いながら、君子の腰の肉をつまんで、笑つた。

「お前は今日から私の情人だよ、私が何も彼も教えてやる」
君子には、まるで嵐のような瞬間であつたのだ。肉体的によりも精神的衝撃が彼女をうつたのだ。智江はベッドに寝転んで君子を見下した。

「どう」
と、深い響を持たせて君子を呼んだ。
「え」
「じきに慣れるさ、お前は物覚えがいいからね」
そう言つて、ふゝ、つと笑つた。君子は胸から腰のあたりまで静かにさぐつてみた。乳房がづき／＼とうずいてゐる。わ／＼と泣出した。う／＼な感情が胸の奥からつきあけてくる。唇の上にはまだ接吻の触感が残つてゐた。彼女は、智江を見るのがまぶしいやうで、彼女に背を向けて起上つた。

「全く、豚みたいになつてゐる子だよ、バッテリーなんかき／＼やしないよ、この子に」智江はそう言つて又笑つた。

四、電氣くらあん

の話

君子は、バッテリーをもらつて帰ると、

その夜、河原で恐る恐る自分の身体にバッテリーをかけてみた。衝撃！。しかし倒れることもなかった。

彼女はそれから毎晩自分の身体にバッテリーをかけた。そして、そのうちに、ビリッ、と感じるだけで何でもなくなつてしまつた。朝は智江との抱擁と遊戯がつづいた。しかし、給料が増えるわけではないのでうなぎ釣は止めることが出来ないのである。

夏も土用に入つた或日、丸茂重役が、一緒にうなぎ釣りに行こう。と、君子をさそつた。君子は、行くにも行かぬにも、智江に呼ばれない限りは河原へ出掛けていたので、面白半分に応じた。

丸茂は、君子と肩をならべて河原を歩きながら、

「おい、今夜わしとどうだな」

と、さうやいた。君子は、油ぎつた丸茂をちらつと見て、これではバッテリーはかゝらないかもしれないな。と、苦笑した。

丸茂の好色は知られていた。彼は一人の女に執着することがなく、女から女を漁つていと云う噂であつた。

「なア、わしは前からあんたが好きじやつたよ」

「いくら」

君子は、夜の女達の口調を真似た。

「五枚」

「少いワ」

「七枚」

「銀行屋のくせに、ケチね」

丸茂はしぶしぶと千円札を一枚、彼女のビクの中に押込んだ。

「これでいゝだろう」

「我慢するわ、その代り、バッテリーかけ

るわよ」

「バッテリーつてなんだい」

「実験よ。十の極を丸茂さんに、一の極を私にかけて、多く衝撃を受けた方が愛情がないつて言うの、つまり、その電流の度合いによつて愛の軽重を計ろうつて言うの」

「ふーん、それは面白いな。どうだ、こゝらの砂丘で」

「少し濡つてゐるわね、でもいゝわ」

二人は流れを前にして砂丘に腰を下した。君子は男の肌にあふれるのはこれが始めてあつた。が、丸茂は、酒を飲んで充電してくるんだつた。などどぶつぶつ言いながら、ぼつてりと脂ぎつた肌をじかに出した。

君子はそれを見ながら、くらあん、ひつくり返つたりうなぎを連想して、クスリ、と笑つた。

「可笑しいかい。初めてじやないんだろ

う。君」

「処女膜健在よ」

「健在とは恐れ入つたな。と、俺が初穂つて言うわけだな。思わなかつたよ」

「失礼しちやうワ、確認してよ」

「うんうん」

「ね、本当でしょ！もう一枚頂戴！」

丸茂は闇の中でやゝ笑いながら更に一枚渡した。

君子はバッテリーを拾つた。そして夢中で丸茂と自分の体にバッテリーをあてて、ス

イツチを入れた。と、彼は、む、と、そり返つて、くらあん、と、転り落ちた。彼女ははつとして起上り、丸茂を抱起した。彼は心臓麻痺を起したのだ。彼女は急いで彼に服を着せると、町へ向つて駆出した。

丸茂はうなぎ釣中心臓麻痺で死亡。と言

うことになつた。

朝、智江は君子にマツサージをさせながら彼女を鋭く見据えた。

「お前、本当に実験したんだね」

君子は眼を伏せた。智江の豊かな胸を静かに揉みながら言いた。

「お前のお蔭で、私は又新らしいうなぎを獲えなくちやならなくなつたよ。うなぎ取りも亦楽しいもんだけどさ。そらだろ」

そして、彼女は腹をゆすつて男のように

笑つた。

「今度つからは、お前にも程よく分けてあげるから、バッテリーくらあんはお止しよ冷汗が出るよ」

「でも、私の話、本当ですわ。うなぎはいくら深く入つていても、くらあんと穴から飛出しましたわ」

君子もくつくつと笑つて、若さを失なわぬ智江の肢体をたのしんでいた。朝陽は二つの裸像を美しく染めていた。(終)

◎モデル年齢當懸賞◎

奮つて御應募下さい
十二人のモデル嬢の年令(満)を
お当て下さい。全部お当て下さ
つた方には抽せんで賞金を差し
上げます。

(グラビヤ頁及び目次裏を参照下さい)

締切 昭和二十六年十月三十日

発表 次々号本誌上

送先 大阪府堺局区内 曙書房懸賞係宛

読者通信、読者文藝を募る

愛読者の方々の便りをお待ち致します本誌に対する御注文、御意見並に御希望及び川柳、俳句、短歌其の他の短文芸をドシドシお寄せ下さい。発表の分には薄謝を呈呈致します。

読者係

地方記者募集!

各地の鮮新な探訪記事の蒐集を担当する記者を募集します。各種取材に自信のある努力家。略歴及び十枚程度の自作文を御送付下さい。詳細御返事します。

編集部

★裸婦美人寫眞實費分譲

本誌専属の美人モデルによる各種姿態の全裸寫眞を印刷紙に焼付け希望者に実費分譲致します。見本は切手百円同封の上御申込の方に、目録同封の上早速御送付申し上げます。代理部

◎直接購讀者募集

半年分 六冊(送料共) 五〇〇円
(定価値上の際も据置き)

右御支払込の愛読者の方々に特別景品として裸婦寫眞三枚一組無代進呈します
◎振替又は小為替にて御送金下さい。

奇譚クラブ

第五卷第十二号
十一月号 定價九十円
昭和二十六年十一月一日発行

昭和二十六年十一月一日発行

編集人 吉田 稔

印刷人 上田 庄之助

大阪府堺局区内菅原通四丁目三〇

發行所 曙書房

振替口座大阪第三四九五六番
電話堺一七四六番

軟派雜誌界の寵姫

奇譚クラス

十二月号予告!!

特集 男色天国繁昌記

猥褻の見世物總まり

江戸時代異色責模様・殺人淫樂症の女

怪奇実話小説 古里猥褻の研究会神戸支部

女学生集団裸体写真事件

ボクの女歴を告白する

童貞仕末記

食人ホテルの惨劇

艶麗夢十夜一夜

微笑笑姿抜心中実話集

アフレ神様繁昌記
うちの隣りは競輪娘

淫乱の女

こんな強烈な性慾の
持主がいるだろうか?

男娼はワイセツか
売淫か!!

この他面白づくめの記事満載!!!

原稿募集

1 珍談奇譚 (枚数、五枚、十枚、二十枚)

世に知られざる最新奇なる話題。古今東西
その何れを問いません。エロチックでユーモ
ラスなものも歓迎します。

2 探訪記事 (枚数、十枚、二十枚)

社会の実態、特殊施設、都会の盛り場、温泉
飲楽場、農村性風景、すべて興味本位の突見
談、探訪記

3 体験告白記 (枚数、二十枚迄)

驚異に値する特異な体験記、又は異常な生活
の告白日記、その新旧は問いませんが、なる
べく真実の裏付のあるもの

4 軟派文獻 (枚数、二十枚迄)

歌かい話題であればなんでも結構です。写真
絵画の添付があれば好都合です。肩のこりな
い好色談を歓迎。

5 暴露記事 (枚数、二十枚迄)

映画、演劇、スポーツ、政治其の他あらゆる
部面のかくれエピソード、秘事、隠密事件
の暴露記事。

6 変態読物 (枚数、二十五枚迄)

アブ・ノーマルな人物の伝記、変態性慾者の
行状、異常な人物の行動を描いた読物、其の
他あらゆる変態資料の読物化。

7 笑話、小話、コント、漫画、
挿絵

一、締切は特に定めません。
二、送付先、読書房奇譚クラブ編集部宛
三、開封第四種郵便にてお送り下さい。
四、原稿は原則として御返戻申し上げませんから
五、切手同封はお断りいたします。
六、採用決定いたしました分は、お返事の上、発
表後相当謝礼差し上げます。